三雲・井原遺跡Ⅸ

－ 三雲南小路・上覚・屋敷・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区の調査 －

糸島市文化財調査報告書

第 13 集

2014

糸 島 市 教 育 委 員 会

三雲・井原遺跡Ⅸ

－ 三雲南小路・上覚・屋敷・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区の調査 －

糸島市文化財調査報告書

第 13 集

2014

糸 島 市 教 育 委 員 会

三雲・井原遺跡上覚地区439番地全景写真（真上から）

巻頭図版２

調査区遠景（北から　上：南小路地区461番地、下：屋敷地区467番地）

序

本書は平成17年度～24年度にかけて、三雲・井原遺跡において実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

三雲・井原遺跡が所在する糸島市は3世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する「伊都国」が所在したと考えられる場所で、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として、我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。そのため、市内には弥生時代・古墳時代の遺跡を中心に、国指定史跡7箇所をはじめとする数多くの貴重な文化財が点在しており、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、開発による活気あるまちづくりとの調整がはかられているところであります。

また、糸島市教育委員会では、平成6年度からこの遺跡の確認調査を継続的に行い、王に次ぐ有力者層の墳墓群や居館の濠と思われる方形区画などの確認を行い、これまでに確認されている三雲南小路王墓と合わせて、国指定史跡を目指しているところであり、本書が当地の歴史解明の一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会の委員の皆様、ご理解とご協力を頂きました地権者および周辺地域の方々、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力頂きました関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月31日

糸島市教育委員会
教育長　家宇治　正　幸

例　言

1．本書は糸島市に所在する三雲・井原遺跡で平成17年度～平成24年度までに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2．本書は平成25年度の国庫補助事業を受け作成した。
3．遺構の実測は、龍孝明の協力を得て、調査を担当した瓜生秀文・河合修・江﨑靖隆・平尾和久が行った。
4．遺構の写真は空中写真を（有）空中写真企画・諫山広宣に委託し、その他は瓜生・河合・江﨑・平尾が撮影した。
5．遺物の復元・実測・製図にあたっては、河合・江﨑・平尾の他に藤野さゆり・三嶋弘美・田中阿早緑・内山久世・蔵田和美・名取さつきが行った。
6．本書の執筆は各調査担当者で分担した。それぞれの本文末尾に執筆者の氏名を記している。
また、第４章 Ⅳ については、谷畑美帆氏（明治大学）から玉論をいただいた。
7．三雲・井原遺跡における調査区は小字を用いた表記とする。なお、三雲・井原双方に共通する小字の場合は旧大字を小字の前につける。
8．出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり。
丹塗り　スス　コゲ　二次焼成痕　黒斑
9．本書で用いる座標は日本測地系である。
10．本書の編集は平尾が行った。

本文目次

第1章　はじめに …… 1
第2章　位置と環境 …… 2
第3章　調査の記録 …… 10
Ⅰ．上覚地区439番地（江﨑靖隆） …… 10
Ⅱ．三雲ヤリミゾ地区436-1番地（河合修） …… 84
Ⅲ．南小路地区458-1番地（河合） …… 91
Ⅳ．南小路地区470-3番地（河合） …… 97
Ⅴ．屋敷地区486番地（平尾和久） …… 101
Ⅵ．南小路地区461番地（平尾） …… 104
Ⅶ．屋敷地区467番地（平尾） …… 152
Ⅷ．井原ヤリミゾ地区2578番地（瓜生秀文） …… 165
Ⅸ．井原ヤリミゾ地区2583番地（瓜生） …… 173
Ⅹ．井原ヤリミゾ地区2577番地（平尾） …… 180
第4章　まとめ
Ⅰ．上覚地区439番地1、2号溝について（江﨑） …… 184
Ⅱ．三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品について（平尾） …… 187
Ⅲ．三雲・井原遺跡屋敷地区467番地出土小形仿製鏡について（平尾） …… 191
Ⅳ．三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区1094番地出土人骨について（谷畑美帆） …… 193

挿図目次

第１図　糸島地域主要遺跡分布図（1/125,000）…… 3
第２図　三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図（1/40,000）…… 4
第３図　三雲・井原遺跡調査区配置図（1/8,000）…… 6
第４図　本報告調査区配置図（1/2,500）…… 7
第５図　三雲上覚遺跡Ⅰ－６トレンチ再調査実測図（1/40）…… 11
第６図　1～11号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 13
第７図　12号住居跡平断面実測図（1/40）…… 15
第８図　12号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 15
第９図　15･16号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 16
第10図　18号住居跡平断面土層実測図（1/40）…… 17
第11図　18号住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 18
第12図　18号住居跡出土遺物実測図②（1/3）…… 19
第13図　19～22号・26・27号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 20
第14図　30・31号住居跡平断面実測図（1/40）…… 21
第15図　30号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 22
第16図　31号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 23
第17図　34号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 24
第18図　37号住居跡平断面実測図（1/40）…… 26
第19図　35～37号住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 27
第20図　2･3･5･6号箱式石棺墓実測図（1/30）…… 28
第21図　4号箱式石棺墓平断面土層実測図（1/30）…… 29
第22図　3～5号箱式石棺墓出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 30
第23図　2号甕棺墓出土遺物実測図（1/3）…… 31
第24図　1号祭祀土坑平断面実測図（1/20）…… 32
第25図　1号祭祀土坑出土遺物実測図①（1/3）…… 33
第26図　1号祭祀土坑出土遺物実測図②（1/3）…… 34
第27図　2号祭祀土坑平断面実測図（1/20）…… 35
第28図　2号祭祀土坑出土遺物実測図①（1/3）…… 36
第29図　2号祭祀土坑出土遺物実測図②（1/3）…… 37
第30図　2号祭祀土坑出土遺物実測図③（1/3）…… 38
第31図　2号祭祀土坑出土遺物実測図④（1/3・1/6）…… 39
第32図　2号土壙墓平断面実測図（1/20）…… 40
第33図　2号土壙墓出土遺物実測図（1/3）…… 40
第34図　3号土壙墓出土遺物実測図（1/3）…… 41
第35図　4号土壙墓出土遺物実測図（1/3）…… 41
第36図　調査区北壁土層断面実測図（1/80）…… 42

第37図　1号溝土層断面実測図（1/30）…… 42
第38図　1号溝平断面実測図上層（1/30）
…… 43～44
第39図　1号溝平断面実測図下層（1/30）
…… 45～46
第40図　1号溝出土遺物実測図①（1/3）
…… 48
第41図　1号溝出土遺物実測図②（1/3）
…… 49
第42図　1号溝出土遺物実測図③（1/3）
…… 50
第43図　1号溝出土遺物実測図④（1/3）
…… 51
第44図　1号溝出土遺物実測図⑤（1/3）
…… 53
第45図　1号溝出土遺物実測図⑥（1/3）
…… 54
第46図　1号溝出土遺物実測図⑦（1/3）
…… 55
第47図　1号溝出土遺物実測図⑧（1/3）
…… 56
第48図　1号溝出土遺物実測図⑨（1/3）
…… 57
第49図　1号溝出土遺物実測図⑩（1/3）
…… 58
第50図　2号溝平断面実測図（1/30）
…… 59
第51図　2号溝土層断面実測図（1/30）
…… 60
第52図　2号溝出土遺物実測図①（1/3）
…… 61
第53図　2号溝出土遺物実測図②（1/3）
…… 62
第54図　2号溝出土遺物実測図③（1/3）
…… 63
第55図　2号溝出土遺物実測図④（1/3）
…… 64
第56図　2号溝出土遺物実測図⑤
（1/2・1/3）…… 65
第57図　2号溝出土鉄矛実測図（1/2）
…… 66
第58図　1・2号掘立柱建物平断面実測図
（1/40・1/60）…… 68
第59図　1～4号土坑出土遺物実測図（1/3）
…… 70
第60図　4～6号土坑出土遺物実測図（1/3）
…… 71
第61図　5・7・8号土坑平断面実測図（1/30）
…… 73
第62図　6～9号土坑出土遺物実測図（1/3）
…… 74
第63図　9～14号土坑出土遺物実測図（1/3）
…… 75
第64図　1号水路平断面実測図（1/150）
…… 77
第65図　1号水路出土遺物実測図①（1/3）
…… 78
第66図　1号水路出土遺物実測図②（1/3）
…… 79
第67図　1号水路出土遺物実測図③（1/3）
…… 80
第68図　1号水路出土遺物実測図④
（1/2・1/3）…… 81
第69図　ピット出土遺物実測図（1/2・1/3）
…… 82
第70図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区
遺構配置図・土層図（1/100）…… 85
第71図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区
出土遺物実測図①（1/3）…… 87
第72図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区
出土遺物実測図②（1/4・1/3）…… 88
第73図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区
出土遺物実測図③（1/3・1/2）…… 89

第74図　南小路地区458-1番地遺構配置図（1/100）…… 92
第75図　南小路地区458-1番地調査区出土遺物実測図①（1/3・1/2）…… 94
第76図　南小路地区458-1番地調査区出土遺物実測図②（1/3・1/2・1/1）…… 95
第77図　南小路地区470-3番地トレンチ遺構配置図・土層図（1/80）…… 98
第78図　南小路地区470-3番地出土遺物実測図（1/3・1/2）…… 99
第79図　三雲・井原遺跡屋敷地区486番地調査区配置図（1/100）…… 101
第80図　西側調査区全体図（1/50）…… 102
第81図　東側調査区全体図（1/40）…… 103
第82図　住居跡・ピット出土遺物実測図（1/2・1/3）…… 103
第83図　三雲・井原遺跡南小路地区461番地全体図（1/200）…… 105
第84図　大溝土層断面図（1/40）…… 106
第85図　大溝トレンチ1出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 107
第86図　大溝トレンチ2出土遺物実測図①（1/3）…… 109
第87図　大溝トレンチ2出土遺物実測図②（1/3）…… 111
第88図　大溝トレンチ2出土遺物実測図③（1/3）…… 112
第89図　大溝トレンチ3出土遺物実測図①（1/3）…… 113
第90図　大溝トレンチ3出土遺物実測図②（1/3）…… 115
第91図　大溝トレンチ3出土遺物実測図③（1/3）…… 116
第92図　大溝トレンチ3出土遺物実測図④（1/3）…… 118
第93図　大溝トレンチ3出土遺物実測図⑤（1/3）…… 120
第94図　大溝トレンチ4出土遺物実測図①（1/3）…… 121
第95図　大溝トレンチ4出土遺物実測図②（1/3）…… 122
第96図　大溝トレンチ1～4出土遺物実測図（1/2）…… 122
第97図　1・2・4号住居跡実測図（1/60）…… 124
第98図　3・8号住居跡実測図（1/60）…… 126
第99図　5～7号住居跡実測図（1/60）…… 127
第100図　5号住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 128
第101図　5号住居跡出土遺物実測図②（1/3）…… 129
第102図　5号住居跡出土遺物実測図③（1/3）…… 130
第103図　8号住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 131
第104図　8号住居跡出土遺物実測図②（1/3）…… 133
第105図　5号・8号住居跡出土遺物実測図（1/2・2/3）…… 134
第106図　1・2号土坑実測図（1/30）…… 135
第107図　3・4号土坑実測図（1/30）…… 136
第108図　5・6号土坑実測図（1/30）…… 137
第109図　1～3号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 138
第110図　4～6号土坑出土遺物実測図（1/3）…… 139
第111図　5号土坑出土遺物実測図（1/6）…… 140
第112図　ピット出土遺物実測図（1/3）…… 142

第113図　北トレンチ出土遺物実測図（1/3）…… 143
第114図　東・西トレンチ出土遺物実測図①（1/3）…… 145
第115図　東・西トレンチ出土遺物実測図②（1/2）…… 146
第116図　包含層出土遺物実測図①（1/3）…… 147
第117図　包含層出土遺物実測図②（1/3）…… 148
第118図　包含層出土遺物実測図③（1/3）…… 149
第119図　包含層出土遺物実測図④（1/2）…… 150
第120図　三雲・井原遺跡屋敷地区467番地全体図（1/200）…… 152
第121図　大溝トレンチ平面・土層断面図（1/40）…… 153
第122図　大溝トレンチ1～3出土遺物実測図（1/3）…… 154
第123図　大溝トレンチ4出土遺物実測図（1/3）…… 156
第124図　大溝出土遺物実測図①（1/2）…… 157
第125図　大溝出土遺物実測図②（1/1・1/2）…… 158
第126図　1・2号土坑実測図（1/40）…… 158
第127図　1・2号土坑包含層出土遺物実測図（1/3）…… 159
第128図　井原上学遺跡溝3と出土遺物（1/200・1/8・1/12）…… 160
第129図　屋敷地区500番地1号溝と出土遺物（1/200・1/60・1/8）…… 161
第130図　三雲・井原遺跡西側大溝配置図（1/2,000）…… 162
第131図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2578番地全体図（1/150）…… 166
第132図　東側土層断面図（1/50）…… 167
第133図　北側土層断面図（1/40）…… 168
第134図　溝内部からの出土遺物実測図（1/3）…… 170
第135図　その他の出土遺物実測図（1/3）…… 171
第136図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2583番地全体図（1/200）…… 174
第137図　北側土層断面図（1/50）…… 175
第138図　西側土層断面図（1/50）…… 176
第139図　南側土層断面図（1/40）…… 177
第140図　土坑実測図（1/20）…… 177
第141図　木棺墓実測図（1/20）…… 178
第142図　大溝･木棺墓出土遺物実測図（1/3）…… 178
第143図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2577番地調査区配置図（1/250）…… 181
第144図　南側調査区土層断面図（1/60）…… 182
第145図　北側調査区土層断面図（1/60）…… 182
第146図　包含層出土遺物実測図（1/3）…… 183
第147図　三雲南小路遺跡及び周辺遺跡位置図（1/500）…… 186
第148図　三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品一覧①（1/2）…… 188
第149図　三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品一覧②（1/2）…… 189
第150図　三雲・井原遺跡出土小形仿製鏡（1/2）…… 191

図版目次

巻頭図版1　三雲・井原遺跡上覚地区439番地全景写真（真上から）
巻頭図版2　調査区遠景（北から　上：南小路地区461番地、下：屋敷地区467番地）
図版1-1　上覚地区439番地西側全景（真上から）
図版1-2　1号溝上層土器出土状況（真上から）
図版1-3　1、2号溝完掘状況（真上から）
図版2-1　18号住居完掘状況（北から）
図版2-2　30号住居完掘状況（南から）
図版2-3　I-6トレンチ再調査全体写真（南から）
図版2-4　2号箱式石棺墓、2号祭祀土坑検出状況（南から）
図版2-5　4、5号箱式石棺墓検出状況（北から）
図版2-6　4号箱式石棺墓半掘状況（北から）
図版2-7　5号箱式石棺墓検出状況（西から）
図版2-8　3号箱式石棺墓検出状況（西から）
図版3-1　1号祭祀土坑土器出土状況（南から）
図版3-2　2号祭祀土坑土器出土状況（南から）
図版3-3　1号溝土器出土状況（南から）
図版3-4　1号溝土器出土状況近景（南から）
図版3-5　1号溝下層土器出土状況（南から）
図版3-6　1号溝下層土器出土状況近景（南から）
図版3-7　2号溝土層断面状況（西から）
図版3-8　2号溝上層土器出土状況（南から）
図版4-1　2号溝下層土器出土状況（南から）
図版4-2　2号溝鉄矛、砥石出土状況（南から）
図版4-3　2号溝埋納甕出土状況（南から）
図版4-4　1、2号溝完掘状況（南から）
図版4-5　2号土坑墓完掘状況（南から）
図版4-6　1号水路完掘状況（南から）
図版4-7　10号土坑内塊石検出状況（西から）
図版4-8　1号水路内塊石出土状況（西から）
図版５　上覚地区439番地出土遺物①
図版６　上覚地区439番地出土遺物②
図版７　上覚地区439番地出土遺物③
図版８　上覚地区439番地出土遺物④
図版９　上覚地区439番地出土遺物⑤
図版10　上覚地区439番地出土遺物⑥
図版11　上覚地区439番地出土遺物⑦
図版12-1　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区全景（北から）
図版12-2　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区全景（南から）
図版13-1　2号土坑土層検出状況（北東から）
図版13-2　4号土坑検出状況（東から）
図版14-1　6号土坑土層検出状況（南西から）
図版14-2　8号土坑検出状況（北から）
図版15　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区出土遺物
図版16-1　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（西から）
図版16-2　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（北から）
図版17-1　南小路地区458-1番地調査区全景（上空から）
図版17-2　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（南西から）
図版18-1　南小路地区458-1番地調査区検出状況（北西から）
図版18-2　南小路地区458-1番地調査区検出状況（西から）
図版19-1　南小路地区458-1番地調査区出土遺物
図版19-2　南小路地区470-3番地調査区T1全景（西から）
図版20-1　南小路地区470-3番地調査区T1全景（北から）
図版20-2　南小路地区470-3番地調査区T2全景（北から）
図版21-1　南小路地区470-3番地調査区T2遺構検出状況（西から）
図版21-2　南小路地区470-3番地調査区出土遺物
図版22-1　屋敷地区486番地東側調査区全景
図版22-2　屋敷地区486番地西側調査区全景

図版22-3　屋敷地区486番地出土遺物
図版23-1　南小路地区461番地調査区遠景（西から）
図版23-2　調査区遠景（東から）
図版24-1　調査区全景
図版24-2　大溝全景
図版25-1　大溝トレンチ1・2と5号土坑
図版25-2　大溝トレンチ1
図版26-1　大溝トレンチ2
図版26-2　大溝トレンチ3
図版26-3　大溝トレンチ4
図版27-1　2号土坑
図版27-2　3号土坑
図版27-3　5号土坑
図版28　南小路地区461番地出土遺物①
図版29　南小路地区461番地出土遺物②
図版30　南小路地区461番地出土遺物③
図版31　南小路地区461番地出土遺物④
図版32　南小路地区461番地出土遺物⑤
図版33　南小路地区461番地出土遺物⑥
図版34　南小路地区461番地出土遺物⑦
図版35　南小路地区461番地出土遺物⑧
図版36　南小路地区461番地出土遺物⑨
図版37　南小路地区461番地出土遺物⑩
図版38　南小路地区461番地出土遺物⑪
図版39　南小路地区461番地出土遺物⑫
図版40　南小路地区461番地出土遺物⑬
図版41-1　屋敷地区467番地調査区遠景（上は461番地）
図版41-2　屋敷地区467番地調査区全景
図版42-1　調査区北側全景
図版42-2　調査区南側全景
図版43-1　大溝トレンチ1全景
図版43-2　大溝トレンチ2全景
図版43-3　大溝トレンチ2遺物出土状況
図版44-1　大溝トレンチ3全景
図版44-2　大溝トレンチ3遺物出土状況
図版44-3　大溝トレンチ4全景
図版45　屋敷地区467番地出土遺物①
図版46　屋敷地区467番地出土遺物②
図版47　屋敷地区467番地出土遺物③
図版48-1　井原ヤリミゾ地区2578番地全景（南より）
図版48-2　井原ヤリミゾ地区2578番地全景（真上より）
図版49-1　近世溝（北より）
図版49-2　近世溝（南より）
図版50-1　住居跡（南より）
図版50-2　住居跡（西より）
図版51-1　溝内部からの出土遺物
図版51-2　その他の出土遺物
図版52-1　井原ヤリミゾ地区2583番地全景（南西より）
図版52-2　井原ヤリミゾ地区2583番地全景（北西より）
図版53-1　木棺墓（東より）
図版53-2　木棺墓（南より）
図版54-1　大溝遠景（南西より）
図版54-2　南側大溝（南より）
図版55　大溝・木棺墓出土遺物
図版56-1　井原ヤリミゾ地区2577番地東側調査区全景
図版56-2　井原ヤリミゾ地区2577番地近世水路①
図版56-3　井原ヤリミゾ地区2577番地近世水路②
図版57-1　井原ヤリミゾ地区2577番地近世水路③
図版57-2　井原ヤリミゾ地区2577番地北側調査区
図版57-3　井原ヤリミゾ地区2577番地南側調査区
図版58　井原ヤリミゾ地区2577番地出土遺物

第1章　はじめに

三雲・井原遺跡は弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡で、伊都国の中心地と考えられる重要な遺跡である。遺跡は糸島市東部の瑞梅寺川と川原川に挟まれた微高地に立地し、面積は約60haと推定される。遺跡の発掘調査は江戸時代の三雲南小路遺跡に始まり、これまでに昭和50年代の福岡県教育委員会による発掘調査、その後は前原町、前原市、糸島市の各教育委員会により、現在まで継続的な発掘調査が行われている。本報告では平成17年度～平成24年度に実施した調査成果を報告する。

三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会（平成25年度設置）

委員長　西　谷　　正（海の道むなかた館館長・九州大学名誉教授）

委　員　工　楽　善　通（大阪府立狭山池博物館館長）

柳　田　康　雄（元國學院大學教授）

小　西　龍三郎（株式会社　修復技術システム代表取締役）

武　末　純　一（福岡大学教授）

難　波　洋　三（独立行政法人　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）

糸島市教育委員会

平成25年度（報告書作成）

総　　括	教育長	家宇治　正　幸（平成26年3月～）
		菊　池　俊　秀（～平成26年2月）
	教育部長	井　土　敏　幸
	文化課長	洞　　龍二郎
	文化課長補佐兼文化振興係長	山　﨑　しのぶ
	同　　発掘調査係長	角　　浩　行
庶　　務	文化課文化振興係　主事	西　木　　望
報告書作成	文化課　主幹	瓜　生　秀　文
	主任主査	河　合　　修
	主査	江　﨑　靖　隆
		平　尾　和　久（編集）

なお、本報告書作成にあたり、文化庁、福岡県教育委員会のご指導・ご支援・ご協力を得た。記して感謝申し上げます。

（平尾和久）

第２章　位置と環境

Ⅰ．地理的環境

三雲・井原遺跡は福岡県西部の糸島市に所在する。糸島市は平成22年１月１日に前原市と二丈町、志摩町とが合併して誕生した市で、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀市と接する。面積は216.15㎢、人口97.721人（平成26年１月１日現在）の市で、近年は福岡市近郊都市に見られるベットタウン化が急速に進行している。また、人口の約半分が国道202号線沿いに集中し、残りの半分が田園地帯が多く残る市域全体に広がる。

地形的には、南方に井原山、雷山、羽金山、女嶽、浮嶽などの脊振山系の山々、東方は高祖山と博多湾、北方と西方は玄界灘で画される比較的まとまった地域で、現在の行政区画では、糸島市全域と福岡市西区の一部を含む。

地質的には、高祖山が花崗岩であるほかは、花崗閃緑岩で、低チタンの良質な砂鉄を多く含む。また、雷山山頂から飯場峠付近にかけては三郡変成岩が展開する。可也山や今山では頂上付近に玄武岩があり、後者では弥生時代前半期にかけて石斧の材料として用いられた。

主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野、糸島低地帯の三ヶ所にある。怡土平野には雷山および井原山の裾部から舌状に延びる数本の段丘があり、平原遺跡などは中位段丘に所在する。今回報告する三雲・井原遺跡は市の中央を横断する国道202号線から、南側へ約3㎞の場所に位置する。瑞梅寺川水系の瑞梅寺川と川原川に挟まれた標高30～44ｍの肥沃な扇状地上にあり、遺跡の範囲は東西約500ｍ、南北約700ｍに及ぶ。

Ⅱ．歴史的環境

１．糸島地域の歴史的環境

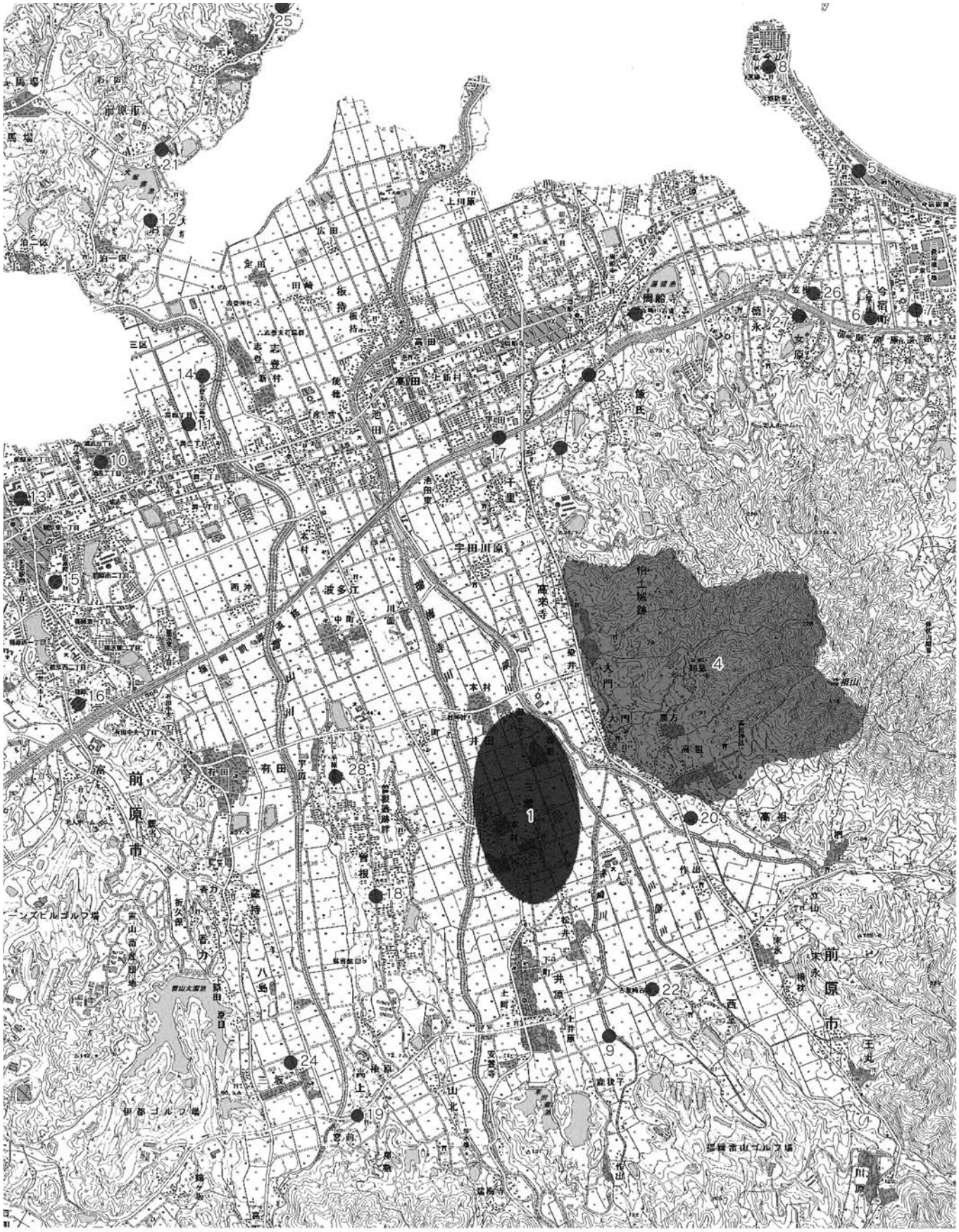
わが国における弥生時代の始まりは、博多湾を中心とする玄界灘沿岸地域で確認できるが、糸島地域では曲り田遺跡のほかには集落跡が確認されていなかった。しかし、近年では上深江小西遺跡から5棟の掘立柱建物、石崎大坪遺跡2次調査で水田跡が確認され、糸島地方西部の石崎遺跡群周辺が初期農耕の拠点となったことが明らかとなっている。

墳墓は新町遺跡、長野宮ノ前遺跡、志登遺跡群などで支石墓や甕棺墓、土壙墓が確認され、三雲・井原遺跡においても加賀石地区や石ヶ崎地区で同時期と思われる支石墓が認められる。

弥生時代前期になると上深江海老ノ峯遺跡で2軒の円形住居跡が確認されている。板付Ⅱ式から前期末にかけては遺構が増加傾向にあり、甕棺墓は新町遺跡、広田遺跡、今宿遺跡、周船寺遺跡等で確認され、集落は三雲・井原遺跡のほか福岡市西区周船寺遺跡10次調査で板付ⅡＡ段階の溝、13次調査で円形と方形の住居跡が8軒検出されている。三雲・井原遺跡横枕地区で板付ⅡＡ段階の掘立柱建物が確認されている。また、東縄手遺跡では丘陵を直線的に切る幅2.0ｍ、深さ1.5ｍのＶ字溝と円形住居跡が確認されている。

弥生時代中期の墳墓は久米遺跡、広田遺跡、木舟三本松遺跡、篠原新建遺跡、三坂七尾遺跡、高上石町遺跡、潤地頭給遺跡で甕棺墓が確認されている。特に潤地頭給遺跡では300基を超える甕棺

第1図　糸島地域主要遺跡分布図（1/125,000）



1. 三雲・井原遺跡
2. 飯氏遺跡
3. 飯氏二塚古墳
4. 怡土城跡
5. 今宿遺跡
6. 今宿大塚古墳
7. 今宿五郎江遺跡
8. 今山遺跡
9. 井原１号墳
10. 浦志遺跡
11. 潤地頭給遺跡
12. 御道具山古墳
13. 上町向原遺跡
14. 志登支石墓群
15. 篠原新建遺跡
16. 上鑵子遺跡
17. 周船寺遺跡
18. 銭瓶塚古墳
19. 高上石町遺跡
20. 高祖榎町遺跡
21. 泊リュウサキ遺跡
22. 西堂古賀崎古墳
23. 丸隈山古墳
24. 三坂七尾遺跡
25. 元岡桑原遺跡
26. 山ノ鼻１号墳
27. 若八幡宮古墳
28. 平原遺跡

第２図　三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図（1/40,000）

墓が検出され、糸島地域で最大規模の密度となる。また、久米遺跡6号甕棺墓で細形銅剣、同23号甕棺墓で細形銅戈、潤地頭給遺跡299号甕棺墓で円環系銅釧5点などのように、副葬品をもつ甕棺墓も散見される。

中期の集落は御床松原遺跡、一の町遺跡、泊リュウサキ遺跡、元岡・桑原遺跡、今宿五郎江遺跡などで確認されている。御床松原遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心とした集落で、海に面するという立地から土錘や石錘など漁撈関係の遺物が多いが、貨泉や半両銭、後漢鏡片など一般集落では見られない遺物も含まれていることから、糸島地域の対外交流の玄関口＝海村との認識も示されている（武末2009）。また、一の町遺跡は中期前半～後期初頭を中心とする集落で、掘立柱建物25棟以上、住居跡5軒以上が検出されている。特筆されるのは大型の掘立柱建物で、身舎面積が概ね50㎡を超えるものが4棟あり、最大の1号大型建物は95.2㎡を測る。今宿五郎江遺跡では掘立柱建物を中心とする集落が営まれている。

弥生時代後期に入ると北部九州全域で甕棺墓は激減するが、糸島地域は数を減らしながらも継続的に甕棺墓が営まれる。ただ、墓群を形成するのは、三雲・井原遺跡のほかに神在遺跡、福岡市西区飯氏遺跡など少数で、単独墓が増加する傾向にある。そのような中、頸部を打ち欠く壺を組み合わせた飯氏7号甕棺墓では雲雷文内行花文鏡が出土している。また、甕棺墓と併行して木棺墓、土壙墓も確認され、弥生時代終末期～古墳時代初頭には箱式石棺墓が出現する。潤地頭給遺跡Ⅰ-E区土壙墓（木棺墓の可能性もあるが、攪乱が著しく詳細不明）でも内行花文鏡と翡翠勾玉が出土している。

後期の集落は中期から継続する御床松原遺跡、一の町遺跡、今宿五郎江遺跡のほか、吉井水付遺跡、曲り田遺跡、志登遺跡群、上鑵子遺跡などで確認される。一の町遺跡では弥生時代後期後半の身舎面積100㎡を超えるSB02が検出されている。吉井水付遺跡では後期後半の住居跡4軒が確認され、包含層からは鏡片3点、青銅製鋤先、L字形石杵などが出土している。上鑵子遺跡では後期初頭から後半の住居跡が42軒確認され、谷部から大量の木製品が出土した。また、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては、三雲・井原遺跡のような拠点集落と、御床松原遺跡のような海浜部の遺跡で、三韓系や楽浪系などの朝鮮半島系土器が出土しており、弥生時代の糸島地域が果たした対外交流の窓口として役割を示す資料として重要である。

2．三雲・井原遺跡の歴史的環境

三雲・井原遺跡の調査は、江戸時代の青柳種信による三雲南小路遺跡、井原鑓溝遺跡に関する聞き取り調査と出土品の調査記録をその端緒とし、明治期以降、中山平次郎や原田大六らによる考古資料の分析等が行われている。

本格的な発掘調査は、原田大六による石ヶ崎支石墓の調査を除くと、昭和49年から始まる県営ほ場整備事業を契機とする福岡県教育委員会による確認調査が始まりである。その後、平成6年度からは前原市教育委員会による重要遺跡確認調査が開始され、市町村合併により糸島市が誕生したのち今日まで調査は継続している。これらによって、当遺跡の重要性を示す貴重な資料が数多く確認されるとともに、縄文時代から中世に至るまで継続的に営まれた複合遺跡であることが明らかと

第３図　三雲・井原遺跡調査区配置図（1/8000）

第４図　本報告調査区配置図（1/2,500）

なっている。

以下でこれまでの調査成果を概観する。

弥生時代初頭には、遺跡の北側に井田用会支石墓、井田御子守支石墓、三雲加賀石支石墓が形成される。これら支石墓の上石はいずれも2m前後の大型で、大型柳葉形磨製石鏃や管玉が副葬されており、西北九州で確認される支石墓とは大きく異なることから、これらを特定個人墓の萌芽とす

る見解もある（柳田2002）。集落は加賀石地区で弥生時代前期中頃の円形住居跡が確認されるなど、遺跡の北側に居住域・墓域ともに形成されている（角2013）。

弥生時代前期末からは、今山遺跡での石斧の生産・流通が本格化し、北部九州の広い範囲で確認されるようになる。この石斧流通の管理主体が三雲・井原遺跡の首長にあり、再分配される過程で培った流通網を活かして、大陸・半島文化の受容の窓口としての役割を果たすとともに、王墓に位置付けられる三雲南小路遺跡の出現の契機となったとする見解もある（武末1993）。

この三雲南小路遺跡は、東西南北ともに30m以上の方形プランの墳丘墓で、そのやや南寄りに2つの甕棺が納められる。1号甕棺は江戸時代に発見されたもので、『柳園古器略考』に記載分と発掘調査時の出土分を合わせて、有柄銅剣、銅戈、朱入りの小壺とともに、銅鏡35面、ガラス璧、銅矛、勾玉、管玉、金銅四葉座飾金具などが副葬されていた。2号甕棺は調査時に新たに確認されたもので、盗掘を受けているので全容の把握は難しいが、銅鏡22面以上、勾玉、管玉などが出土している。このように傑出した副葬品と墳丘をもつ特定個人墓であることから、王墓と位置付けられている。

なお、近年の調査では三雲南小路遺跡の北東側にあるヤリミゾ428・429番地の調査でＬ字に屈曲する区画溝（祭祀溝と報告）が確認されており、王墓との関連性が注目される。

弥生時代後期になると、甕棺墓が減少していくが、糸島地域では甕から壺へと形を変え、古墳時代前期まで認められる。後期の壺棺は、江戸時代に発見され以後、所在地が分からなくなり幻の王墓とも言われる井原鑓溝遺跡にも採用されたと考えられている。この遺跡も青柳種信が著した『柳園古器略考』、により広く知られることなった。出土遺物で現存するものはないが、掲載された出土品の図面から、銅鏡19面（江崎2013）、巴形銅器、「刀剣の類」、「鎧の如きもの」などが「壺」から出土したことが分かる。現存する遺物がないため、時期は拓本や図から推測されているが、後期初頭～後期後半まで見解が分かれている。

なお、木棺墓、土壙墓も当期を中心に確認され、後期後半～古墳時代初頭には箱式石棺墓が出現する。三雲寺口遺跡では、Ｌ字状の祭祀土坑区画内に箱式石棺墓が2基確認されている。2号箱式石棺墓からは「長宜子孫」銘内行花文鏡が出土しており、王墓以下の階層にも中国鏡が副葬された可能性が指摘され、井原ヤリミゾ遺跡の調査で木棺墓に副葬・供献される内行花文鏡や方格規矩鏡が確認されている。

古墳時代前期になると、弥生時代に形成された集落域の状況が変化する。それまでの集落域に盾形の周濠をもつと考えられる端山古墳、築山古墳が築かれ、集落はその周辺に分布するようになる。

なお、これまでに福岡県教育委員会ならびに前原市、糸島市教育委員会で刊行した三雲・井原遺跡関係の報告書を刊行年順に紹介する。本報告は29冊目の三雲･井原遺跡調査報告書に位置づけられる。

【福岡県教育委員会】
柳田康雄編　1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集
柳田康雄・小池史哲編　1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集
柳田康雄・小池史哲　1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集
小池史哲　1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集
柳田康雄編　1985『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集
【前原市（町）・糸島市教育委員会】
川村　博編　1982『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第8集
川村　博編　1983『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報』前原町文化財調査報告書第10集
川村　博編　1984『三雲遺跡Ⅰ』前原町文化財調査報告書第13集
川村　博編　1985『井原遺跡群Ⅲ』前原町文化財調査報告書第19集
川村　博・林　覚・岡部裕俊・石井扶美子編　1985『井原遺跡群Ⅳ』前原町文化財調査報告書第21集
林　覚編　1986『井原遺跡群Ⅴ』前原町文化財調査報告書第24集
岡部裕俊編　1987『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第25集
林　覚編　1988『井原遺跡群Ⅶ』前原町文化財調査報告書第30集
林　覚編　1990『井原遺跡群Ⅷ』前原町文化財調査報告書第32集
岡部裕俊編　1991『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第35集
林　覚編　1992『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集
岡部裕俊編　1994『井原地区周辺の古墳群』前原市文化財調査報告書第51集
角　浩行編　1996『三雲・井原遺跡群調査概要1』前原市文化財調査報告書第62集
角　浩行編　1997『三雲・井原遺跡群1』前原市文化財調査報告書第63集
牟田華代子・岡部裕俊編　2002『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集
牟田華代子編　2003『三雲・井原遺跡Ⅲ』前原市文化財調査報告書第82集
岡部裕俊編　2003『井原1号墳』前原市文化財調査報告書第83集
平尾和久編　2004『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財調査報告書第86集
岡部裕俊・牟田華代子編　2006『三雲・井原遺跡Ⅴ』前原市文化財調査報告書第90集
江﨑靖隆・楢﨑直子編　2006『三雲・井原遺跡』前原市文化財調査報告書第92集
江﨑靖隆編　2010『三雲・井原遺跡Ⅵ』糸島市文化財調査報告書第1集
江﨑靖隆編　2012『三雲・井原遺跡Ⅶ』糸島市文化財調査報告書第7集
平尾和久編　2013『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

【参考文献】
江﨑靖隆　2013「井原鑓溝遺跡」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集
角　浩行　2013「総括」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集
武末純一　1993「交易はどのようにおこなわれたか」『新視点日本の歴史』1原始編
武末純一　2009「三韓と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』151
柳田康雄　2002『九州弥生文化の研究』学生社

第３章　調査の記録

Ⅰ．上覚地区439番地

１．調査概要

本調査は、井原鑓溝遺跡の所在確認を目的とする重要遺跡確認調査である。平成16～20年度にかけて行われたヤリミゾ地区における一連の確認調査は、後漢鏡やガラス小玉を副葬する墳墓群を検出し、糸島地域における弥生時代後期の墓制を考える上で一定の成果を上げたが、井原鑓溝遺跡の所在を確定するまでには至らなかった。平成20年度に開催された三雲遺跡等発掘調査指導委員会では、これまでの調査成果および経緯説明を行った上で、井原鑓溝遺跡所在確認調査の継続に関して協議が行われた。その結果、井原鑓溝遺跡所在確認調査を継続することに決まり、平成21年度の調査対象地については、井原鑓溝遺跡と関連する近世水路が存在することや昭和49年度の福岡県教育委員会による三雲上覚遺跡Ⅰ－6の調査において、小形箱式石棺墓の下に大きな掘り方が存在しており、委員より再調査の要望があったことなどから、糸島市三雲439番地を調査対象とする旨を委員会に提案し、了承を得た。

これに基づき、糸島市教育委員会では、平成21年6月から地権者交渉を行い、9月に地権者の承諾を得ることができたため、稲刈り終了後の平成21年11月4日に重機を搬入し、調査を開始した。

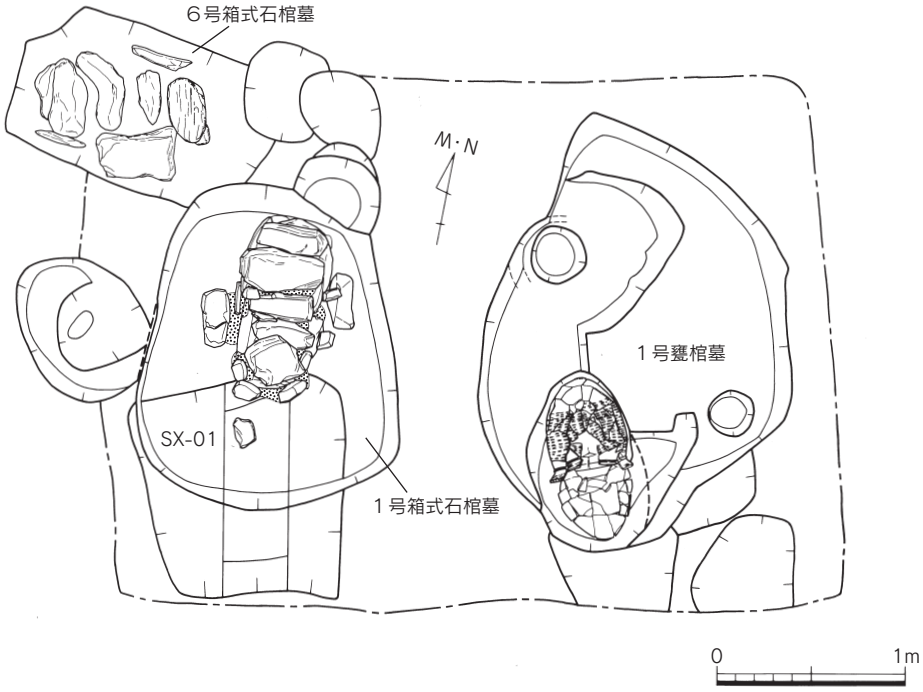
遺構面は、調査区西端で、表土直下20㎝下で確認し、調査区東端では、ほ場整備で嵩上げされた関係で、表土から1.2ｍ程度下で確認された。基本的には黄褐粘質土層が遺構面であり、主な遺構としては、①弥生時代中期～後期の溝2条②古墳時代初頭の箱式石棺墓6基、甕棺墓3基、祭祀土坑2基③古墳時代中期の竪穴式住居34軒④中世の土壙墓4基、井戸1基、水路、土坑、ピットなどである。このうち、①は三雲南小路遺跡と同時期の遺構として注目される。調査面積は1,023㎡、調査期間は平成21年11月4日～平成22年3月21日までである。

２．遺構と遺物

⑴三雲上覚遺跡Ⅰ－6の再調査（第５図）

昭和49年度に行われた福岡県教育委員会による三雲上覚遺跡Ⅰ－6の調査では、南北3ｍ×東西10ｍのトレンチを設定し、石棺墓と甕棺墓は1段掘り下げたところで検出している。この調査は座標に基づき、設定されていたため、このトレンチの場所は、調査区の北西側で比較的容易に確認できた。調査の結果、1号石棺墓下の掘り方（SX-01）は、南北1.15ｍ、東西1.05ｍの方形土坑であり、トレンチを設定し掘削したが、深さ44㎝で地山を検出したため、甕棺墓や木棺墓の墓壙である可能性は低いと判断した。

一方、当時の実測図には記載されていないが、Ⅰ－6調査区の北西端では、新たに箱式石棺墓（6号箱式石棺墓）が存在していることが判明した。今回、調査区を広げたことにより、周囲に箱式石棺墓群があることがわかり、Ⅰ－6トレンチ調査は、その群の一部を検出していることが判明した。



第５図　三雲上覚遺跡Ⅰ－６トレンチ再調査実測図（1/40）

⑵竪穴式住居

本遺跡では、竪穴式住居が38軒検出された。このうち、トレンチを含む確認調査を行った住居は、12、18、30、31、37号住居であり、現地保存を優先する調査方針に基づき、その多くが平面的な確認と検出表面の土器を採取することで終了している。

1号住居

調査区南西端で検出した竪穴式住居で、一部は調査区外である。現状で南北3.1m、東西2.9mを測り、出土遺物より正方形となるのであろう。住居検出面で表採した土器は、1が古墳時代前期中葉、2が古墳時代中期中葉と考えられる。

出土遺物（第６図1・2）

1は高坏の坏部で、脚部が欠損する。口縁部の先端が外反し、坏部の屈曲も明瞭で、深さがある。内外面ともにナデ調整。2は椀で、口縁先端部下に強めのナデを行う。胴下半は指頭圧痕が明瞭である。

2号住居

調査区南西端で検出した。住居の北東角のみ確認しており、検出位置から1号住居と隣接する住居と考えられる。表面採取した土器は無い。

3号住居

調査区南西端で検出した方形住居で、南北2.4m、東西2.8mと小形である。4号住居と併存している。出土遺物から、住居ではない可能性もあったが、1、2号溝の調査を優先したため、調査を行うことができなかった。

出土遺物（第６図3・4）

3は鋤先口縁壺の口縁部片で、口縁が下方へと垂れる。4は高坏の屈曲部の破片で、内面は段が

付き、横方向のミガキ、外面はハケメが行われる。

4号住居

南北4.8m、東西3.6mを測る住居で、平面形が歪な長方形を呈する。近代の水路に一部破壊されており、土器が露出している状況であった。調査区西側中央に位置する。

出土遺物（第６図5・6）

5は椀で、底部を欠損し、外面を指オサエで成形する。6は高坏の坏部で、脚部の接合部分で分離している。

5号住居

6号住居と切りあい関係にあり、調査区西端で検出された住居である。住居の一部は調査区外であるが、平面形は長方形と考えられる。

出土遺物（第６図7・8）

7は甕の底部片で、内外面ともにナデ調整である。8は口縁部片で鋤先状口縁である。

6号住居

調査区西端で、5号住居に切られる住居である。5号住居と同様、平面形は長方形と見られ、南北3.4m、東西4.2mの規模である。

出土遺物（第６図9・10）

9は鋤先状を呈する口縁部片で、口縁が内側へ発達している。内外面ともにナデ調整である。10は底部片で、完全な平底である。

7号住居

調査区北西端で検出した住居で、その大部分が調査区外である。南北3.7mを測る。

出土遺物（第６図11～13）

11は壺で頸部～胴上部にかけて残存する。外面頸部にわずかにハケメ調整が残るが、全体的にハケメをナデ消している。内面胴上部はヘラケズリを行う。12は高坏の坏部から脚部にかけて残存する。13は椀の底部付近で、指オサエで成形する。

8号住居

調査区北西端で検出した住居で、平面が歪な長方形となっている。出土遺物から住居ではない可能性がある。

出土遺物（第６図14・15）

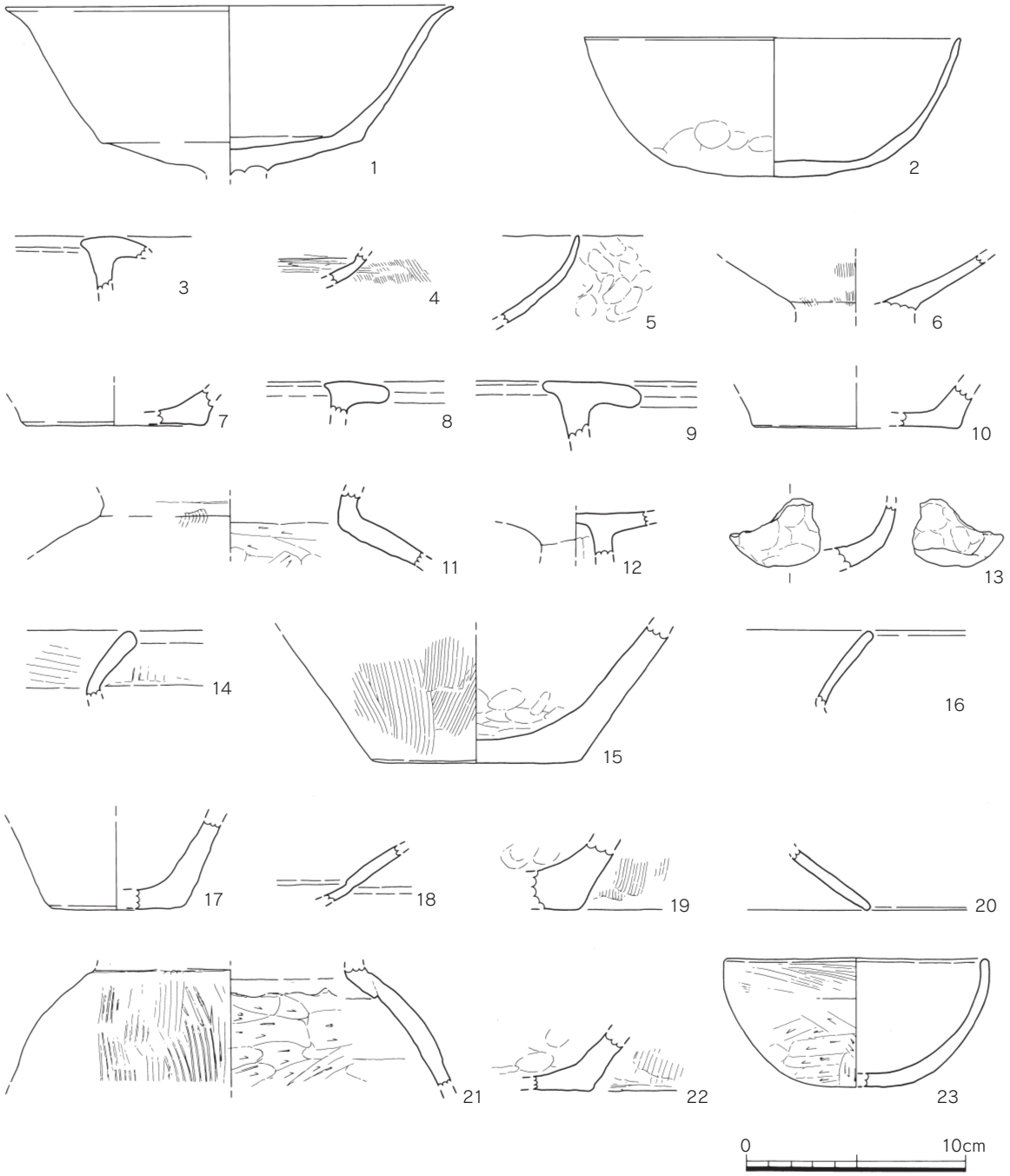
14は甕の口縁部片で、くの字を呈する。口縁部内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメである。15は甕の底部片で、外面に粗いハケメを行う。

9号住居

調査区南西側で検出した住居で、10、11号住居を切り込む。平面形は歪な長方形を呈する。弥生時代終末期の遺物が出土するが、混入したものであろう。

出土遺物（第６図16～18）

16はくの字を呈する口縁部片であるが、風化が著しく、調整不明瞭。17は甕の底部片で、内外面共にナデ調整。18は高坏の坏部片で、屈曲部が明瞭。



第６図　1～11号住居跡出土遺物実測図（1/3）

10号住居

調査区南側で検出した。9、11号住居と切りあい関係にあり、9号住居よりも古く、11号住居よりも新しい。一部は調査区外となっている。

出土遺物（第６図19・20）

19は甕の底部片で、外面のハケメは底部近くまで施される。20は高坏の脚裾部である。風化が著しく調整不明瞭。

11号住居

調査区南端で、9、10号住居に切られる住居である。表面採取の土器は、古墳時代中期前半である。

出土遺物（第６図21～23）

21は、甕の胴上部片で肩がやや張り気味である。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリである。頸部内面に粘土の継ぎ目が残る。残存で器高5.9㎝を測る。22は壺の底部片で、外面のハケメが粗い。23は椀で、口縁部が若干内傾する。口縁外面は横方向のハケメ、胴下位はヘラケズリである復元口径12.1㎝、残存高5.8㎝を測り、色調は、内面が黄橙色、外面が暗褐色、橙色である。

12号住居（第７図）

調査区西側中央で、13、14号住居を切る形で検出された住居である。南北4.9ｍ、東西5.0ｍの方形プランであり、Ｌ字形のトレンチを設定して調査を行った。深さ32㎝で床面に到達したが、住居北側では、焼土及び炭が上面から検出されたことから、カマドを破壊してしまう可能性があり、掘削しないこととした。

出土遺物（第８図）

1は把手付きの坏身である。身部外面には波状文があり、受け部から口縁部にかけて垂直に立ち上がる。身下半は回転ヘラケズリ、底部内面には自然釉が付着する。復元口径10.0㎝、残存で器高5.6㎝を測る。2は甕の口縁部片で、内外面にハケメを残す。復元口径17.0㎝。3は椀で、底部を欠損する。口縁部は垂直に立ち上がり、外面の横ナデは明瞭である。復元口径12.8㎝、残存で器高3.5㎝を測る。4は福井式甕棺で胴下位の破片である。内外面共に粗いハケメが目立ち、波状の扁平突帯を貼付する。5は甕の底部片で、底部に丸みをもつ。内外面共に指ナデによる成形である。復元底径9.0㎝。6も甕の底部片で、平底である。小型のものであろう。7は器台の裾部片である。指ナデ成形で、内面にシボリの痕跡がある。8は支脚片で、外面は指ナデ調整である。

13号住居

調査区西側中央に位置し、12号住居に切られる住居である。平面は歪な正方形で、現状で、南北4.0ｍ、東西5.2ｍを測る。検出表面の遺物は採取できなかった。

14号住居

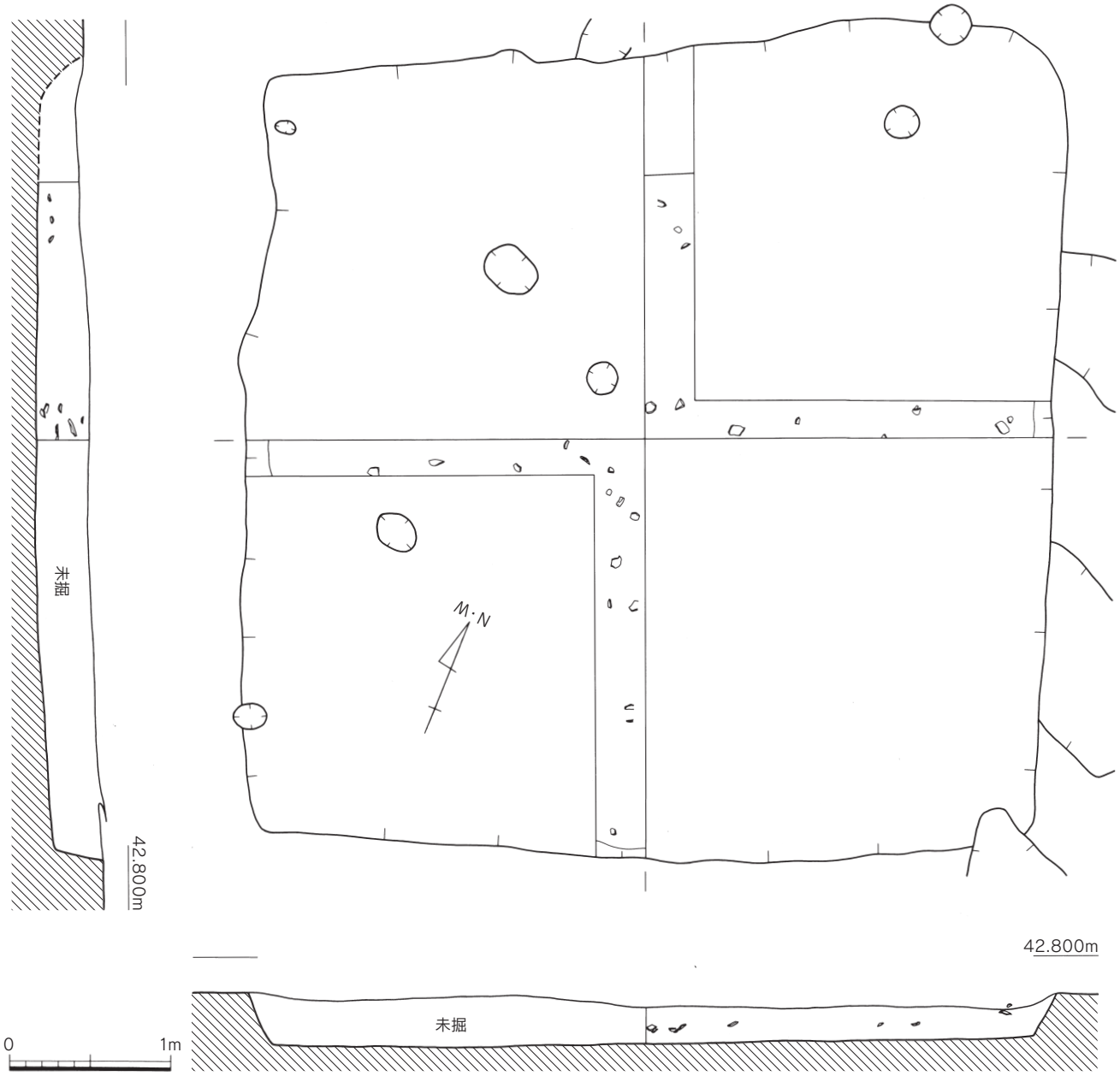
調査区西側中央で、12、13号住居に切られる住居である。平面は長方形を呈しており、検出表面の遺物は採取できなかった。

15号住居

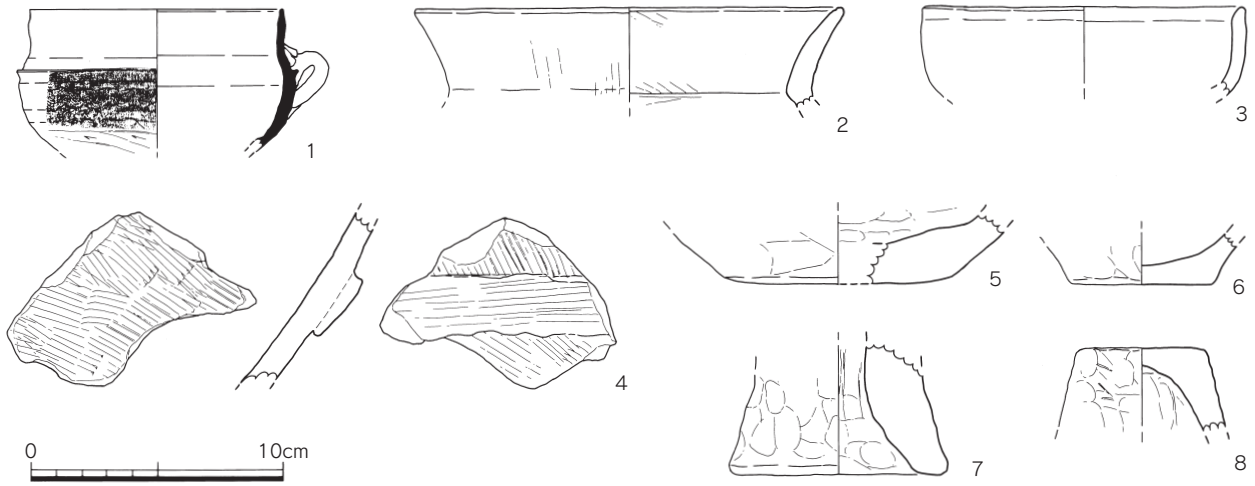
調査区北側中央で検出したが、部分的な検出であり、出土遺物からも住居であるかどうか疑わしい。採取した土器は3点である。

出土遺物（第９図１～３）

1は素口縁壺の口縁部片で、内面に横方向のハケメが残る。復元口径21.6㎝、残存で器高7.5㎝を測る。2は甕の底部片で、平底に焼成後の穿孔がある。復元底径7.0㎝、残存で器高4.2㎝である。3は高坏の口縁部片で、屈曲で外れたものである。内面は縦方向のハケメの後にミガキを行う。



第７図　12号住居跡平断面実測図（1/40）



第８図　12号住居跡出土遺物実測図（1/3）

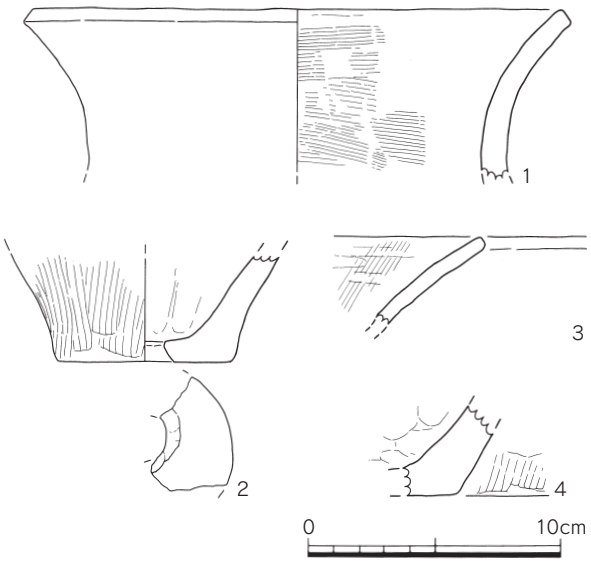
16号住居

調査区北側中央で、15号と17号に隣接する住居で、角の部分を一切検出できなかった。

表採できた土器は1点のみである。

出土遺物（第９図４）

4は16号住居から出土した甕の底部片で、わずかな膨らみがある。色調は内面が淡橙色、外面が灰白色・黒褐色を呈する。



第９図　15・16号住居跡出土遺物実測図（1/3）

17号住居

調査区北側中央で検出した遺構で角部分のみしか確認できなかったため、住居であるかどうか不明と言わざるを得ない。残念ながら表採できた土器はない。

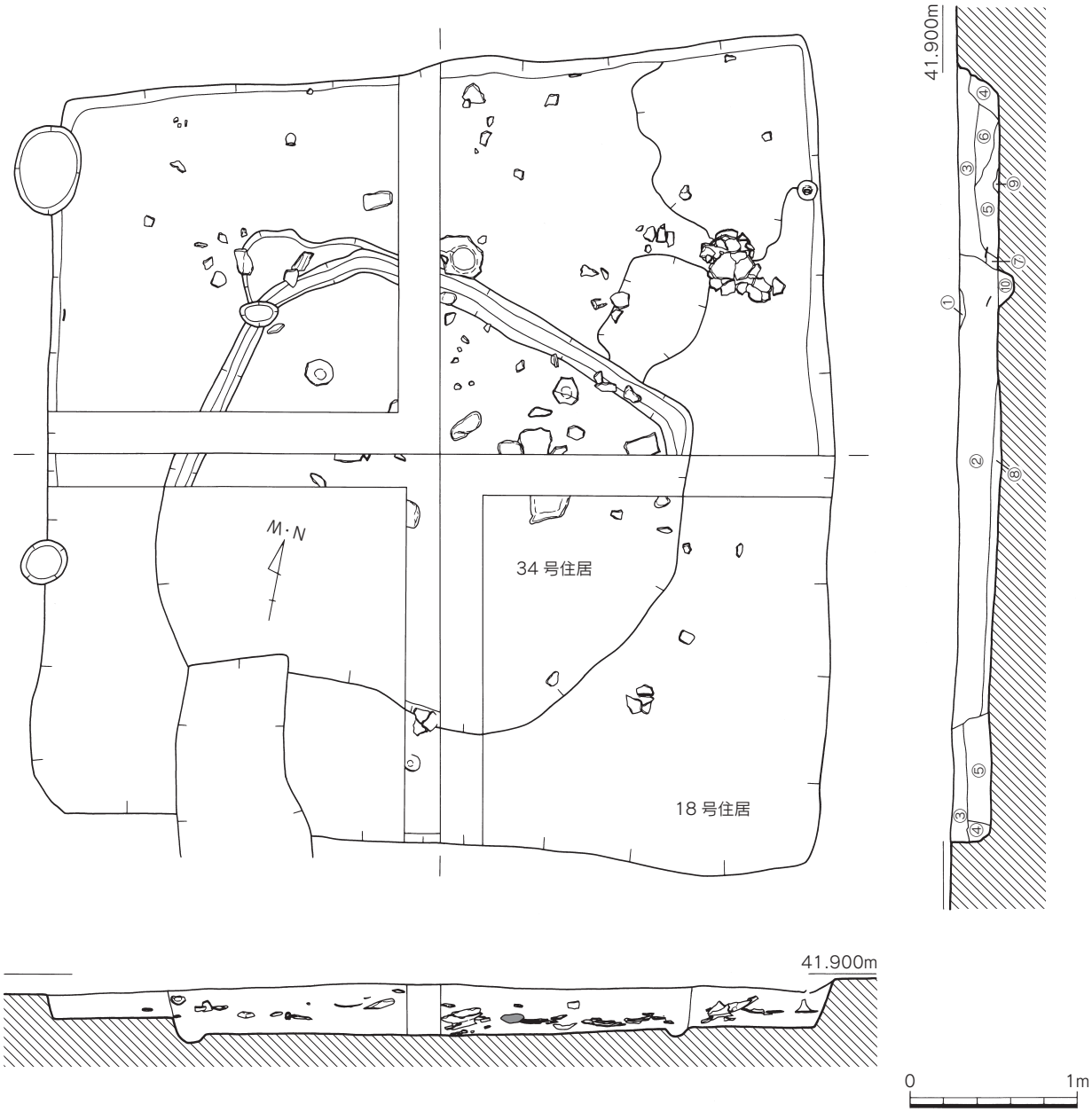
18号住居（第10図）

調査区北東端で、1号溝を切る形で検出された住居で、平面は南北4.65m、東西4.7m正方形を呈する。北半分と南側はＬ字形のトレンチを設定し、調査を行った結果、18号住居埋没後に34号住居が造られており、土層上その立ち上がりラインは明瞭であった。18号住居出土土器は、弥生土器が混入するものの、布留系甕（7、8）や高坏（9）、二重口縁壺（5）など柳田編年の土師器Ⅲａ式が主体となっている。しかし、4の二重口縁壺は、それよりも1型式新しい土師器Ⅲｂ式であり、古墳時代中期前半と考えられる。

出土遺物（第11・12図）

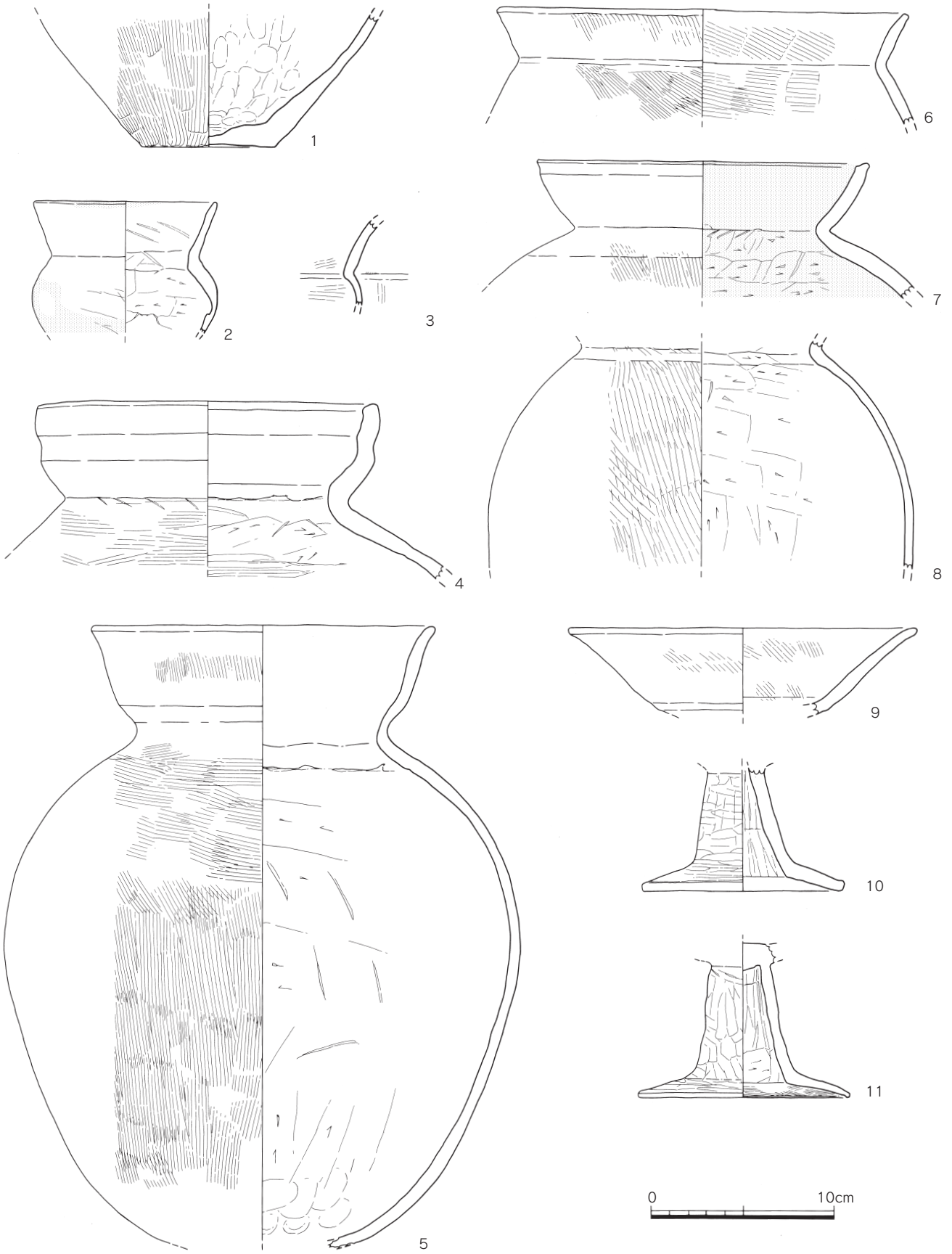
1は壺の底部片である。若干の上げ気味の底部を呈し、外面は縦方向のハケメを施す。復元底径7.2㎝、残存で器高7.2㎝を測る。2は小型丸底鉢で、丸みを帯びた胴部から口縁が外反する。胴部の外面調整はハケメの後ナデ調整、胴部内面はヘラケズリを行う。復元口径10.0㎝、残存で器高7.1㎝を測る。3も小型丸底鉢で、口縁～胴部まで残存する破片である。小さな胴部から口縁が強く外反する。4は二重口縁壺で、口縁～胴上部まで残存。口縁部は強い横ナデによって弱い屈曲をつくる。胴部外面は横方向のハケメ、内面はヘラケズリで仕上げる。口径18.5㎝、残存で器高9.6㎝を測る。5も二重口縁壺で、底部を欠損する。胴部は上位に最大径があり、口縁の屈曲が弱い。外面調整は、胴上位に横方向のハケメ、胴中位以下が縦方向のハケメ、胴部内面がヘラナデである。口径18.6㎝、残存高33.8㎝、色調は内面が灰褐色、外面が橙色、黄褐色である。6は、くの字口縁を持つ甕で、内外共にハケメ調整。復元口径22.4㎝、器高は残存で6.0㎝を測る。7は布留系の甕で口縁～胴上部が残存する。若干内曲する口縁は、その先端を外方へつまみ上げる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリである。全体として器壁が厚い。復元口径18.0㎝、残存で器高7.3㎝である。8は甕の胴部片で、外面が粗いハケメ、内面は胴上位が横方向のヘラケズリ、胴中位以下が縦方向のヘラケズリである。9は高坏の坏部片で、やや外反する口縁を持ち、内外面

にハケメが残る。復元口径19.0㎝を測る。10、11は高坏の脚部片で、短脚である。両者とも脚裾部の屈曲が明瞭で、外面はミガキを行う。前者が脚部径11.0㎝、後者が脚部径11.5㎝を測る。12は小型の手づくね土器で、あまり外反しない口縁に、丸みの少ない胴部。ハケメと指押さえで成形する。13は小さな脚部の付く手づくね土器。14も手づくね土器の破片である。

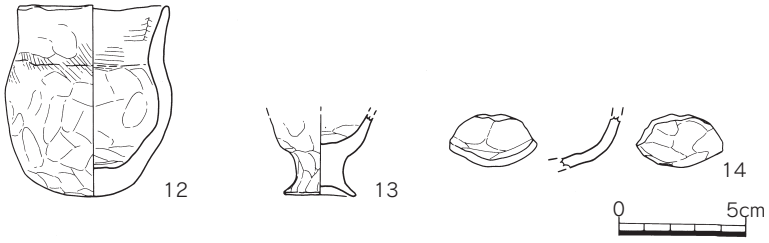


①明灰色土層（炭をわずかに含む、中世）
②黒茶色粘質土層（炭を含む）
③暗黄茶色土層（黄褐色の地山ブロックを含む、しまりが良い）
④黒褐色土層（土器を含む）
⑤黄茶色砂質土層（黄褐色の地山ブロックを多く含む）
⑥明黄茶色砂質土層（黄褐色の地山ブロックを多く含む）
⑦黒色粘質土層（炭を多く含む）
⑧暗黒茶色土層（炭を多く含む）
⑨汚黄褐色土層
⑩黒褐色粘質土層

第10図　18号住居跡平断面土層実測図（1/40）



第11図　18号住居跡出土遺物実測図①（1/3）



第12図　18号住居跡出土遺物実測図②（1/3）

19号住居

調査区南西側で検出した住居で、東西7.5mを測る。住居の角部分は検出できなかったが、表面採取の土器が3点出土している。

出土遺物（第13図1～3）

1は鋤先口縁壺の口縁部片で、内傾が強い。全体に風化が著しいため、口縁端部の刻目がわずかに残る。2は甕の胴上部片で、外面はハケメ調整、内面はヘラケズリを施す。3は高坏の脚裾部片。内外面共にハケメ調整。

20号住居

19号住居に隣接して検出されたもので、確認できたのは角部分のみであったため、住居であるかどうか判断が難しい。

出土遺物（第13図4）

4は甕の胴部片で、内外面共にハケメ調整である。

21号住居

調査区中央を走る1号水路の東側にある住居で、22号住居と切りあい関係にある。現状で、東西4.2mを測り、正方形と推測される。出土遺物から柳田編年の土師器Ⅲａ式。

出土遺物（第13図5～8）

5は甕の口縁部片で、くの字形を呈する。胴部外面は粗いハケメ、胴部内面はヘラケズリである。6は口縁部が外反する椀で、外面下位は横方向のヘラケズリを行う。7は高坏の脚部片で、脚裾部を失っている。外面は指ナデで成形する。8は龍泉窯青磁片で、内面に輪花文を施す。

22号住居

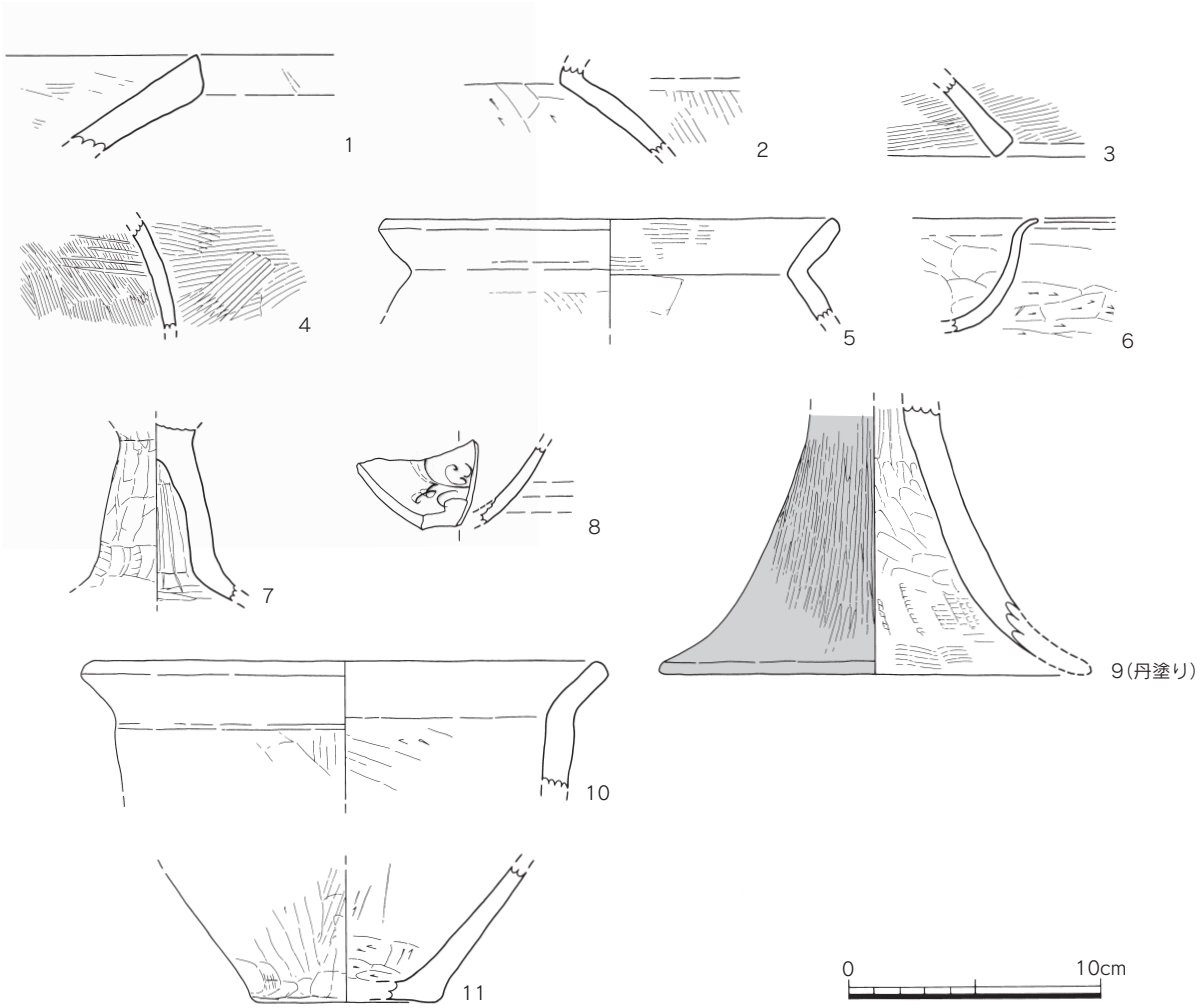
調査区南側で検出した住居で、21、23号住居に切られる形で確認された。土器は住居を掘削する現代溝の底面に露出していたものである。

出土遺物（第13図9）

9は高坏の脚部で、脚裾部を失う。丹塗り土器で、外面が縦方向のヘラミガキ、内面は脚裾部が横方向のハケメ、それより上位が、ナデおよびシボリの痕跡がある。

23号住居

22号住居を切る形で検出された住居で、調査区南側に位置する。東西3.9mを測り、検出面での遺物は出土しなかった。



第13図　19～22号・26・27号住居跡出土遺物実測図（1/3）

24号住居

調査区南側で検出された住居で、一部の検出であるため、住居であるか疑わしい。検出面での遺物は出土しなかった。

25号住居

調査区東側に位置し、一部の検出に留まるため、住居であるかどうか確証を得ない。

26号住居

調査区南東端で検出した住居で、27号住居とは切りあい関係にある。検出面で採取した土器は1点のみである。

出土遺物（第13図10）

10は甕の口縁部片で、外反する口縁から、外に張らない胴部をもつ。内面はヘラケズリである。復元口径20.8㎝、残存高5.0㎝。

27号住居

26号住居に切られる形で検出された住居で、調査区南東端に位置する。南北で5.4ｍを測る。

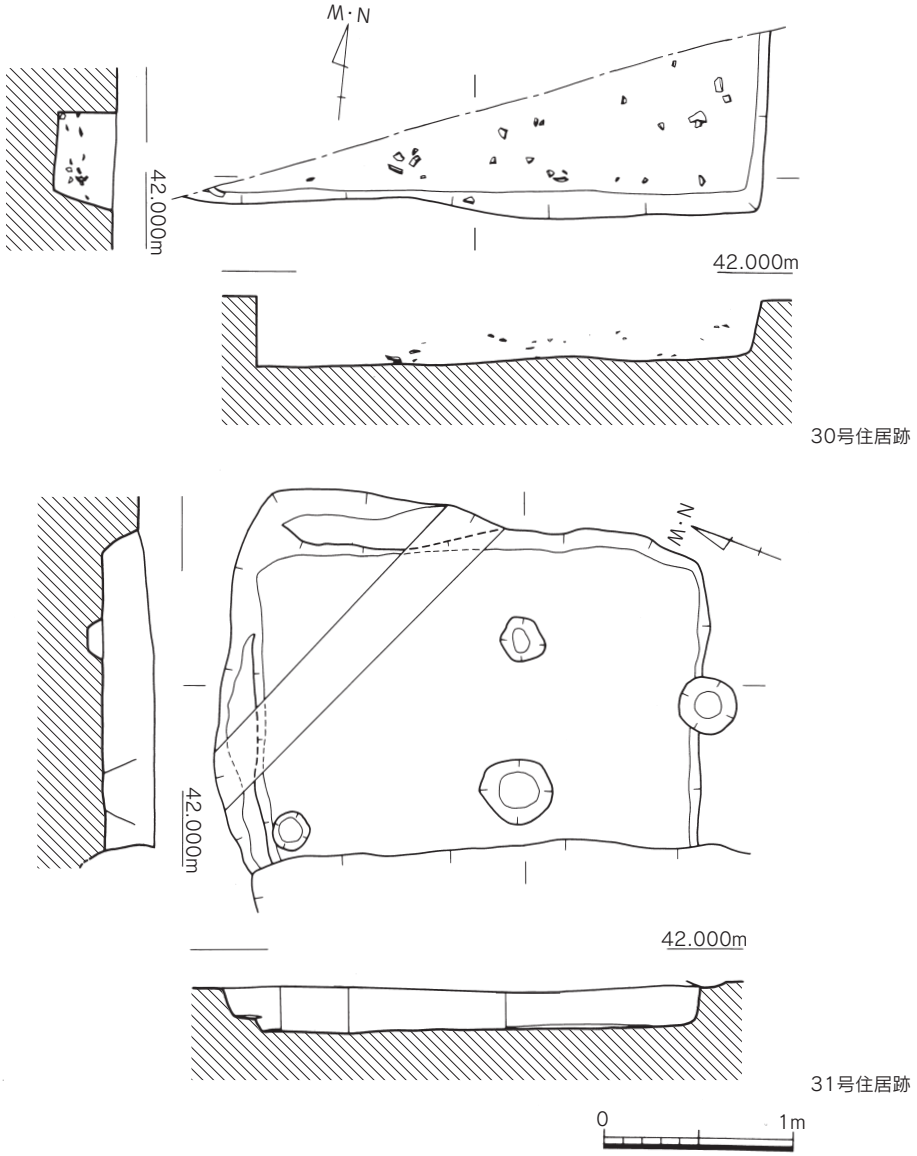
出土遺物（第13図11）

11は甕の底部片で、比較的薄い平底である。外面調整はハケメの後、ヘラ状工具によるナデ、底部近辺を指ナデによって整えている。

30号住居（第14図）

1号溝を切る形で検出された住居で、調査区北東端に位置する。調査区の関係上、住居の角部分のみの確認となったが、深さ30㎝と残りの良い住居である。土器は床面から中位近くにかけて多く出土している。出土土器から、方形住居と考えられ、1辺3m以上の規模である。

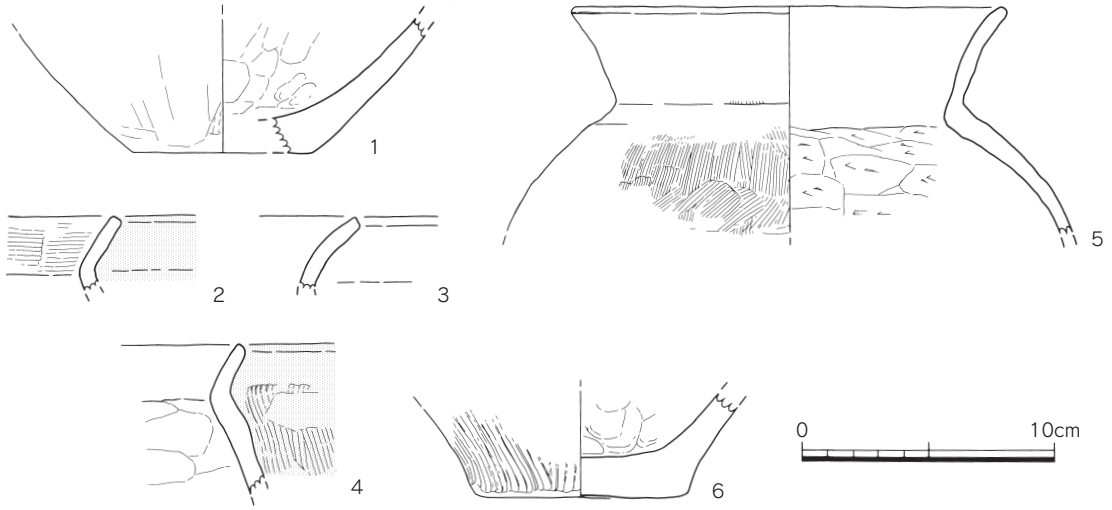
出土遺物のうち、1～4、6は混入品か。5は柳田編年における土師器Ⅲａ式であることから、古墳時代前期末～中期初頭の時期を想定したい。



第14図　30・31号住居跡平断面実測図（1/40）

出土遺物（第15図）

1は壺の底部片で、胴部調整はヘラナデ。底部と胴部の境は丸みを帯びる。2、3は甕の口縁部片である。4は甕の口縁～胴上部片で、弱いくの字口縁である。5も甕の口縁～胴上部片で、口縁は外方に開き、その端部は丸く仕上げる。胴部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラケズリである。6は甕の底部片で、外面調整は底部付近まで縦方向のハケメを行う。



第15図　30号住居跡出土遺物実測図（1/3）

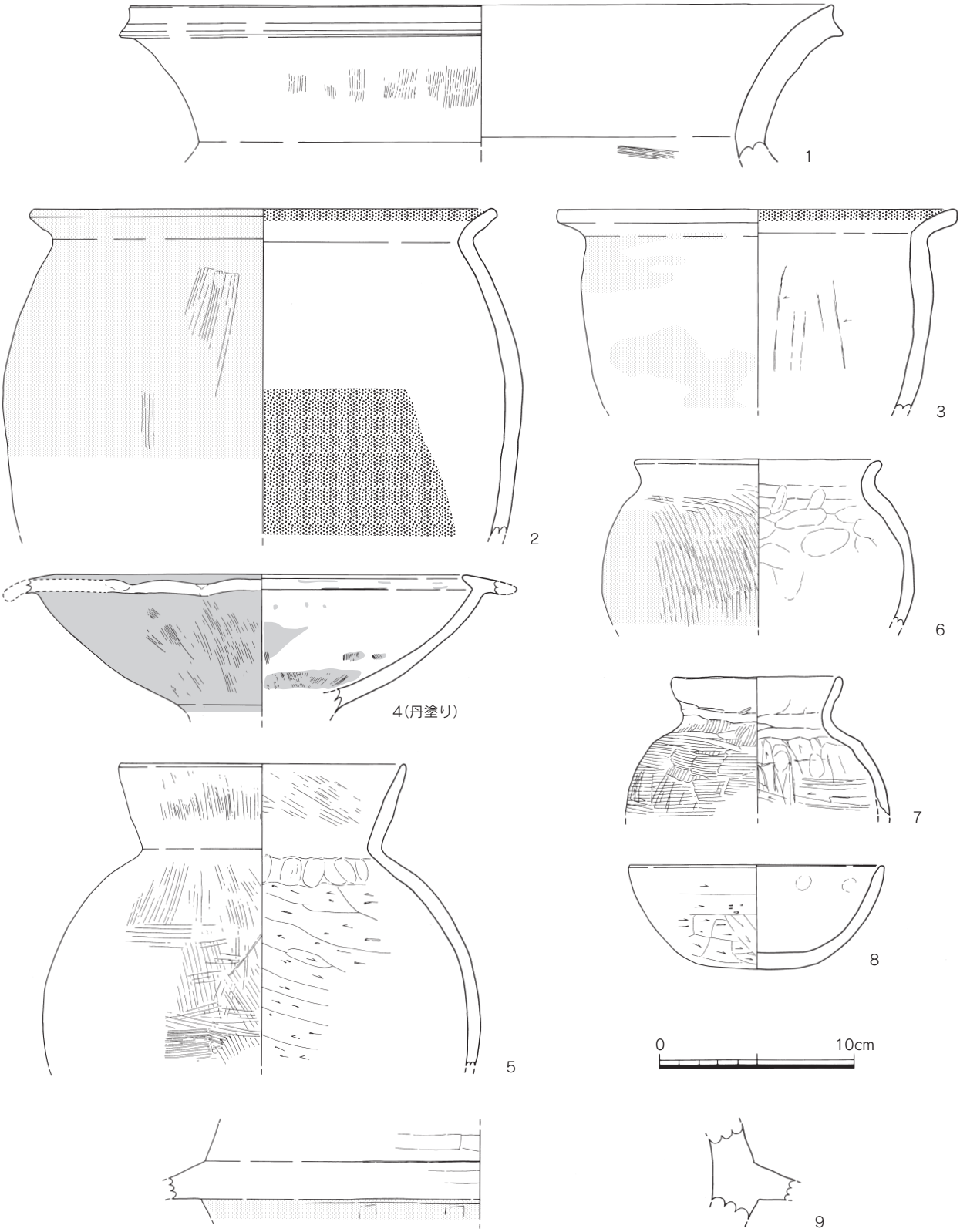
31号住居（第14図）

1号溝の南端部分を破壊して造られた住居で、東西1.8＋αm、南北2.5mの規模で小形である。この住居も18号住居による破壊を受けており、正方形であれば、約2/3が破壊されているものと思われる。住居内のSP-01が柱穴であろうか。

1～5の弥生土器や9の滑石製石鍋は混入品。6は布留式の形状を残しているが、8は柳田編年の土師器Ⅲｂ式であり、古墳時代中期前半である。

出土遺物（第16図）

1は大型甕棺の口縁部片である。口縁端部は強い横ナデを行い、刻目が無い。口縁外面のハケメはナデ消す努力が払われ、内面のハケメの痕跡は、ナデによって確認することができない。2～4は、1号溝からの流れ込みか。2は、くの字口縁の甕で、胴下位を欠損する。胴部最大径が上位にある。3の甕は、外面の煤の付着が著しい。胴部があまり張らず、内面調整はヘラナデを行う。4は鋤先口縁を持つ高坏で、坏部のみ出土した。外下方に垂れ気味の口縁に浅い坏部をもち、丹塗りとハケメを行った痕跡が、内外面にわずかに確認できる。5は甕で、胴下位を欠損する。外面口縁～胴部、口縁内面にハケメ調整、頸部を指オサエ、胴部内面はヘラケズリ調整である。6は短頸壺で、胴部外面のハケメは粗い。7は小型甕で歪みがある。胴部外面をハケメ、内面は棒状工具によるナデ。8は椀で、外面下位にヘラケズリを行う。素口縁は外方に延びる。9は滑石製石鍋片で、鍔の部分である。

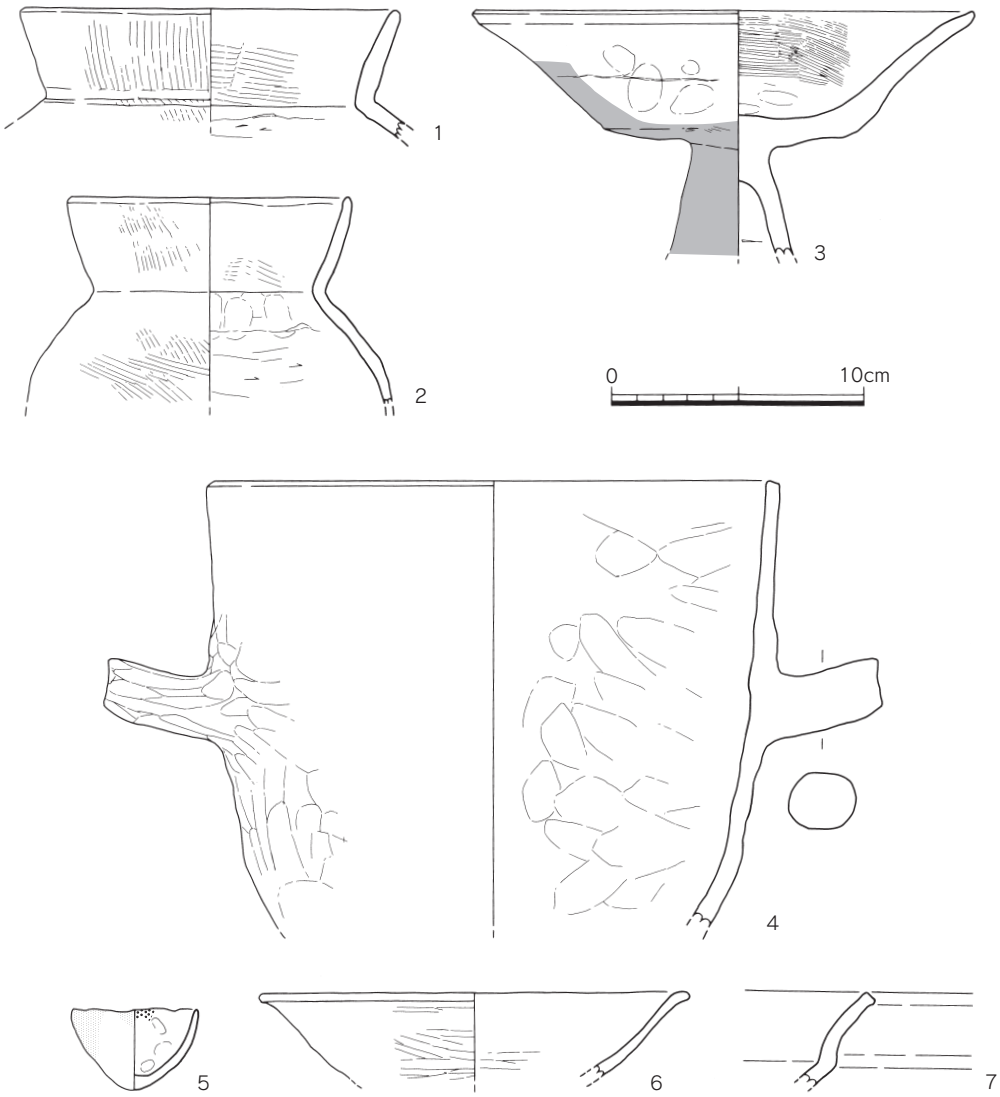


第16図　31号住居跡出土遺物実測図（1/3）

34号住居（第10図）

調査区東側中央に位置し、18号住居を切る形で検出された住居である。18号住居内に収まる形で検出されており、住居中央に設定した土層ベルトの観察では、34号住居の立ち上がりは比較的明瞭であったが、平面プランが歪な形をしていたため、その性格の判断が難しかった。そのため、北半分を主に調査の対象とし、南半分はトレンチによって確認することとした。その結果、北半分では、壁面に沿って排水溝が検出され、東側床面より甑が出土したため、小形の住居と判断した。住居の規模は、東西2.80m、南北2.45mを測る。

出土遺物のうち、1～5は柳田編年の土師器Ⅲａ～Ⅲｂ式の範疇で、古墳時代中期前半に比定され、18号住居との時期差があまりない。6、7は弥生時代後期に該当し、混入品であろう。



第17図　34号住居跡出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第17図）

1は甕の口縁～胴上部片で、くの字形に外反する口縁をもつ。口縁と頸部境の稜は明瞭である。外面が縦方向のハケメ、口縁内面が横方向のハケメ、胴部内面はヘラケズリである。復元口径15.0㎝、残存で器高5.1㎝である。2は小型壺で、胴下半を失っている。わずかに内湾する口縁の端部は、内側につまみ出す。外面は粗いハケメ、胴部内面はヘラケズリとナデで成形する。復元口径11.2㎝、残存高8.1㎝を測る。3は高坏で、脚部を欠損する。復元口径19.5㎝、残存高9.7㎝である。坏部に段を有し、口縁が外方へ大きく開く。坏部外面には粘土の繋ぎ目が明瞭に残る。土師器Ⅲａ式。4は甑で、口縁～胴下半までの残存。素口縁で、胴部までは直線的にすぼまっている。胴上位につく把手は、端部を板ナデで面取りしており、直線的に上方へと延びている。内外面共にナデ調整である。復元口径22.5㎝、残存高17.7㎝を測る。5は手づくね土器で、ナデ成形。尖り底を呈する。復元口径4.9㎝、器高3.2㎝と小型である。6は高坏の口縁～坏部のみ残存で、外反する口縁をもつ。内外面共にヘラミガキ調整である。復元口径17.0㎝、残存高3.4㎝である。7は高坏の口縁部片で、短く外反する。

35号住居

調査区東側中央に位置し、東西4.5ｍ、南北3.5ｍの長方形住居である。この付近は、ほ場整備の際に重機による掘削が行われていたようで、住居もこの削平を受けているほか、住居中央に現代の撹乱が掘られている。この撹乱は住居の床面には達しておらず、図示した出土遺物は、この撹乱内ものである。

出土遺物（第19図1～6）

1は須恵器の甕胴部片で、内外面ナデ調整である。2は高坏で、坏部と脚部は接合しないが、図上で復元した。復元口径16.6㎝である。3は椀で、4は坏である。3は丸みを帯びた体部に、底部付近にヘラケズリを行う。復元口径14.0㎝、残存で器高4.2㎝を測る。4は口縁が外方に開くもので、復元口径15.0㎝、器高3.3㎝を測る。5は鼓型器台で、脚部のみの出土。外面ナデ、内面は横方向のハケメ。脚部径復元10.0㎝である。6は高坏の坏部のみが出土。外方に開く口縁と深い坏部をもつ。復元口径15.5㎝、残存で器高6.6㎝を測る。

36号住居

調査区中央に位置する住居で、1号水路に切られる形で検出した。東西3.0ｍ、南北4.9ｍを測り、平面形は長方形である。埋土に弥生時代後期の遺物が含まれていたため、井原鑓溝遺跡との関連が疑われたが、1号水路下には甕棺墓壙のような痕跡は無かったため、住居と判断した。

出土遺物（第19図7･8）

7は甕の胴上部片で、口縁下に三角突帯を貼付する。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整である。8は、くの字を呈する口縁部片である。

37号住居（第18図）

調査区北東側で検出した住居で、検出当初、住居の存在が不明確であったため、南北のトレンチを設定したところ、2軒の住居が切り合っている事が分かり、37号住居が新しい。ＧＬから深さ49㎝で床面に到達し、床面では炭化材が出土している。焼土の出土は少量であるが、焼失住居の

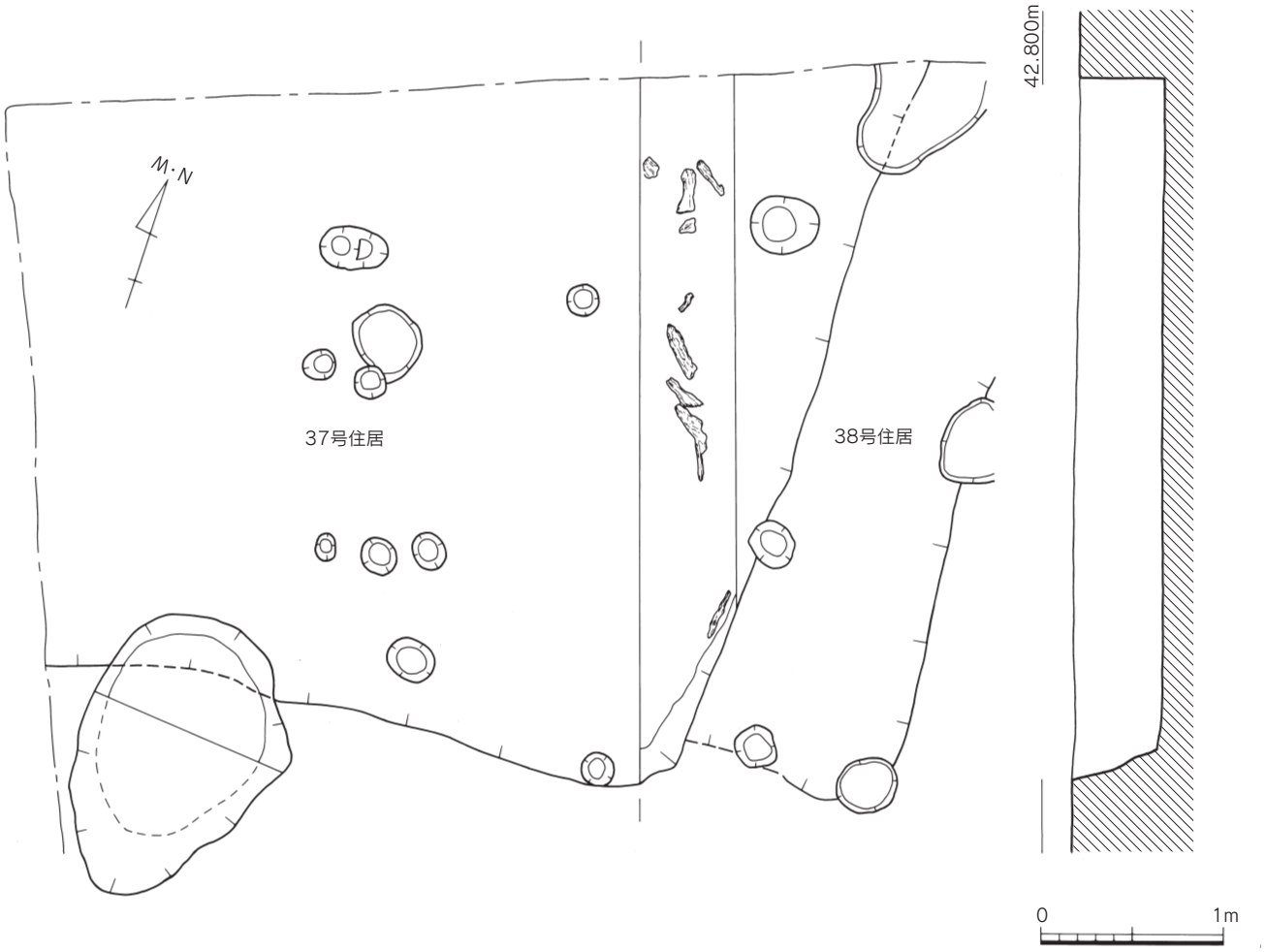
可能性がある。

出土遺物（第19図9～11）

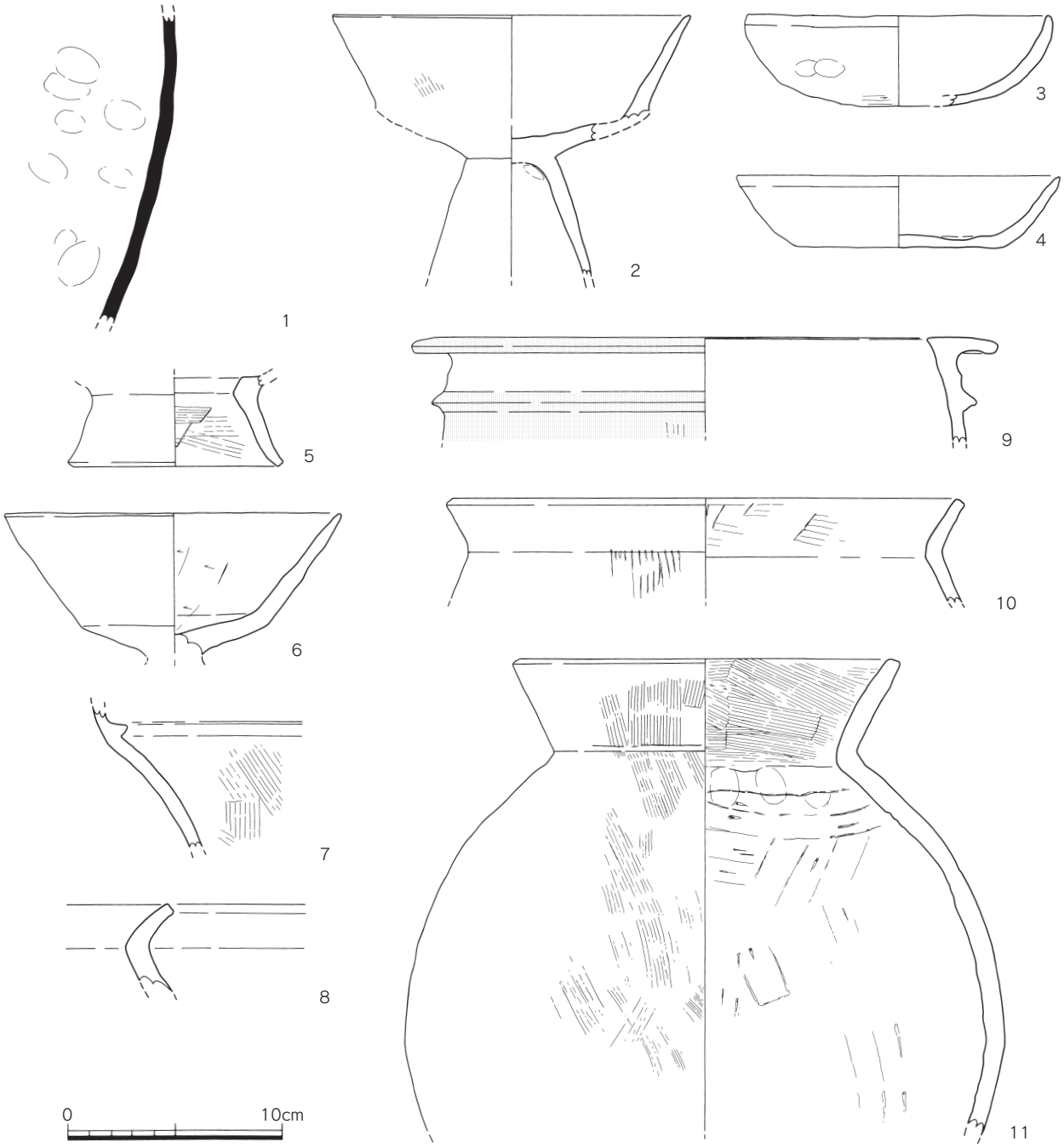
9は鋤先口縁をもつ甕。口縁は外方に垂れ、口縁下に三角突帯を貼付する。突帯下にハケメがわずかに残る。復元口径27.2㎝、残存高4.8㎝を測る。10は、くの字口縁をもつ甕で、胴部外面と口縁内面にハケメを行う。復元口径24.0㎝、残存高4.8㎝を測る。11は甕で、胴部下半を欠損するが、胴部最大径は胴中位にあるものと思われる。外面調整は縦方向のハケメ、口縁内面は横方向のハケメ、胴部内面のヘラケズリも明瞭である。

38号住居

調査区北東側に位置し、37号住居に切られる住居。検出当初は、切り合い関係は認められたものの、新旧の判断が困難であったため、37号住居のトレンチにより、新旧を確認した。遺物は出土していない。



第18図　37号住居跡平断面実測図（1/40）



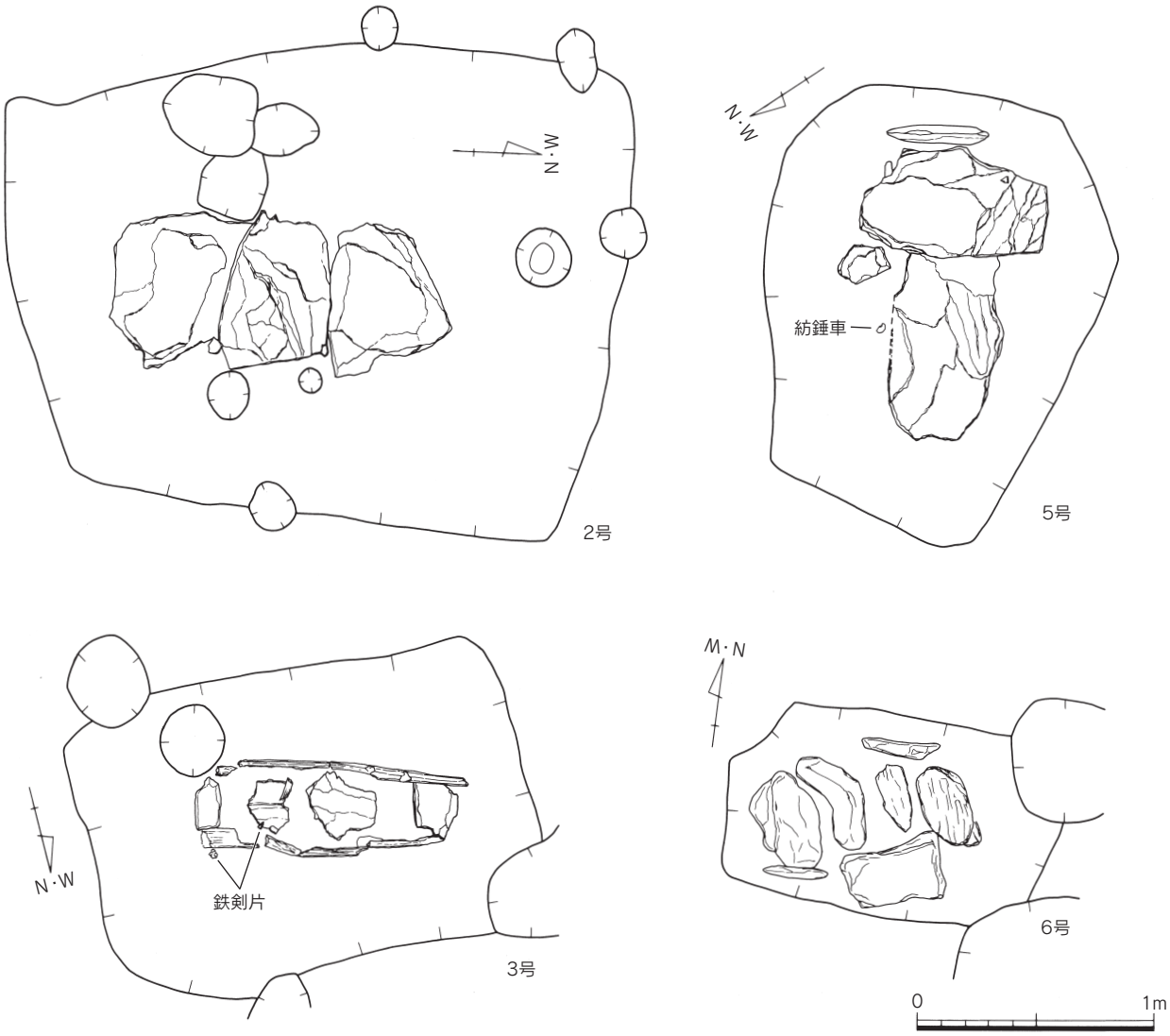
第19図　35～37号住居跡出土遺物実測図（1/3）

⑶箱式石棺墓

本遺跡では、箱式石棺墓7基検出された。墓群は2つに分かれ、1、2、3、6号箱式石棺墓の群と4、5号箱式石棺墓の群に分かれる。さらに、前者の群は1、2号祭祀土坑が付帯している。箱式石棺墓の調査は、そのほとんどを平面的な検出に留め、内部を調査したのは4号箱式石棺墓のみである。また、1号箱式石棺墓と1号甕棺墓は、昭和49年に福岡県教育委員会による三雲上覚遺跡Ⅰ－6において、既に調査されているため、今回の調査で新たに検出した箱式石棺墓は、これに連続する形で番号を付した。

2号箱式石棺墓（第20図）

調査区北西側で検出された箱式石棺墓で、その北側には2号祭祀土坑が存在する。墓壙平面は、東西1.9m、南北2.5mの長方形であり、その墓壙内の南寄りに天井石を3枚確認した。天井石の規模は、南北1.4m、東西0.6mで、比較的に薄手の板材である。



第20図　2・3・5・6号箱式石棺墓実測図（1/30）

3号箱式石棺墓（第20図）

調査区西側中央に位置する箱式石棺墓で、その南側には1号祭祀土坑がある。東西1.9m、南北1.3mの長方形墓壙を有し、小形の箱式石棺墓である。検出した段階で、既に側石が見えている状態で、北側石に4枚、南側石5枚、天井石4枚で構成される。小口石は南北共に天井石の下にあるが、側石内に収まる構造と考えられる。

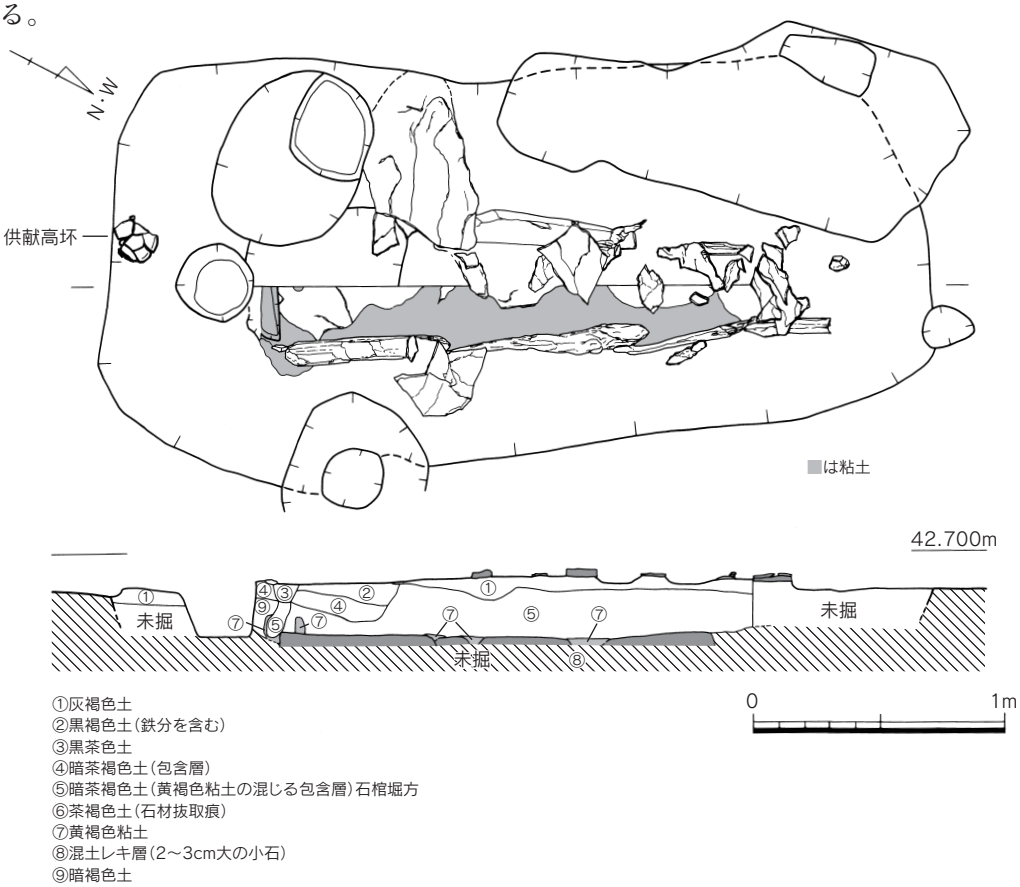
鉄剣片は、棺内東側および南小口に近い北側石の棺外から出土したもので、2つ破片は接合する。

出土遺物（第22図1）

1は鉄剣の身部で、さびの進行が著しく、小石が癒着する。中央を走る稜は明瞭ではなく、身幅3.5㎝、厚さ0.5㎝を測る。

4号箱式石棺墓（第21図）

調査区西側中央に位置し、5号箱式石棺墓とペア埋葬となる成人棺である。墓壙平面は、東西1.55m、南北3.25mの歪な長方形を有している。天井石は、水田の排水溝によって破壊を受けており、天井石のズレや南小口石の抜き取りは、この時に生じたものである。調査は棺内の東側半分のみ対象として行った。東側壁は東側石4枚を組み合わせて使用し、西側石は2枚まで確認できる。南小口は天井石下にあるため、不明確であるが、凵形となる。床面は板石を4枚敷いた上で、その隙間を黄褐色粘土によって丁寧に目張りして貼り床としている。棺幅は北に向かって狭まっており、南頭位と考えられ、その頭位方向（墓壙南端）には高坏が供献されている。古墳時代初頭に比定される。



第21図　4号箱式石棺墓平断面土層実測図（1/30）

出土遺物（第22図2）

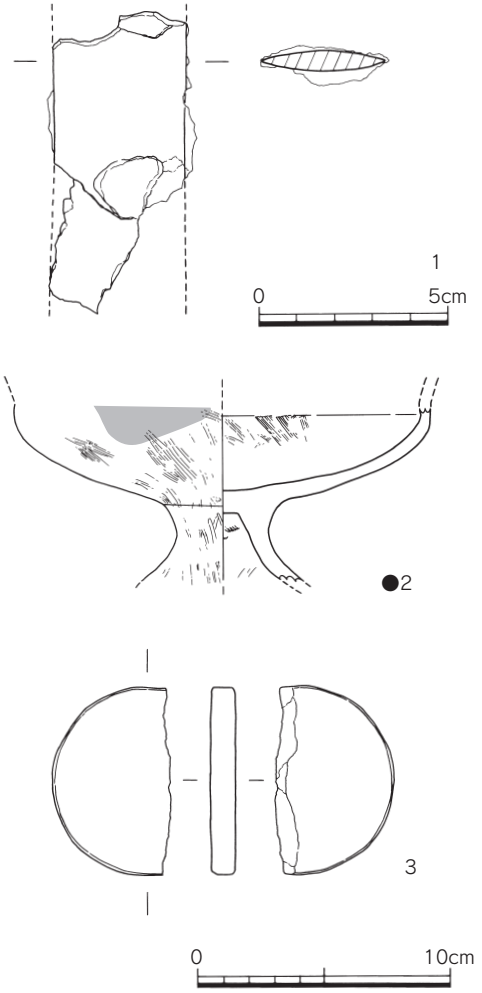
2は高坏で、口縁と脚裾部を欠損する。坏部は、口縁との粘土接合部分できれいに外れている。脚部にミガキが残るが、坏部は内外面ともにハケメ調整。

5号箱式石棺墓（第20図）

4号箱式石棺墓に隣接し、調査区西側中央に位置する。東西0.9～1.5m、南北1.8mの歪な長方形を呈する墓壙で、墓壙内の天井石2枚は長辺の向きを変えることで、棺の長さを調整していることが分かる。現状では南小口石の位置は確認できたが、側石がうまく組み合わされていない。紡錘車は、天井石から6㎝程度上位から出土したものである。

出土遺物（第22図3）

3は紡錘車で、約1/2が残存する。面径4.9㎝で、中央の穿孔は見られない。石材は片麻岩系である。



第22図　3～5号箱式石棺墓出土遺物実測図
（1/2・●は1/3）

6号箱式石棺墓（第20図）

三雲上覚遺跡Ⅰ-6調査区の再調査で新たに検出された箱式石棺墓である。1号箱式石棺墓と切り合い関係にあり、1号箱式石棺墓の方が新しい。小形の箱式石棺墓で、東西1.4m、南北0.9mの長方形墓壙である。検出面で床石、側石が見られ、板石ではなく塊石を使用している。床面に4点、南側石に2点、北側石1点を組み合わせているが、その造りは丁寧ではない。

7号箱式石棺墓

調査区中央部で、1号水路及び36号住居に切られる箱式石棺墓である。検出した段階で南北に小口石東側で側石を確認した。保存を優先し、内部の調査を行っていない。

⑷甕棺墓

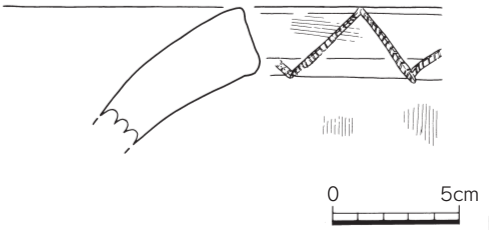
甕棺墓については、福岡県教育委員会による昭和49年度調査において出土した甕棺墓を1号としていることから、今回新しく検出した甕棺墓を連番として調査を行った。基本的には、現地保存を優先したため、甕棺自体は、口縁部分の検出のみに留めており、取り上げたのは遺構検出時のものである。

2号甕棺墓

調査区北西側で検出した甕棺墓で、4号箱式石棺墓と切りあい関係にあり、4号箱式石棺墓よりも古い。取り上げを行ったのは、口縁の一部のみである。弥生時代終末期と考えられる。

棺体（第23図）

甕棺の口縁部片で、口縁の内側への傾きが強い。口縁端部は、横方向のハケメの後に、鋸歯状の刻目を行う。外面は、口縁端部近くまで粗いハケメである。内外面共に橙色である。



第23図　2号甕棺墓出土遺物実測図（1/3）

⑸祭祀土坑

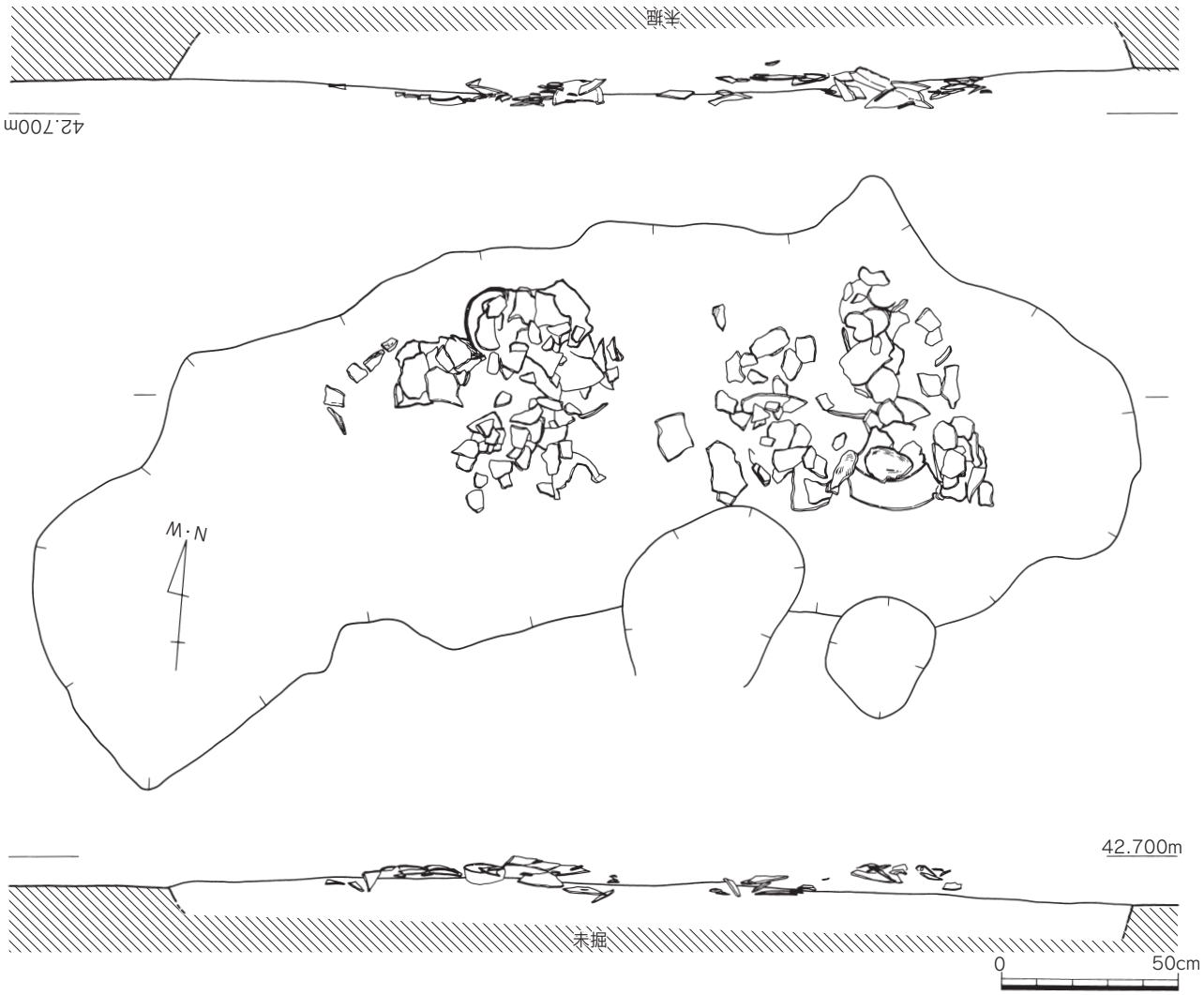
1号祭祀土坑（第24図）

調査区北西側に位置し、3号箱式石棺墓に近接する。東西2.7m、南北1.1mの歪な楕円形を呈しており、土坑内からは多くの土器が出土した。土器は平面的に2つの群に分かれており、東側に集中するグループを第1群（5、9）、西側に集中するグループを第2群（1、2、3、4、6、7、8、10、11）として取り上げを行った。遺構の時期比定のため、調査は上層の土器を取り上げるのみとして、掘削を伴う下層の調査は行っていない。

1、2、4などは柳田編年の土師器Ⅰａ式であるが、3、7などは土師器Ⅰｂ式である。2つの群に時期差はないが、出土遺物の中でも新しい傾向のものが含まれていることから、上層に含まれる土器は、古墳時代初頭と考える。

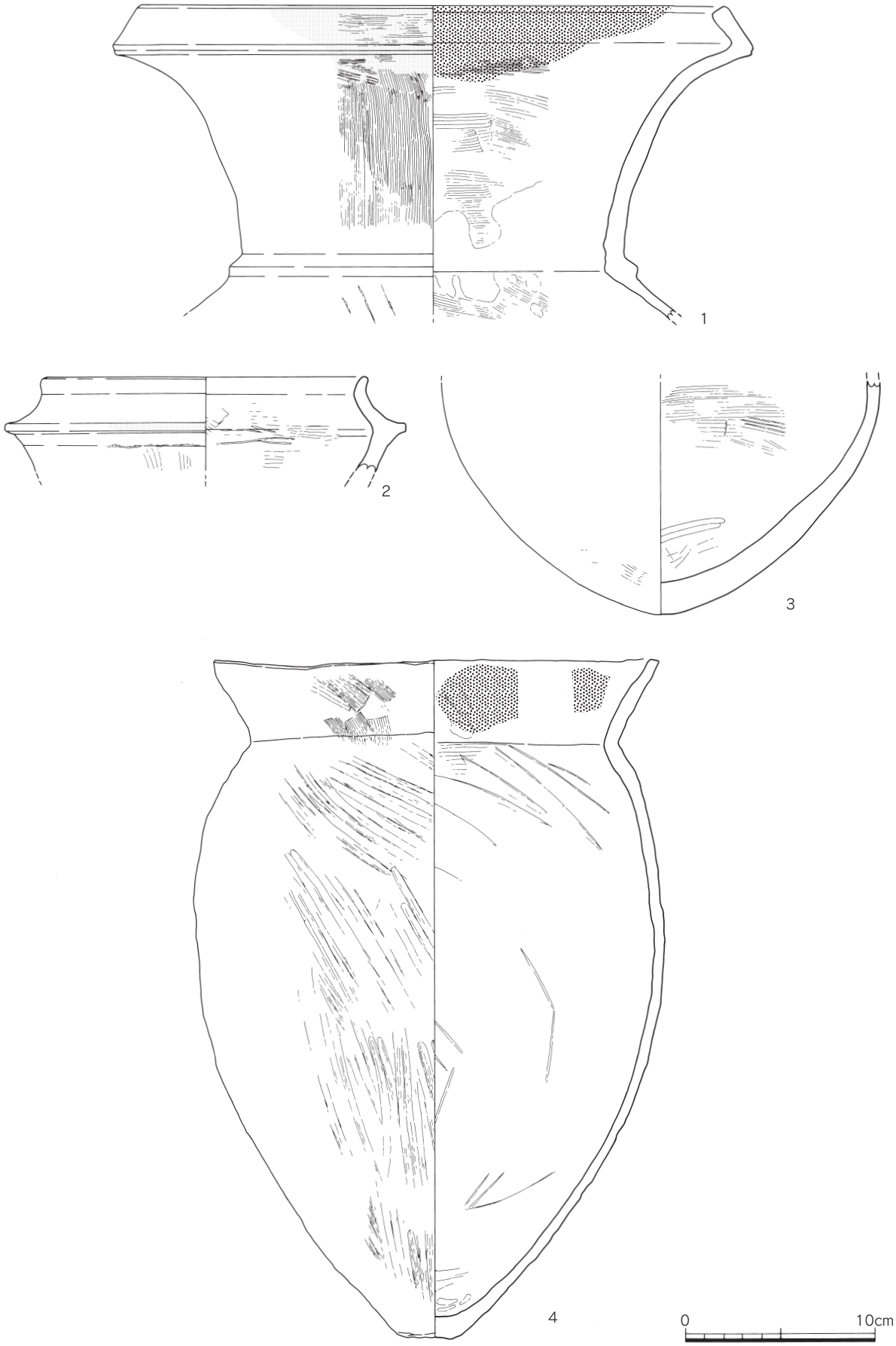
出土遺物（第25・26図）

1は複合口縁壺の口縁部～胴上位が残存するものである。あまり外反が強くない頸部に、くの字の口縁がつく。頸部と胴部の境には三角突帯を貼付する。内外面共にハケメ調整である。復元口径30.7㎝、残存高16.2㎝を測る。2も複合口縁壺の口縁部片で、くの字に屈曲する口縁から、その端部が外反する。内外面共にハケメ調整。復元口径17.0㎝。残存高4.9㎝。3は壺か甕の底部片。尖り気味の底部であり、内面には横方向のハケメが残る。残存高12.2㎝。4は在地系甕で口径23.4㎝、器高35.7㎝、底径3.3㎝を測る。口縁端部を面取りし、胴部最大径が胴上位にある。底部は小さな平底。調整は、口縁外面が縦方向のハケメ、胴部が棒状工具によるナデ、胴部内面は横方向のハケメの後に、板状工具によるナデである。柳田編年Ⅰａ式。5も在地系甕で、4と同様、口縁端部の面取り、胴部最大径が胴部の上位にくる。口縁下には三角突帯を1条巡らす。外面調整は、口縁～胴部がハケメ、胴中位が棒状工具によるナデ、胴下位に擦過痕。内面はハケメ調整である。復元口径25.5㎝、残存高24.6㎝を測る。6は甕の口縁部片で、口縁端部を面取りした上で、

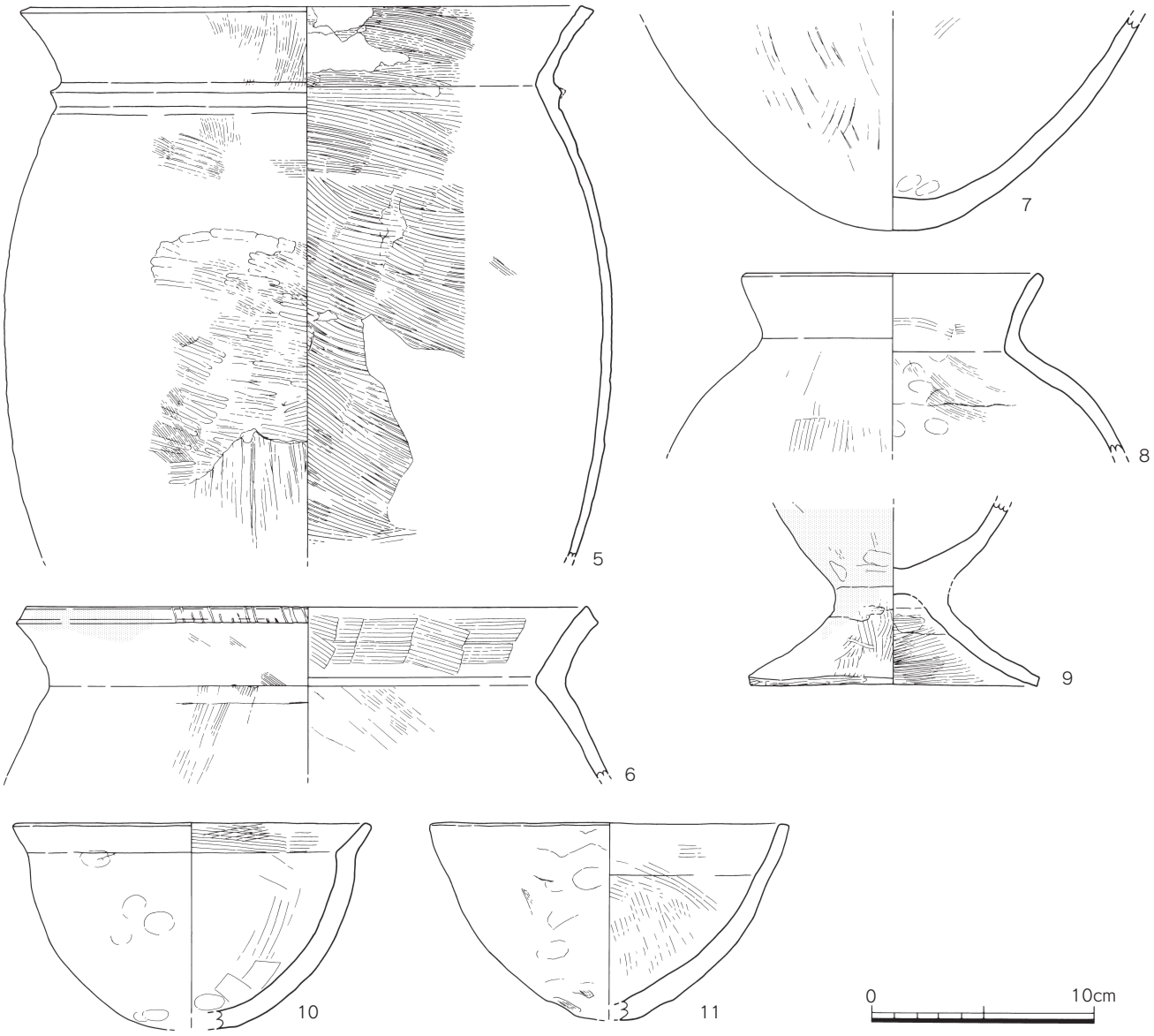


第24図　1号祭祀土坑平断面実測図（1/20）

刻み目を施す。内外面共にハケメ。7は甕の底部片で、丸底に近い底部をもつ。外面には擦過痕を残す。8も甕で、口縁部から胴上位まで残存。復元口径13.0㎝、残存高8.0㎝。9は脚台付土器で、脚部から胴下位まで残存する。復元脚部径12.8㎝、残存高8.0㎝。10、11は椀である。10は外反する口縁をもち、やや平底気味の底部である。復元口径16.0㎝、残存高9.2㎝。11はあまり外反しない口縁で、丸底に近い。復元口径16.0㎝、残存高8.8㎝を測る。



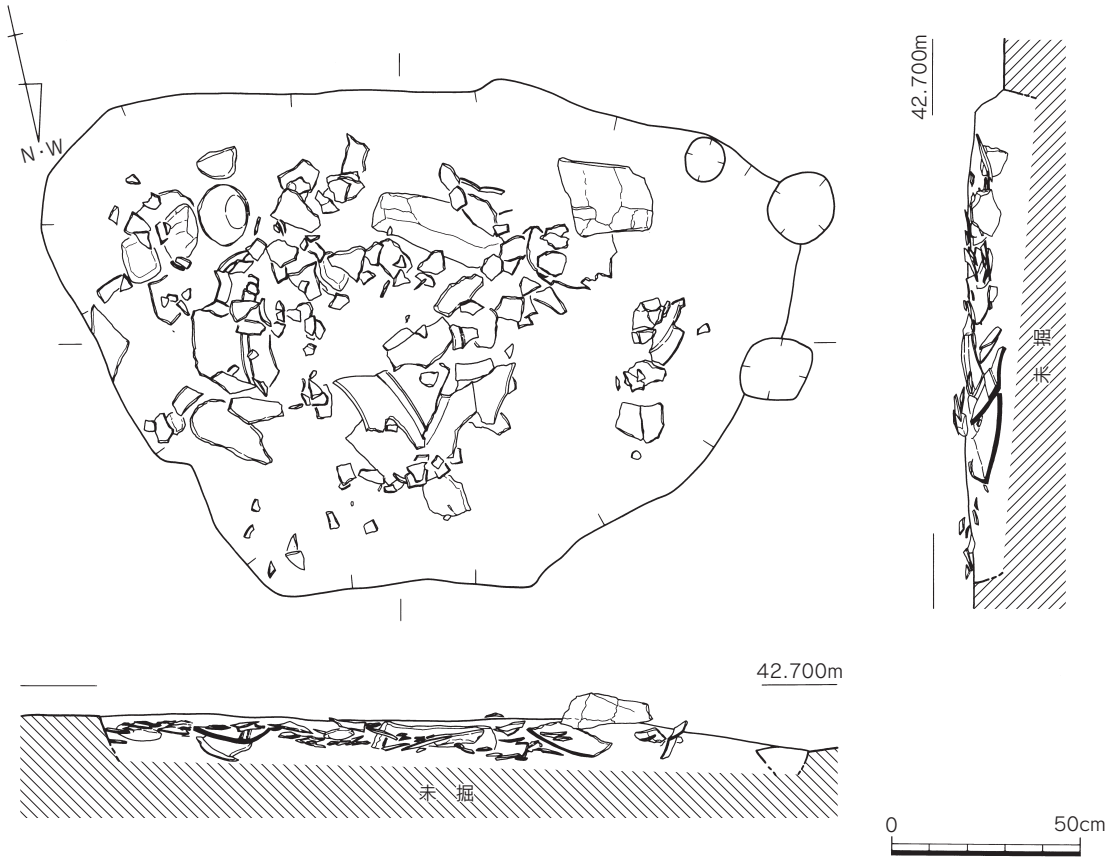
第25図　1号祭祀土坑出土遺物実測図①（1/3）



第26図　1号祭祀土坑出土遺物実測図②（1/3）

2号祭祀土坑（第27図）

2号箱式石棺墓の北側、調査区北西に位置し、2号箱式石棺墓に隣接している。平面プランは逆台形を呈し、東西1.8m、南北1.3mの規模である。遺構検出の段階で、古墳時代初頭の土器群が見られたため、祭祀土坑と判断して、1号祭祀土坑と同様、下層の調査は行わなかった。柳田編年による土師器 Ia ～ Ib式の土器が出土しており、上層に含まれる土器は古墳時代初頭に比定される。



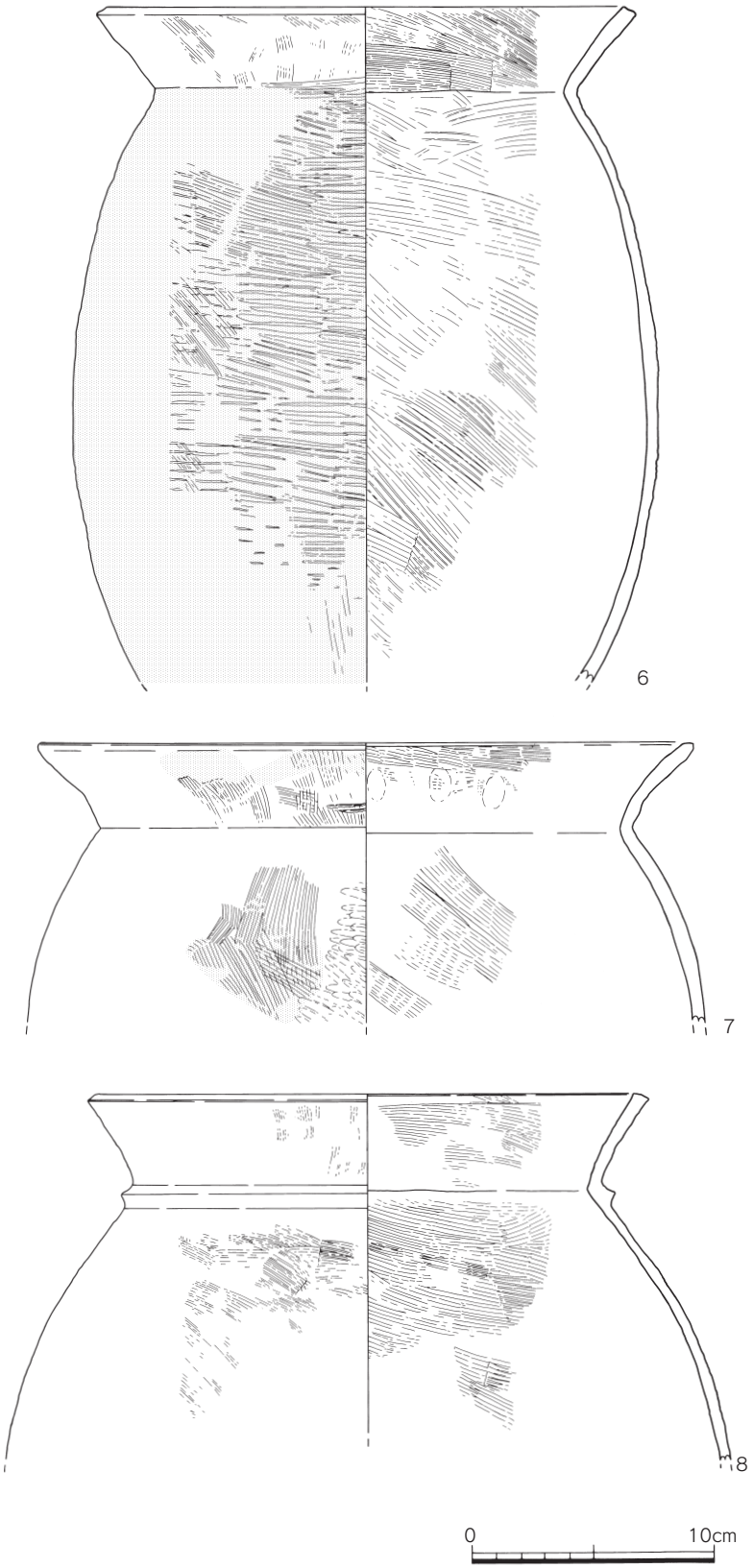
第27図　2号祭祀土坑平断面実測図（1/20）

出土遺物（第28～31図）

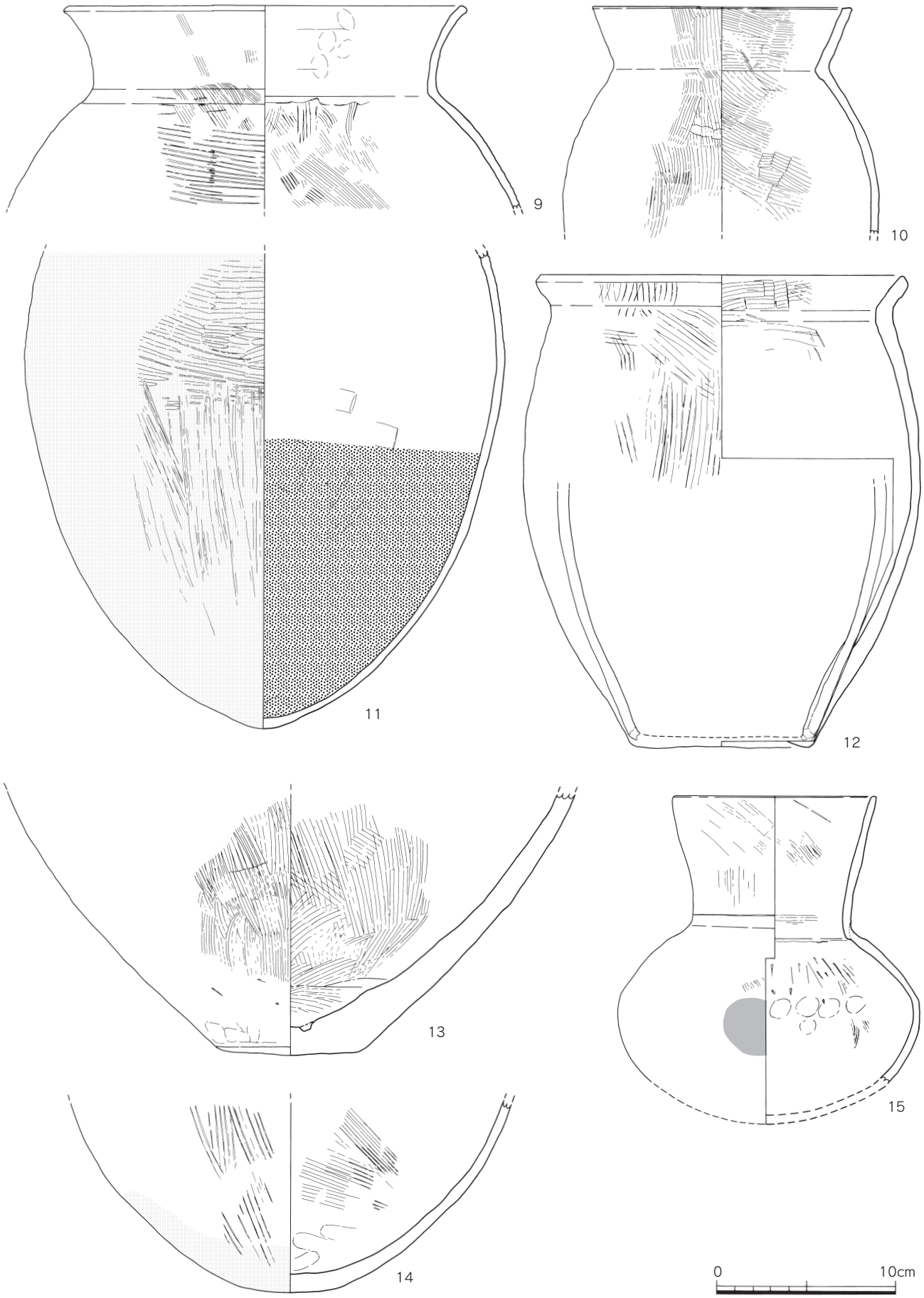
1は底部が丸底化した甕で、口縁部はそれほど外反せず、頸部内面の屈曲もあまり明瞭ではない。胴部外面はタタキの跡に縦方向のハケメを施すが、タタキの方向は右下がりである。胴下位は板状工具によるナデ。胴部内面は下位までハケメ調整である。2は直立気味の口縁をもつ甕で、口縁から胴中位まで残存する。胴部外面に横方向のタタキを残す。3は在地系の甕。くの字口縁から胴中位に最大径があり、底部は小さな平底状を呈する。外面調整は胴上半がタタキ、胴下半に擦過痕。内面はハケメ調整である。4も在地系甕であるが、底部が丸底化し、胴中位に最大径がある。口縁から胴部の外面は粗いハケメ、下半はヘラケズリ。内面は粗いハケメを行う。5は甕で、口縁～胴中位まで残存。胴部外面に右下がりのタタキ、内面はハケメ調整である。6の甕は、胴下位を欠損する。口縁端部は丸く仕上げ、くの字口縁から肩があまり張らず、胴中位に最大径がある。胴部外面は横方向のハケメ、胴部内面は斜方向のハケメである。7の甕は口縁～胴上部まで残存する。胴部外面は右下がりのタタキの後にハケメ調整。8も口縁～胴上部まで残存する甕で、口縁端部を面取りする。頸部に三角突帯を1条巡らし、内外面共にハケメ調整である。9は甕で、あまり外反しない口縁をもつ。胴部外面は右下がりのタタキ、内面はハケメ調整である。10は小型の甕で、

第28図　2号祭祀土坑出土遺物実測図①（1/3）

口縁～胴中位まで残存する。内外面共にハケメ調整。11は甕の胴中位～底部にかけて残存する。底部は尖り底を呈し、外面胴上位に右下がりのタタキ、胴中位以下に擦過痕。内面は板状工具によるナデを行う。12は窓開き土器で、くの字形口縁に平底を呈する。外面は粗いハケメ、胴部内面は板状工具によるナデである。窓は底部内面の位置から、外方に大きく開く形状となっている。窓の胴上位部分は残存していないため、全体像が不明であるが、このような底部近くから開く窓は珍しい。13は壺の底部片で、平底である。内外面共にハケメ調整。14は甕の胴下位から底部にかけて残存する。底部は丸底であり、内外面にハケメを行う。15は長頸壺で、底部を失っている。逆ハの字状に延びる口縁に、偏球形の体部が付く。頸部には、粘土の繋ぎ目にあわせて、強いナデにより生じた沈線が巡る。16は高坏で、坏部からわずかな屈曲を経て外反する口縁をもつ。内

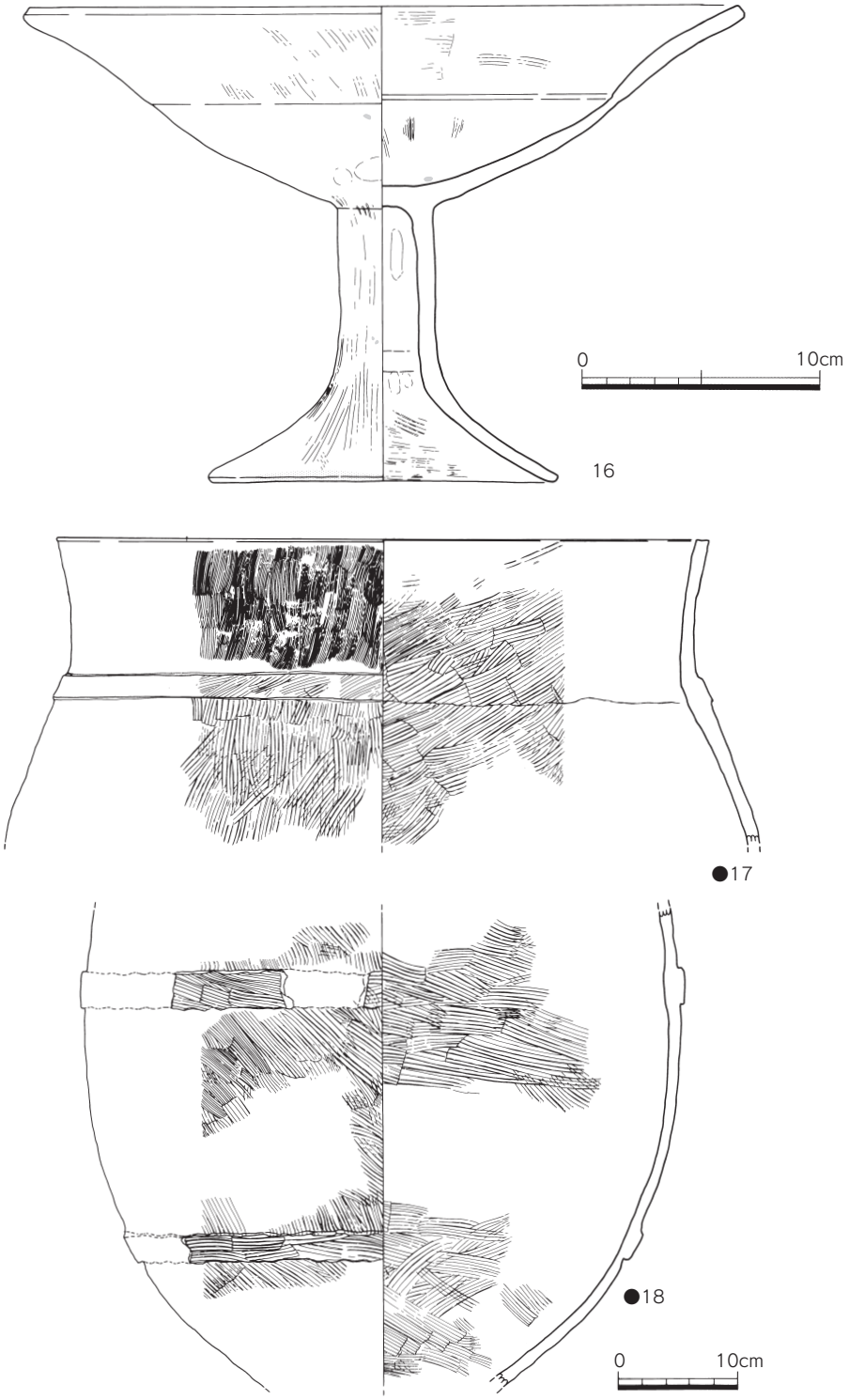


第29図　2号祭祀土坑出土遺物実測図②（1/3）



第30図　2号祭祀土坑出土遺物実測図③（1/3）

外面の調整はハケメが目立つが、サキゾノ地区Ⅰ-1の1号住居出土高坏よりも脚部が短脚で、口縁も長く延びない。17は福井式甕棺で、口縁部～胴上部の破片である。直立気味の口縁をもち、頸部にハケメを残す扁平突帯を1条巡らす。口縁外面は、細かなハケメを行うが、胴部外面や内面は粗いハケメである。18も福井式甕棺で、胴中位～胴下位が残存する。2条ある扁平突帯は上下縁が波状となり、ハケメ調整を残す。内外面共に粗いハケメ調整である。



第31図　2号祭祀土坑出土遺物実測図④（1/3・●は1/6）

⑹土壙墓

土壙墓は調査区東側を中心に4基検出した。2号土壙墓が平安時代後半～末、3・4号土壙墓が鎌倉時代に比定される。

1号土壙墓

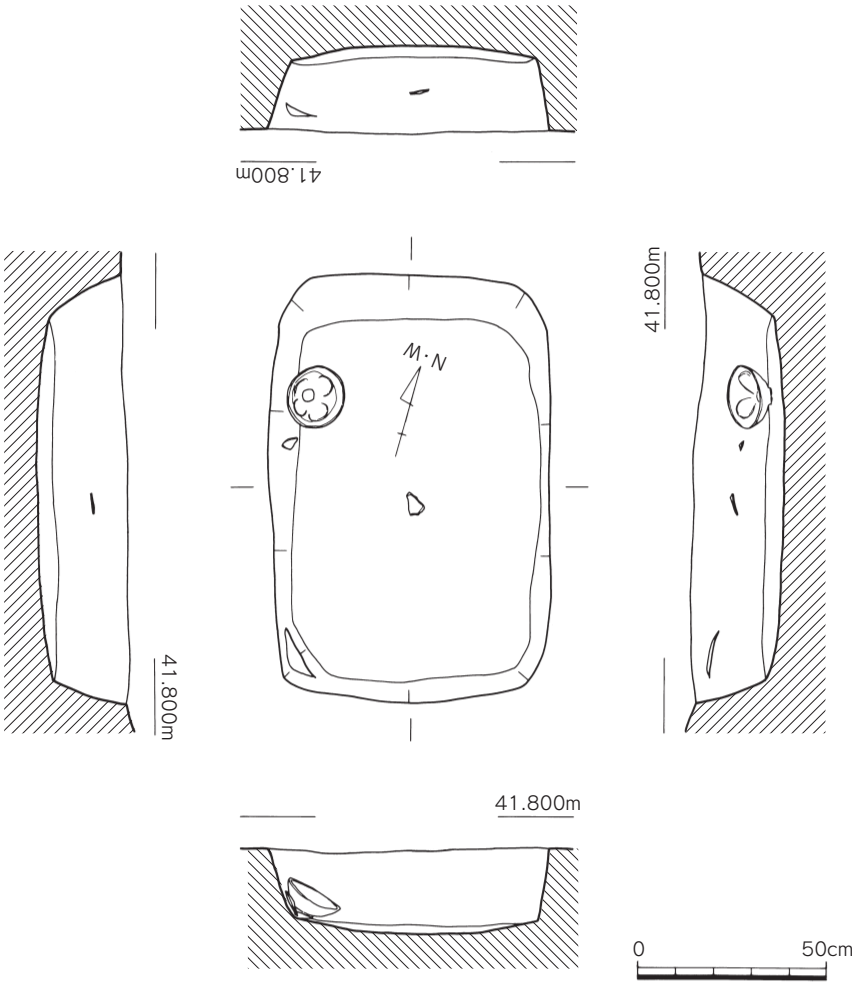
調査区北東側に位置し、18号住居の南東で検出した土壙墓である。造成工事の際に重機による掘削を受けており、墓壙の約半分が大きく破壊されていた。墓壙は東西1.1m、南北1.4mの長方形プランを呈している。

2号土壙墓（第32図）

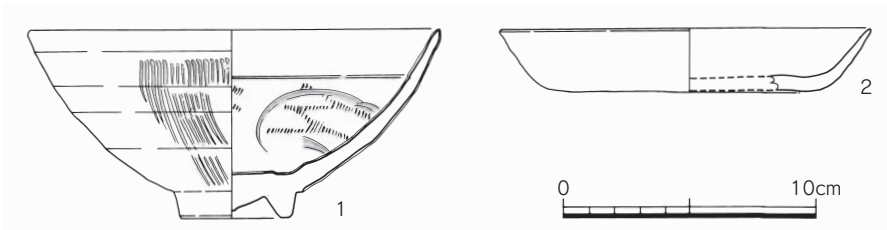
調査区東側に位置し、2号溝を切る形で検出された土壙墓である。墓壙は東西0.74m、南北1.13m、深さ24㎝を測り、断面は逆台形である。北東側の同安窯青磁1点は供献品である。12世紀中～後半頃である。

出土遺物（第33図）

1は同安窯青磁椀で、完形である。小さな高台から湾曲しながら外方に延びる体部をもつ。外面は細かな櫛目文、内面は略化した花文と点描文を有する。口径16.2㎝、器高7.4㎝高台径4.5㎝を測る。2は土師器坏で、切り離しはへら切り。復



第32図　2号土壙墓平断面実測図（1/20）



第33図　2号土壙墓出土遺物実測図（1/3）

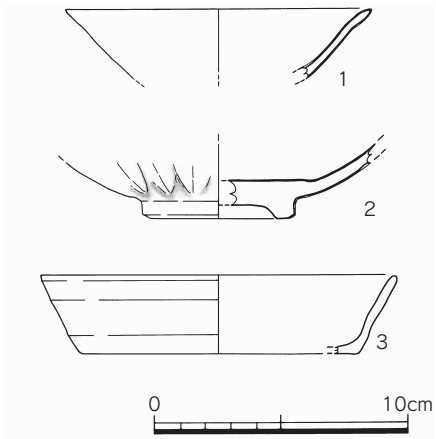
元口径14.4㎝、器高2.4㎝を測る。

3号土壙墓

調査区北東側で検出した土壙墓で、墓壙の東側が土層ベルト内である。墓壙の規模は、現状で東西1.65m、南北1.85m、長方形を呈している。13世紀後半～14世紀と考えられる。

出土遺物（第34図）

1は白磁椀で、底部を失っている。口縁が外反し、口縁端部は口禿げである。2は龍泉窯青磁椀で高台部分のみの残存である。外面に片彫り連花文がある。3は土師器坏で、底部はヘラ切り。復元口径14.0㎝、器高3.1㎝である。



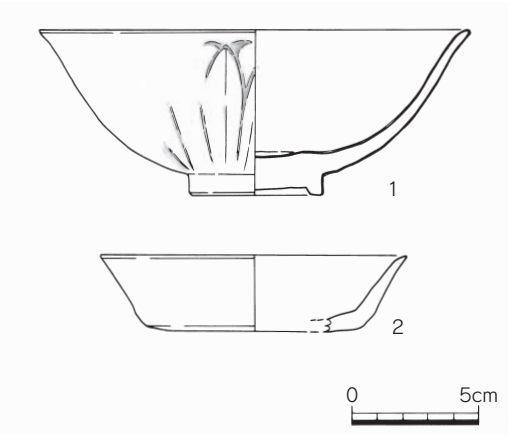
第34図　3号土壙墓出土遺物実測図（1/3）

4号土壙墓

調査区中央に位置する土壙墓である。墓壙の規模は東西1.65m、南北1.2mを測り、長方形を呈する。墓壙中央北寄りで龍泉窯青磁と土師器坏が出土したため、土壙墓と判断した。13世紀後半～14世紀。

出土遺物（第35図）

1は龍泉窯青磁椀で、外反する口縁をもち、厚手の高台がつく。体部外面には鎬連弁、内面の無文。復元口径17.0㎝、器高6.5㎝、高台径5.2㎝を測る。2は土師器坏で、底部を欠損する。



第35図　4号土壙墓出土遺物実測図（1/3）

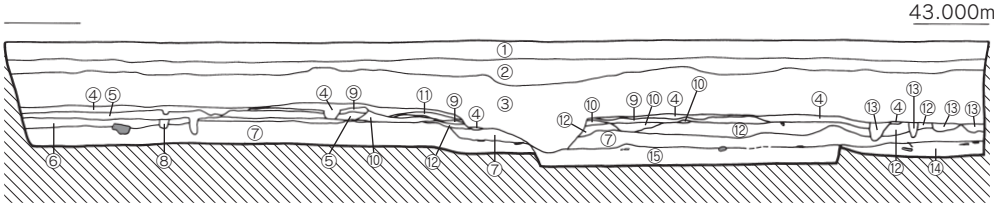
⑺溝

1号溝（第36～39図）

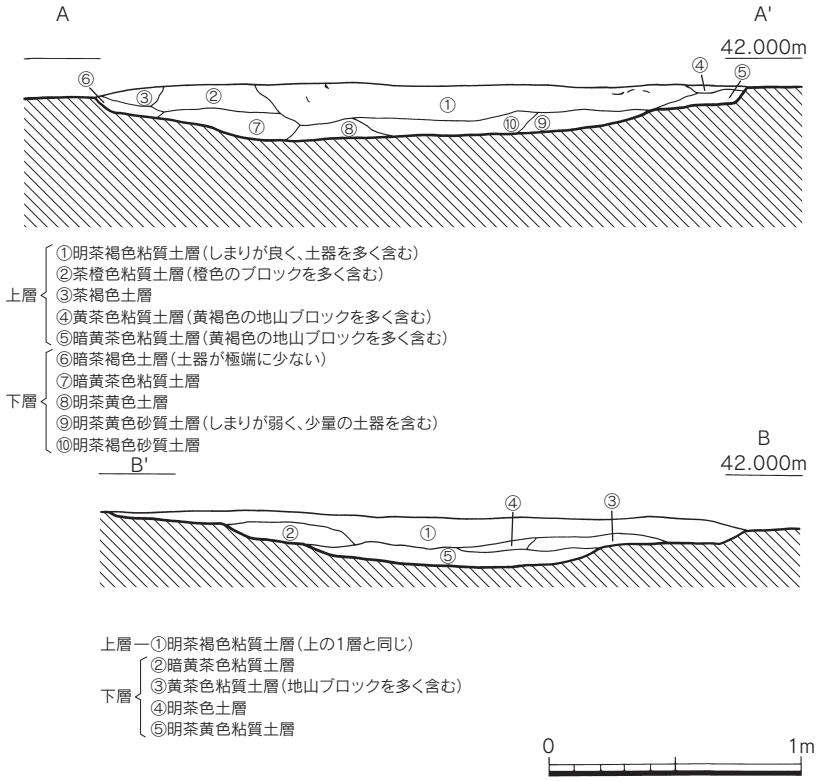
調査区北東側で検出した溝で、三雲南小路遺跡の南側に位置する。溝の位置、方向は、三雲南小路遺跡の1号溝の延長方向と一致していることから、地権者の許可範囲までの拡張を行った。基本層序は、最上面に現在の水田層があり、造成土を挟んで下位に旧水田層がある。この旧水田層下には水田基盤層があり、直下の遺物包含層を一部破壊している。遺物包含層は茶褐色粘質土で、弥生時代終末期～古墳時代前期の土器が混入しており、遺構検出を行ったが溝の明確なラインを捉えきれず、下位の黄褐色粘質土まで掘り下げを行った。溝の規模は東西2.57m、深さ24cmで、断面が緩やかなU字形を呈している。底面は北に向かって下がっており、北端で標高41.600m、中央で41.630m～41.680mである。検出長は約11.4mであり、北側と南側で古墳時代中期の住居（18、35号住居）に切られていたものの、南端における床面からの立ち上がりは明確であった。

溝の土層は、細かな分層は難しいものの、1～5層の上層と6～10層の下層の2層に分けた。このうち、出土土器は1層に多く含まれており、下層から出土する土器は非常に少ない。

出土土器の時期は、弥生時代中期中葉～後半のものがわずかに含まれるが、上層を中心にその大半は弥生時代後期前半であり、弥生時代後期後半のものがわずかに含まれる。今回の調査では明確なラインが捉えられなかったが、弥生時代終末期～古墳時代前期前半を含む最上層が、最終埋没と考えられる。

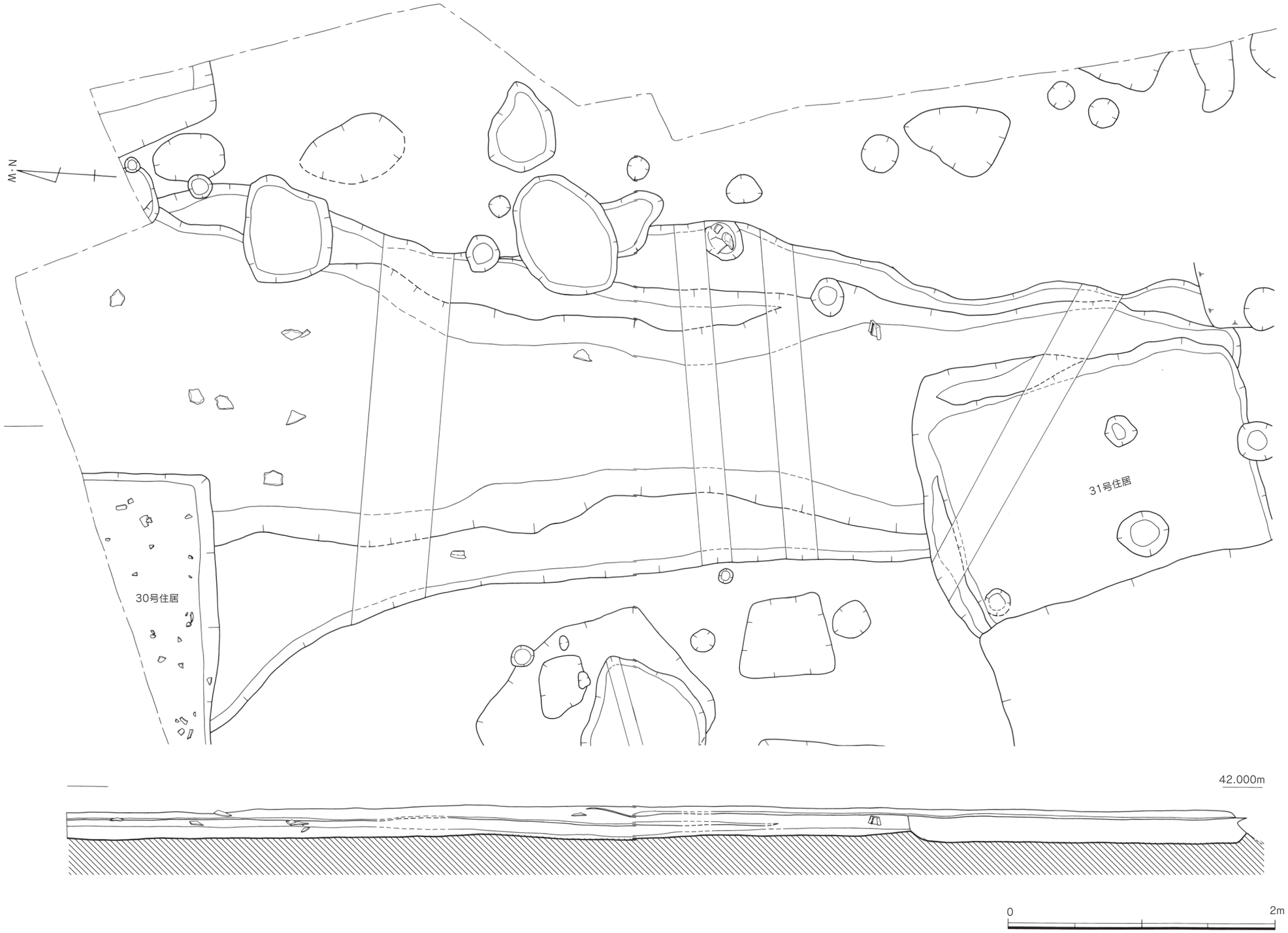


第36図　調査区北壁土層断面実測図（1/80）



第37図　1号溝土層断面実測図（1/30）

第38図　1号溝平断面実測図上層（1/30）



第39図　1号溝平断面実測図下層（1/30）

出土遺物（第40～49図）

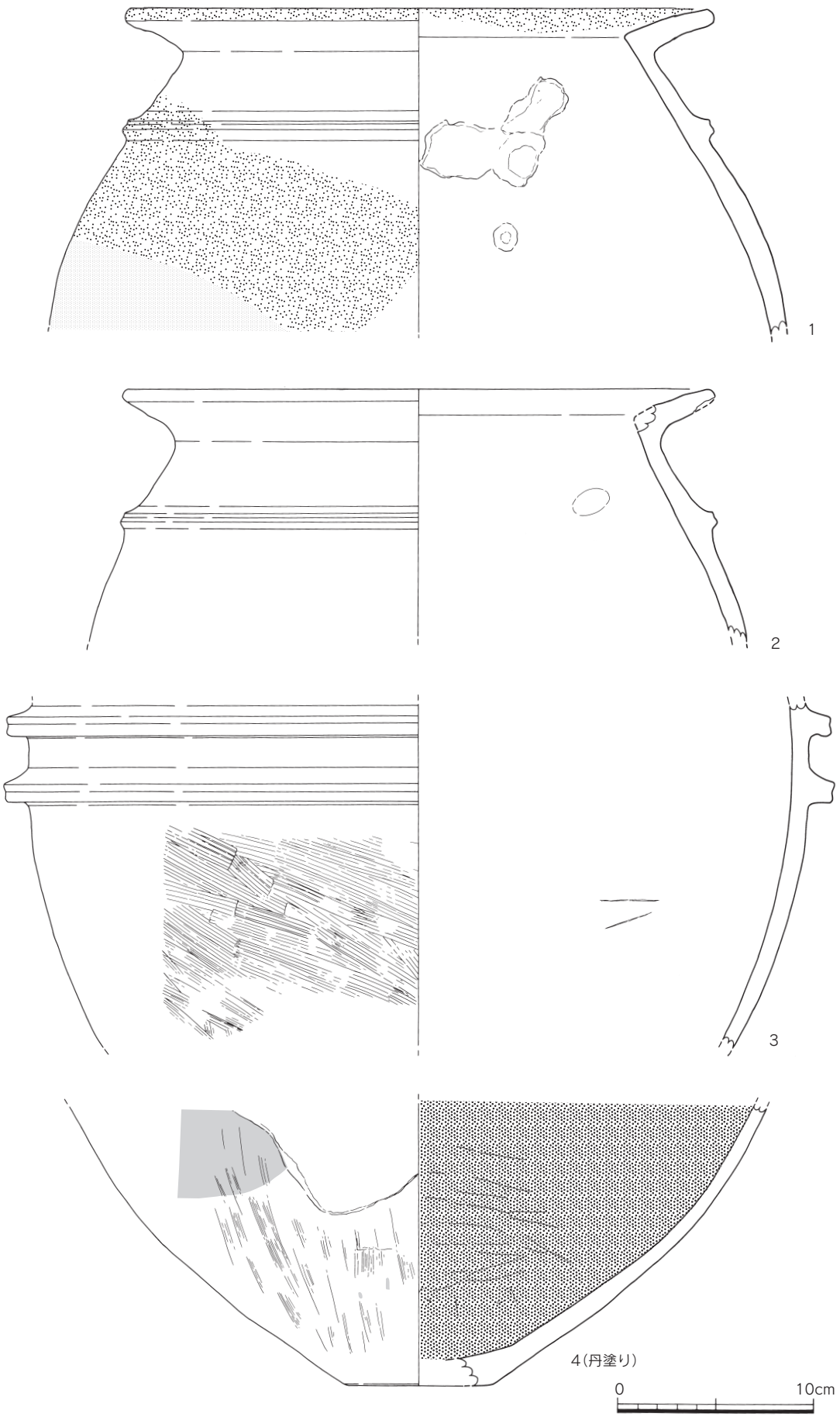
1、2は甕の口縁～胴上部片である。1は内側に発達しない逆Ｌ字状口縁が上がり、頸部下位にM字突帯を1条巡らす。外面の口縁～胴中位には二次焼成痕、内面胴上位に器面剥離が見られる。2も1と同様の口縁をもち、内外面ナデ調整である。3は壺の胴部片で、胴中位に2条突帯があり、その下位はハケメ調整である。4は壺の底部片で、平底である。胴下位まで丹塗りを行い、細かなハケメを胴下位に施す。5は壺の口縁～頸部片で、素口縁である。丹塗りは外面および頸部内面までであるが、風化が著しく、ミガキは外面の頸部と胴部の境や頸部内面にわずかに見られる程度である。

6～13は袋状口縁壺。6は袋状口縁壺で、口縁～頸部まで残存する。丹塗りではないが、縦方向のハケメをきれいにナデ消している。7は複合口縁壺の口縁部片で、丹塗りは内面にまで及んでいる。8に比べ口縁は若干開き気味である。8も複合口縁壺で、口縁～頸部まで残存する。丹塗りは外面および口縁端部内面まで施す。丹塗りのない頸部内面は横方向のハケメを行う。9は小型の複合口縁壺で、口縁端部を欠損する。丹塗磨研であるが、全体的に風化が著しく、丹自体は頸部外面にわずかに残る程度である。10は丹塗りの複合口縁壺で、頸部が垂直気味に立ち上がる。外面のミガキは明瞭ではない。11は複合口縁壺で、頸部～胴部の破片で、口縁部を欠損している。頸部と胴部の境に1条の三角突帯を貼付する。肩が大きく張り出し、最大径は上位にある。12、13は複合口縁壺の胴部である。12は上位に最大径があり、そこからやや下がった位置に、台形状の突帯を1条貼付する。外面は縦方向の粗いハケメ、内面は指オサエの際の爪痕が明瞭に残る。13も肩が張る印象で、12よりもやや高い位置に三角突帯がある。外面は細かなハケメ、内面は板ナデである。14は小型壺で、口縁部を欠損する。肩はあまり張らず、底部はレンズ状を呈する。外面は縦方向のハケメ、内面は強いナデである。

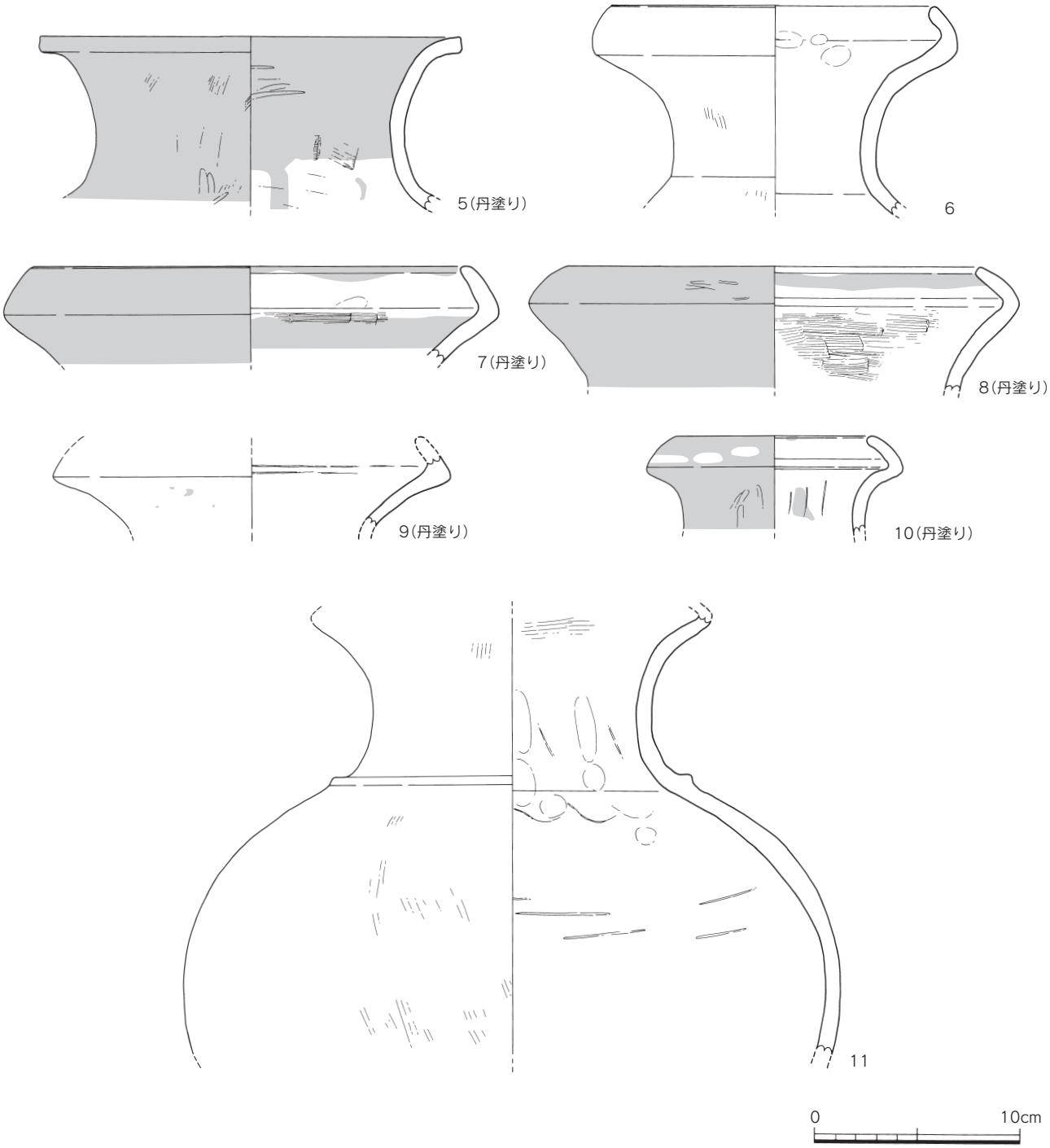
15～20は壺の底部片である。15はやや下膨れの感があり、平底ではあるが、外面にミガキが残る。16は平底で、全体的に磨滅が著しく、外面にわずかにハケメが残る。17は底部の近くまで、ハケメを施す。底部内面は指オサエが明瞭。18は平底で、全体的に調整不明瞭。19は複合口縁壺の底部片で、丹塗磨研が外面に施される。20は平底であるが、胴部と底部の境は丸味を帯びる。21、22は小型壺で、口縁～胴上部まで残存する。くの字形の口縁をもつ。23は小型壺の胴部片で、胴部最大径に突帯を1条貼付する。

24～26は鋤先口縁をもつ甕の口縁部片である。24は溝の床面上で検出したもので、弥生時代中期中葉。25は口縁上面が丸みを帯びるもの。26は口縁が内外に発達して、外方にやや垂れ気味である。

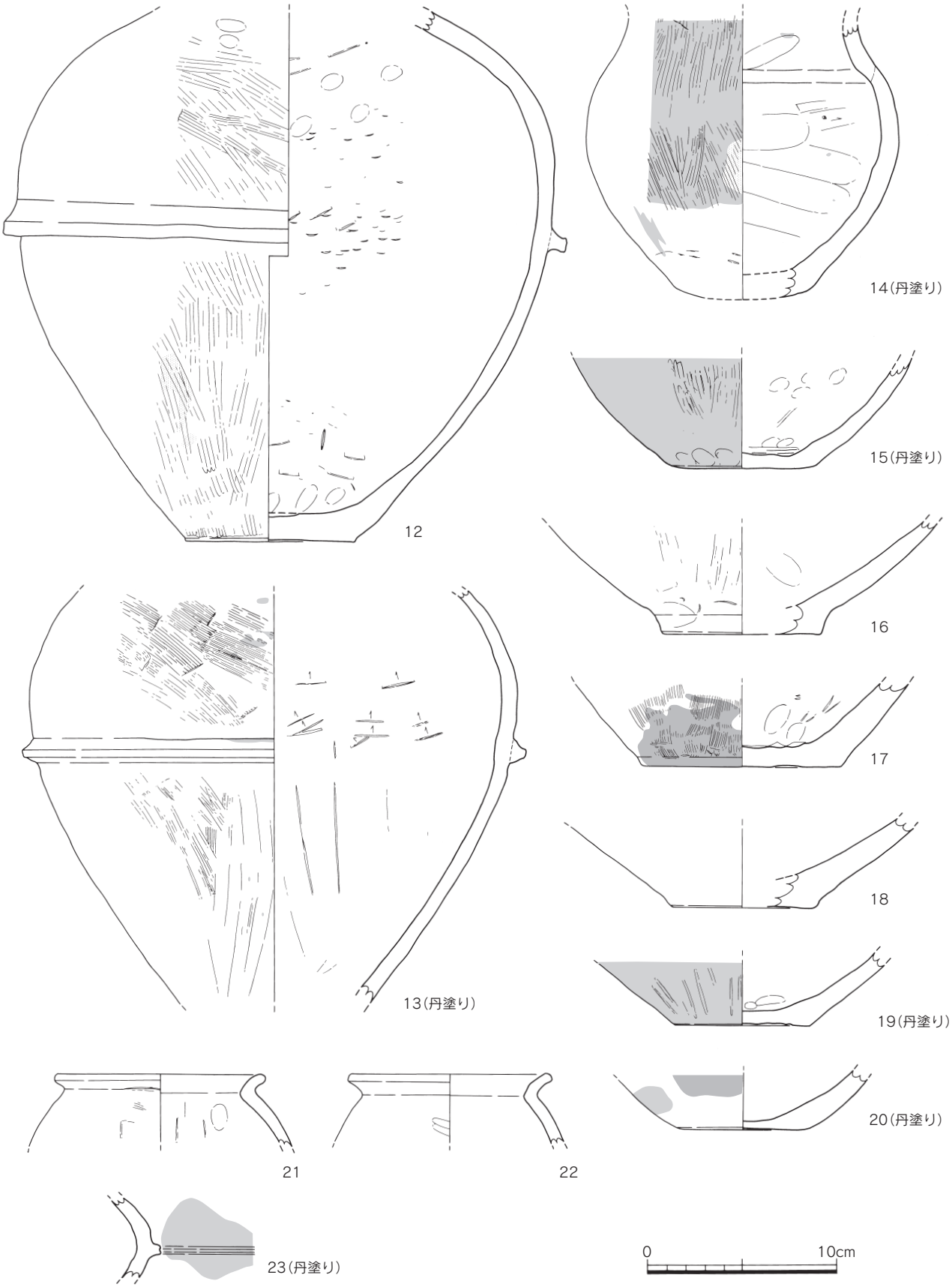
27～50はくの字口縁をもつ甕である。27は逆Ｌ字形の口縁が、くの字状を呈する。底部は欠損するが、胴上位に最大径がある。調整は、胴部外面が縦方向の粗いハケメ、胴部内面は板ナデ、ナデである。28は甕で、口縁部が欠損する。胴部はやや下膨れの感があり、底部の稜はやや丸みを帯びる。内外面ともにハケメ調整である。29は甕で、口縁～胴中位まで残存する。口縁は屈曲が弱いが、胴部最大径は上位にある。胴中位に煤の付着がある。



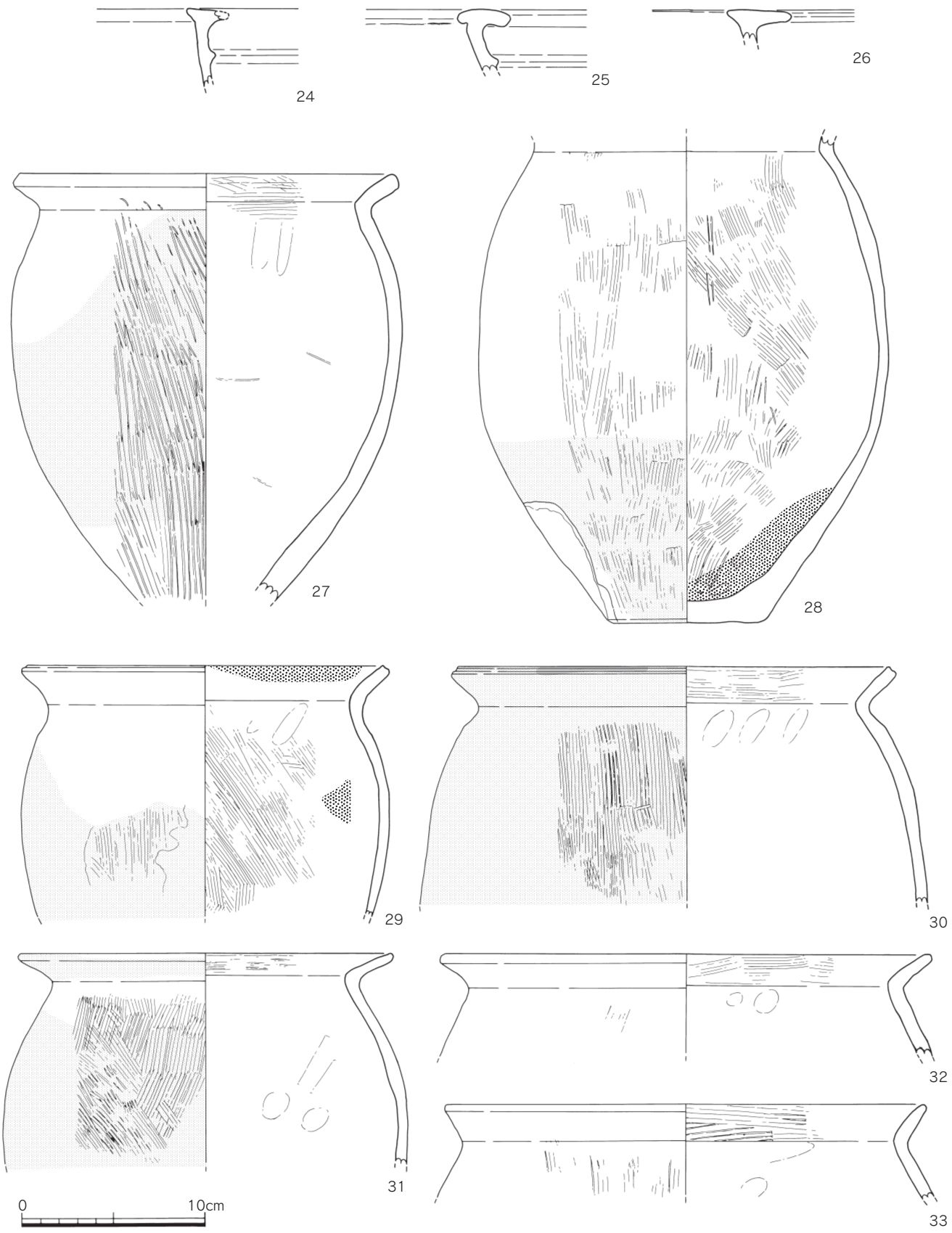
第40図　1号溝出土遺物実測図①（1/3）



第41図　1号溝出土遺物実測図②（1/3）



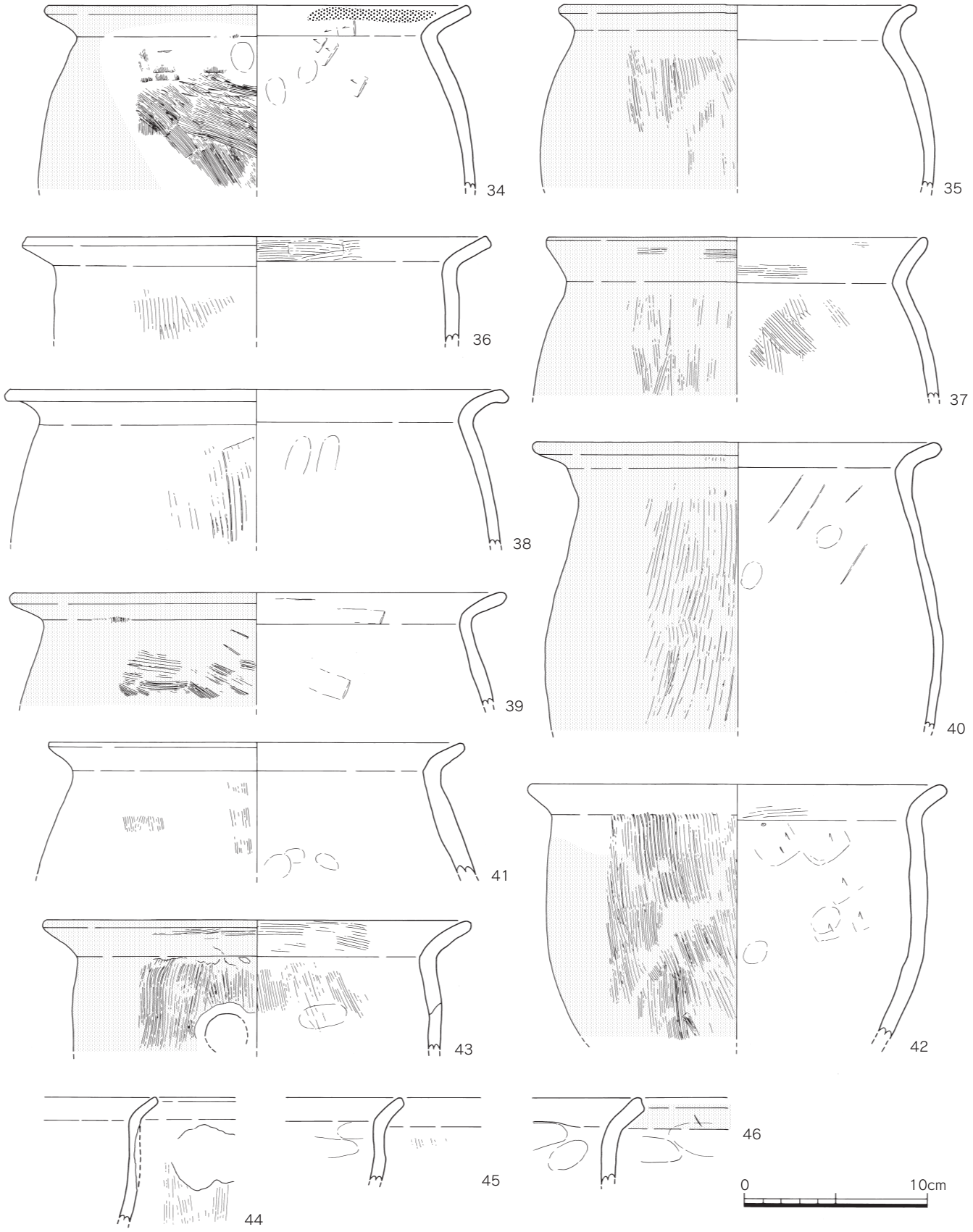
第42図　1号溝出土遺物実測図③（1/3）



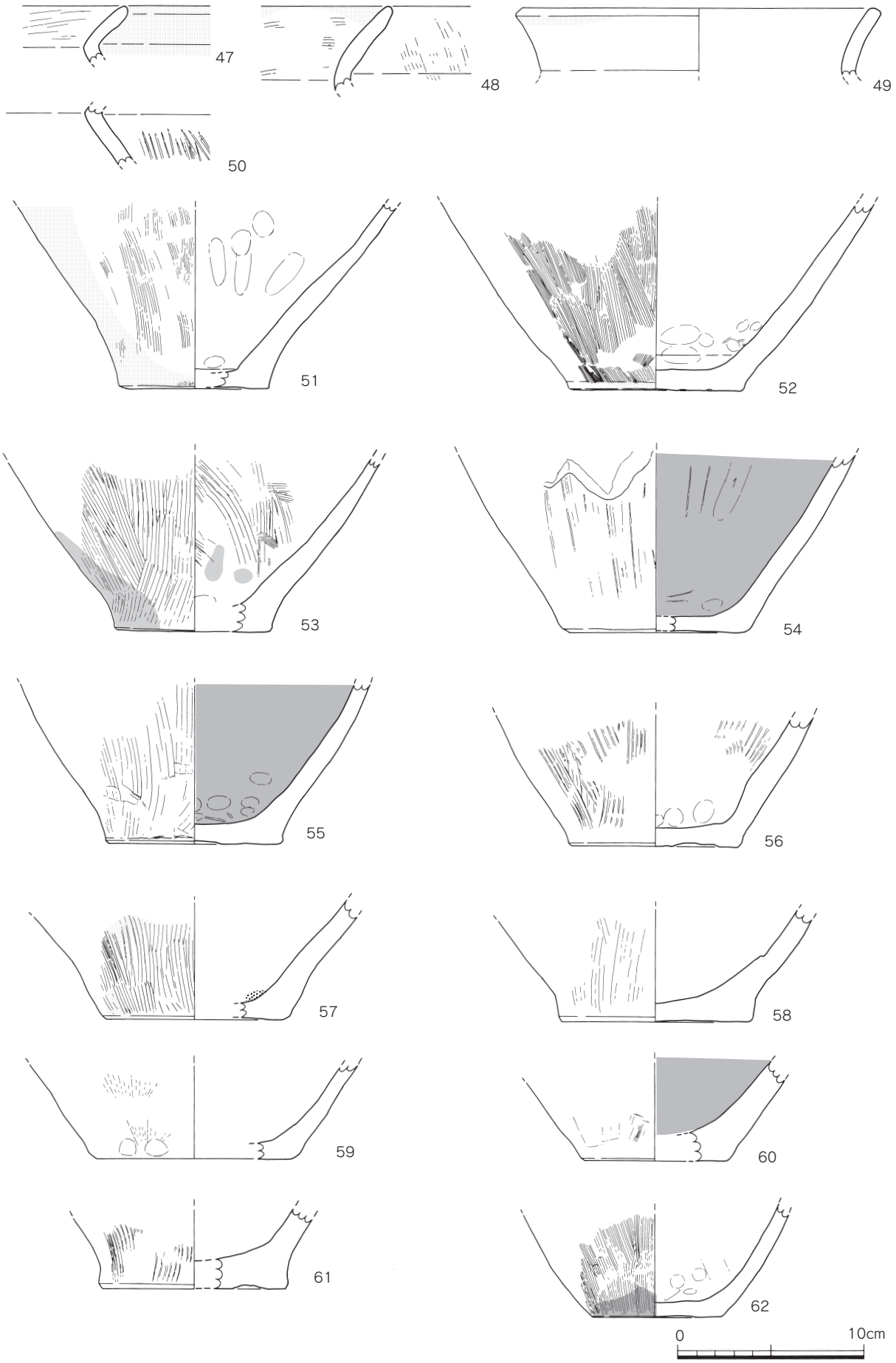
第43図　1号溝出土遺物実測図④（1/3）

30は甕の口縁～胴上部が残存するもので、くの字口縁の端部は強いナデを行う。31は、くの字口縁の屈曲が強い甕。外面は斜方向のハケメ、内面はナデ、板ナデである。32、33は甕の口縁部片で、くの字を呈する。33は口縁の屈曲が弱く、胴部は粗いハケメである。34は口縁～胴上位が残存する甕で、口縁下の器壁に厚みがある。胴部外面は、斜方向に細かなハケメ、内面はナデ、板ナデである。35は口縁の屈曲が弱い甕で、上位に最大径がある。全体的に風化が著しく、外面のハケメがわずかに分かる。36はあまり肩の張らない甕。胴部外面は粗いハケメ、口縁内面は横方向のハケメ、そのほかはナデ調整である。37は、くの字口縁の甕で、復元口径20.5㎝、残存高8.7㎝を測る。胴部内面のハケメが粗い。38の甕は、口縁が湾曲して延びるもので、胴部外面に粗いハケメが残る。39は口縁～胴上部まで残存する甕で、胴部外面は横方向のハケメ、その内面は板ナデである。40は胴部の歪みが著しい甕で、最大径が胴中位にある。胴部外面は粗いハケメ、胴部内面は板状工具によるナデである。41は、くの字口縁をもつ甕。復元口径22.6㎝、残存高7.1㎝を測る。42は、弱いくの字口縁で、内面の稜が明瞭ではない。外面は細かなハケメを行い、胴部内面は板状工具によるナデである。復元口径22.2㎝、残存高13.8㎝を測る。43の甕は、口縁～胴上位が残存するもので、復元口径23.3㎝、残存高7.0㎝を測る。胴上位に焼成後穿孔がある。44は、甕の口縁部片で、細片である。外反する短い口縁に、張らない胴部である。胴部外面に剥離が見られる。45は甕の口縁部片で、全体的に風化が著しい。46の甕は、胴部があまり張らないもので、45と同様、全体的に風化が著しく、わずかにナデの痕跡が認められる。47、48は甕の口縁部片で、両者ともに粗いハケメである。49は甕の口縁部片で、風化が著しいため、内外の調整が不明瞭である。50は甕の胴上部の破片で、外面の粗いハケメが残る。

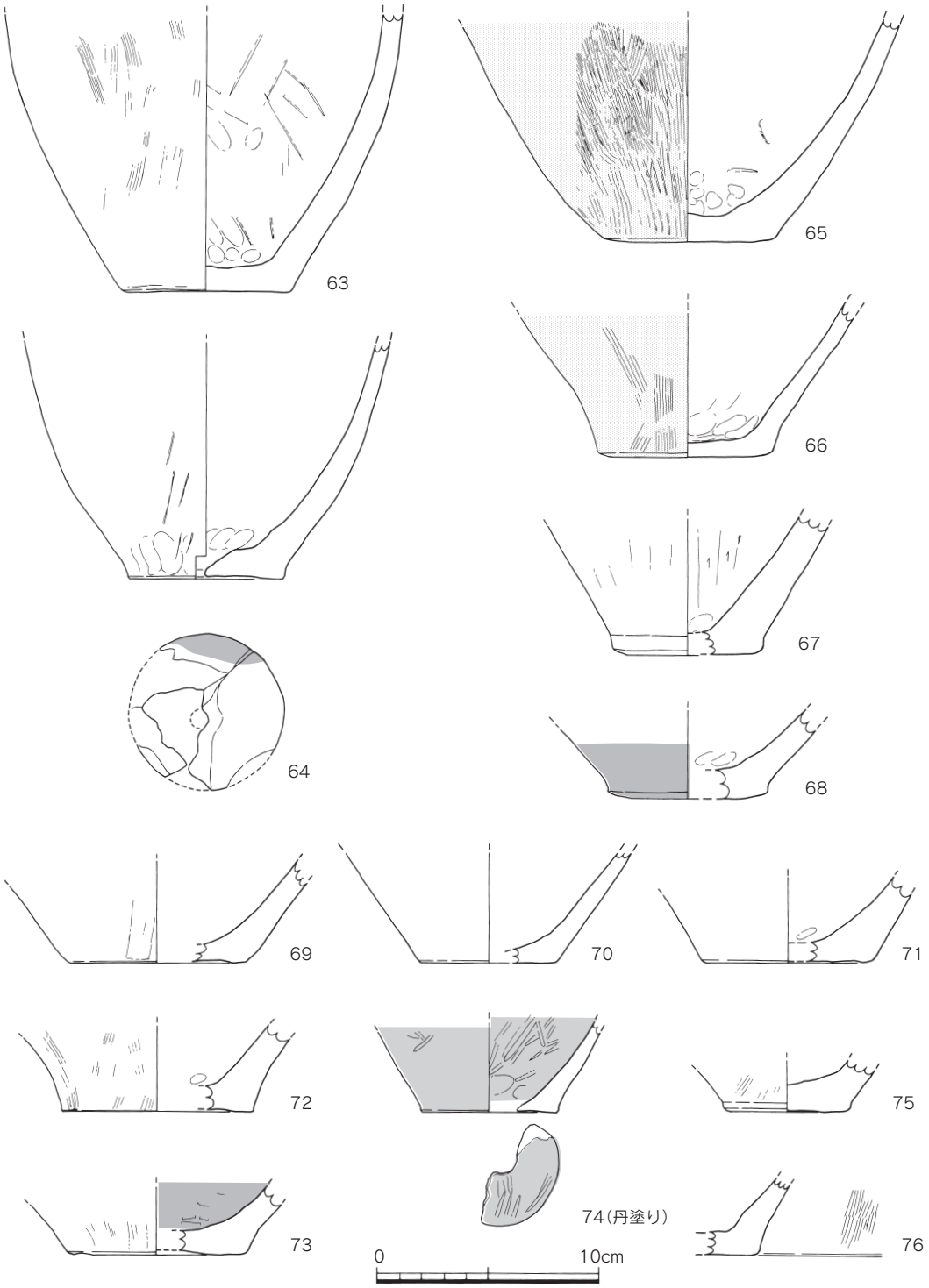
51～76は甕の底部片。51は平底で、外面に縦方向のハケメ、内面はナデ調整である。52は1号溝の遺構検出中に出土したもの。外面調整は縦方向のハケメ、内面調整はナデである。53の底部片は、平底を呈し、復元底径8.4㎝を測る。内外面共に粗いハケメが残る。54は平底であるが、底部と胴部の境が不明瞭。胴部内外面は棒状工具によるナデを行う。55の底部は平底で、ハケメを底部近くまで行う。56は比較的に薄い底部で、粗いハケメを胴内外に施す。57は甕の底部片で、平底である。外面は縦方向のハケメ、復元底径10.0㎝を測る。58も平底である。全体的に磨耗が著しく、外面のハケメがわずかに確認できる程度である。59は甕の底部片で復元底径10.2㎝を測る。底部外面はナデによる成形。60の底部は平底で、全体的摩滅が著しい。復元底径7.9㎝。61は平底で、底部と胴部の稜が明瞭である。62は底径から小型の甕である。外面は細かなハケメを行う。63は胴部～底部まで残存する甕で、胴部内面を板状工具によるナデ、底部付近はナデ成形である。64は、復元径7.0㎝の底部に、径0.8㎝の焼成前穿孔を行う甕である。底部内外面の指オサエは明瞭で、残存高10.7㎝である。上層より出土。65の甕は、底部と胴部の境が丸みを帯びる。外面は縦・斜方向のハケメ、内面は板ナデまたはナデである。66は最下層より出土した底部片で、平底を呈する。外面は縦方向のハケメ、底部内面はナデ調整。67、68は底部が若干レンズ状を呈する。68は1層の上面より出土。69は甕の底部片で、平底。風化が著しく、ハケメの痕跡がわずかに残る。70は復元底径6.0㎝の小さな平底がつく甕で、外面の調整が風化の為不明瞭である。71は甕の底部片で、平底である。復元底径7.6㎝を測る。72は横ナデによって底部と胴部の境が



第44図　1号溝出土遺物実測図⑤（1/3）



第45図　1号溝出土遺物実測図⑥（1/3）

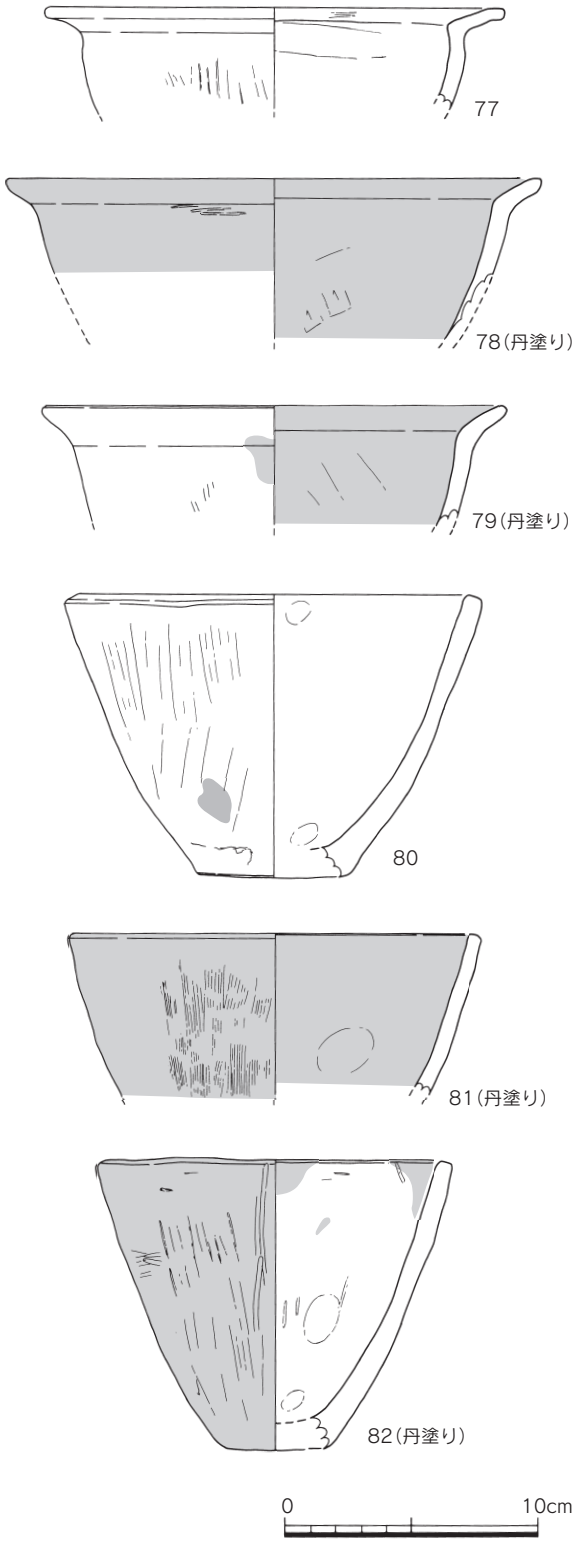


第46図　1号溝出土遺物実測図⑦（1/3）

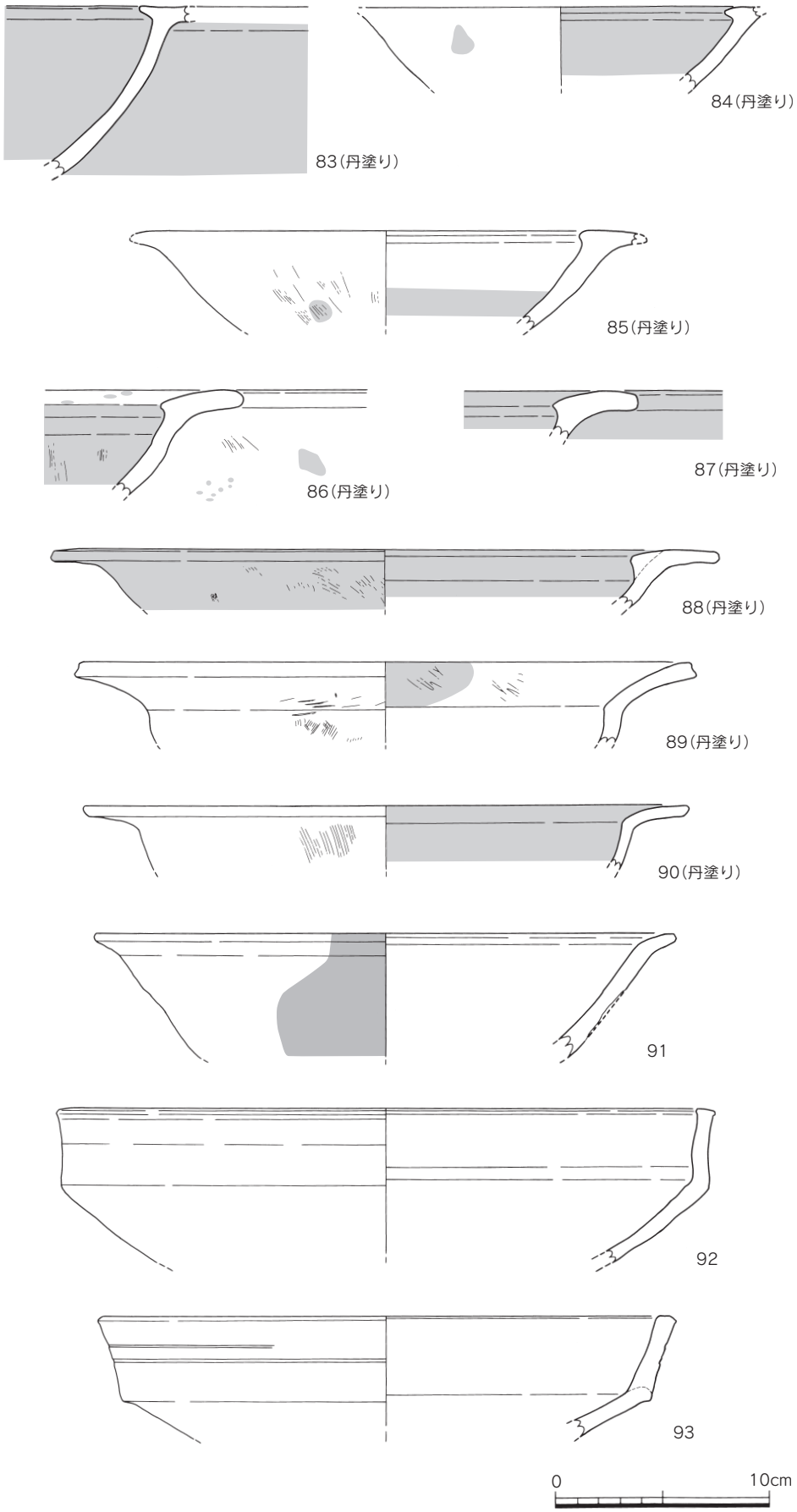
明瞭な甕の底部片である。外面は縦方向のハケメを行う。73は甕の底部片。復元底径8.0㎝を測る。74は小型甕の底部で、焼成後穿孔を行う。内外面共にミガキ調整。75は小型甕の底部で、平底を呈し、復元底径5.5㎝を測る。76も底部片である。

77～82は鉢形土器である。77は逆L字状の口縁が内傾するもので、口縁～胴上部まで残存する。胴部外面は縦方向のハケメで、復元口径18.0㎝。78は77よりも屈曲が弱いが、内面の稜は明瞭である。全体的に風化が著しいが、口縁下に横ミガキがわずかに残る。79も口縁の屈曲が弱い鉢形土器で、胴部～胴上位が残存する。口縁～胴部の境はやや不明瞭となっている。80は鉢形土器で、素口縁をもち、底部を欠損する。外面は縦方向のハケメ、内面はナデで仕上げる。底部には胴部との繋ぎ目が残る。81も素口縁の鉢形土器で、口縁～胴上部の残存。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整である。82は内外面にミガキが残る鉢形土器で、底部を失っている。復元口径14.0㎝、器高11.4㎝である。

83～97は高坏。83は高坏片で、ほぼ水平な鋤先口縁をもつ。内外面共に丹塗りであるが、ミガキではなく、ナデ調整である。84は鋤先口縁の高坏片で、全体的な風化が著しいが、坏部内外面に丹塗りの痕跡を伺うことができる。85は若干外傾する鋤先口縁をもつ高坏で、内外面共に丹塗りであるが、外面はハケメ、内面はナデ調整である。86は高坏の口縁部片である。鋤先口縁は内傾し、内側へあまり発達していない。内外面共に丹塗りで、調整はハケメの後ナデを行っている。87は高坏の口縁部片で、内傾する鋤先口縁をもち、丹塗りである。



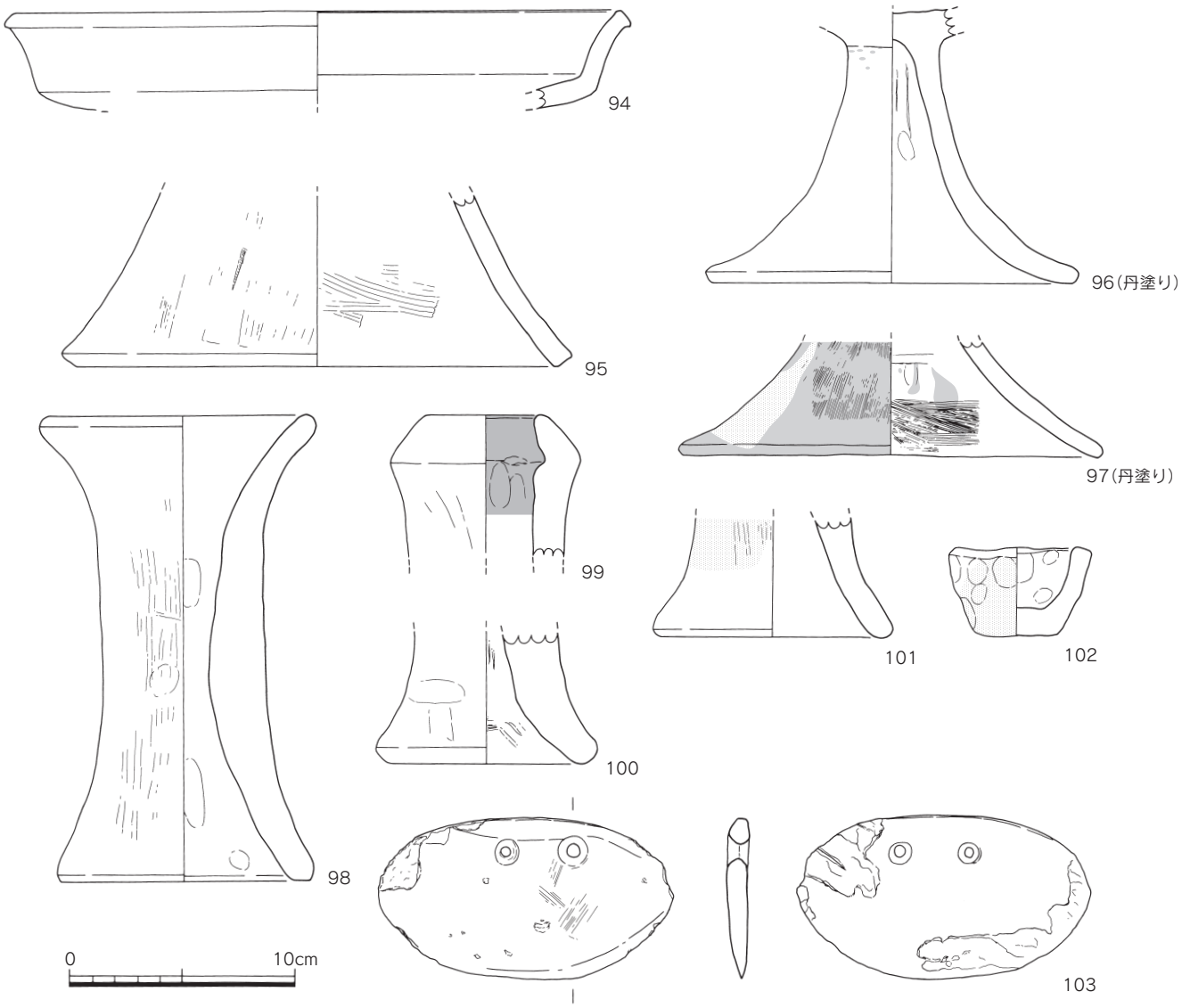
第47図　1号溝出土遺物実測図⑧（1/3）



第48図　1号溝出土遺物実測図⑨（1/3）

88の鋤先口縁は若干内傾し、復元口径31.1㎝を測る。89、90は口縁の内側への発達がなくなり、内傾が強くなった高坏で、弥生時代後期前半。89は口縁内面にミガキ、坏部外面がハケメである。90は最上層より出土したもので、丹塗りである。91は89、90の口縁と比べ、外への屈曲が弱くなり、口縁と胴部の境の稜もあまりつかない。弥生時代後期前半～中頃。92は直立した口縁をもつ高坏で、弥生時代後期中頃。内外面共にナデ調整で、復元口径30.6㎝である。93は直立した口縁がわずかに外反している。口縁は強い横ナデにより成形される。94は口縁が外反する高坏で、坏部以下を欠損する。復元口径27.0㎝で、内外面共にナデ調整。95は高坏の脚部片で、脚裾端部を面取りする。復元脚部径22.5㎝で、内外面共にハケメである。弥生時代後期前半か。96は高坏の脚部片。全体的に摩耗が著しく調整不明瞭。97も96と同様、高坏の脚部で、脚裾部が大きく広がる。内外面共に細かなハケメが観察できる。

98～101は器台である。98はくびれが上位にあり、外面が縦方向のハケメ。復元口径12.2㎝、器高20.5㎝、復元底径11.1㎝を測る。99は口縁が内傾する特異なタイプの器台。口縁部はナデに



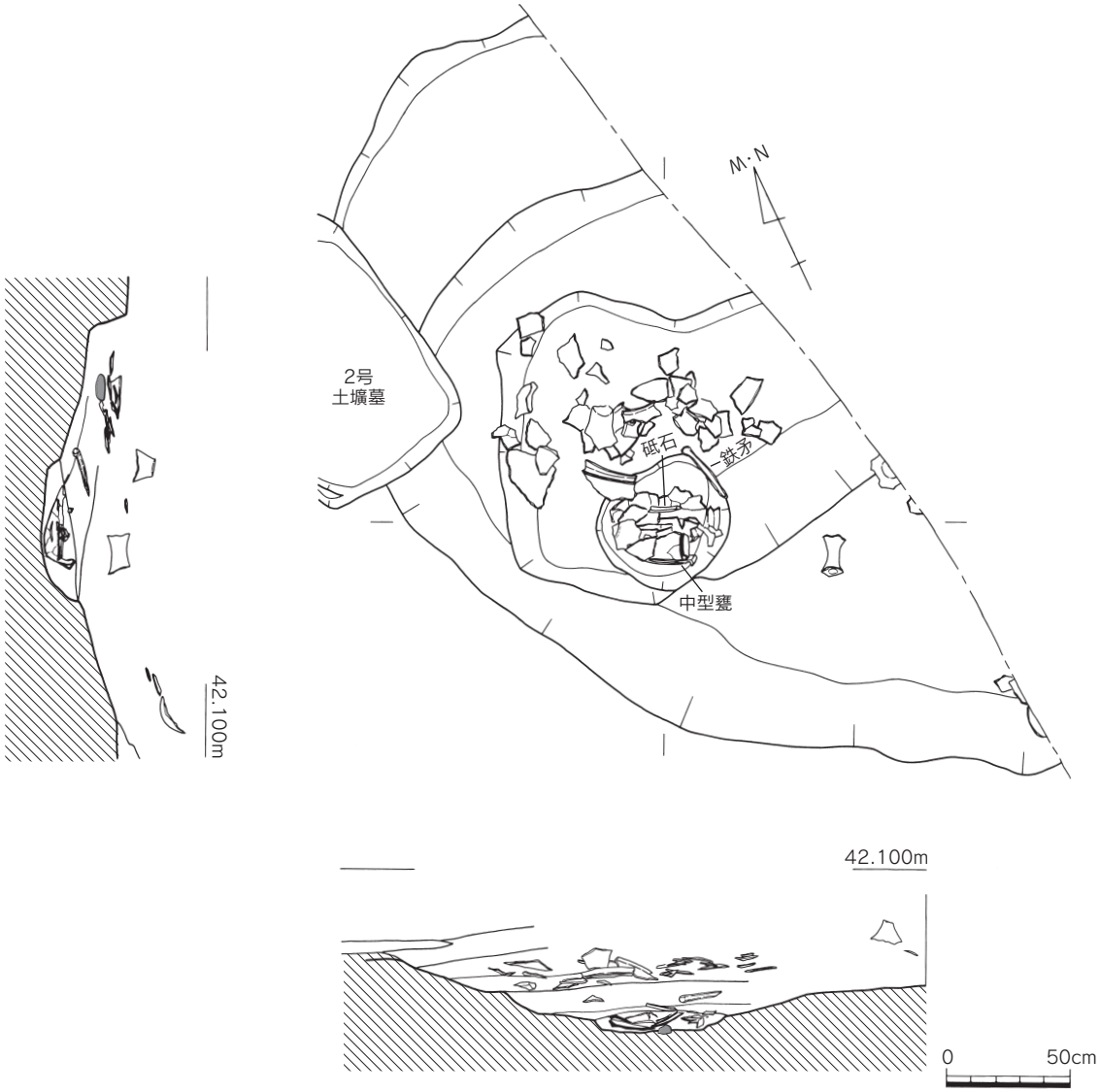
第49図　1号溝出土遺物実測図⑩（1/3）

よって作られており、器壁が厚い。100は器台の下部のみが残存するもので、器壁が厚い。ナデまたは板ナデで成形する。101も器台の下部のみが残存。外面ハケメ調整。102は手づくね土器で、強い指ナデが観察できる。口径6.3㎝、器高3.9㎝を測る。103は、立岩産石包丁で輝緑凝灰岩製である。全長8.7㎝、幅4.8㎝、厚さ0.6㎝を測り、使用による磨耗で刃部･背部共に丸味が著しい。

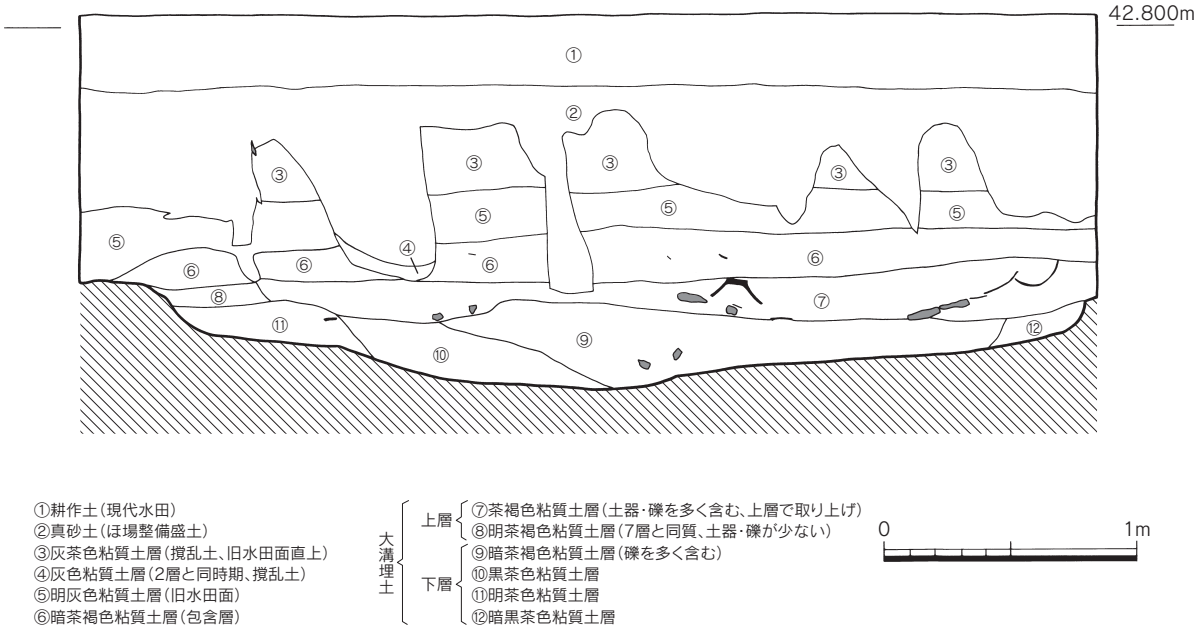
2号溝（第50・51図）

調査区北東側で検出した溝で、中世の土壙墓（2号土壙墓）に切られる形で検出した。検出当初は住居と考えていたが、埋土に弥生時代中期～後期の土器が含まれていたことから、調査区を東側に拡張した上で調査を行ったところ、出土土器及びその位置関係から1号溝と関連する溝の可能性がある。2号溝の主軸方位はN-65°-Wで、1号溝の主軸にほぼ直角する形で延びている。

基本層序は、1層～5層まで水田耕作土、造成土および旧水田面である。6層の茶褐色粘質土は、古墳前期の土器を含む包含層で、それ以下の7層～12層が2号溝の埋土である。溝内では大きく2



第50図　2号溝平断面実測図（1/30）



第51図　2号溝土層断面実測図（1/30）

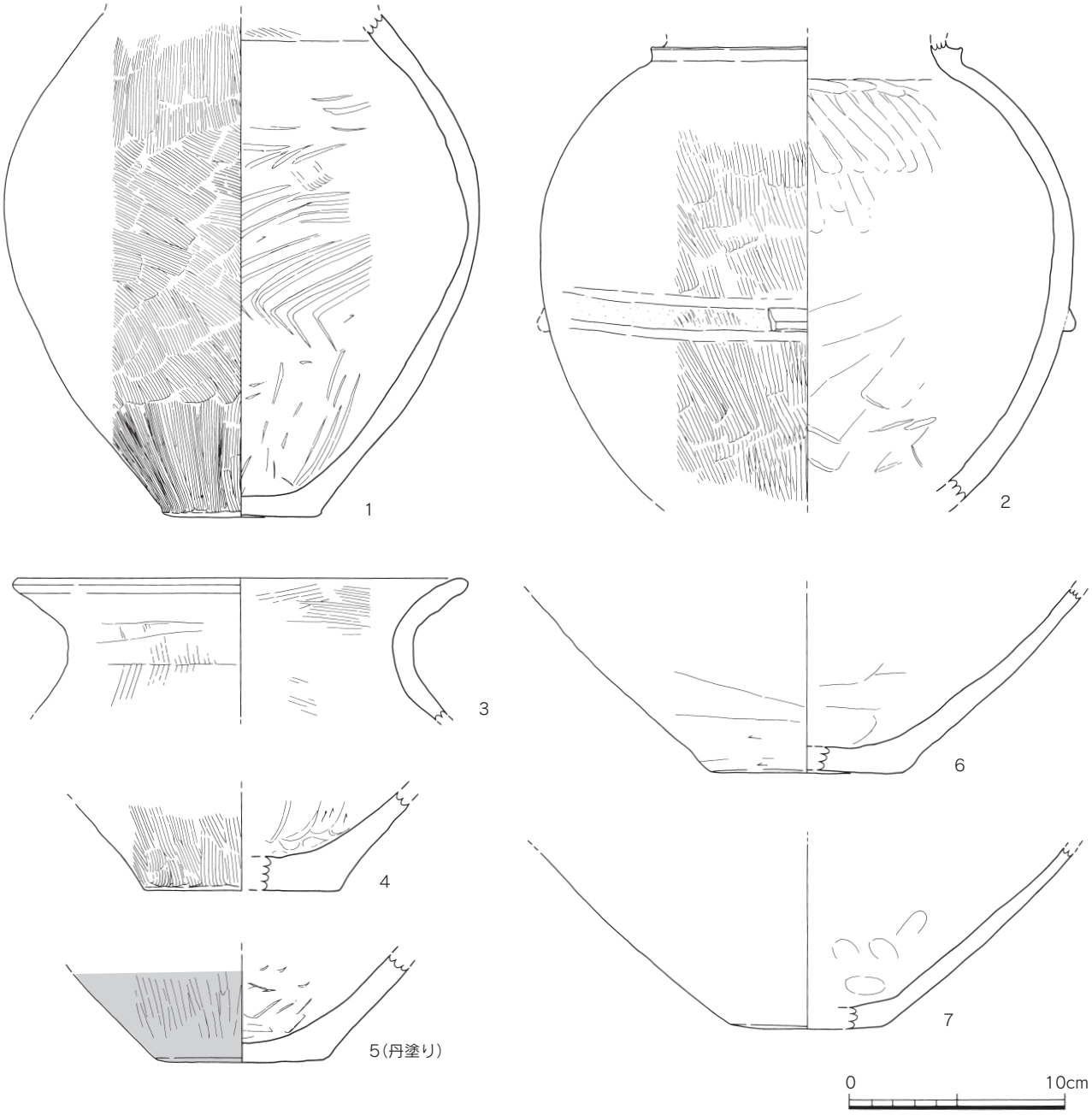
層に分けることができ、上層である7、8層は、土器や礫の出土が多く、9～12層の下層では、土器量が減少する。

溝の規模は推定幅2.9m、検出長2.95m、深さ30cmであり、北側では2段のテラス、南側では1段のテラスを設ける。最下層では、径52cmの土坑に、中型甕が出土しており、この甕の上面に接する形で砥石が、砥石より3cm程度上位で鉄矛が出土した。鉄矛は南側に切先を向けている。1号溝と2号溝は直接的には繋がらず、両溝間には空間（陸橋部）が設けられており、検出したのは溝の先端部と考えられる。

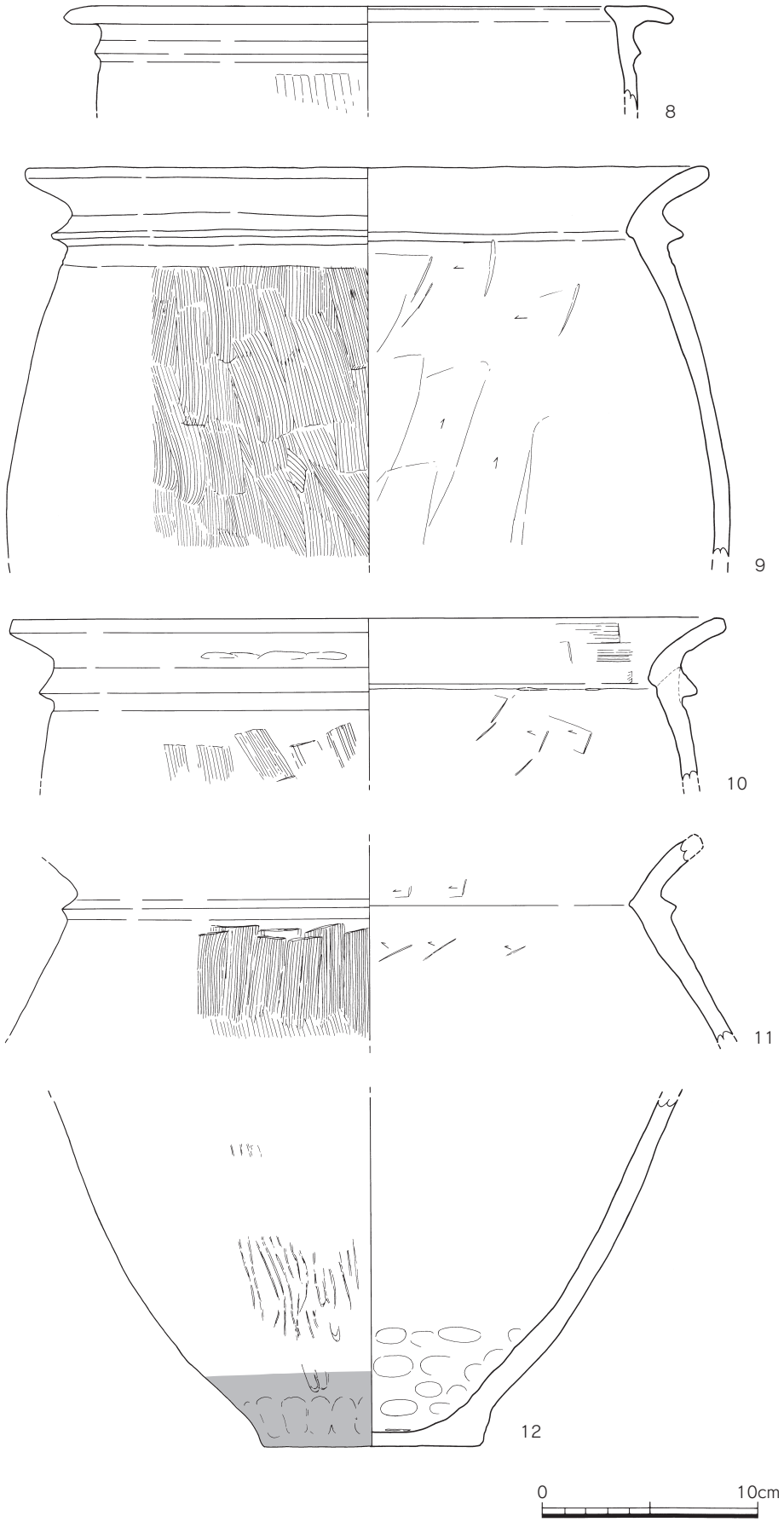
出土土器は、最下層で出土した中形甕は弥生時代中期後半であり、それより古いものは出土していない。1号溝と同じく上層は弥生時代中期末～後期前半のものが多く、弥生時代後期後葉のものをわずかに含む。

出土遺物（第52～57図）

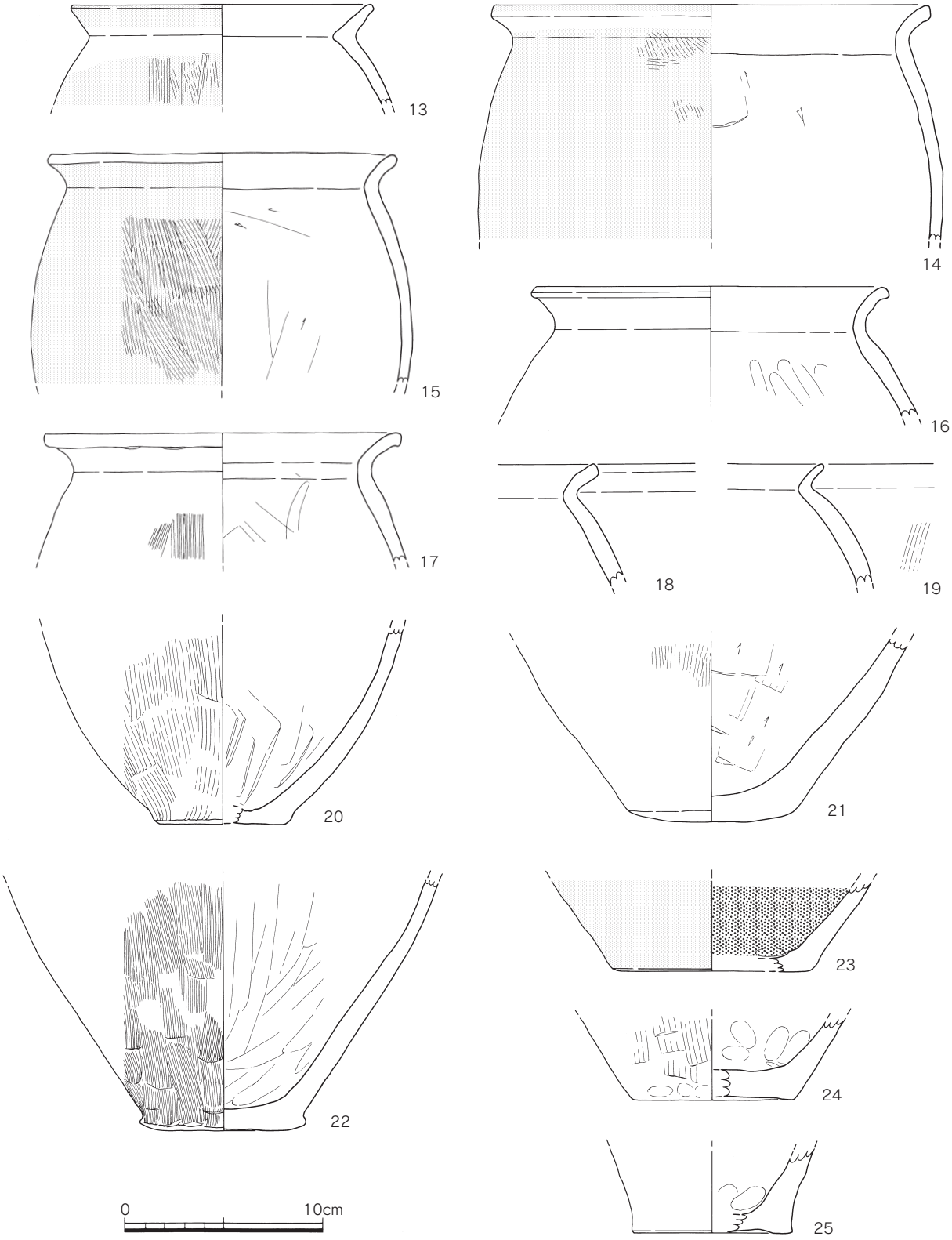
1は甕で口縁を欠損する。胴部最大径は胴中位に近いところにあり、底部は平底である。胴部外面は縦・斜方向のハケメ、内面はヘラ状工具によるナデを行う。復元底径7.4cm、残存高23.2cmを測る。2は複合口縁壺の胴部片で、頸部と胴部の境と胴中位に1条の三角突帯を貼付する。外面は斜方向のハケメ、内面は頸部と胴部の接合部分に対して丁寧な指ナデを行う。3は素口縁の壺か。外面頸部は粘土の繋ぎ目が残り、調整は縦方向のハケメ。復元口径21.0cm、残存高6.0cmを測る。4～7は壺の底部片。4は平底を呈する壺の底部片で、底部付近までハケメを行う。復元底径9.0cm、残存高4.5cmである。5は底部と胴部の境の稜がやや丸みを帯びる。4に比べ粗いハケメである。6は残存高8.6cm、底径8.8cmを測り、平底を呈する。内外面共にヘラナデである。7は底部がややレンズ状を呈する壺で、全体的な磨滅が著しく、調整不明瞭。残存高8.5cm、復元底径7.0cmを測る。8は鋤先口縁をもつ甕で、口縁部のみの残存。口縁はやや外傾し、口縁下に三角突帯を1条巡らす。



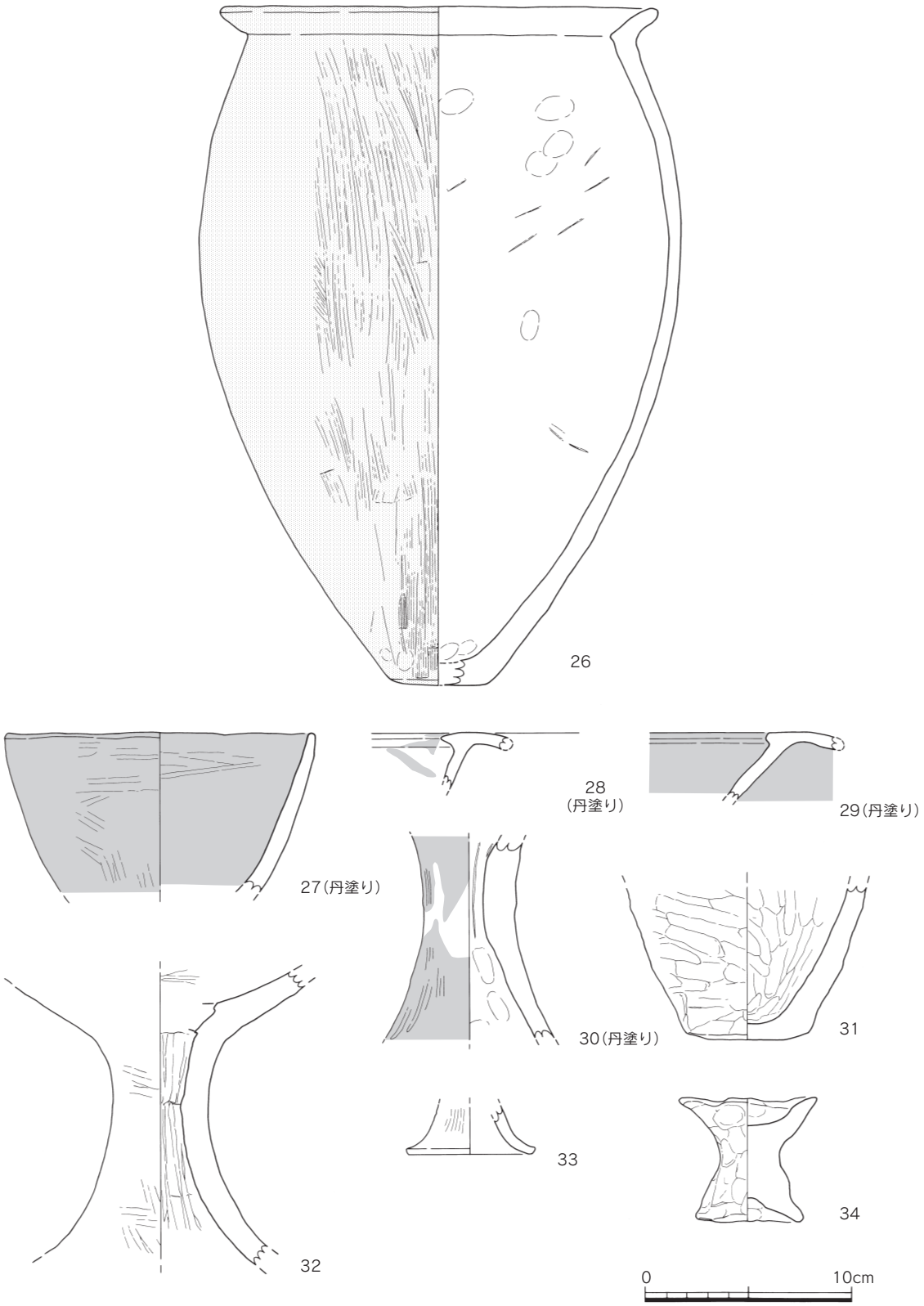
第52図　2号溝出土遺物実測図①（1/3）



第53図　2号溝出土遺物実測図②（1/3）

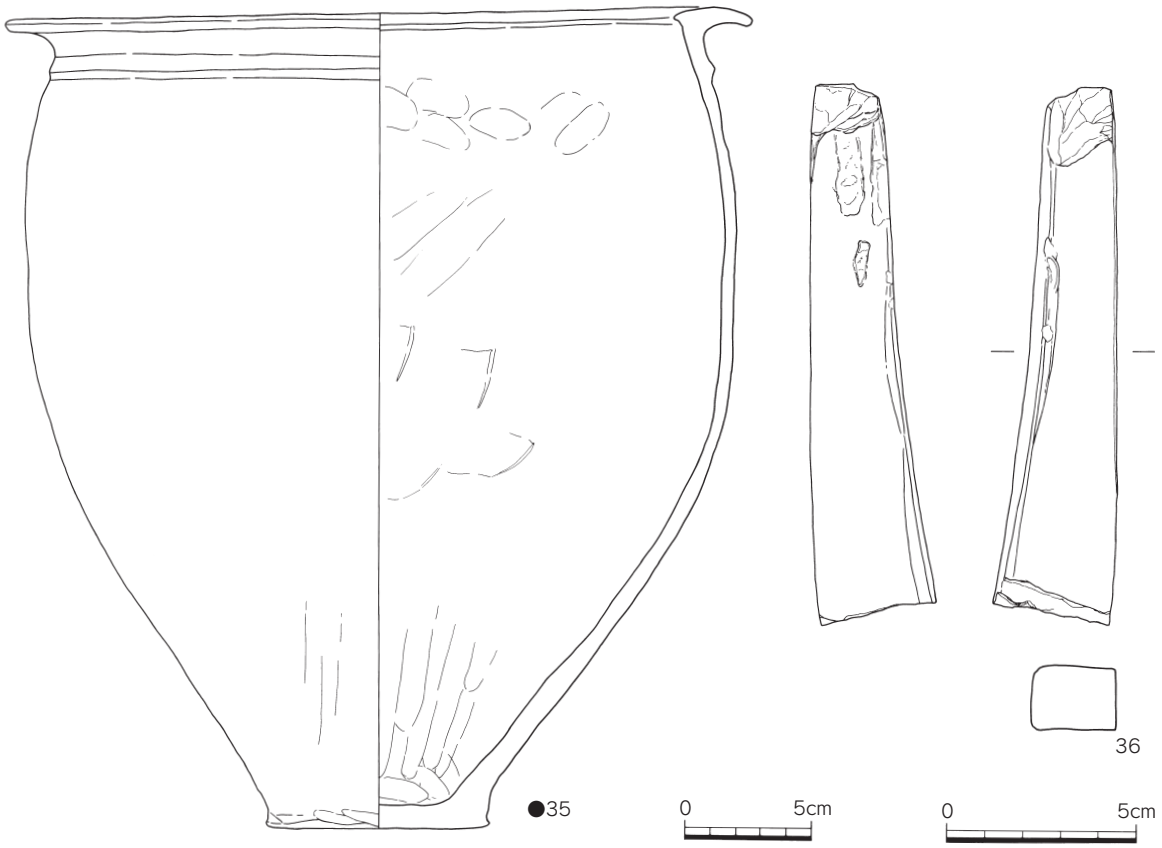


第54図　2号溝出土遺物実測図③（1/3）



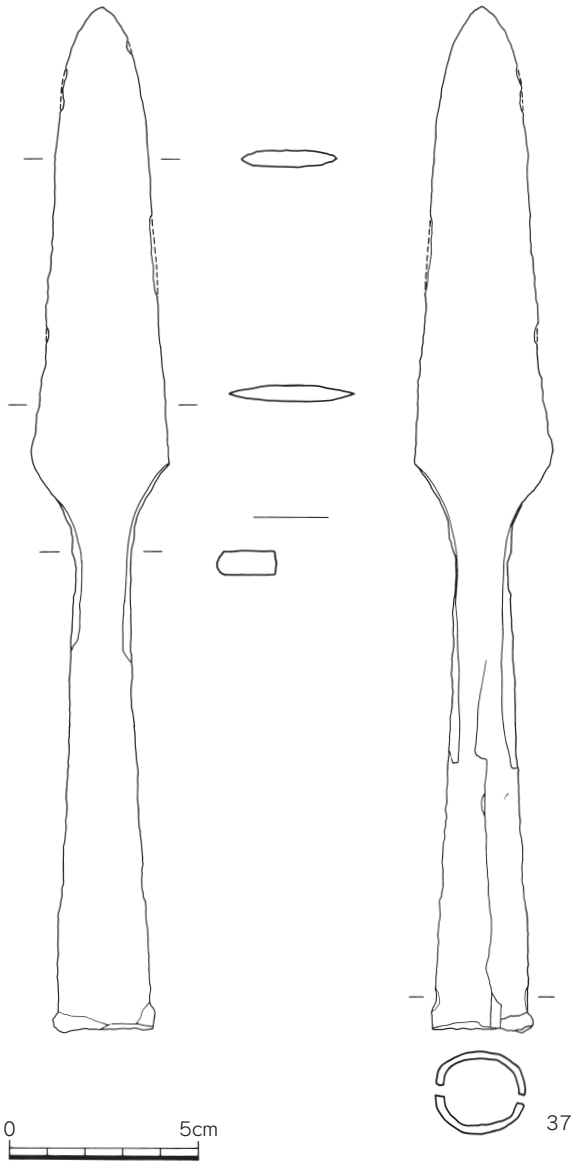
第55図　2号溝出土遺物実測図④（1/3）

復元口径28.2㎝、残存高4.9㎝を測る。9は甕の口縁～胴上部片で、逆Ｌ字状の口縁が強く内傾する。口縁の内側への張り出しを残し、頸部に三角突帯を巡らす。外面は縦方向のハケメ、内面はヘラ状工具による横方向のナデを施す。復元口径31.6㎝、残存高18.0㎝を測る。10の甕も逆Ｌ字の口縁が強く内傾する。復元口径33.0㎝、残存高7.5㎝である。11は強く内傾する口縁をもつ甕で、口縁内側の張り出しが、ナデによる成形により、わずかな痕跡として残る。12は胴部～底部にかけて残存する甕で、平底である。外面は棒状工具によるナデ、底部内面は指オサエを施す。13は甕で、口縁～胴上部が残存する。口縁は、くの字状を呈し、頸部内面の屈曲が強い。外面はハケメ、内面はナデ調整。14の甕は口縁～胴中位まで残存する。口縁は、くの字状を呈するが、頸部内面はなだらかで稜がつかない。15の甕は、くの字口縁から肩があまり張らない形態で、外面は縦方向の粗いハケメ、内面はヘラ状工具によるナデである。復元口径17.6㎝、残存高11.5㎝を測る。16は甕で、口縁～胴上位まで残存する。くの字口縁の端部は若干の丸みを帯び、頸部内面に稜がつく。17は甕の口縁～胴上部片で、約1/4程度の残存。口縁端部を面取りし、胴部はあまり張らないようである。外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデで、口径18.0㎝、残存高6.4㎝を測る。18、19は短頸壺の口縁～胴上部片で、くの字に屈曲する口縁をもつ。20は甕の底部片で、平底の底部から胴下位に向かって膨らみながら立ち上がる。外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデで、底径7.0㎝、残存高9.8㎝を測る。21はレンズ状を呈する底部片で、外面はハケ



第56図　2号溝出土遺物実測図⑤（1/2・●は1/3）

メ、内面はヘラ状工具によるナデである。復元底径8.2㎝、残存高8.9㎝を測る。22の甕は、底部～胴中位まで残存する。底部の形態は不安定な平底で、底部と胴部の境は屈曲部を作る。外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデで、復元底径8.4㎝、残存高12.5㎝を測る。23は平底を呈する底部片で、復元底径10.0㎝を測る。内面はナデ調整であるが、外面は風化のため調整不明瞭。24は甕の底部片。若干上げ底気味の底部片で、外面は縦方向の粗いハケメ、内面は指オサエである。25は小型甕の底部片か。若干上げ底気味の底部で、復元底径8.0㎝を測る。26は1/3程度の残存する甕で、くの字口縁から胴上位が張り、底径4.1㎝と小さい底部にむかってすぼまる。外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデで、復元口径21.0㎝、器高32.8㎝を測る。色調は外面淡黄灰色、内面は、にぶい黄橙色を呈する。



第57図　2号溝出土鉄矛実測図（1/2）

27は鉢形土器で、底部を欠損する。内外面共に丹塗磨研であるが、ミガキの痕跡は口縁近くで確認でき、体部下半はハケメである。復元口径15.0㎝、残存高7.6㎝を測る。28は高坏の口縁部片で、丹塗磨研である。口縁は外傾する。29も丹塗磨研の高坏で、口縁部片である。風化のため調整不明瞭。30は高坏の脚部片で、丹塗磨研である。外面のミガキはわずかに残る程度で、風化によって調整は不明瞭である。31は鉢形土器で、口縁部を欠損する。内外面共に強いナデによる成形で、底部はレンズ状となる。復元底径6.0㎝、残存高7.4㎝を測る。32は高坏の坏部～脚部の一部が残存し、坏部の円盤充填部分が欠落する。全体的に風化が著しいが、脚部外面と坏部内面にはミガキの痕跡がわずかに残る。33は小型高坏の脚裾部か。裾部は大きく広がり、外面は縦方向のハケメ調整である。34は手づくね土器で、強いナデによって脚部と坏部を成形する。口径6.6㎝、

器高6.1㎝、底径5.2㎝を測る。

35は鉄矛、砥石の下位で、2号溝の最下層から出土した甕で、ほぼ完形である。鋤先口縁の下に1条の三角突帯を巡らし、最大径が上位にくる。底部は平底で、器壁が薄い。外面はヘラナデ、内面は指オサエ、板状工具によりナデを行う。口径29.6㎝、器高32.4㎝、底径8.9㎝を測る。36は砥石で、甕（35）の上位で出土したものである。全面を砥面として使用しており、残存長14.2㎝、幅3.1㎝、厚さ1.9㎝、重さ118.85ｇを測る。仕上げ用砥石である。37は鉄矛で、2号溝から出土したもの。身部の断面は両丸式で、中央に稜が付かない。関は緩やかであるが、右関に比べ左関の折り曲げがやや甘く、左関はやや膨らむ形状である。身部と袋部が接合する部分の断面は長方形であり、袋端部は直基式で、目釘穴を2つ設ける。全長27.1㎝、身部14.1㎝、袋部13.0㎝を測り、端正な形状である。

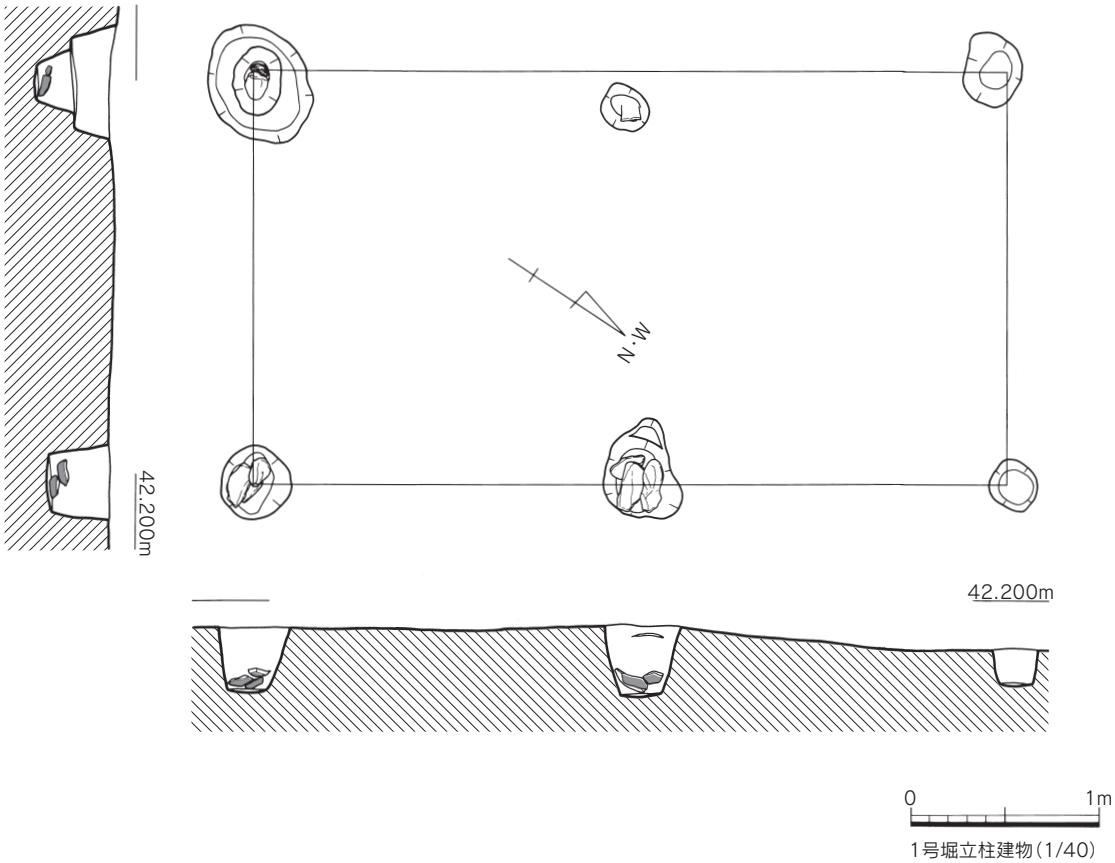
⑻掘立柱建物

1号掘立柱建物（第58図）

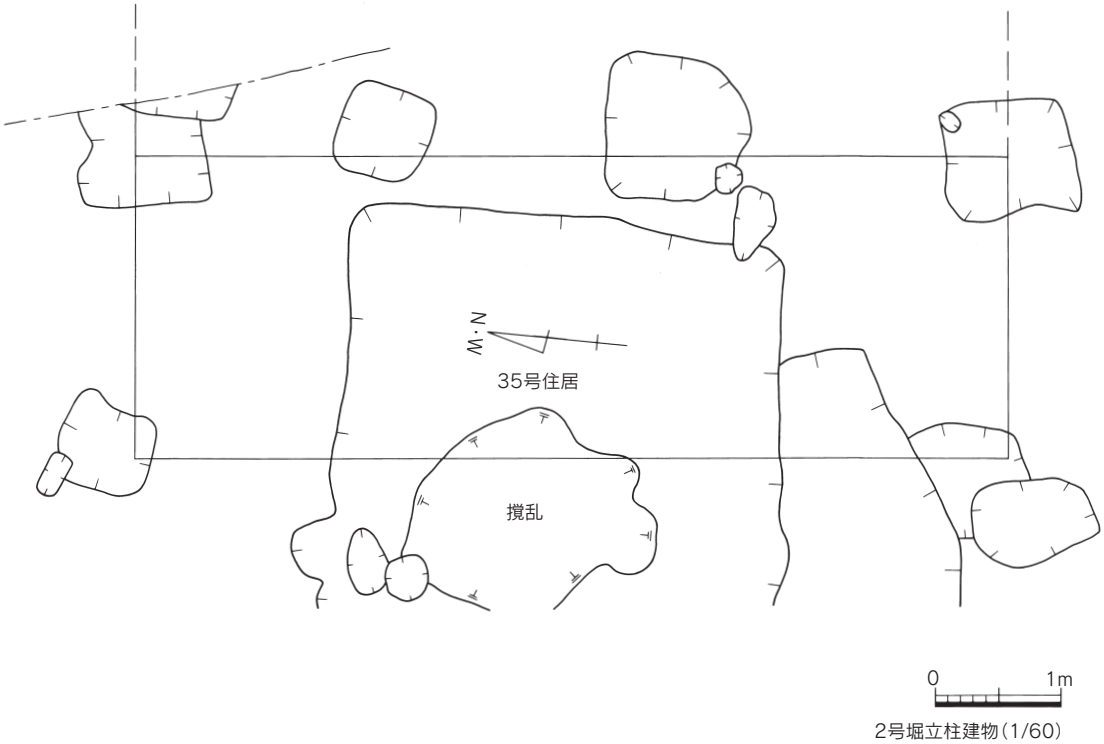
調査区北西側に位置する建物で、福岡県教育委員会による上覚地区Ｉ－1トレンチ調査で掘立柱建物として報告されているが、今回の調査では、前回では不明であった北西側の柱穴を検出したことで、南北2間×東西1間まで確認することができたため、改めて報告する。桁行長4ｍ、梁行長2.18ｍ、柱間間隔は1.9～2.1ｍで、主軸方位N-35°-Wである。扁平な石を底に敷いて、礎石としている。出土遺物より平安末期～鎌倉時代と考えられる。

2号掘立柱建物（第58図）

調査区西側で検出した建物で、時間的制約により、調査を断念し検出のみにとどめた。35号住居に切られていることや調査区外にも延びているものと思われ、現状で東西1間×南北3間分、東西2.4ｍ、南北6.6ｍまで確認できる。主軸方位はN-5°-Wである。35号住居は古墳時代中期前半であり、それよりも古いことになるが、掘り方は1辺が1m前後の隅丸正方形であり、弥生時代に属する総柱建物となる可能性がある。



1号堀立柱建物（1/40）



2号堀立柱建物（1/60）

第58図　1・2号掘立柱建物平断面実測図（1/40・1/60）

⑼土坑

1号土坑

調査区中央に位置し、2号土坑に切られる。東西0.75m、南北0.65mを測り、坑内より龍泉窯青磁が出土する。13世紀前半代～14世紀初頭である。

出土遺物（第59図1～4）

1は龍泉窯青磁椀の破片で、底部を欠損する。外面は鎬連弁を配し、内面は無文である。復元口径16.0㎝、残存高4.8㎝である。2は外反する口縁をもつ龍泉窯青磁椀で、底部を欠損する。外面は鎬連弁、内面は無文である。復元口径16.4㎝、残存高5.1㎝を測る。3も龍泉窯青磁椀の破片。やはり、外面に鎬連弁、内面は無文である。4は白磁椀で、口禿げするもの。復元口径12.0㎝、残存高3.2㎝。

2号土坑

調査区中央に位置し、1号土坑を切る形で検出された土坑で、青磁、白磁片が出土する。13世紀後半～ 14世紀前半と考えられる。

出土遺物（第59図5～7）

5は青磁椀で、高台部のみ残存する。施釉は高台の外側までで、内側は無釉である。6は白磁椀で、口縁部を欠損する。椀の内外面に施釉する。高台径5.9㎝、残存高4.1㎝。7は白磁皿で、体部外面以下から底部にかけて施釉されていない。

3号土坑

調査区西側中央に位置する土坑で、32号住居に隣接する。弥生時代終末期～古墳時代初頭か。

出土遺物（第59図8・9）

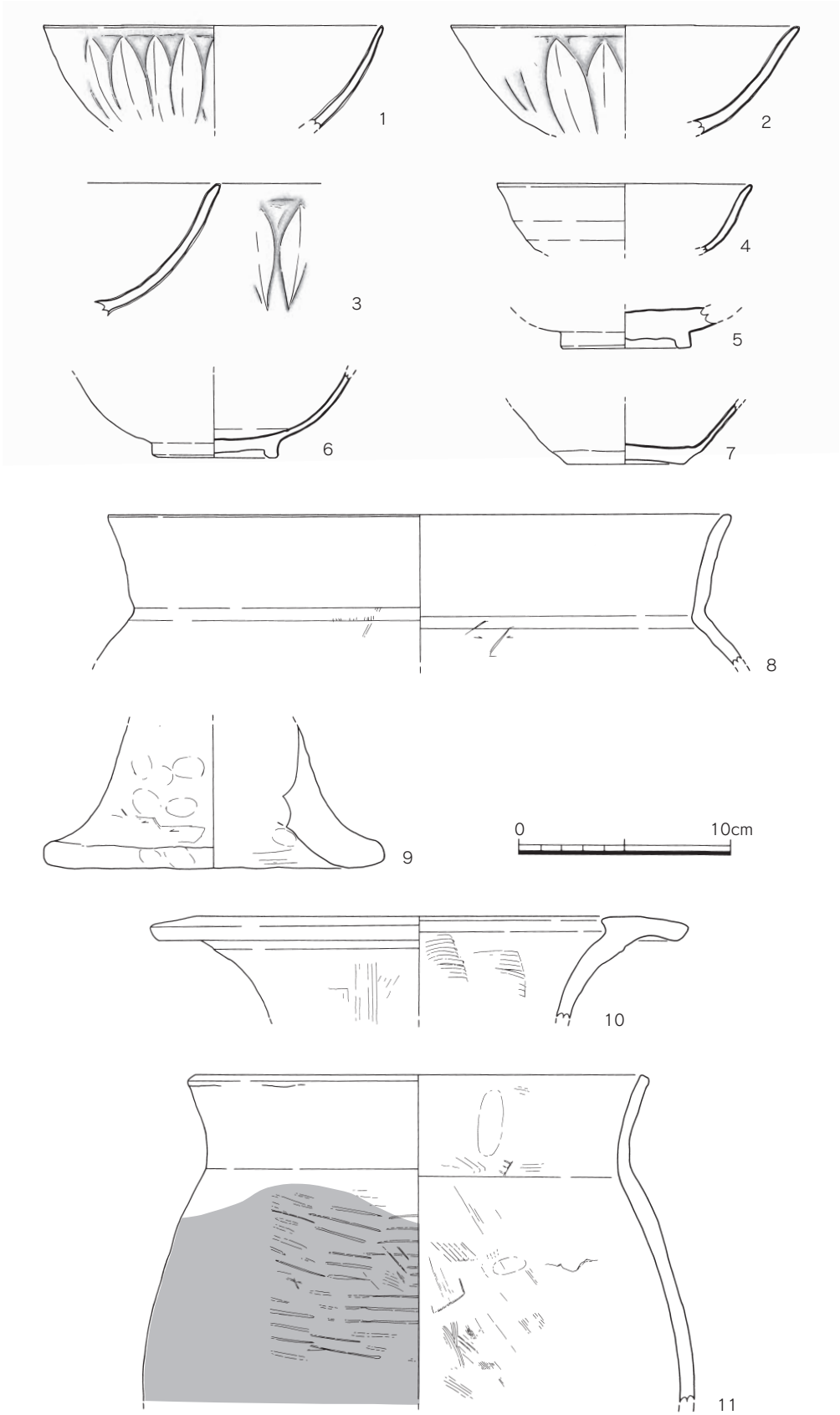
8は大型甕の口縁部片で、復元口径29.4㎝、残存高7.2㎝を測る。口縁部は強い横ナデを行い、胴部内面は横方向のヘラケズリである。9は器台の裾部のみの残存。器壁の厚い脚部が大きく広がる。外面は指ナデ、板ナデ、内面は裾部付近がハケメである。

4号土坑

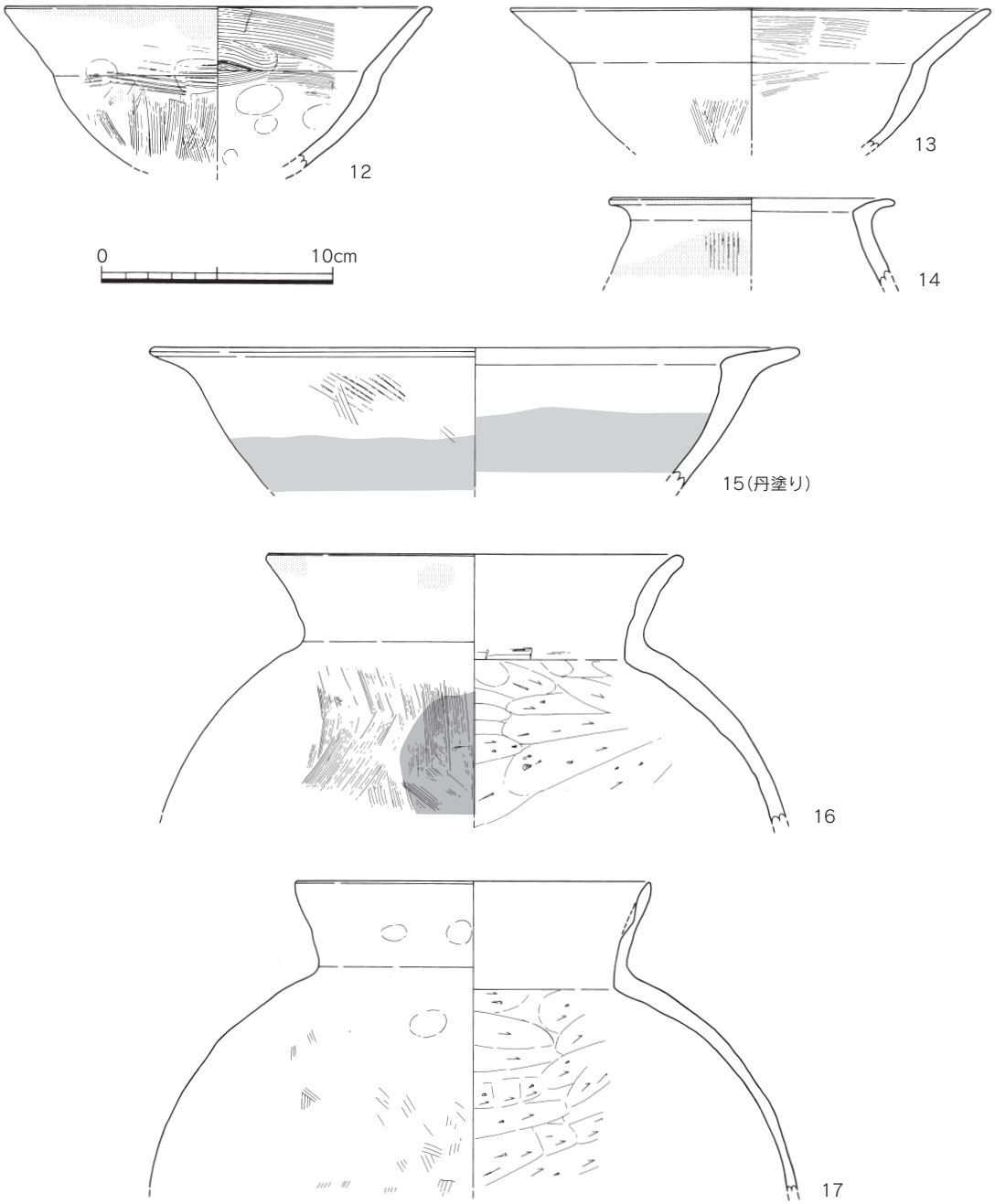
調査区西側に位置し、1号祭祀土坑と4号箱式石棺墓との間にある土坑で、南北2.25m、東西1.50mを測る。

出土遺物（第59図10・11、第60図12・13）

10は鋤先口縁壺で、口縁～頸部のみ残存。口縁はやや外傾し、外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメである。11は甕で、口縁～胴上部まで残存する。やや外反する口縁に、あまり肩の張らない胴部で、胴部外面は横方向のタタキ、内面はハケメの後ナデである。復元口径21.0㎝、残存高15.3㎝を測る。12は鉢で、底部を欠損する。外反する口縁に段が付いて、張らない胴部へと続く。体部外面～口縁内面はハケメ、内面ナデ調整である。復元口径18.5㎝、残存高6.9㎝。13も鉢で、底部を欠損する。12と比べて、段の内側の稜は明瞭である。内外面共にハケメ調整で、復元口径21.0㎝、残存高6.0㎝を測る。



第59図　1～4号土坑出土遺物実測図（1/3）



第60図　4～6号土坑出土遺物実測図（1/3）

5号土坑（第61図）

調査区北東側に位置し、1号溝を切って造られている。東西0.96m、南北0.72m、深さ9.5cmを測る。

出土遺物（第60図14・15）

14は内傾する逆L字状口縁をもつ小型壺で、外面ハケメ調整である。復元口径12.4cm、残存高3.8cmを測る。15は高坏の坏部片で、内傾する口縁をもつ。全体的に風化しており、外面のハケメがわずかに残る。

6号土坑

調査区北側中央に位置し、1号水路に近接する。土坑は現地保存を優先したため、遺物を採取するに留めた。平面プランは1辺2.2ｍの隅丸正方形か。

出土遺物（第60図16・17、第62図18～21）

16、17は布留期の甕。16は、口縁～胴上部のみ残存しており、口縁の外反が弱い。胴部の調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が横方向のヘラケズリである。復元口径18.0㎝、残存高11.6㎝を測る。17は16と比べて直立気味の口縁で、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリ。復元口径15.3㎝、残存高13.4㎝を測る。18は甕で、胴部に歪みが生じており、口径に比べ胴部の張りが著しい。胴部外面は縦方向の粗いハケメ、内面は横方向のケズリである。19は瓦質の片口鉢。レンズ状の底部付近には薄い煤が、口縁付近では濃い煤が付着するとともに底部～胴下位にかけて破裂痕跡があり、火にかけられたものである。復元口径20.7㎝、残存高7.8㎝を測る。20は瓦質の捏鉢で、器壁は薄いが、口縁部を肥厚させる。21は土師器坏で、底部は糸切りと板状圧痕が見られる。底径8.4㎝、残存高1.8㎝を測る。

7号土坑（第61図）

調査区北東側に位置し、37号住居を切る形で検出された。東西1.27ｍ、南北1.80ｍの不正形土坑で、半掘した時点で、中世の遺物が出土し、時期の判断ができた為、それ以上の調査を行わず、現地保存とした。12世紀後半代。

出土遺物（第62図22・23）

22は同安窯青磁椀で、口縁を欠損する。逆台形の厚い高台に、体部外面に幅広の櫛目文、内面は花文を施す。体部下位には施釉しない。高台径4.6㎝、残存高5.8㎝を測る。23は土師器坏で、復元口径15.0㎝、器高2.9㎝を測る。

8号土坑（第61図）

調査区北東側に位置する。当土坑は、福岡県教育委員会による三雲上覚Ⅰ－1調査で、既に調査が行われており、P1として報告され、出土した土師器坏から平安末期～鎌倉時代とされている。今回の調査で出土した甕の底部片は、埋め戻しの際に混入したものである。東西1.88ｍ、南北2.46ｍ、深さ40ｃｍを測る。

出土遺物（第62図24）

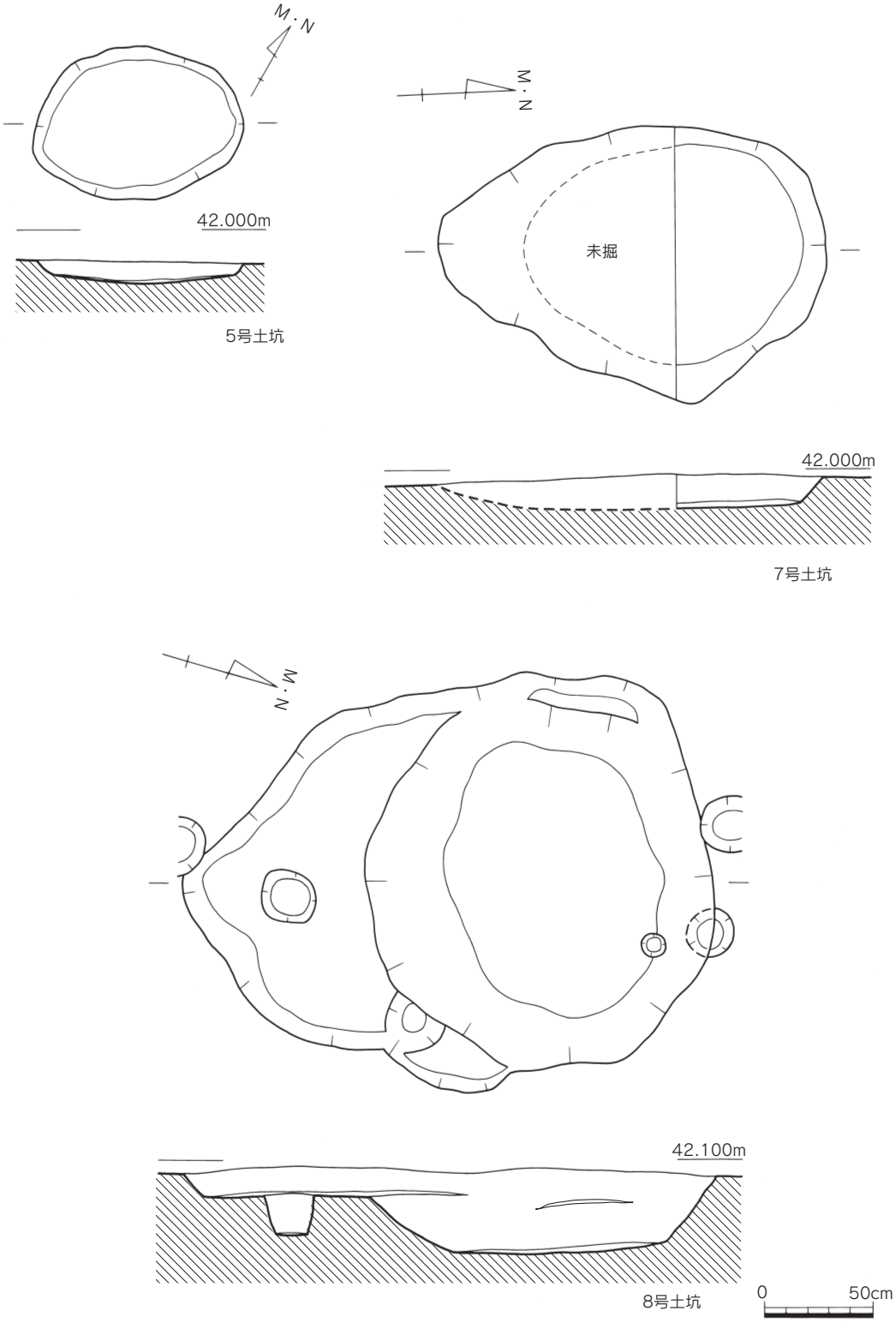
24は甕の底部片で、底部近くまでハケメを施す。復元底径7.0㎝、残存高3.3㎝を測り、小型甕であろう。

9号土坑

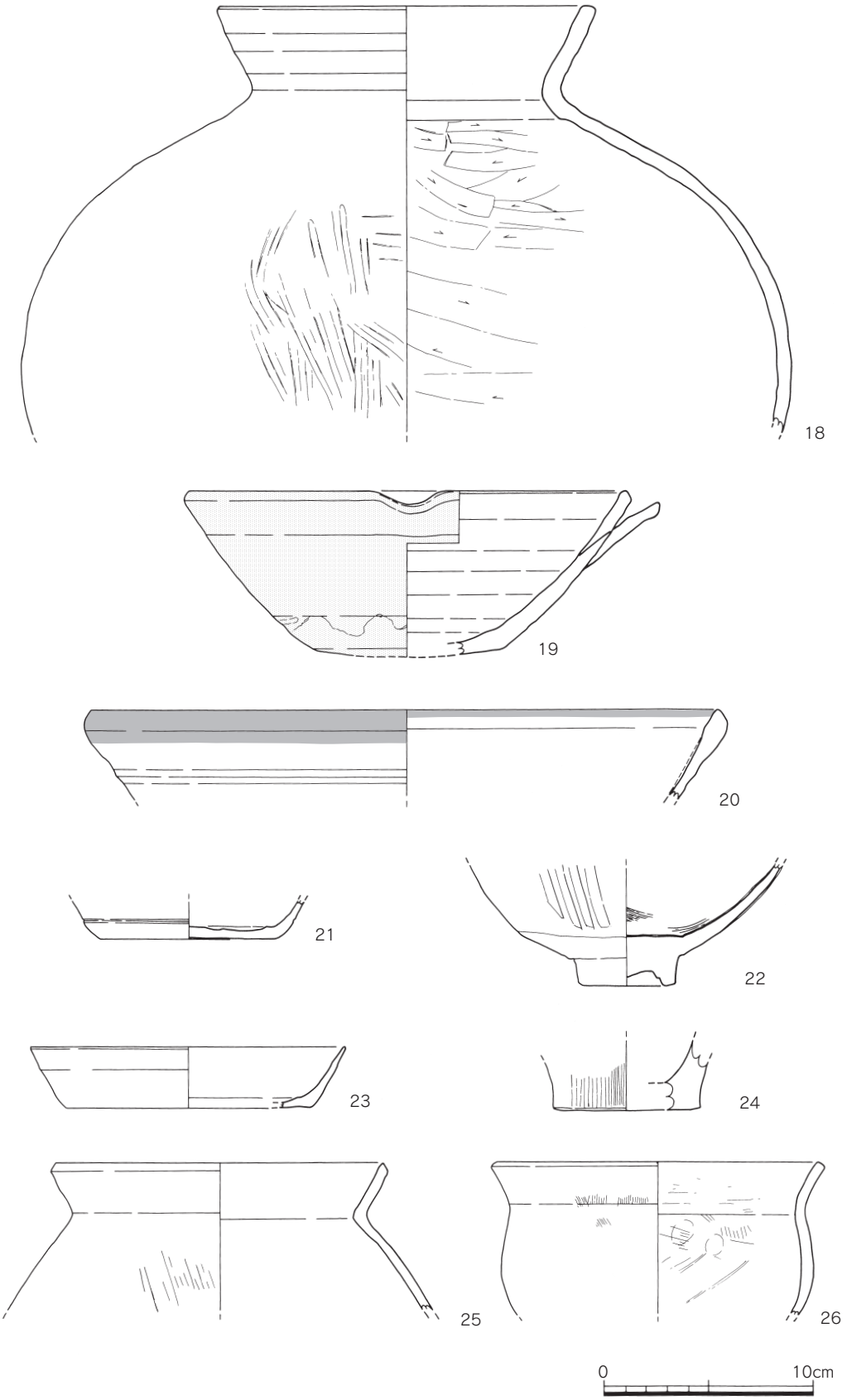
調査区北東側に位置する。検出した時点で、溝状を呈しており、土層観察用ベルトを挟んで東側でその一部を確認した。現地保存を優先したため、表面の土器を採取したのみである。

出土遺物（第62図25・26、第63図27・28）

25は布留式甕で、胴下半を欠損する。くの字状に外反する口縁端部は面取りしている。外面はハケメの痕跡がわずかに残る。復元口径16.0㎝、残存高7.1㎝を測る。26は鉢で、口縁～胴下位まで残存し、口縁はあまり外反しない。ハケメはナデ消す努力がなされている。27は支脚で、脚



第61図　5・7・8号土坑平断面実測図（1/30）

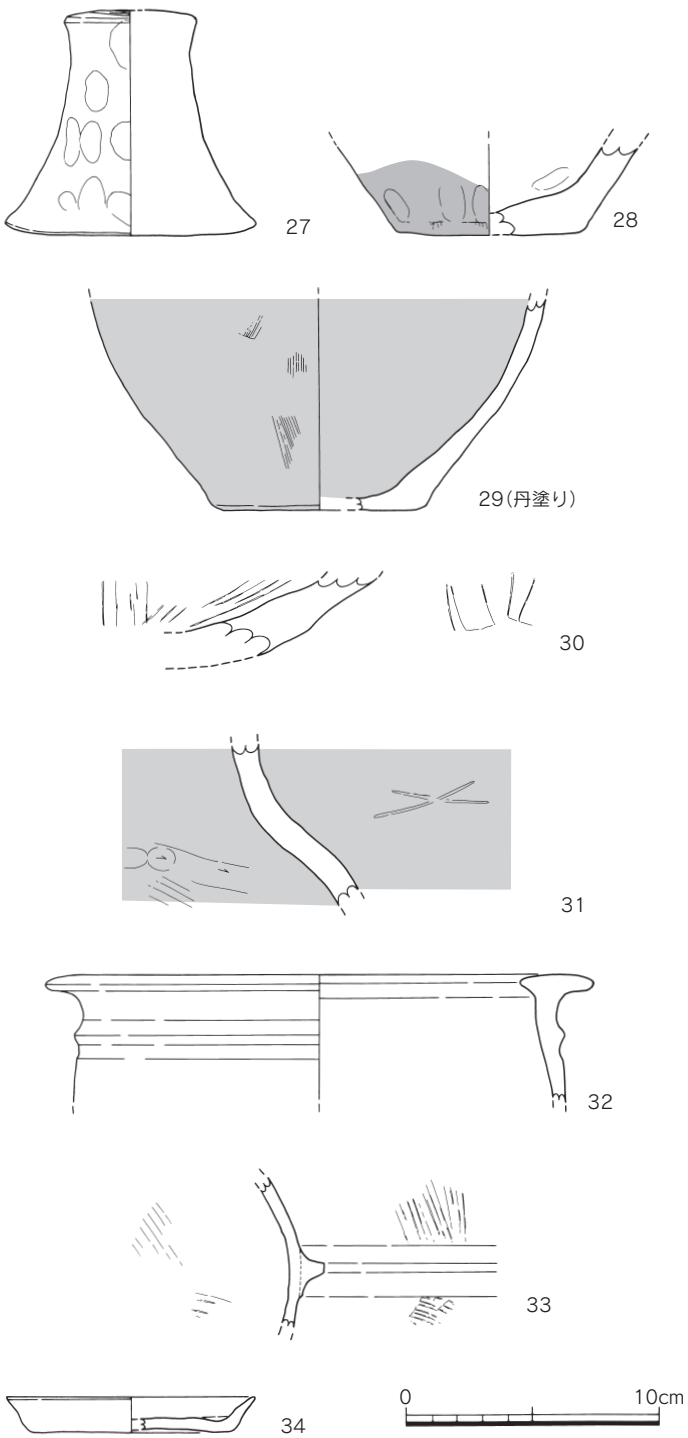


第62図　6～9号土坑出土遺物実測図（1/3）

部が大きく広がり、指オサエで成形する。復元口径5.0㎝、器高8.9㎝、底径10.0㎝を測る。28は甕の底部片で、底部はわずかにレンズ状となる。復元底径7.0㎝、残存高3.4㎝。

10号土坑

調査区中央に位置し、1号水路を切る形で検出した土坑で、東西2.4m、南北2.6mの歪な円形を呈する。土坑内は石が多く含まれていたが、きれいに並べられたものではなく、乱雑に積み上げられた様子であった。検出時には、この切り合い関係を認識しないまま、調査を行ったが、石が土坑内に広く広がり、その掘り方が1号水路の幅を超えること、最も高い位置にある礫のレベルが1号水路の床面よりも上位にあることから、1号水路埋没後に掘削された土坑と判断した。土坑内からは中世の遺物が出土しており、時間的制約があったことから、その下部については調査を行わず、現地保存を行った。



第63図　9～14号土坑出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第63図29・30）

29は甕で、胴下位～底部まで残存する。底部と胴部の境は丸みを帯びる。弥生時代後期前半から中頃。30は滑石製石鍋片で、底部付近か。内外面のケズリが明瞭である。

11号土坑

調査区中央に位置し、1号水路が東に分岐する地点にある。1号水路及び10号土坑に切られてお

り、残存で東西1.1m、南北1.15mを測る。土坑内は調査を行っていないが、表面採取の土器は弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（第63図31）

31は壺の胴部片で、外面が丹塗磨研である。胴部外面はミガキ、内面はハケメである。

12号土坑

調査区中央に位置し、4号土壙墓に切られる。住居の可能性があるが、検出できたのは一部分であったため、不明である。表採できた土器は弥生時代中期である。

出土遺物（第63図32）

32は甕の口縁部片である。鋤先口縁の下位に三角突帯を1条巡らす。内外面共にナデ調整で、復元口径21.6㎝、残存高5.1㎝である。

13号土坑

調査区北東側に位置し、一部が土層観察ベルト内である。東西0.9m、南北0.6mを測る横長の土坑である。2段掘りとなっており、東側に柱穴がある。

出土遺物（第63図33）

33は壺の胴部片で、台形状突帯を1条めぐらす。内外面ともにハケメ調整。残存高6.6㎝を測る。

14号土坑

調査区中央に位置する。36号住居と切りあい関係にあり、土坑の一部は調査区外へと続いている。表採土器は中世のもの。

出土遺物（第63図34）

34は土師皿で、復元口径9.8㎝、器高1.4㎝、復元底径7.6㎝を測る。体部外面及び内面は回転ナデ調整、底部は糸切りである。

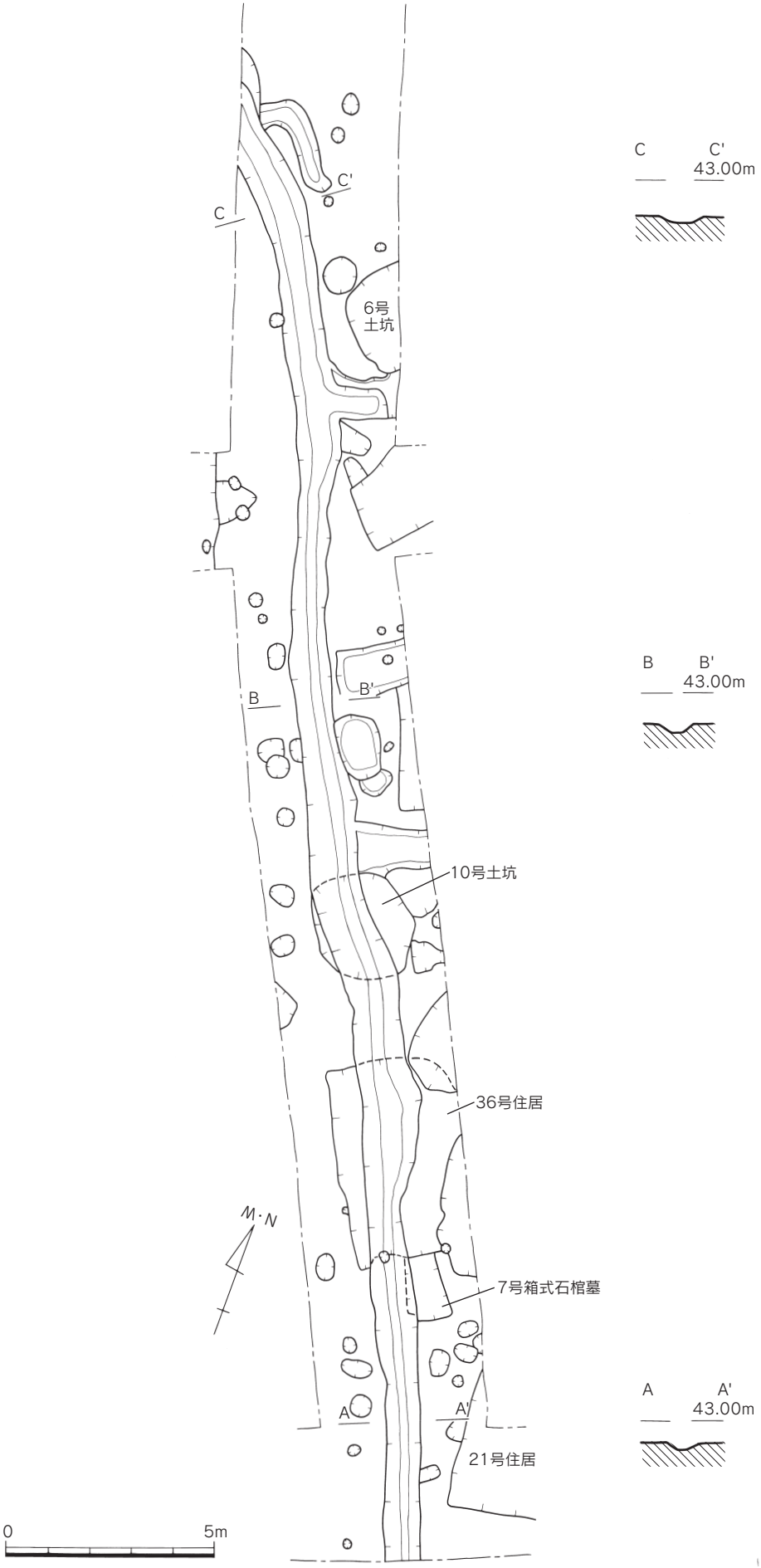
⑽1号水路（第64図）

調査区中央を南北に走る水路で、大正年間の地籍図にも記載されているが、出土遺物は中世の青白磁。水路は幅0.7～1.4m、深さ20㎝を測り、断面逆台形を呈する。埋土は明灰色粘質土で、下層は、水の流れを示す細かな砂層であった。北側で西方向へとやや曲がっている。

出土遺物（第65～68図）

1～13は白磁。1は口縁部が玉縁となる白磁片で、口縁下、体部外面は無釉である。2は素口縁が外反する白磁椀で、口縁端部を口禿げしている。内面には白堆線が入り、13世紀後半～14世紀前半と考えられる。3は口縁が外反する白磁椀で、内面は白堆線で分割される。口縁端部は口禿げで、復元口径15.8㎝、残存高5.0㎝を測る。4は体部が直線的に延びる白磁椀で、体部下半を欠損する。口縁端部は口禿げで、白堆線で分割する。復元口径15.0㎝、残存高3.9㎝を測る。5は白磁椀で口縁部のみの残存し、口縁端部は口禿げを行う。復元口径11.9㎝、残存高3.0㎝を測る。

6～12は白磁皿である。6は約1/4残存する白磁皿で、口縁部は短く直線的である。底部外面は、板状工具で釉をのばしている。7は口禿げを行う白磁皿で、底部を欠損する。見込みに段を有し、復元口径10.0㎝、残存高3.25㎝、復元底径5.9㎝を測る。8は約1/2程度残存する白磁皿で、口縁

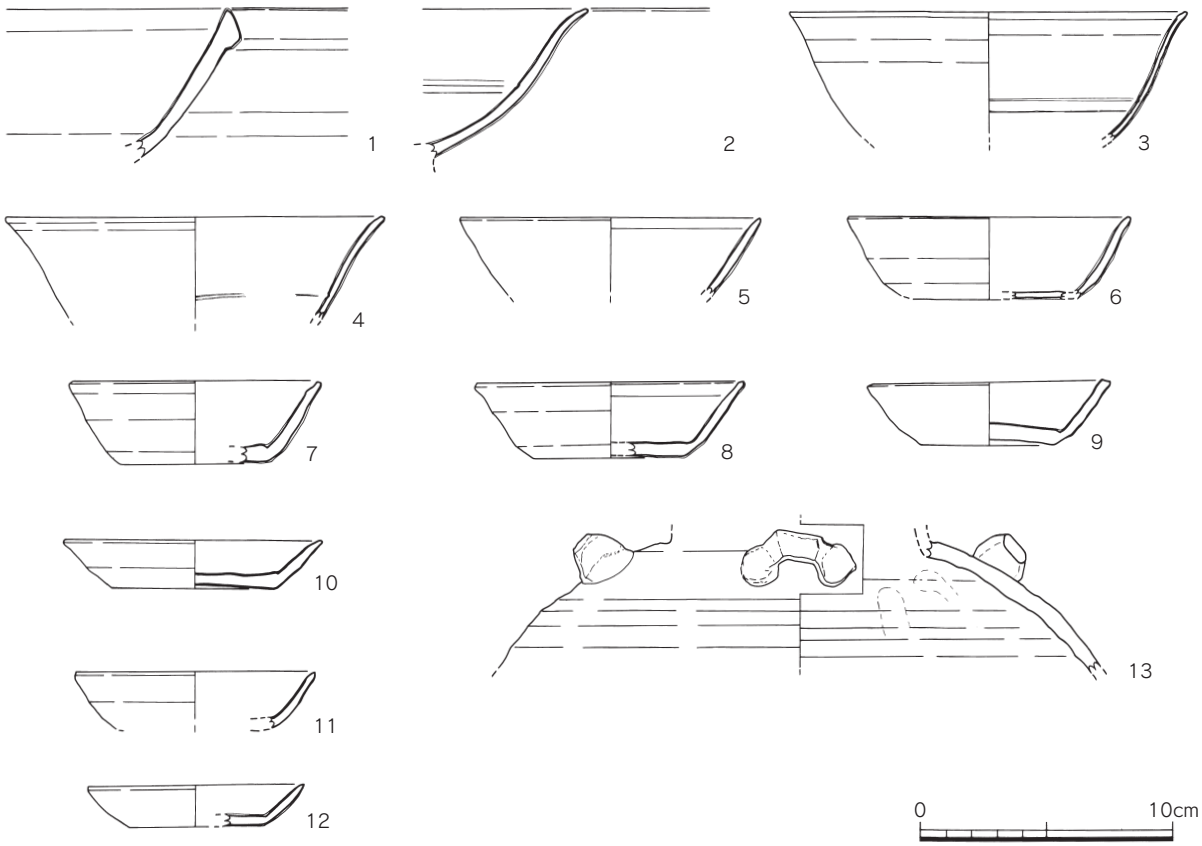


第64図　1号水路平断面実測図（1/150）

内面を口禿げする。復元口径10.6㎝、器高3.0㎝、復元底径5.8㎝を測る。9はほぼ完形の白磁皿で、口縁端部を口禿げ、底部は無釉である。口径9.6㎝、器高2.4㎝、底径5.2㎝を測り、内外面共に灰白色である。10は3/4程度残存する白磁皿。口縁端部は口禿げで、他は全面施釉である。11の白磁皿は底部を欠損する。口縁端部は口禿げ、底部は無釉である。復元口径9.5㎝、残存高2.2㎝を測る。12は白磁皿。口縁は短く直線的で、その端部を口禿げする。底部は板状工具で釉をのばしている。13は四耳壺の胴上部片で、内外面共に施釉し、灰黄色である。

14～24は龍泉窯青磁。14は外面に鎬連弁、内面は無文の青磁椀で、高台部分の釉は削られている。復元口径15.4㎝、器高6.6㎝、高台径5.4㎝を測る。15も14と同様の椀で、体部外面は片彫りの鎬連弁、内面は無文である。復元高台は厚めの造りで、復元口径16.0㎝、器高6.3㎝、復元高台径5.4㎝である。16の龍泉窯青磁椀は、約1/4程度の残存である。体部外面は片彫りの鎬連弁、内面は無文。高台は厚めに作られる。復元口径15.0㎝、器高6.2㎝、高台径5.4㎝である。17は龍泉窯青磁椀で、約1/4程度の残存。体部外面は鎬連弁を施し、内面は無文である。復元口径15.6㎝、器高6.2㎝、復元高台径4.6㎝を測る。18も龍泉窯青磁で、底部を欠損する。体部外面は鎬連弁を配し、内面は無文。復元口径18.4㎝を測る。19、20は口縁部のみの残存で、やはり体部外面は鎬連弁、内面は無文である。

21～25は龍泉窯青磁椀で口縁部が欠損するもの。21は内面見込みに花文、体部内面に草花状の文様を施す、体部外面は無文で、高台の釉は削られる。22、23、25は体部外面に鎬連弁、内面は



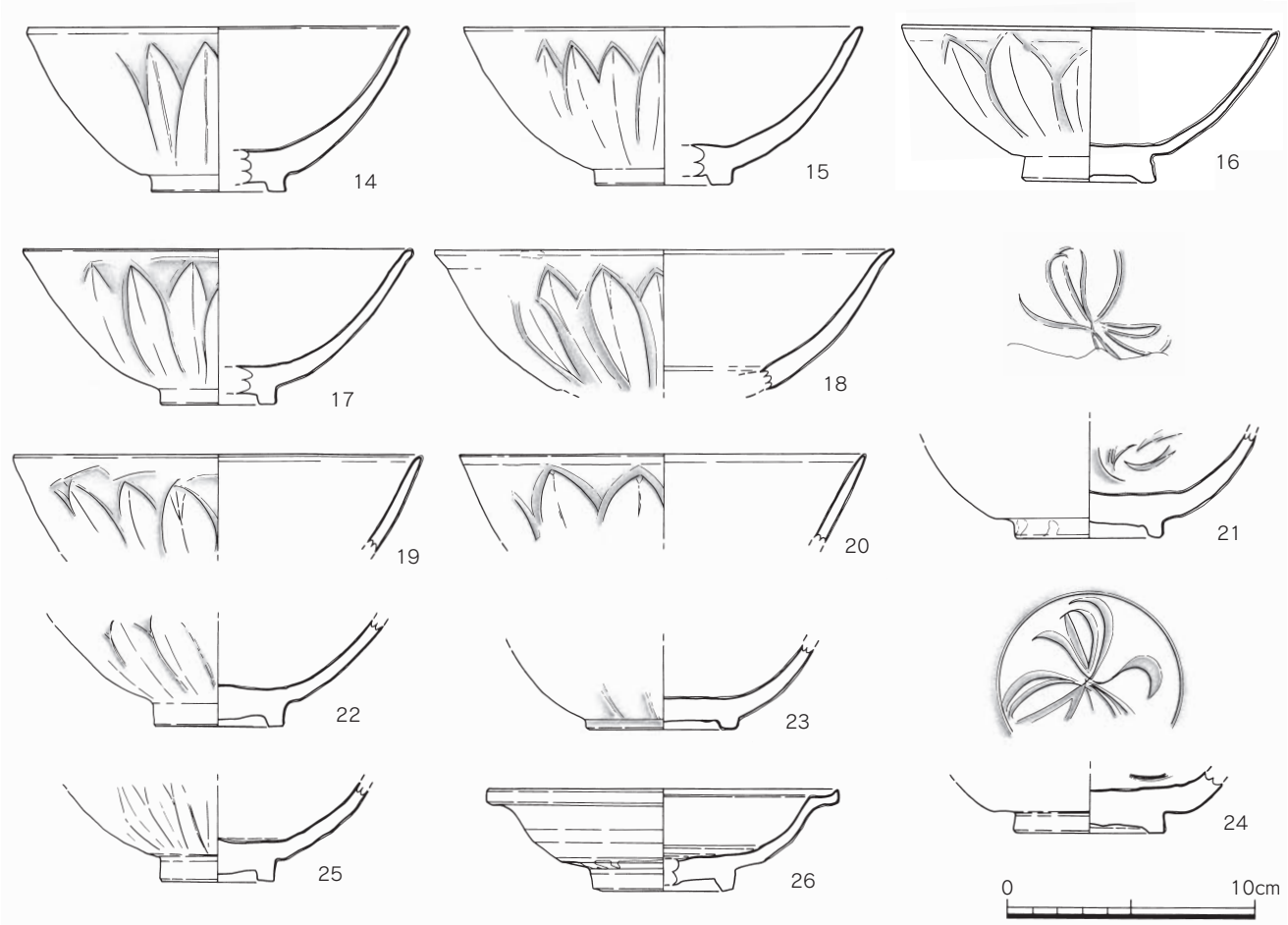
第65図　1号水路出土遺物実測図①（1/3）

無文。23の高台は低く作られている。24は底部のみ残存。内面見込みに花文を施す。26は龍泉窯青磁坏で、口縁を強く屈曲させ、外上方につまみあげる。内外面共に無文で、高台部分の釉を剥ぎ取りする。復元口径14.1㎝、器高4.1㎝、復元高台径5.6㎝を測る。13世紀中頃～14世紀初頭。

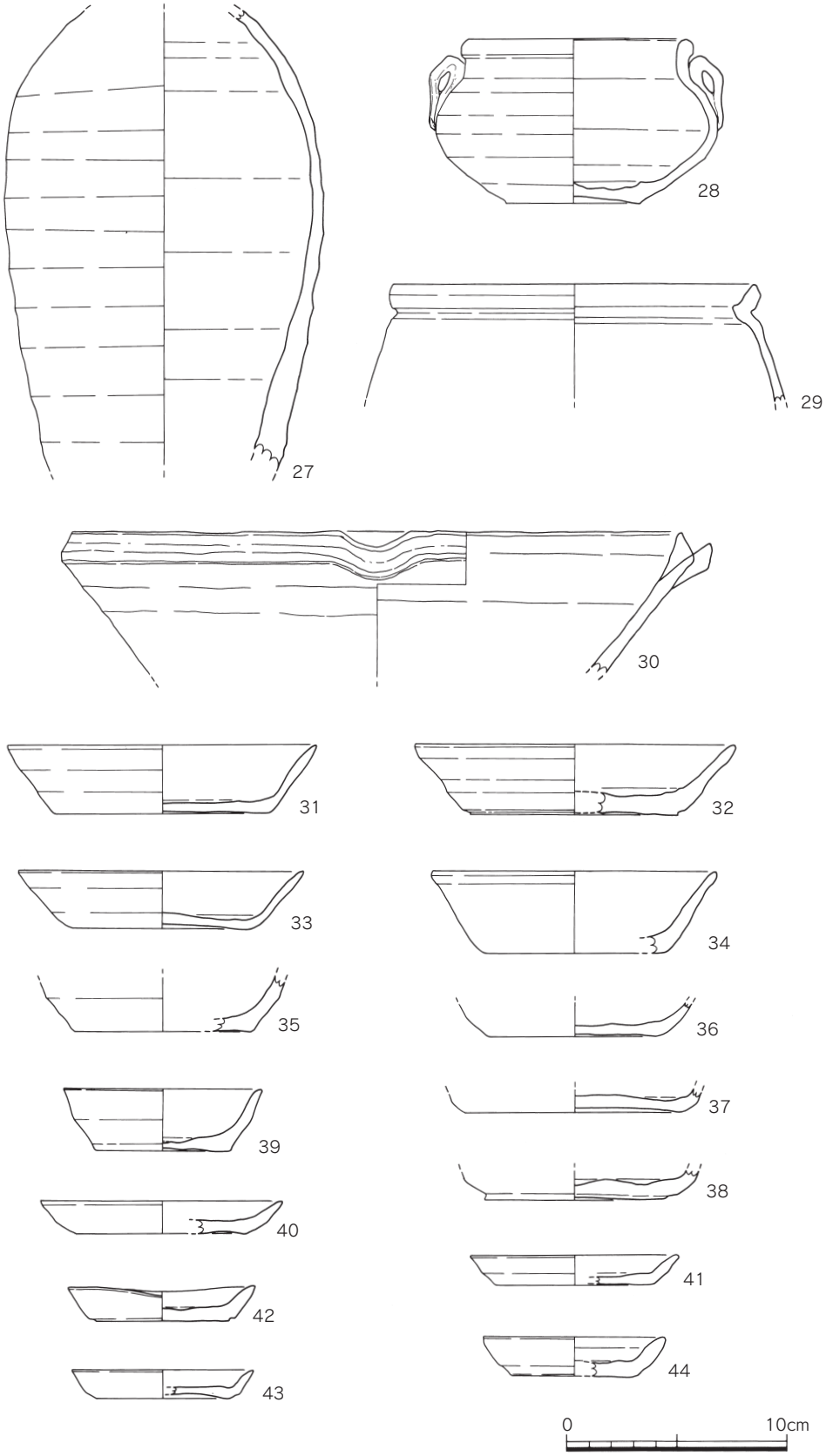
27は陶器壺。長胴形で、口縁と底部を欠損する。胴中位が膨らみ、強い回転ナデによって作られる。外面は灰褐色、内面は赤褐色である。28は口縁～胴下位にかけて約3/4程度が欠損する耳付壺である。口縁部を肥厚させ、中位が張る胴部に縦形の耳を付ける。内外に施釉するが、胴下半は流した釉が垂れている。口径9.7㎝、器高7.4㎝、底径6.1㎝を測る。

29は灰白色を呈する陶器壺で、胴上位が膨らむ。口縁は内側から屈曲して外方へとあがる。復元口径16.6㎝、残存高5.2㎝を測る。30は東播系片口鉢で、体部下半を欠損する。復元口径27.6㎝、残存高6.3㎝を測る。

31は土師器坏で、回転ナデによる成形。底部は糸切りで、復元口径14.0㎝、器高3.1㎝、復元底径9.6㎝を測る。32は約1/2残存する土師器坏で、底部は糸切り。復元口径14.2㎝、器高3.2㎝、復元底径9.4㎝を測り、内外面共に褐色である。33も土師器坏で、復元口径12.8㎝、器高2.6㎝、復元底径8.0㎝を測る。34の土師器坏は底部を欠損する。体部が深く、口縁は外方に広がる。復元口径13.0㎝、器高3.7㎝を測る。35は口縁部を欠損する土師器坏で、回転ナデによって、体部に



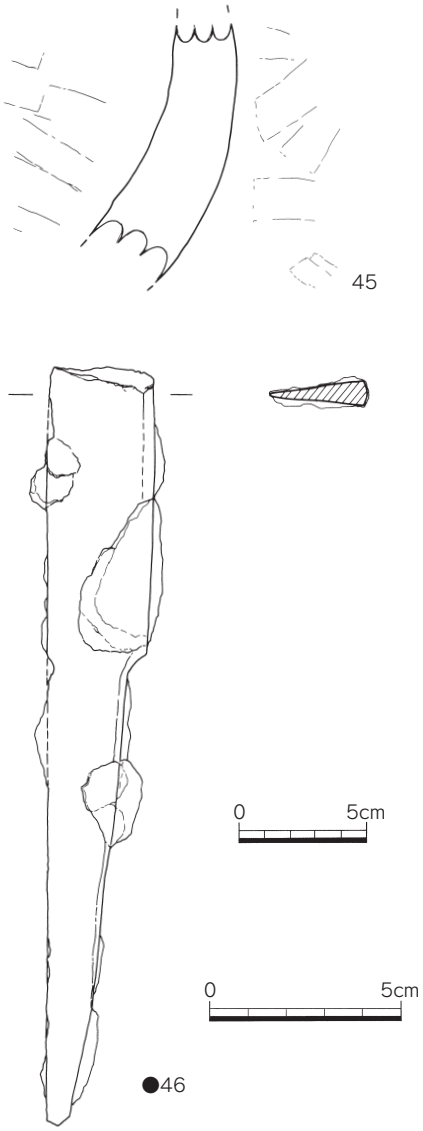
第66図　1号水路出土遺物実測図②（1/3）



第67図　1号水路出土遺物実測図③（1/3）

段がつく。36は口縁部を欠損する土師器坏で、底部は糸切り。37も口縁部を欠損する土師器坏。復元底径10.0㎝で、糸切りである。内外面に、にぶい黄橙色を呈する。38は土師器坏で、口縁部を欠損する。39は体部に段がつく土師器坏で、底部は糸切り。復元口径9.0㎝、器高2.8㎝、復元底径6.0㎝を測る。

40～44は土師皿である。40の土師皿は、復元口径11.0㎝、器高1.5㎝を測り、切り離しは糸切りである。41は強いナデを行う土師皿で、復元口径9.4㎝、復元底径7.0㎝、器高1.4㎝で、糸切りである。42、43の土師皿は、両者ともに糸切りである。42は口径8.4㎝、器高1.6㎝、底径5.9㎝、43は復元口径8.2㎝、器高1.3㎝、復元底径6.0㎝を測る。44は復元口径8.2㎝、器高1.8㎝、復元底径5.6㎝の土師皿。底部の切り離しは糸切りである。45は滑石製石鍋で、体部下位の破片である。内外面共にケズリが明瞭。46は身の一部～茎部のみが残存する大刀である。刃の身～茎部にかけて直線的であり、緩やかな関が背側についている。残存長20.1㎝、茎部長11.9㎝、身部幅2.8㎝を測る。



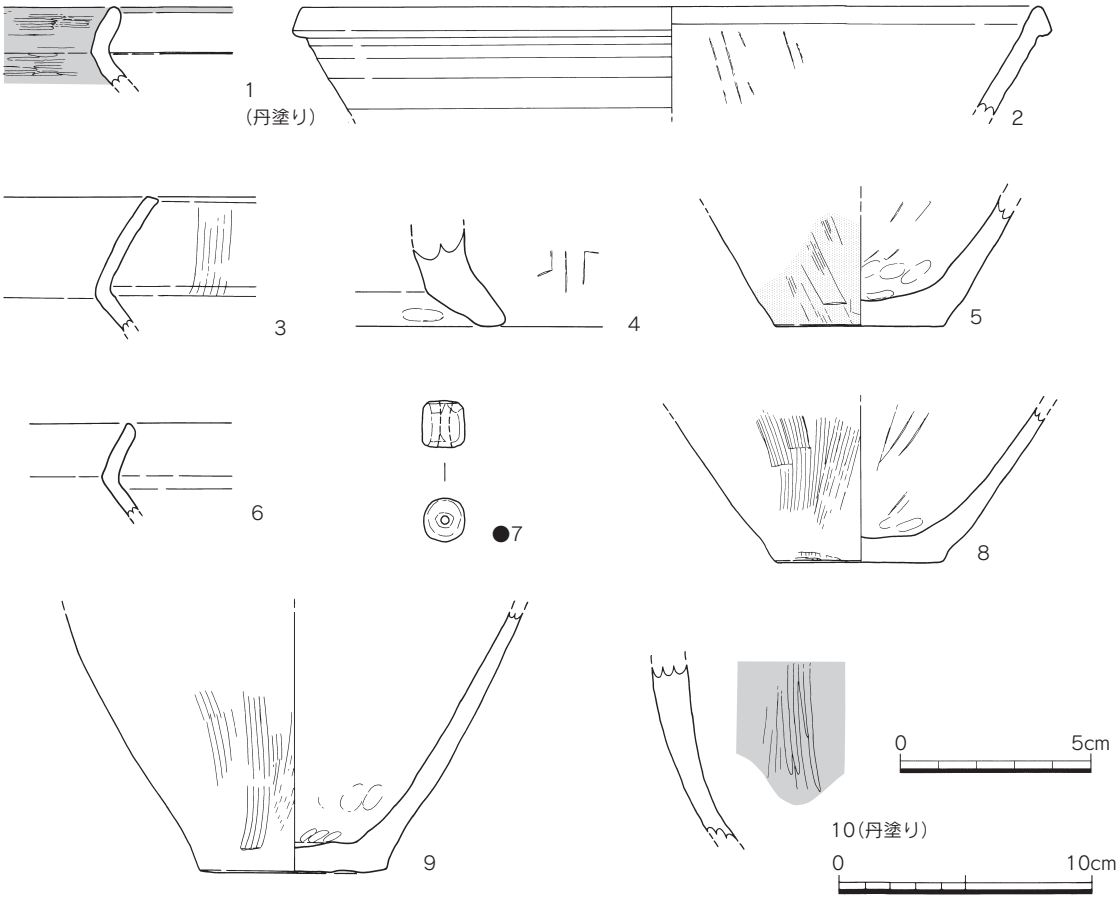
第68図　1号水路出土遺物実測図④
（●は1/2・1/3）

⑾ピット

ピットについては、掘立柱建物の柱穴にならないもののうち、出土遺物があるもののみ報告する。

出土遺物（第69図）

1は3号ピットより出土した甕の口縁部片で、口縁端部～内面が丹塗磨研である。2は6号ピットから出土。擂鉢の口縁部片で、口縁部を肥厚させる。3、4は8号ピットからの出土。3は、くの字口縁をもつ甕で、外面のハケメがわずかに残る。4は器台の脚裾部片で、外面は板状工具によるナデを行う。5は16号ピットから出土した甕の底部片である。平底で、外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデである。6は24号ピットからの出土。口縁は、くの字状を呈し、全体的に風化が著しい。7は38号ピットから出土した土玉で、径1.1㎝、高さ1.2㎝を測る。8、9は40号ピットからの出土。8は壺の底部片か。平底で、外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナデである。9は甕の底部片で、胴下位まで残存する。平底で、底径7.4㎝、残存高10.3㎝を測る。10は高坏の脚部片で、外面は丹塗磨研。縦方向のミガキは明瞭に残る。41号ピットから出土である。



第69図　ピット出土遺物実測図（●は1/2・1/3）

3．小結

本遺跡は、弥生時代～中世にかけての遺構が存在する複合遺跡であり、竪穴式住居、箱式石棺墓、祭祀土坑、溝、土坑、水路などを検出した。このうち、調査成果として最も注目される弥生期の溝については、後述することとし、ここでは他の遺構について時期別に簡単にまとめたい。

①弥生時代後期後半～古墳時代初頭

弥生時代に属する遺構は、調査区北東端で検出した1，2号溝のほかに箱式石棺墓、甕棺墓、祭祀土坑がある。箱式石棺墓は全部で7基を検出しており、そのうち6基は、調査区北西側を中心に南北軸の群を形成している。群の中では、1～3、6号箱式石棺墓のまとまりに対して、南東側に少し離れて4、5号箱式石棺墓のペア埋葬が存在し、2号甕棺墓が付随する。

2号甕棺墓は、現地保存を優先し、口縁端部のみの検出に留めたため、甕棺全体の形状が不明であるが、弥生時代後期以降に糸島地域で盛行する大型壺である。時期は口縁部の形状からすると、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に属すると考えられる。

1，2号祭祀土坑は、1～3、6号箱式石棺墓の群に伴うと考えられ、柳田編年の土師器Ⅰa～Ⅰb式の土器が多く出土している。両祭祀土坑は共に上層のみの調査に留めているため、時期比定には注意を要するが、古墳時代初頭の時期であり、箱式石棺墓に関連する祭祀土坑として考えてよい。位置的に1号祭祀土坑は3号箱式石棺墓と、2号祭祀土坑は2号箱式石棺墓と関連する可能性が

ある。出土した大型甕は、扁平突帯が直線的なものと波状を呈しているものが共伴しており、古墳時代初頭に突帯形状に変化が現れ始める可能性がある。今回検出した箱式石棺墓群は、上学～上覚地区にかけて造営される墓域の一部と想定される。

②古墳時代前期中頃～中期前半

竪穴式住居は38軒を検出した。現地保存を優先し、調査したものは限られている。平面プランは長方形と正方形のものがあり、長方形の住居は未調査であるものの周辺の調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期の住居群が検出されており、この時期の住居群の可能性がある。

一方、平面形が正方形となるものは、概ね古墳時代前期末～中期前半に比定される住居である。古墳時代中期前半の34号住居からは、甑が出土しており、この時期から糸島地域におけるカマド受容の画期にあたる（平尾2004）。これらの成果は、上覚地区441、450-2など周辺遺跡でも検出されており、堺、ヤリミゾ、上覚、上学地区に展開する住居群の一部分と考えられる。

③中世以降

中世では、1号掘立柱建物、1 ～ 4号土壙墓、1号水路などが該当し、調査区北東側に集中する。1号掘立柱建物は1×2間、柱内に簡易的な礎石をもつ側柱建物で、時期は平安時代末～鎌倉時代である。ヤリミゾ地区434番地の2×4間の掘立柱建物は、これと同じ時期であり、同一集落建物群と考えられる。

一方、3，4号土壙墓は13世紀後半～ 14世紀であり、調査区中央を南北に走る1号水路もほぼ同時期である。1号水路は、大正年間の地籍図に記されている溝との推定で調査を行ったが、前述したとおり、出土した土器は13世紀後半～ 14世紀前半のものが多く、江戸～大正期の遺物は見られなかった。残念ながら水路上には井原鑓溝遺跡と関連する遺構を検出することができなかったことから、今後の調査に期待したいところである。（江﨑靖隆）

【参考文献】

江﨑靖隆　2013「甕棺の編年」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

平尾和久編　2004『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財調査報告書第86集

柳田康雄　1991「土師器の編年　九州」『古墳時代の研究』6　雄山閣

Ⅱ．三雲ヤリミゾ地区436-1番地

1．調査概要

本調査は、三雲南小路436-1番地（地籍面積650㎡）で実施した重要遺跡確認調査である。当番地は、いわゆる三雲南小路墳丘墓が所在する453-1～3番地と道路を挟んだすぐ南側に位置している（第4図）。

調査の主な目的は、既知の三雲南小路墳丘墓の南側の遺構分布状況の確認である。

この436番地では過去にも平成6年度と平成12年度の2度に亘り三雲南小路墳丘墓の周溝の確認を目的としてトレンチ調査が行われている。これらの調査では、古墳時代の住居跡が良好な状態で発見されているが、南小路墳丘墓或いはその周溝に関連する遺構は同レベルで発見されなかった為、周溝は現在の墳丘墓南側の道路下あたりに位置している可能性が極めて高いと解釈されていた。ところが、本調査の前年度に行われた三雲439番地の発掘調査で、調査区東側で南小路墳丘墓側から南へ延びる溝状遺構（1号溝）が検出され、さらにそれに対応すると考えられる2号溝がさらに東に延びている可能性が指摘された。これらが南小路墳丘墓或いはその南側にある別墳墓などに関連する遺構ではないかとの推測がなされ、本調査はこれらの関連遺構の内容確認を目的として実施されるに至ったものである。

なお、当該調査地には鋼管パイプを躯体としたビニールハウスが設置してあり、本調査はこの既存のハウス骨組み内部での休耕期間中に緊急に行ったもので、極めて限定的な調査とならざるを得なかったことを付しておきたい。また、調査は、保存を目的とした調査で残存している遺構の分布状況と深さ・種類・時期の確認等を本旨としており、遺構の一部については全掘せず検出、又は表層部分の掘り下げのみにとどめている。

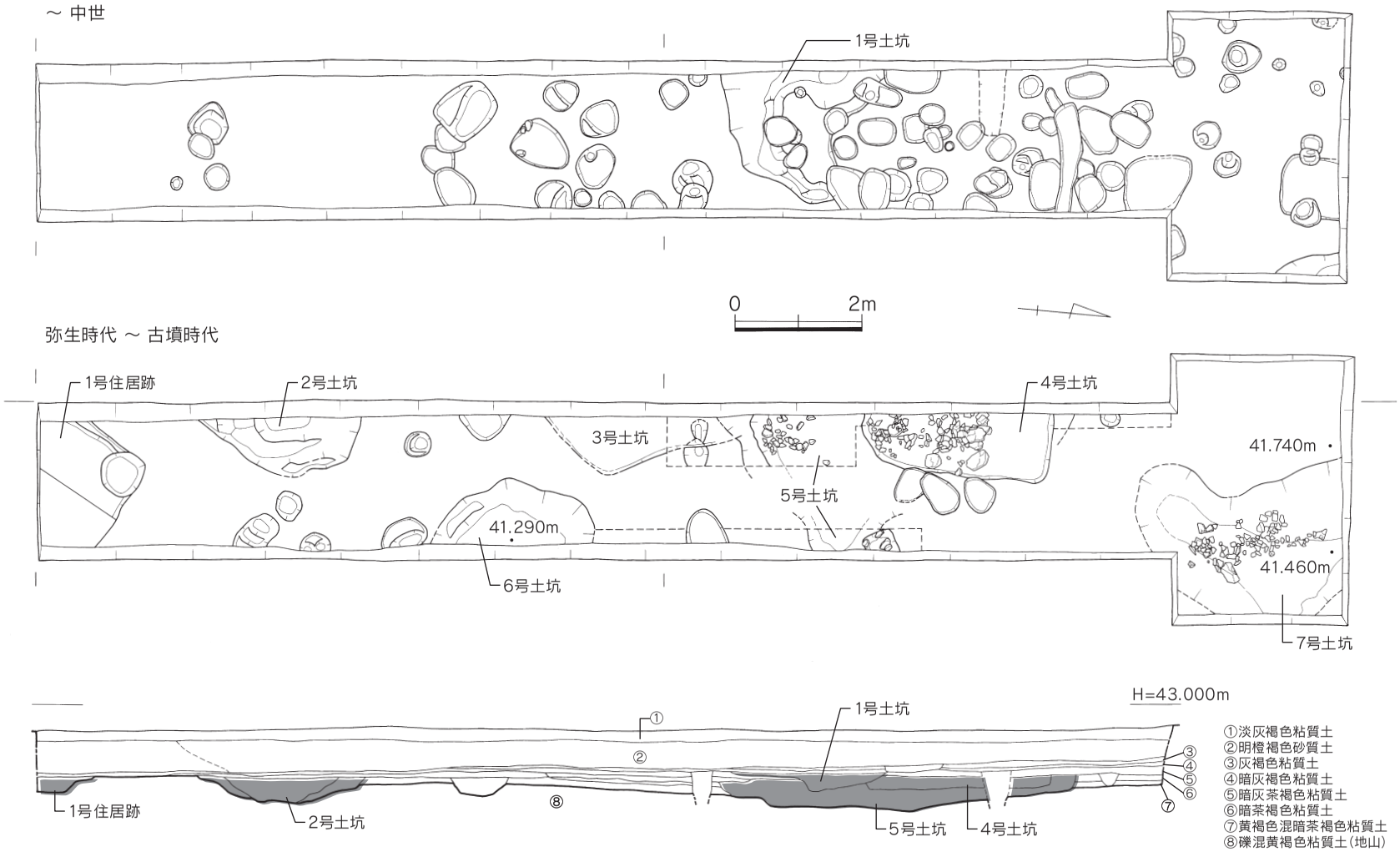
平成22年7月26日から表土剥ぎを開始し、耕作期間との調整もあってビニールハウス骨組み内での調査は8月中をもって一旦終了し、翌年1月に北側にトレンチを拡張して追加調査を行い、平成23年1月24日をもって調査を完了した。

2．遺構と遺物

遺構の概要（第70図）

調査地点は、436番地の最も西寄りに位置する。既存のビニールハウスの向きに合わせて南北方向に軸を向ける長さ約21m×幅2.5mのトレンチを設定し、1m単位のグリッドに分けて任意分層発掘による調査を行った。時間的な制約もあって、トレンチ内にあっても遺構の全部を検出できた訳ではなく、特に下層の遺構については東西壁面のみサブトレンチを入れて土層断面にて遺構の深度を確認するだけに留まっている。

調査地点の現地表面の標高はおよそ42.6mを測り、現状では三雲南小路墳丘墓の地表面よりも一段高い。現況では一見してフラットな畑に見えるが、測量すると僅かに北側のほうが高くなっている。しかし、掘り下げると、圃場整備により遺構面の上位は一旦ほぼ水平に削平されているものの、検出面のレベルは北側のほうが低く、旧地形は逆に南から北へ緩く下っていたと考えられる。



第70図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区遺構配置図・土層図（1/100）

ここでは大きく分けて二つの遺構面が確認された（第74図）。まず、地表下70㎝程で圃場整備前の旧表土である灰褐色の粘質土層（③層）があり、その下位の④層面に中世～近世頃の遺構が検出された。この遺構検出面では、特に無数のピット群が北半部に特に集中していたが、そのほとんどが近世以降のものとみられ、建物の柱穴というよりは耕作などの掘り返しなどと考えられる。これらピット群に切られて1号土坑が検出された。1号土坑は、不整形の土坑ですり鉢状に浅く掘られており、西側に深くなって続いている。全容は不明だが、埋土中に土師皿や青磁片などが出土（第71図2～7）している。中世の遺構である。

これらの遺構の下層の⑥層面に弥生・古墳時代の遺構面が検出された。この遺構面では、竪穴住居跡1基、土坑6基、ピット群などを確認した。

調査区南端で検出された1号住居跡は、方形住居のコーナー部のみ検出。共伴遺物（第71図1）が少ないが、古墳時代前期に比定される。その3ｍほど北側で確認された2号土坑は、検出面からの深さは60㎝程となり、しっかりとした掘り方で西側へと続いている。439番地の2号溝にへと繋がっていく可能性も残る。出土遺物（第71図8・9）は非常に少ないが、弥生時代中期中頃の遺構とみられる。3号土坑は浅いもので、1号土坑に切られ出土遺物も少なく全容が不明。古墳時代のものか。

4号土坑は1号土坑を掘り下げた北側に検出されたもので、不整長円形のプランで検出した。北側は攪乱されていたが、埋土中に大量の土器片・礫を含んでいる。出土遺物（第72図）は弥生時代終末期のもの。5号土坑は1号土坑及び4号土坑の下位で検出したが、一部の検出のみに留まり全容は不明。東壁面側まで続いているようでかなり大きなプランになる可能性がある。明確に時期を示す遺物に乏しいが、弥生時代終末期かそれより遡る時期の所産であろう。6号土坑は調査区南側の東壁のサブトレンチで確認したもので、埋土中に出土遺物がほとんどなく時期は不明。検出面の周辺に弥生時代中期後半頃の土器片が散見されることから、その時期より遡る時期である可能性があり、2号土坑と同時期で対応する遺構であるかもしれない。

7号土坑は北側拡張時に検出した土坑で、不整形プランですり鉢状の窪みに遺物が堆積した土器溜り状の出土状況であった。埋土中に含まれる出土遺物の大半は弥生時代後期中頃のもの。検出面の表層付近では弥生時代終末期頃の遺物も一部含まれる。

出土遺物（第71～73図）

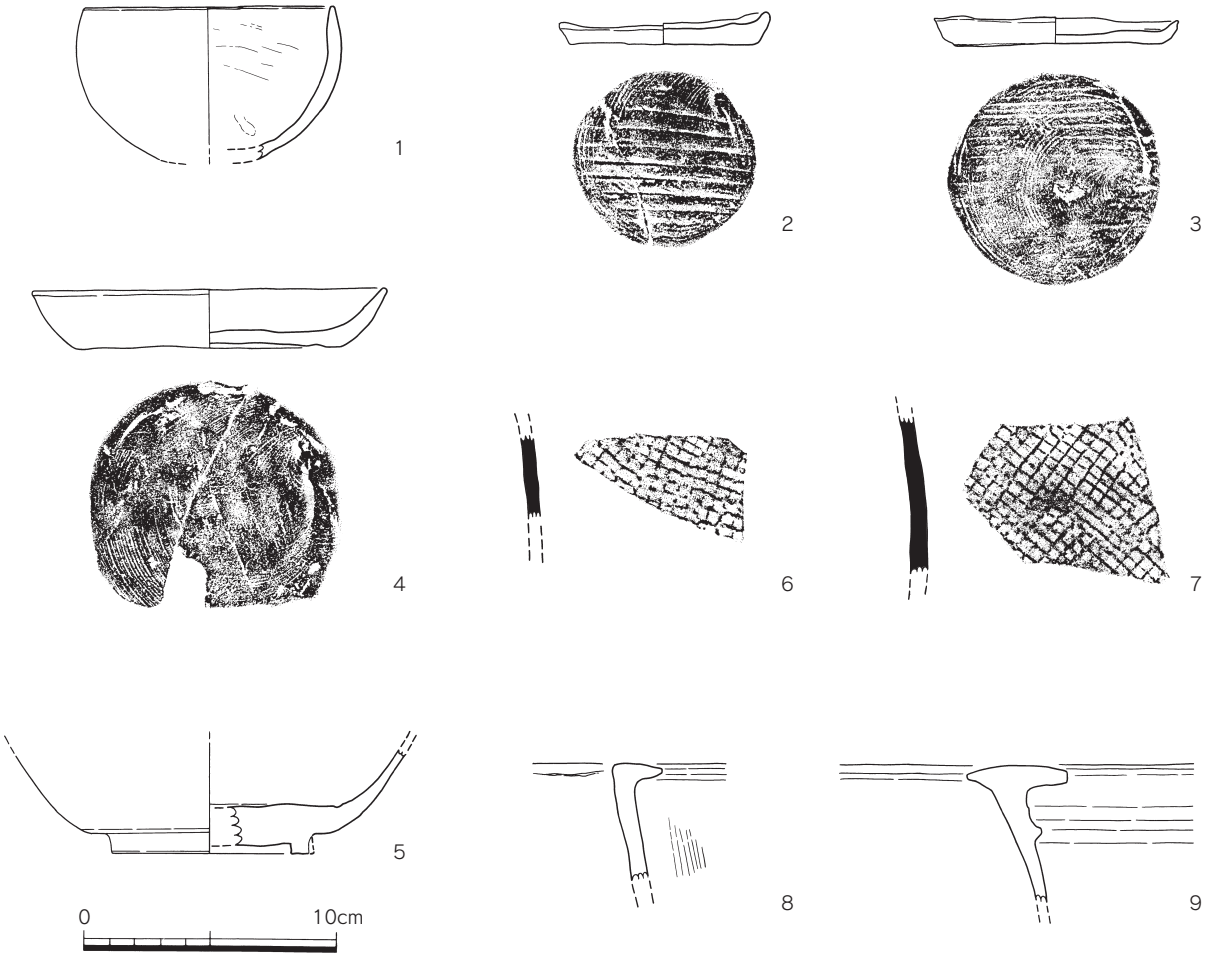
1号住居跡出土遺物（第71図1）

1号住居跡の出土遺物は数点しかない。1は丸い体部をなす椀形土器。口縁端部が丸く先細る。胎土に粗砂が混じり、色調は内外面とも淡褐色を呈する。

1号土坑出土遺物（第71図2～7）

1号土坑からは中世の土師皿（2～4）片など14世紀代の所産とみられる遺物が出土している。

2･3は扁平な浅皿で底部に板目状の圧痕と回転糸切痕が残る。いずれも胎土は精良な土師質で、色調は内外面とも橙褐色を呈する。4は2・3に比べ大きいもので底部に回転糸切痕がある。色調は内外とも橙褐色を呈している。5は高台をもつ青磁椀片。口縁端部を欠く。高台は低めで底部が厚



第71図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区出土遺物実測図①（1/3）

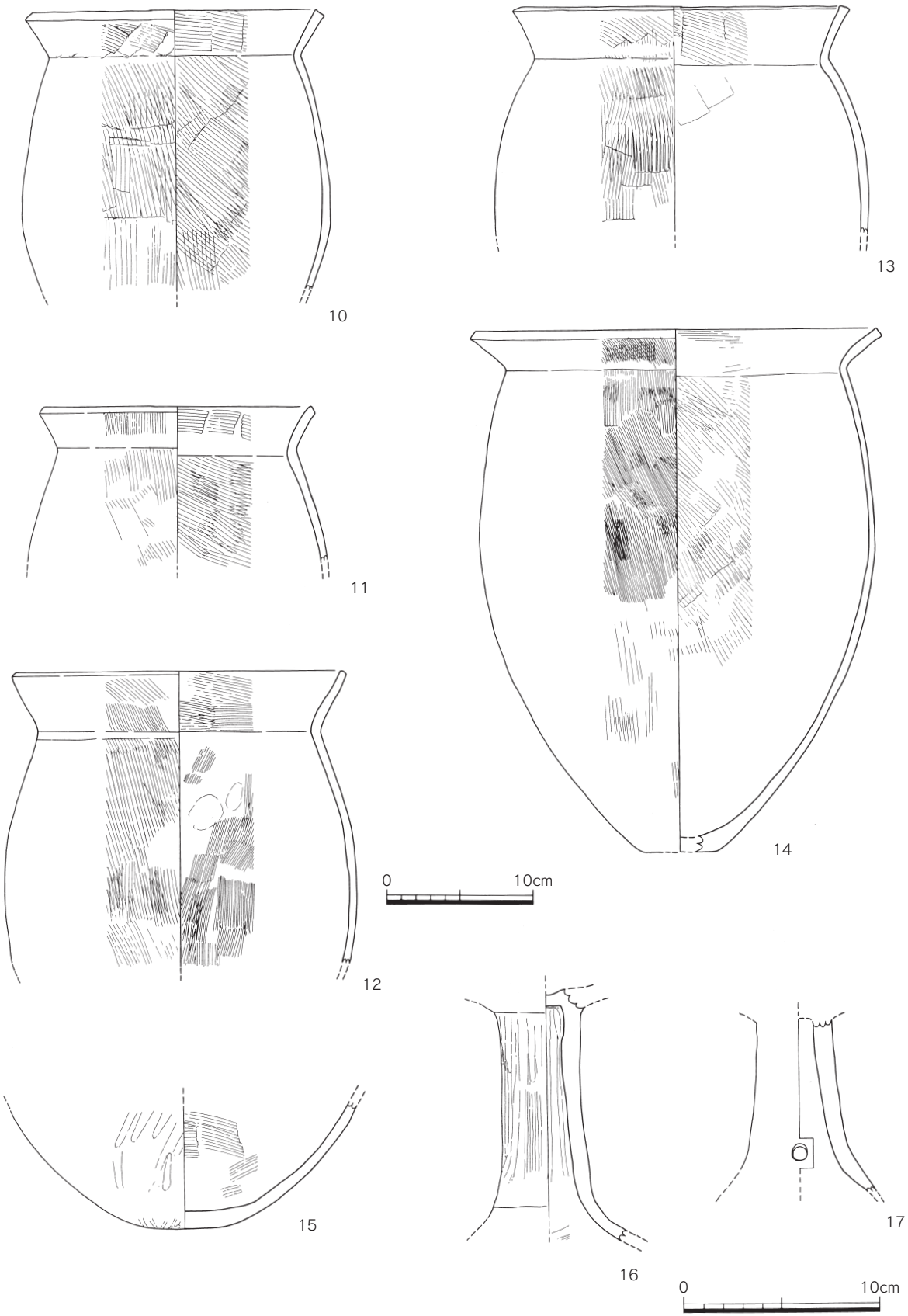
い。色調は内外面ともくすんだ淡オリーブ色、破断面に底部付近で褐色、口縁部は暗灰褐色の胎土が観察できる。6・7は外面に格子タタキを施す須恵器胴部片。同一個体であるとみられ、いずれも胴中位から下位にかけての部位であると考えられる。格子目は斜め方向に施される。色調は外面が淡灰褐色、内面は淡褐色を呈する。

2号土坑出土遺物（第71図8・9）

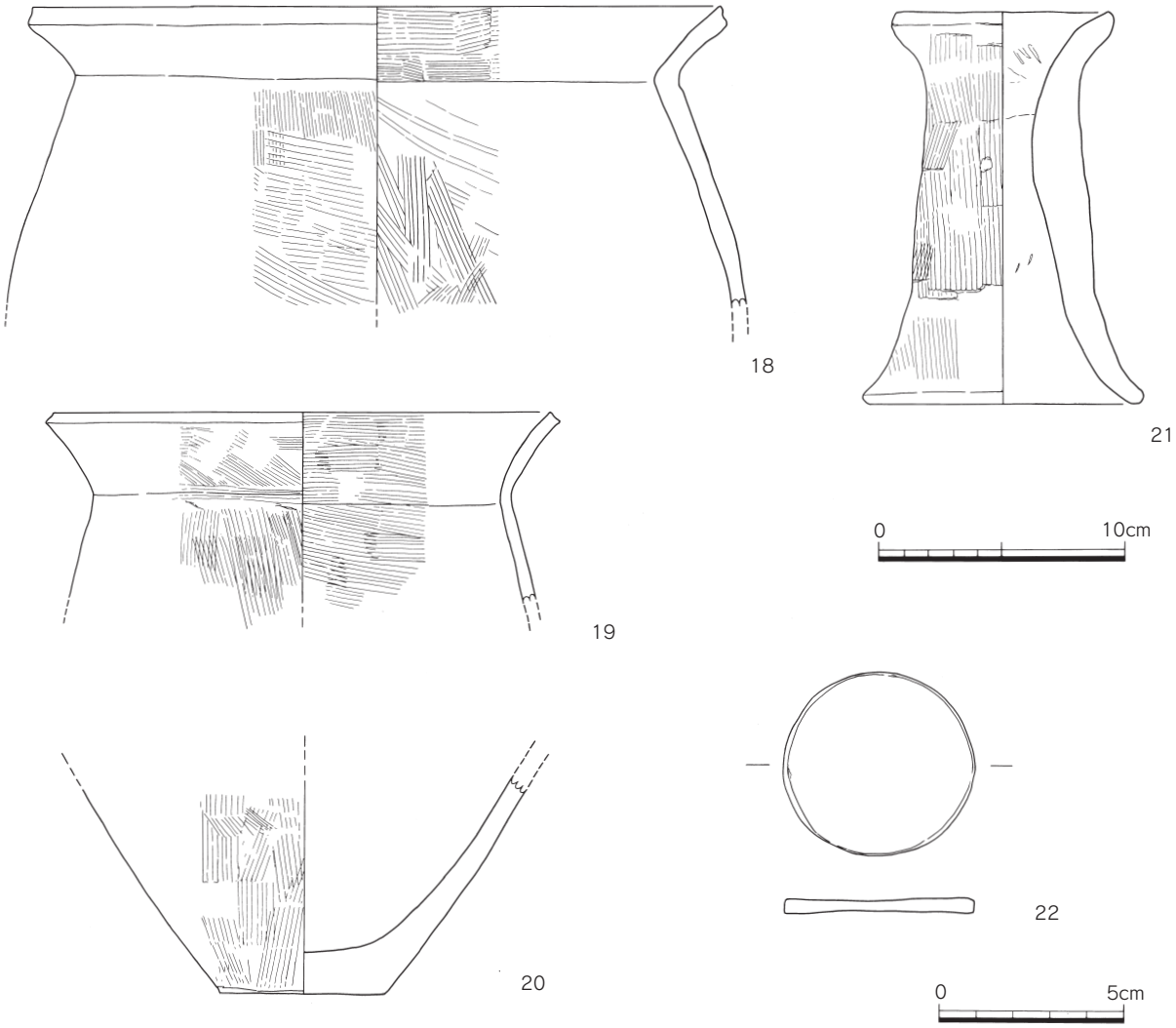
2号土坑の出土遺物は極めて少ない。8は外側への張り出しの少ないL字状口縁の甕口縁部片。埋土の上層から出土している。9はT字状に近い甕口縁部片。口縁下に突帯1条がつく。

4号土坑出土遺物（第72図）

4号土坑では、特に表層で多量の土器が出土している。甕形土器の比率が高い。ここでは主要なもののみ図示し報告する。10～14は甕の口縁から胴部までの部位片。10は口縁から胴部までほぼ完全に復元でき、胴下半から底部を欠く。あまり外へ張りださず直線的に伸びるく字状口縁をなし、胴部も張らない。外面は口縁付近に斜め、胴部以下は縦方向のハケメ、内面については口縁付近は横方向、胴部以下は斜め方向のハケメ調整痕が顕著に残る。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し外面に黒斑がある。11はく字状口縁の甕小片で、色調は内外面とも橙褐色を呈し、胎土が粗く粗砂が多く混じっている。12もく字状口縁の甕片だが、口縁が僅かであるが内湾している。胴部は張ら



第72図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区出土遺物実測図②（1/4・1/3）



第73図　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区出土遺物実測図③（1/3・1/2）

ない。13は外へ張りださず直線的に伸びるく字状口縁をなし、胴部上位の肩がやや張っている。器面は外面に顕著なハケメ調整。内面は口縁部のみハケメ調整痕が残る。14は半裁状態で出土した甕形土器。外に直線的に開いたく字状の口縁で、胴部は張らず底部は丸みを帯びているが、少し平底の部分を残す。外面は口縁から胴部上位にかけて縦・斜め方向の微細なハケメ（調整痕）、内面については口縁付近は横方向、胴部以下は斜め方向の粗いハケメ調整痕が顕著に残っている。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し外面に黒斑がある。15は丸底の甕底部片である。16・17は高坏の脚部片。16は細長く平行にのびる脚部で外面に顕著な縦方向ミガキ調整を施す。色調は内外面とも橙褐色を呈し、胎土に粗砂が僅かに混じる。17は緩く基部に向かって広がる脚部。器面はナデ調整で、色調は淡褐色を呈し、胎土に粗砂が混じる。

7号土坑出土遺物（第73図）

7号土坑出土の遺物のうち主要なものを図示する。18・19は甕口縁部片。18は埋土中でも下層付近で出土。やや口径の大きい甕で胴が張る。く字状をなす口縁部の端部は少し凹む。器面調整は

外面の口縁下付近には縦方向のハケメ、胴部に横方向のハケメを施し、内面は口縁内側に横方向のハケメ、胴部に粗い縦・斜め方向のハケメで調整を施す。色調は内外面とも橙褐色を呈する。19は7号土坑検出時に表層付近から出土したもので、直線的に屈曲するく字状口縁をなす。器面調整は、外面の口縁付近が斜め方向、胴部は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメが顕著に施される。色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。20は下層出土の平底の甕底部片。外面に縦方向のハケメ、内面はナデ調整。胎土に粗砂を多く含み、色調は内外面とも橙褐色を呈する。

21は下層出土の器台。筒形をなし器壁がぶ厚く口縁部と基部端が緩く開く。外面胴部に顕著な縦方向のハケメ調整痕が残る。22は下層出土の紡錘車の未製品。扁平な正円形で結晶片岩を石材としている。重さ23.6gを測る。

３．小結

本調査では、調査区北側（三雲南小路墳丘墓側）に弥生時代後期中頃（7号土坑）から終末期（4号土坑）の土器を多量に含む土坑群が検出された点が注目される。三雲南小路墳丘墓の造営時期からは後出する遺物であり、墳丘墓の墓前祭祀などに関連する遺構であったことも考えられる。しかしながら、南小路墳丘墓の南側の区画溝（周溝）が東側から繋がって廻っているとすれば、その位置についてはこれまで考えられてきたように今回の調査区より北側（既設道路下あたりか）に所在している可能性が高くなったといえよう。

また、今回検出された2号土坑は、西側に延びて439番地調査区の2号溝に繋がる可能性が残る。同時期とみられる6号土坑と合わせて、墳墓等の区画溝などであったことも想起されるが、今回の調査では、遺構の一部を検出したのみであり、現段階においてこの事を積極的に提示するには証座として不十分である。

（河合　修）

Ⅲ．南小路地区458-1番地

１．調査概要

本調査は、三雲南小路458-1番地（地籍面積317㎡）で実施した重要遺跡確認調査である。当該地において個人住宅建設の開発案件があり、それを発端として残存する重要遺構の内容確認を目的として行った。住宅は軽微な盛土とベタ基礎による建築工法で計画されており、工事による地下の遺構への影響がないかを確認する為に実施したもので、遺構の分布状況と深さ・種類・時期の確認等が調査の本旨であり、遺構の一部については全掘せず検出、又は表層部分の掘り下げのみにとどめている。

調査地点は、三雲南小路墳丘墓の中心から西側へ約50ｍ離れた位置にあたる（第4図）。当該地番内では過去に、昭和47年の福岡県教育委員会が実施した南小路Ⅰ-9トレンチ、平成12年の道路拡幅工事に伴う調査（1264番地）という2度の調査例がある。

昭和47年に実施された南小路Ⅰ-9トレンチでは、西側でピット群、東側で弥生時代終末期～古墳時代中期の住居跡4基が重複して検出されており、それらに伴ってガラス小玉や鉄器類などが出土している。このトレンチ東側の1・2号住居跡が切りあって確認されている箇所は、今回の調査地点と重複している。

また、平成12年の道路拡幅工事に伴う1264番地の調査では、弥生時代の住居跡1棟、古墳時代の竪穴住居10棟、弥生時代後期の土坑1基、中世溝1条、ピット群などが確認されている。特に古墳時代住居の密集度が高く、焼失したとみられる住居跡も含まれる。

本調査では、まず東隣の454番地との境界に沿って約26ｍ×3ｍの北北西方向に主軸をむける細長のトレンチを設定した。その後、住宅の基礎予定地部分まで調査区を拡大し、結果的に南西側に幅約10.5ｍほど広がって凸形の調査区となった。

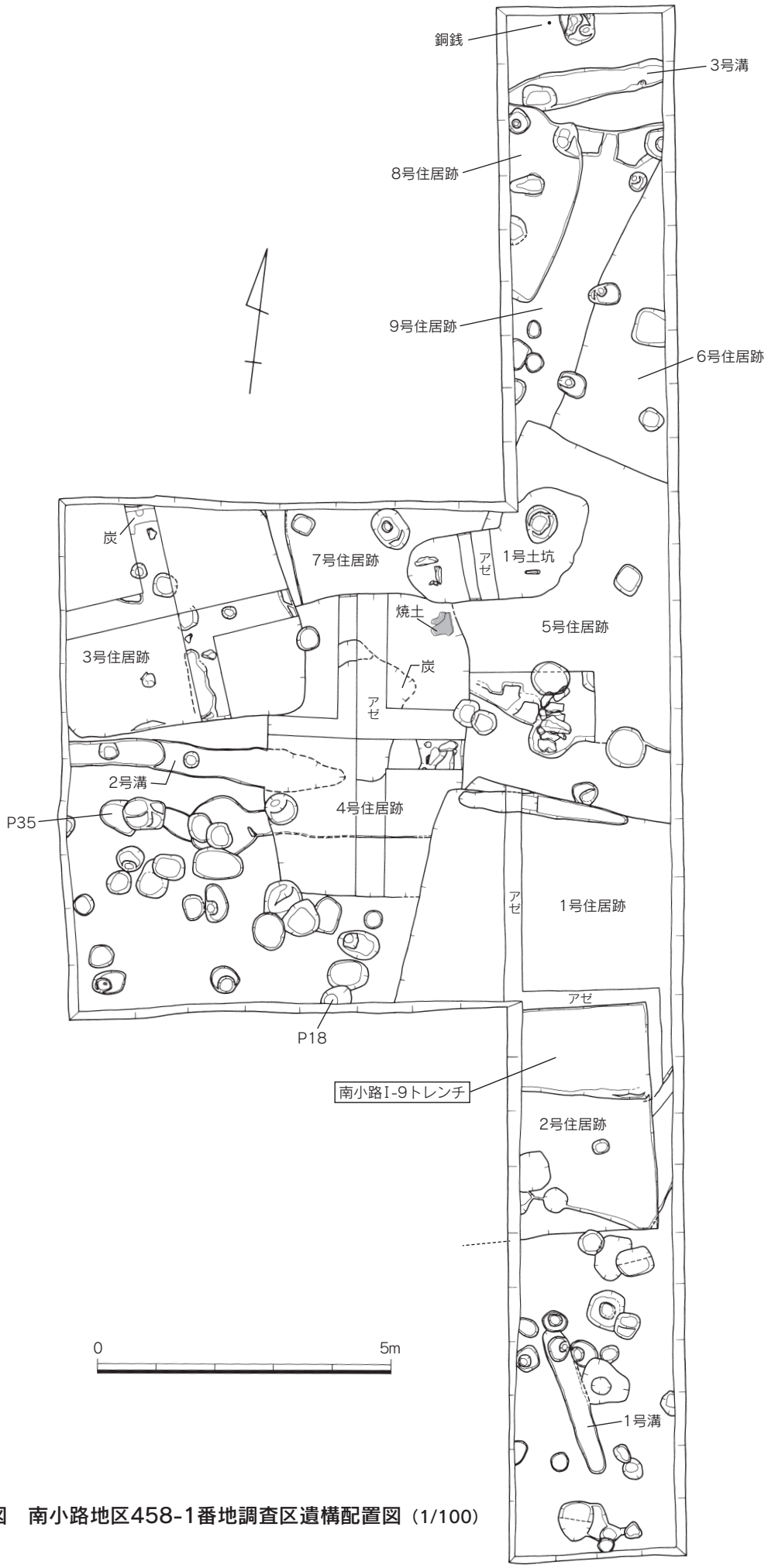
調査は、遺構の全体を検出後、住居跡については土層観察用のベルトを残しつつ、検出面を一段掘り下げ埋土表層付近の遺物を取り上げた。一部の住居跡については、サブトレンチを入れて床面まで掘り下げ遺構の深さを確認した。ピット群については、小型のものについては完掘し、大型のものは検出のみ、または半裁して掘り下げ、土層等の確認を行った。調査期間は平成23年2月1日から3月10日までである。

２．遺構と遺物

遺構の概要（第74図）

調査はまず調査区南側にある南小路Ⅰ-9トレンチの位置の確認から開始し、過去に発見されている1・2号住居跡の一部を確認した。本報告でも1・2号住居跡についてはそのまま遺構番号を踏襲して使用している。ちなみにⅠ-9トレンチで発見されている3号住居跡については、今回の調査でその北西側部分の遺構の続きが伸びていることを想定していたが、遺構はそこまでは広がらないようであり検出されなかった。

結果的に本調査で検出された遺構は、竪穴住居跡9棟（1･2号住居跡を含む）、土坑1基、溝3条、



第74図　南小路地区458-1番地調査区遺構配置図（1/100）

ピット群などである。第74図に遺構配置図を図示する。調査区全体の地山は黄褐色粘質土であり、2号住居跡の南東部付近では一部礫脈の風化層が地山となっている。

竪穴住居跡は、調査区の北西半に複雑に切り合った状況で検出された。南側で検出した1 ～ 4号住居跡は平面プランも明瞭で遺構の識別が容易であったが、北側で検出した6～9号住居は調査区の幅が狭く、遺構の一部の検出に留まっており、その構造や時期等の詳細は不明な点が多い。

遺構の切り合い関係や主軸方向などから先後関係をみると、概ね7・9 号→ 6号 → (2)・5号 → 4号 → 1・3号という北側から南側へ築造が推移したものと考えられる。

先の調査で検出されていた1号住居跡は、5×5m程の規模に復元できる方形住居であることが判明した。北側壁の一部では周溝が検出され、共伴する遺物から古墳時代中期前半の時期に比定できる。この1号住居跡に切られる2号住居跡は、過去の調査成果から古墳時代前期頃のものとみられている。調査区西側角で検出された3号住居跡は、4×4m程の規模に復元できる方形住居で、炭混じりの暗褐色系の埋土であり遺構が明瞭に判別できた。貼床をもち北東側の壁面付近にカマドを構築していたものと考えられる。また、埋土中からほぼ完形に近い土師甕(第75図4)が横向きで出土している。4号住居跡は、3.4×5.1mの規模の長方形プランで1・3号住居跡にそれぞれコーナー部を切られる。一辺の壁際に削り出しのベッド状遺構の一部が確認でき、住居中央付近に炭が集中して確認されている。この4号住居跡や1号土坑に切られる5号住居跡も一辺が4m程度の方形プランとみられる。南壁から突出する石組状の遺構の一部が確認されている。

6～9号住居跡は表層の検出のみでその構造や時期等の詳細は不明な点が多い。7号住居跡は9号住居跡と切り合うとみられるが、先後関係は不明である。8号住居跡は、小型不整形の掘り方を呈しており土坑ともみられたが住居跡としている。2号住居跡の南東及び4号住居南側に概ね弥生～中世頃の所産とみられるピット群が集中するが、掘立柱建物等の復元を想定しうる例はなかった。

出土遺物（第75・76図）

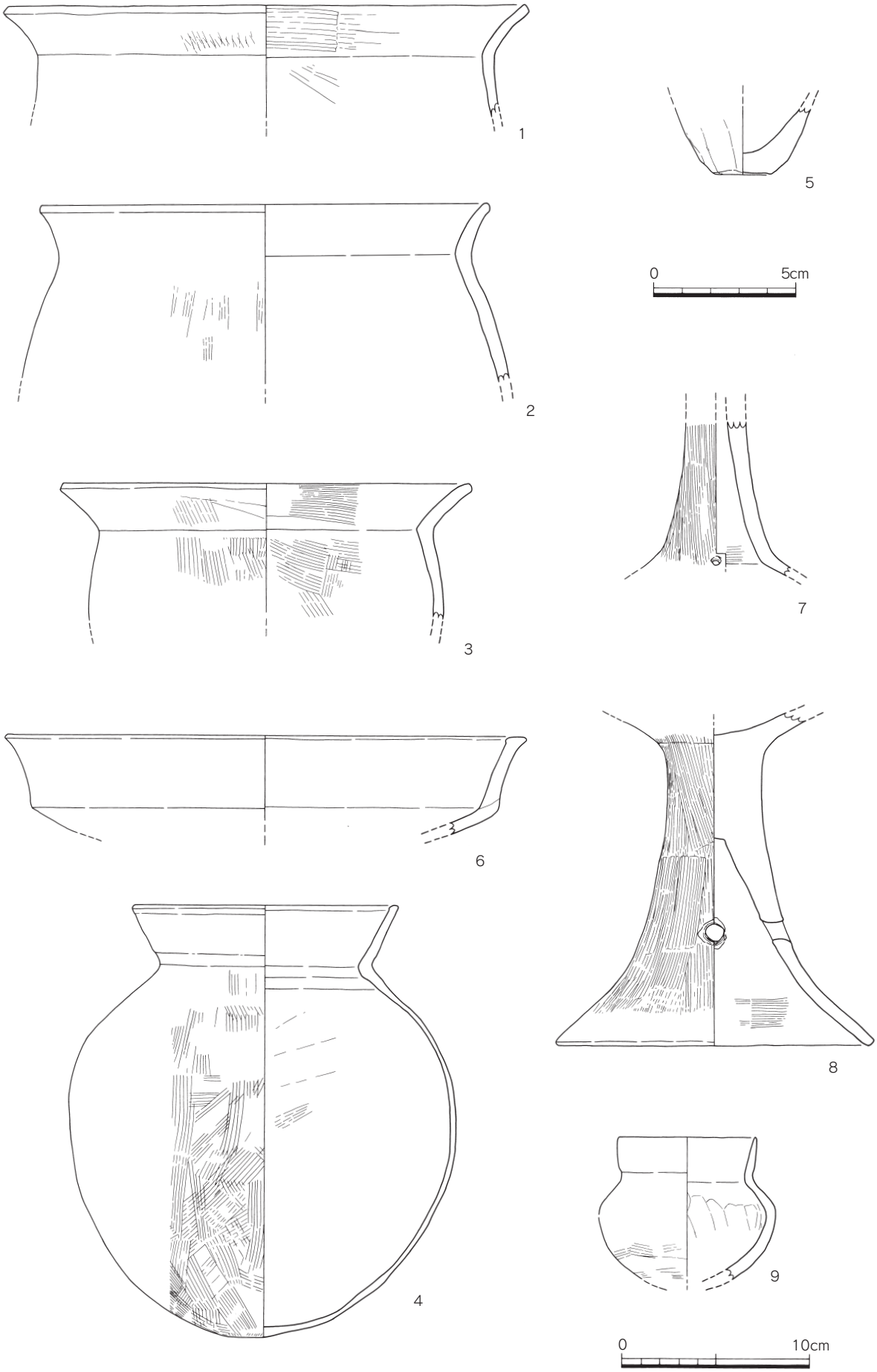
本調査区で出土した遺物のうち、主要なものを第75・76図に図示した。

1は3号住居跡の遺構検出時に出土した甕口縁部である。緩く外側にく字状に湾曲する。色調は内外とも黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。2は4号住居跡の検出面で出土した甕口縁部片。緩く外側にく字状に湾曲し、やや胴が張る。色調は内外とも黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。胴部外面の一部に黒斑がつく。

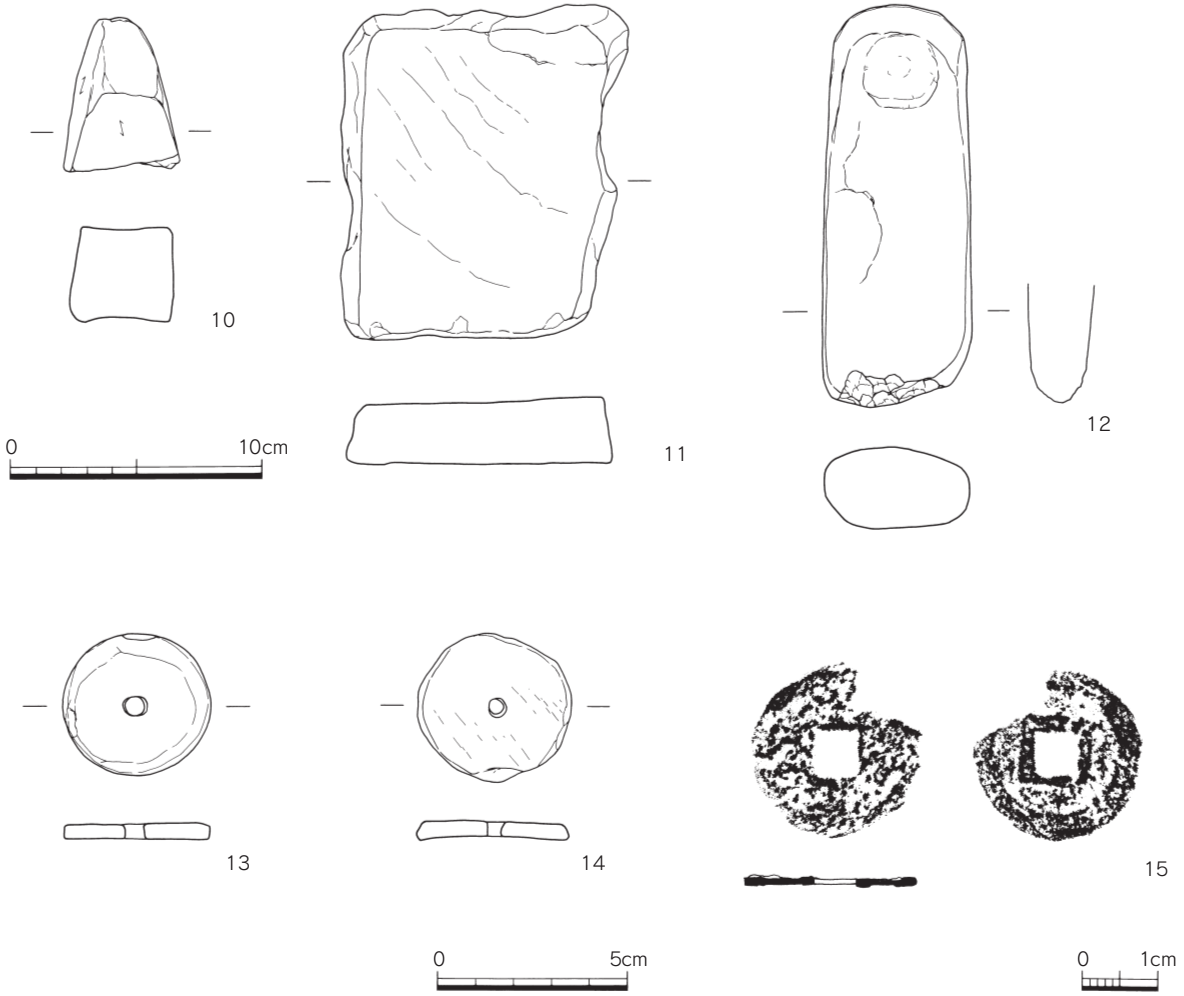
3は8号住居跡検出時に出土の甕口縁部片。外側に開いたく字状口縁をなす。色調は内外とも黄橙褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。

4は3号住居跡の埋土中から横向きになって出土したほぼ完形の甕である。器壁が薄く丸い球体の胴部をなし、口縁部はしっかりしており直線的に立つ。外面は縦・斜め方向のハケメが胴部上位から底部まで施される。口縁付近の内外面は横方向のナデ。胴部内面の調整はヘラケズリがみられる。色調は内外とも黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。胴部外面の一部に黒斑がある。

5は5号住居跡検出時出土の猪口状の小型土器で平底を呈する。色調は内外とも黄褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。



第75図　南小路地区458-1番地調査区出土遺物実測図①（1/3・1/2）



第76図　南小路地区458-1番地調査区出土遺物実測図②（1/3・1/2・1/1）

6は5号住居跡検出時出土の瀬戸内系の特徴をもつ高坏の口縁部片。口縁端部が内側へ丸く肥厚する。胎土に粗砂を多く含み、色調は内外面とも黄橙褐色を呈する。弥生時代後期のもの。

7・8は高坏の脚部片。7は1号土坑検出時に出土したもので、細い脚部で3方向から円孔があけられ、この円孔付近から基部端にかけて屈曲する。外面にハケメ調整。色調は黄橙褐色を呈し、胎土に粗砂が混じる。

8は5号住居跡出土の検出時出土の大型品。器壁が厚く緩やかに開く脚部で、透かしの円孔を3方向に穿つ。脚部外面に縦・斜め方向の顕著なハケメ調整がみられる。内面は横方向のハケメが僅かにみられる。色調は淡黄色褐色を呈し、胎土に粗砂が混じる。弥生時代後期のもの。

9は3号溝埋土中から出土した小坩片で、やや胴上位に張りのある球体体部に先端を丸細くおさめた直線的な口縁が立つ。外面は横方向のハケメ後にナデ調整。色調は内外とも黄橙褐色を呈するが、外面底部付近は煤により黒色化している。胎土に僅かに粗砂が含まれる。

10は3号住居跡検出面出土の砥石片。砂岩製で下半部を欠く。四方側面に擦過痕が残り、断面は四角形を呈する。重さ139.6ｇを測る。

11は8号住居跡検出面出土の扁平な自然礫（割石）を利用した台石。白色のチャート岩を石材と

する。両面とも作業面は平坦で俎板のような用途が考えられる。重さ690.6ｇを測る。

12はP35出土の黒褐色結晶片岩の自然礫を石材とした石斧で、刃部を使用により打ち欠いている。柄の装着部が片面のみ丸く凹んでおり横斧であったとみられる。重さ586.5ｇを測る。

13はP18出土の石製紡錘車。滑石製で周縁のエッジが僅かながら斜めに面取りされている。重さ14.9ｇを測る。

14は5号住居跡検出時に出土した土製紡錘車で、周縁を打ち欠きして丸く仕上げている。断面は薄く僅かに湾曲する。色調は表裏とも明橙褐色を呈する。重さ9.98ｇを測る。

15は3号溝北側の表土剥ぎ時に出土した銅銭で一部を欠損する。方孔円銭で表裏面とも外縁と方孔の周囲に縁が廻る。錆化により銭銘は肉眼では不明であるが、おぼろげながら方孔の上下左右に（四字分の）銭銘があることはみとめられる。厚さは１㎜程で薄く銅質はあまり良好なものとはいえない。全体的に表面はオリーブ色を呈しており、破断面のみ青緑色となっている。残片のみの重さは、1.4gを測る。

３．小結

本調査区では、過去の調査事例も含めて8棟の竪穴住居跡を検出した。調査区の幅が狭く、また遺構の検出に留まっている為、その構造や時期等の詳細については不明な点が多いが、4×4ｍまたは5×5ｍの規模で方形または方形を意識した住居跡が多く、密集度が高いことが窺えた。

遺構検出面に共伴する遺物の大半は古墳時代前期末・中期のもので、これらの集落形成もその時期に比定される。北半部で検出の住居跡埋土中には、弥生時代後期中頃から終末期頃の遺物も散見され、下層に当該期の遺構が存在している可能性が残る。

（河合）

Ⅳ．南小路小路地区470-3番地

１．調査概要

本調査は、三雲南小路470-3番地（地籍面積244.17㎡）で実施した重要遺跡確認調査である。当該地において個人住宅建設の開発案件があり、それを発端として残存する重要遺構の内容確認を目的として行った。遺構の深さ・種類・時期の確認等が調査の本旨であり、遺構の一部については全掘せず検出のみにとどめている。

調査地点は、三雲南小路墳丘墓の中心から北西へ約100ｍ離れ、三雲四組公民館の南隣の位置にある。現地表面の標高は約41ｍを測る（第4図）。

調査地点から西側の道路を挟んだ469番地では、平成10年度の倉庫建築に係る調査で、製鉄に関連するとみられる中世の石組遺構・焼土坑と多数の柱穴群、古墳時代中期の住居跡などが検出されている。また、本調査地点の北に隣接する470-2番地では、昭和56年度の福岡県教育委員会による確認調査、続く平成12年度の公民館建設に伴う事前調査で、弥生時代の祭祀土坑や古墳時代の住居跡、近世の掘立柱建物跡、土壙墓などが検出されており、本調査地点（T1）のすぐ真横で検出された2号住居跡（古墳時代）からは、鋲状銅製品や玉類などが出土している。

本調査では、470-3番地の北西角付近に西側道路と並行する北北西軸のT1（3×7ｍ）、同じく南東側に地籍境界と並行する東北東軸のT2（3×5ｍ）、の二つのトレンチを設定し調査を行った（第4図）。調査期間は平成23年10月27日から11月22日までである。

２．遺構と遺物

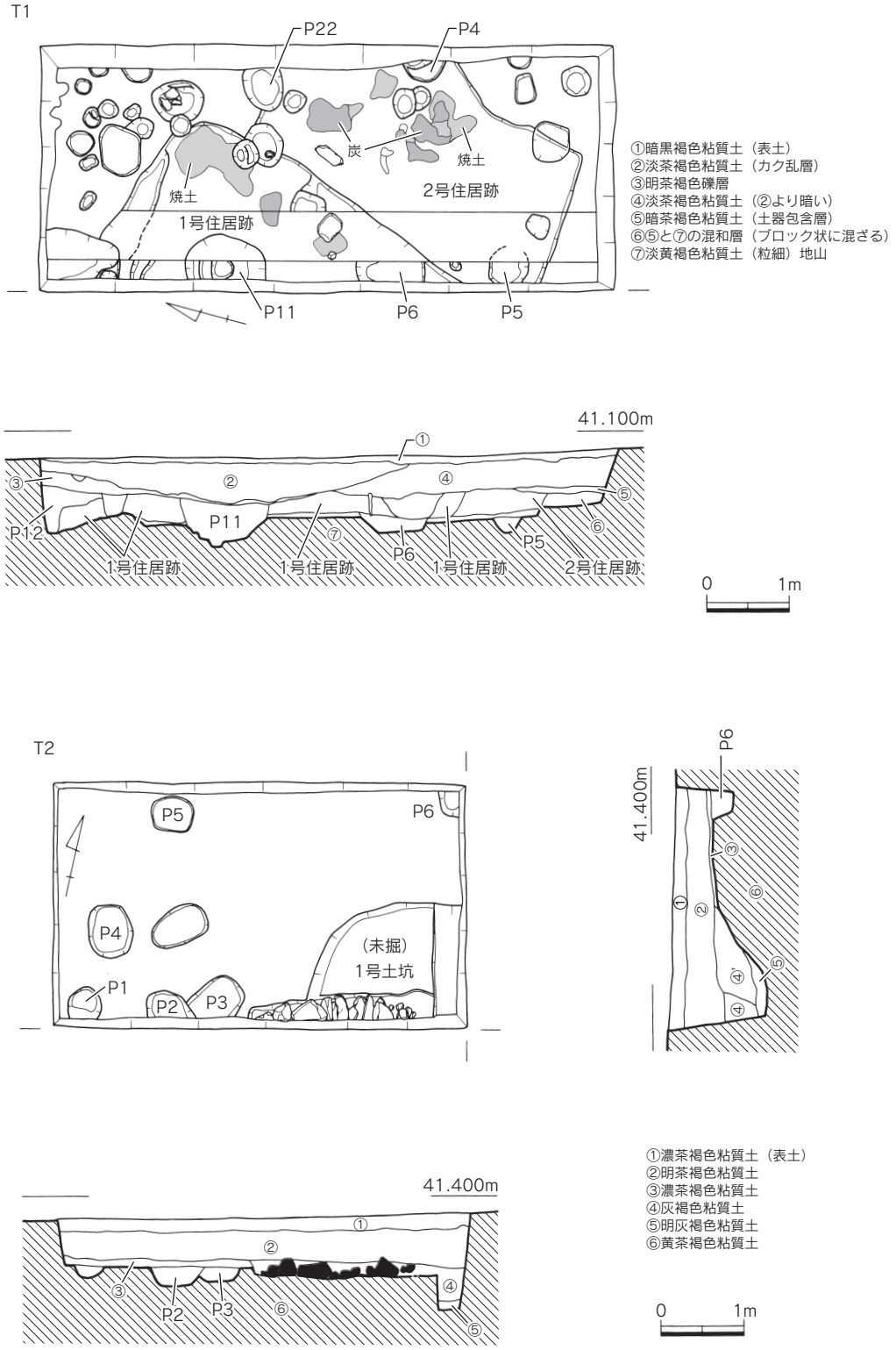
T1（第77図）

470-3番地の北西角付近に西側道路と並行して設定したトレンチである。遺構面は、現地表下から約50㎝で検出された。現地表面は南から北へ下がる緩斜面となっているが、遺構面は、攪乱の為か逆目となって北側のほうがやや高い位置で検出された。

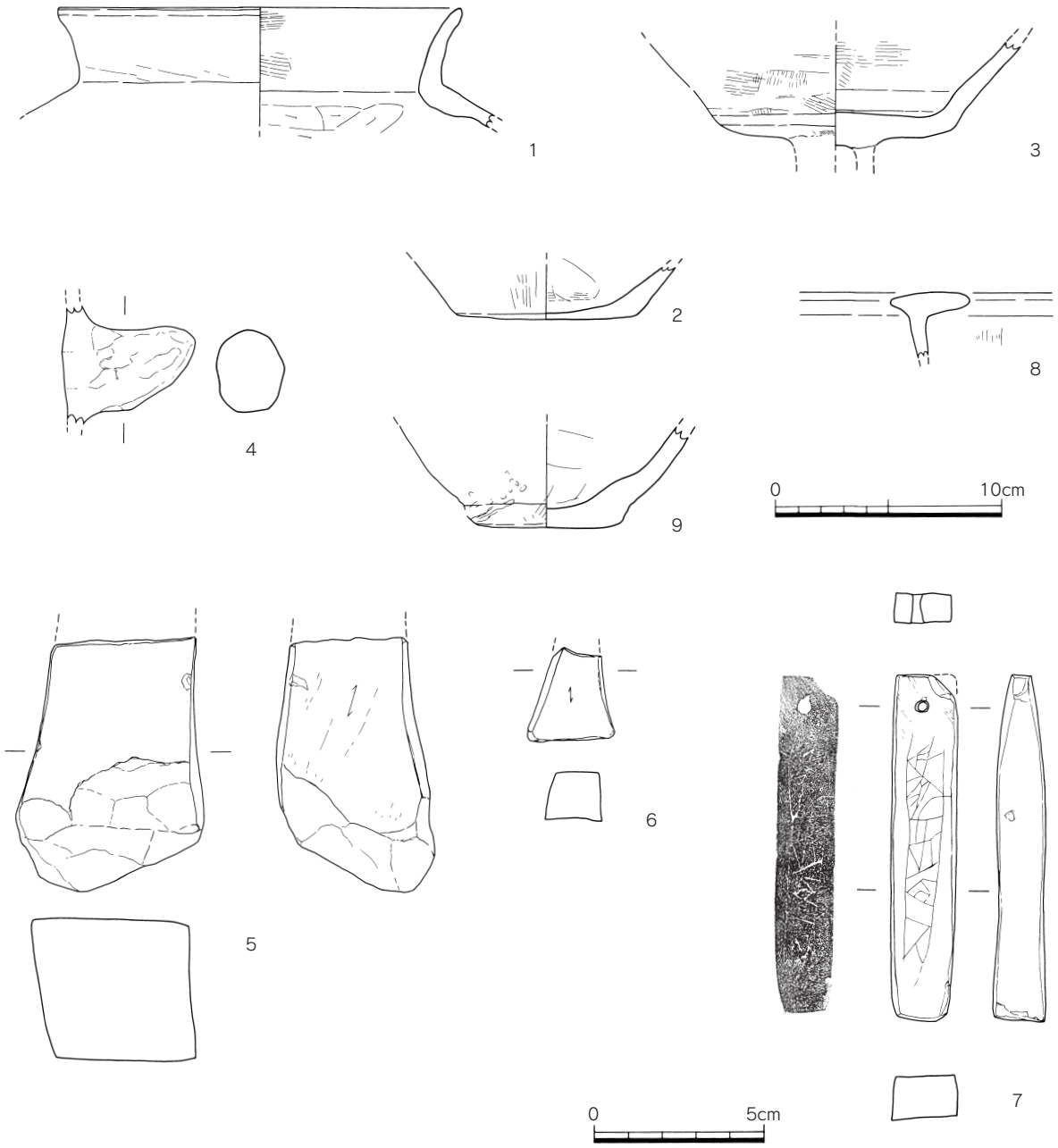
遺構の全体を検出後、西側壁面のみサブトレンチを入れて遺構の深度を確認した。検出遺構のうち、住居跡については土層観察用のベルトを残しつつ、検出面を一段掘り下げ埋土表層付近の遺物を取り上げた。ピット群については、小型のものについては完掘し、大型のものは検出または半裁して掘り下げ、土層の確認を行った。

検出された遺構は、隅丸のコーナー部をもつ方形住居跡2基(古墳時代中期)とピット群である。2基の住居跡は、全体を確認できた訳ではないが、主軸の向きがほぼ同じで、いずれも地床上に貼床状の整地層が確認されており、同一の設計原理に基づき連続して構築された可能性が考えられる。

1・2号住居跡のいずれも東壁面側に埋土に焼土塊や炭・礫石が集中する箇所があり、カマドあるいは何らかの焼成遺構を付設していた可能性が高いとみられ、また、埋土の出土遺物中に砥石類が多く含まれている点が注目され、工房などの用途が想定される。



第77図　南小路地区470-3番地トレンチ遺構配置図・土層図（1/80）



第78図　南小路地区470-3番地出土遺物実測図（1/3・1/2）

出土遺物（第78図1～7）

1～3は1・2号住居跡の遺構検出時に出土したもの。1は甕口縁片。器壁が厚めでやや外湾しながら口縁が開く。胎土に粗砂を含み、色調は内外面とも橙褐色を呈する。2は薄い平底の底部片で、胴部へ膨らみ気味に立ち上がる。胎土に粗砂を含み、色調は内外面とも橙褐色を呈する。

3は高坏の坏部片。口縁端部と脚部を欠く。胎土は精良の土師質で、色調は内外面とも明橙褐色。4はＰ22出土の甑の把手片である。色調は内外面とも明橙褐色を呈する。

5～7は砥石類で大きさ・形態が各種異なっている。5・6は1号住居跡の埋土中から出土。5は荒砥に使用したとみられる大型のもので上半を欠失、下端部も打ち欠かれている。砂岩製で四方の側

縁の面に斜め・縦方向の擦過痕が残る。重さ866.0ｇを測る。6は白色の凝灰岩を石材とする小型砥石で上半部を欠失し四角錐台状に残る。重さ17.2ｇを測る。

7は、P4から出土した四角柱状を呈する定形砥石で一片の端部を欠く。重さ60.3ｇ。石材は頁岩とみられ、上部に両面穿孔により孔を穿ち、当初は携帯用の仕上砥として使用されていたとみられる。片面に線刻による直弧文様の文様帯が施されており、この文様は2本の並行する線の間に直線と弧線により三角・台形など複雑に刻まれる。砥石の上部、穿孔部分付近に砥石使用時の擦痕が観察できるが、文様帯付近には擦痕がみられないことから、砥石から転用後に線刻面を整えた後、線刻を施し装身具へと転用したものと推察される。

T2（第77図）

470-3番地の南東角に設定したトレンチで地籍境界と並行する東北東に軸をむける。現地表面は南から北へ下がる緩斜面となっており、現地表下から約60㎝で礫脈が風化した黄茶褐色粘質土の地山層に形成された遺構面を検出した。

検出遺構は、ピット群と土坑1基を確認した。ピット類については完掘し、土坑については完掘せずサブトレンチによる土層及び遺構の深さの確認のみを行った。

検出されたピット群は、上部を削平されており全体的に浅く残りが悪い。埋土中に僅かながら弥生時代中期頃の土器片を含んでいることを確認した。

南東角で検出した石組みを伴う１号土坑は、埋土中に近・現代の瓦片が含まれており古い時期の遺構ではないことが確認された。この遺構の埋土は湧水を伴う泥質土であり地籍の境界線と遺構の主軸とが並行している点などから、用水路等の一部を埋め戻したものと推察される。

出土遺物（第78図8・9）

8はP4の出土のＬ字状に外側に張り出す甕の口縁部片。器面の外面にハケメ、内面はナデ調整を施す。胎土に粗砂を含み、色調は内外面とも淡褐色を呈する。9は検出時出土の甕底部片でやや厚みのある平底で胴部へ膨らみ気味に立ち上がる。底部の立ち上がりの外表面に工具痕がつく。胎土に粗砂を含み、色調は内外面とも橙褐色を呈する。

３．小結

T1では、検出された2基の住居跡は、出土遺物から古墳時代中期の所産とみられ、いずれの住居跡も埋土に焼土塊や炭・礫石が集中し、何らかの焼成遺構を付設していた可能性が高いと考えられる。砥石の出土が集中している点も注目され、これまでの周辺の調査事例なども鑑みた場合、金属器などの再加工・調整などを行う工房が周辺域に存在していた可能性が想起される。

T2については特筆すべき調査成果は得られなかったが、弥生時代中期のピット群が検出されていることから、同地点の南側にも同時期の遺構が広がっていた可能性がある。

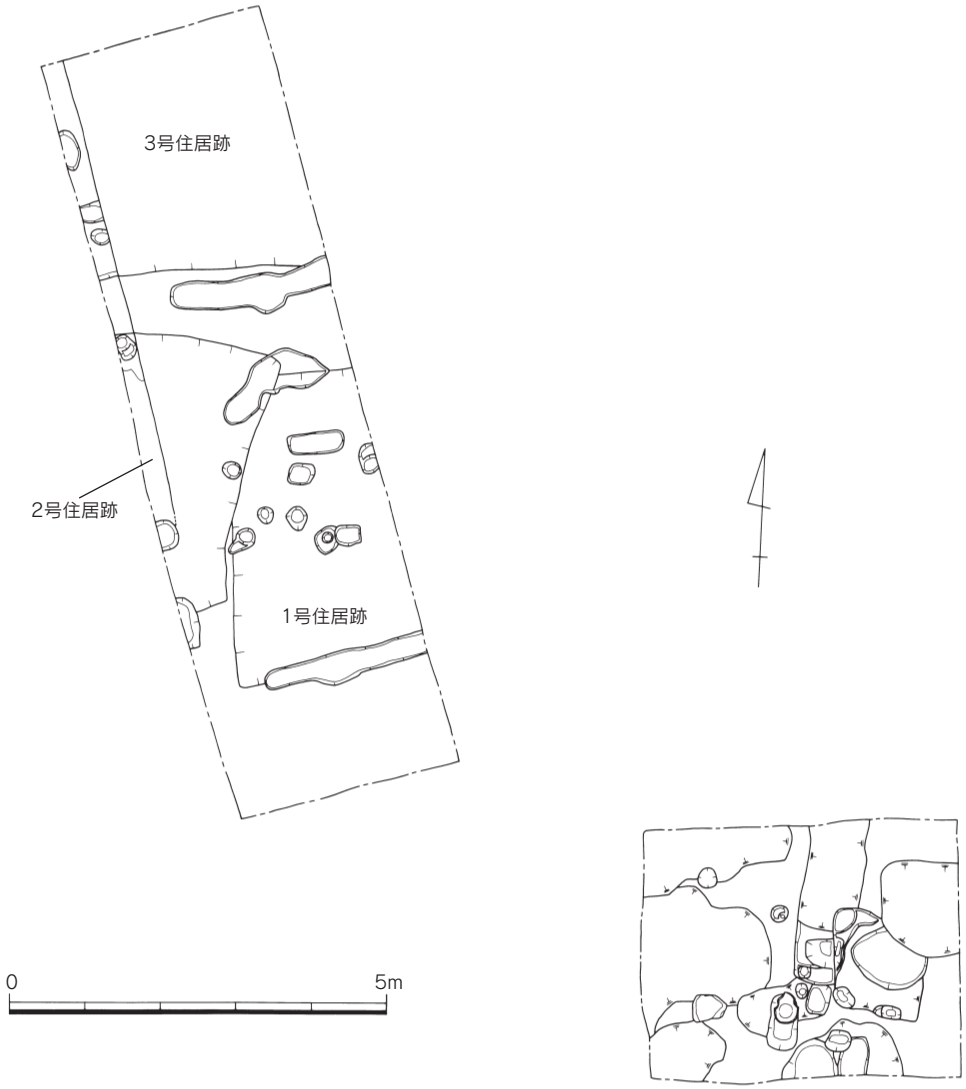
（河合）

Ⅴ．屋敷地区486番地

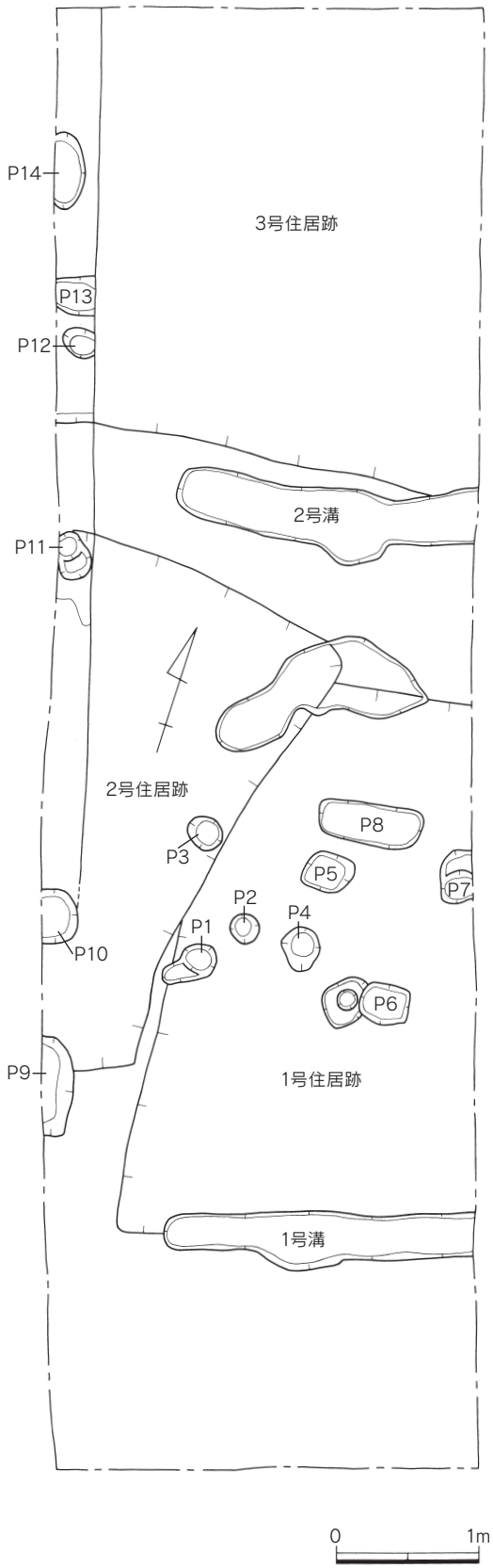
1．調査概要

屋敷地区486番地の調査は、個人住宅建設に伴い実施し、遺構面の深さおよび遺構の内容の確認を目的とした。その結果、現地表面下20～30㎝で遺構面を確認できたため、建物の基礎が遺構を壊さないような基礎の形状へと変更を依頼し、了承された。

調査区は東西2ヶ所に設定した（第79図）。東側調査区では以前建物が建てられていたため撹乱が多く、ピットが確認されたのみであったが、西側調査区では住居跡およびピットが確認された。



第79図　三雲・井原遺跡屋敷地区486番地調査区配置図（1/100）



第80図　西側調査区全体図（1/50）

2．遺構と遺物

（1）住居跡（第80図）

1号住居跡

西側調査区の南側で確認された方形住居で全体の1/2程度が確認された。その西側を2号住居跡に切られる。トレンチ等を設定していないため、遺構の深さや出土遺物は確認されていない。

2号住居跡

西側調査区の中央部分で確認された方形住居で1号住居跡を切る。西側にトレンチを設定したところ、15㎝ほどで床面に達し、焼土とピットが確認された。

出土遺物（第82図1）

1は高坏と思われる脚部の小片である。脚径は16.8㎝に復元された。脚端部は面をもち、内外面ともにハケメを施す。

3号住居跡

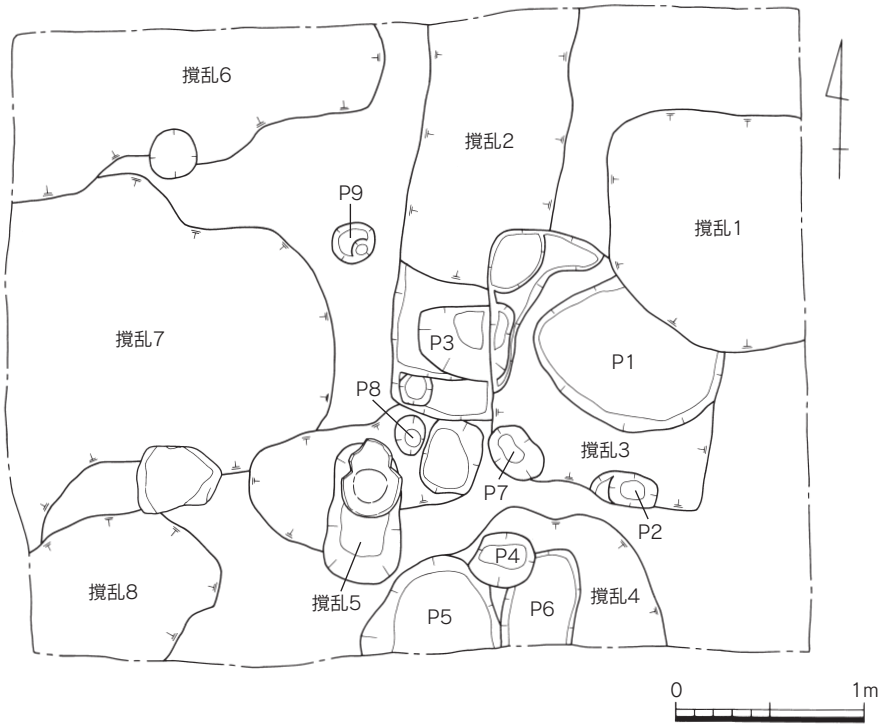
西側調査区の北側で確認された方形住居である。検出面から15㎝ほど下が床面である。

出土遺物（第82図2）

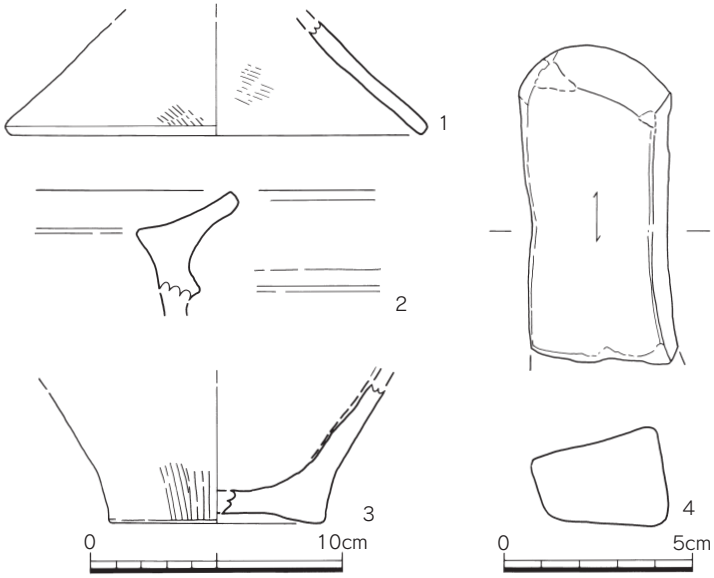
2は受け部をもつやや大型の甕の口縁部片である。小片のため径は復元できないがやや内彎する口縁の下に三角突帯を巡らせる。

（2）その他の遺物

第82図3は西側調査区のピット9から出土した甕の底部である。やや上げ底で外面にハケメを施す。4はピット4から出土した砥石である。平面長方形で長軸側の4側面すべて砥石として用いられる。



第81図　東側調査区全体図（1/40）



第82図　住居跡・ピット出土遺物実測図（1/2・1/3）

Ⅵ．南小路地区461番地

1．調査の概要

近年、糸島市教育委員会では三雲・井原遺跡の広がりを確認する発掘調査を継続している。平成24年度は461番地の調査を実施し、遺跡の西端部確認のため、調査区を西側に設けた。しかし、結果的には調査区の西の端まで遺構面が広がっており、今後、西に隣接する地点の調査が必要であることが確認された。

本調査区では古墳時代前期末頃に埋没した大溝1条、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡7軒、土坑6基等の調査を行った。とくに大溝については、検出当初、弥生時代の環濠の可能性も考えたが、トレンチ調査の結果、最下層にまで古墳時代前期後半の土師器が入っていることが確認されたため、現在は水路と判断している。

2．遺構と遺物

（1）大溝

大溝は調査区の南北方向に斜交する形で検出され、調査区内で29mが確認された。溝の方向性や埋没時の状況を確認するためにトレンチを4ヶ所設定し、南側から順にトレンチ1～4とした。その結果、溝の幅は3.8～5.0mを測り、削られた部分が少ないと思われる北側の幅が広くなっている。深さは検出面より1.0～1.1mを測り、断面台形を呈する。なお、近くに展開する住居跡も検出面から数㎝～10㎝程度で床面に達するものが多く、本来は幅、深さともにより大きなものであったことが想定される。また、溝の底の標高は、最南端のトレンチ1で40.68m、最北端のトレンチ4で40.20mであり、北に向かって2%の勾配で傾斜している。

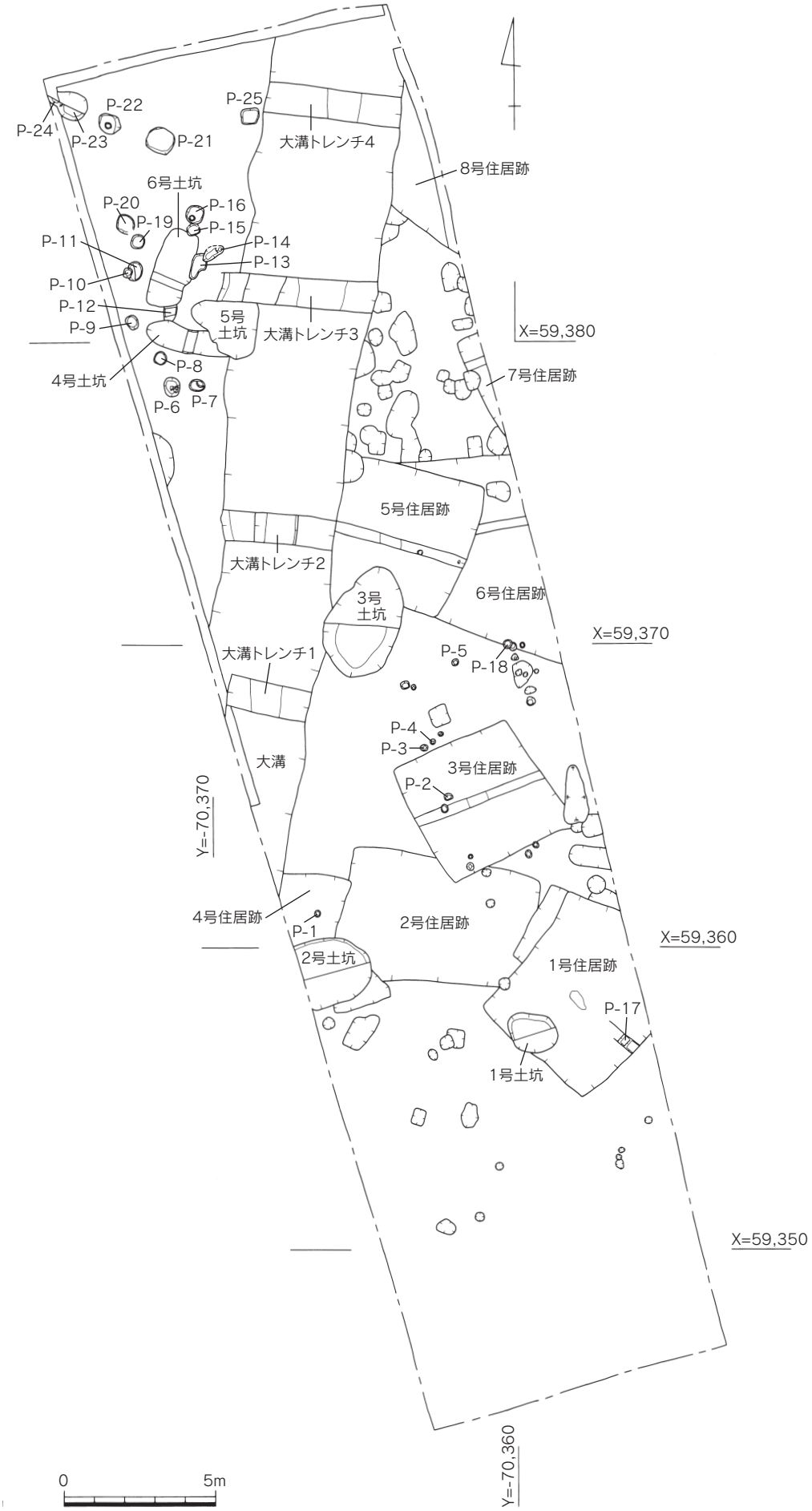
トレンチ1（第84図1）

トレンチ1では1層の灰褐色土層とブロック状に入る部分のみ土質が多く、それ以外の層は砂質土からなる。底に近い9層は礫を含むにぶい青灰砂層で、10層は細かい青灰細砂層からなり、最下層の11層は砂礫層となる。このことから、大溝は水路として用いられたと考えられる。なお、11層から古墳時代前期後半の小型の無頸壺と高坏が出土し、使用時期の一点が確認できる。地山は黄橙色土でやや粘質のものである。

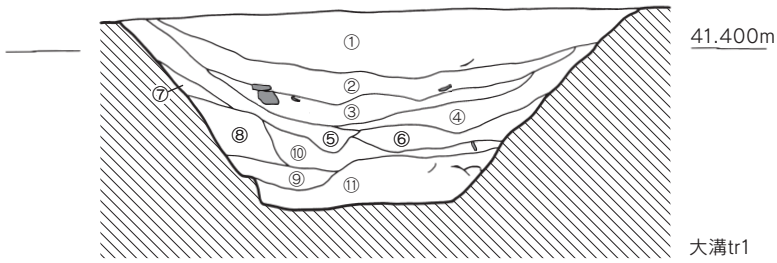
トレンチ1出土遺物（第85図・第96図5）

第85図1～3は壺である。1は最下層である砂礫層から出土した大型の壺である。口縁端部は強い横ナデにより断面M字形とし、その上・下端部にヘラ状工具で刻目を施す。2はやや粗い黄色砂層から出土した壺の底部である。底部中央を欠くが平底に復元される。内面は剥離で調整不明、外面にはナデを施す。3は砂礫層から出土した壺の底部である。平底で大きく外傾しながら立ち上がる。

4～8は甕である。4は灰褐色土層出土の甕の上半部である。張りの弱い胴部に小さく外傾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。頸部はしまり、明瞭な稜がはいる。外面は縦ハケ、内面は横ハケと縦ナデを施す。5は甕の上半部で、小さく外傾する口縁部をもち、端部を丸くおさめ

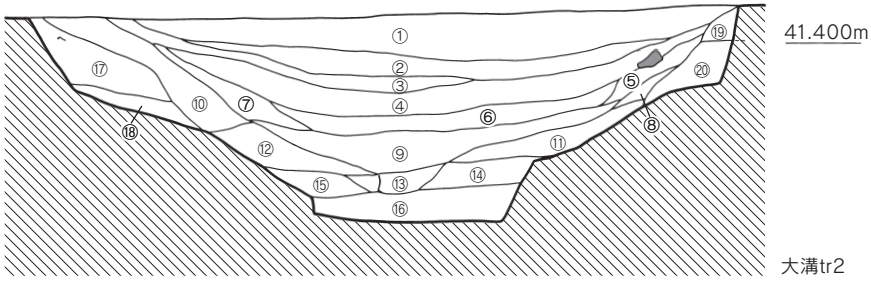


第83図　三雲・井原遺跡南小路地区461番地全体図（1/200）



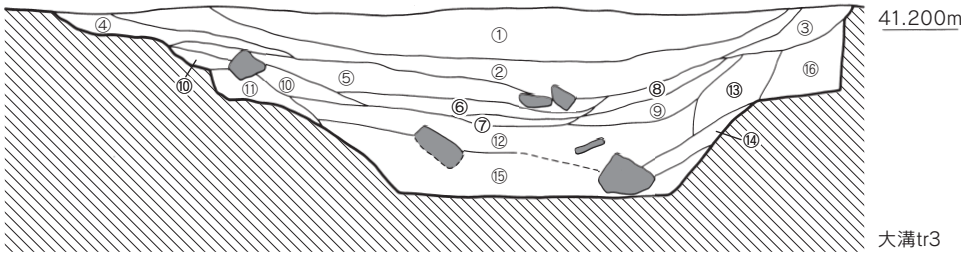
①灰褐色土層(下層は褐色土)
②オリーブ褐色砂質土
③オリーブ褐色細砂質土
④にぶい灰褐色砂質土
⑤暗灰褐色土層(砂少混)
⑥黄色砂層(やや粗い)
⑦にぶい黄褐色土層
⑧黄褐色+オリーブ褐色土層
⑨にぶい青灰砂層(礫少含)
⑩青灰細砂層
⑪砂礫層

1



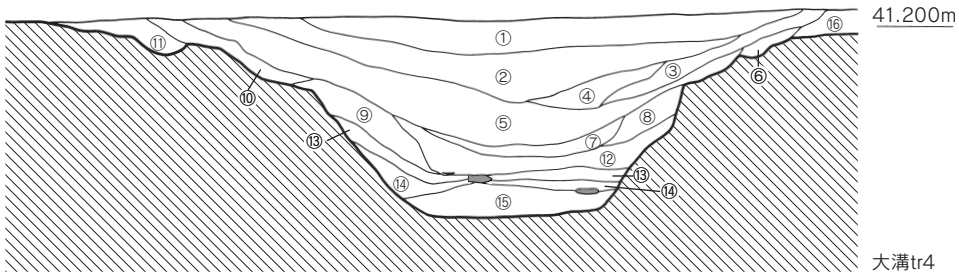
①灰褐色土層
②褐色土
③暗灰褐色土層
④オリーブ褐色砂質土
⑤暗褐色土
⑥オリーブ灰褐色細砂質土
⑦にぶい灰褐色砂質土
⑧灰黄褐色土
⑨にぶい青灰砂質土
⑩暗灰褐色土
⑪にぶい青灰砂質土(砂質が多い)
⑫にぶい青灰砂質土(灰色味が強い)
⑬青灰粘質土
⑭黄灰砂
⑮黄灰砂
⑯砂礫層
⑰茶褐色土
⑱暗茶褐色土
⑲茶褐色土(住居埋土)
⑳黄色褐色土+褐色土(地山か)

2



①灰褐色土層
②オリーブ褐色砂質土(砂少)
③淡オリーブ褐色砂質土
④オリーブ褐色土
⑤褐色土(遺物が多い)
⑥オリーブ褐色砂質土
⑦淡褐色土
⑧オリーブ褐色砂質土(土が多い)
⑨淡褐色土層(7より淡い)
⑩オリーブ褐色土+オリーブ砂質土
⑪オリーブ褐色土
⑫オリーブ灰砂質土(砂が大半)
⑬褐色+オリーブ褐色土層
⑭褐色土ブロック+オリーブ褐色砂質土
⑮石礫層(拳～人頭大の石多い。)
⑯地山(黄褐色土)

3

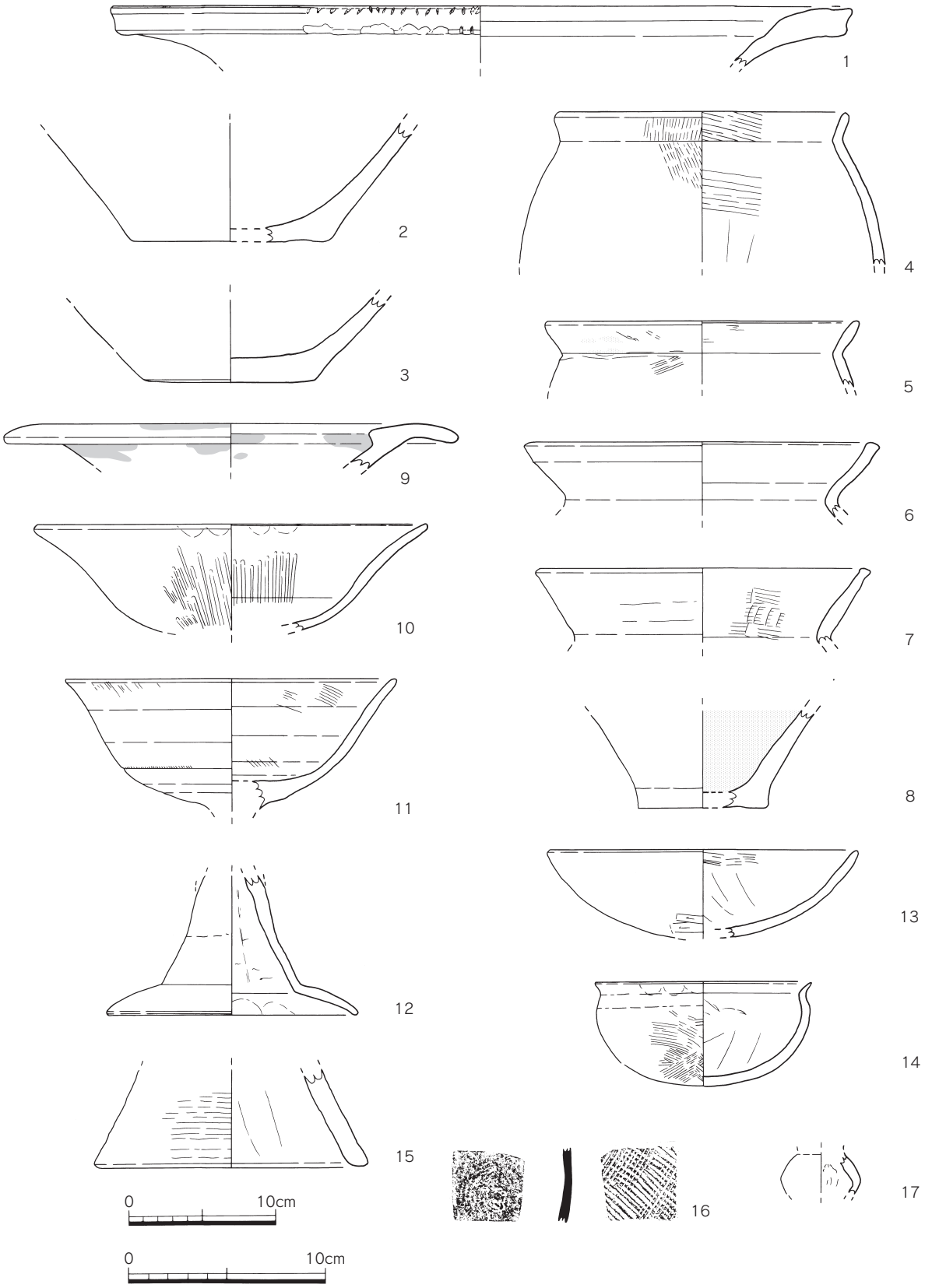


①灰褐色土
②褐色土(遺物が多い)
③暗褐色土(遺物が多い)
④オリーブ褐色砂質土(土が多い)
⑤オリーブ褐色砂質土(1：1)
⑥オリーブ褐色土
⑦灰褐色土
⑧暗褐色土
⑨暗褐色土
⑩灰黄褐色土
⑪オリーブ褐色土
⑫オリーブ灰砂質土(砂多い)
⑬オリーブ灰砂質土(1：1)
⑭灰褐色土(やや粘質)
⑮砂礫層
⑯灰褐色土(別遺構)

4

0　1m

第84図　大溝土層断面図（1/40）



第85図　大溝トレンチ1出土遺物実測図（1/3・1/4）

る。頸部のしまりは強く稜がはいる。内外面ともに横ハケとナデを施す。6は砂礫層から出土した甕の口縁部である。丸みをもつ口縁で、端部に面をもつ。7も砂礫層出土の甕で、直線的に外傾す

る口縁部をもつ。口縁端部は面をとる。外面は横ナデ、内面は横ハケを施す。8は灰褐色土層から出土した甕の底部である。底部中央を欠くが、平底に復元される。内外面ともにナデが施される。内面にはススが付着する。

9～12は高坏である。9は灰褐色土層から出土した高坏の口縁部である。口縁はやや跳ね上げ気味である。内外面ともに丹塗りである。10はオリーブ褐色砂質土から出土した高坏の坏部である。屈曲部が不明瞭で、外反部分が長くなる。口縁端部は面をとり、内外面ともにナデと縦方向の暗文状の縦ミガキを施す。11も高坏の坏部である。10で見られたミガキはなくなり、内外面ともにナデとハケを施す。口径がやや小さくなり、坏部が深化する。口縁端部は丸くおさめる。12はオリーブ褐色砂質土から出土した高坏脚部である。ハ字状に広がる脚柱部に丸みをもつ脚裾部が伴う。裾端部は小さく面をとる。外面はミガキ状のナデ、脚柱部の内面は板ナデを施す。

13・14は鉢である。13は浅い鉢で、底部を欠くがおそらく丸底になると思われる。外面底部付近はヘラケズリ、それ以外はナデを施し、内面は横ハケとナデを施す。14は完形に復元される小型の鉢である。半球状の胴部に小さな口縁が伴う。胴部外面は横ハケ、内面はナデを施す。

15は灰褐色土層から出土した器台下半部である。外面は横タタキ、内面はナデを施す。

16はオリーブ褐色砂質土から出土した瓦質土器片である。外面にタタキ、内面は当具痕をナデ消している。

17はミニチュア土器である。口縁部と底部を欠くが壺を模したものと思われる。

第96図5は敲石である。下面は敲痕を多くのこし、もち手はグリップ状の形態を示す。

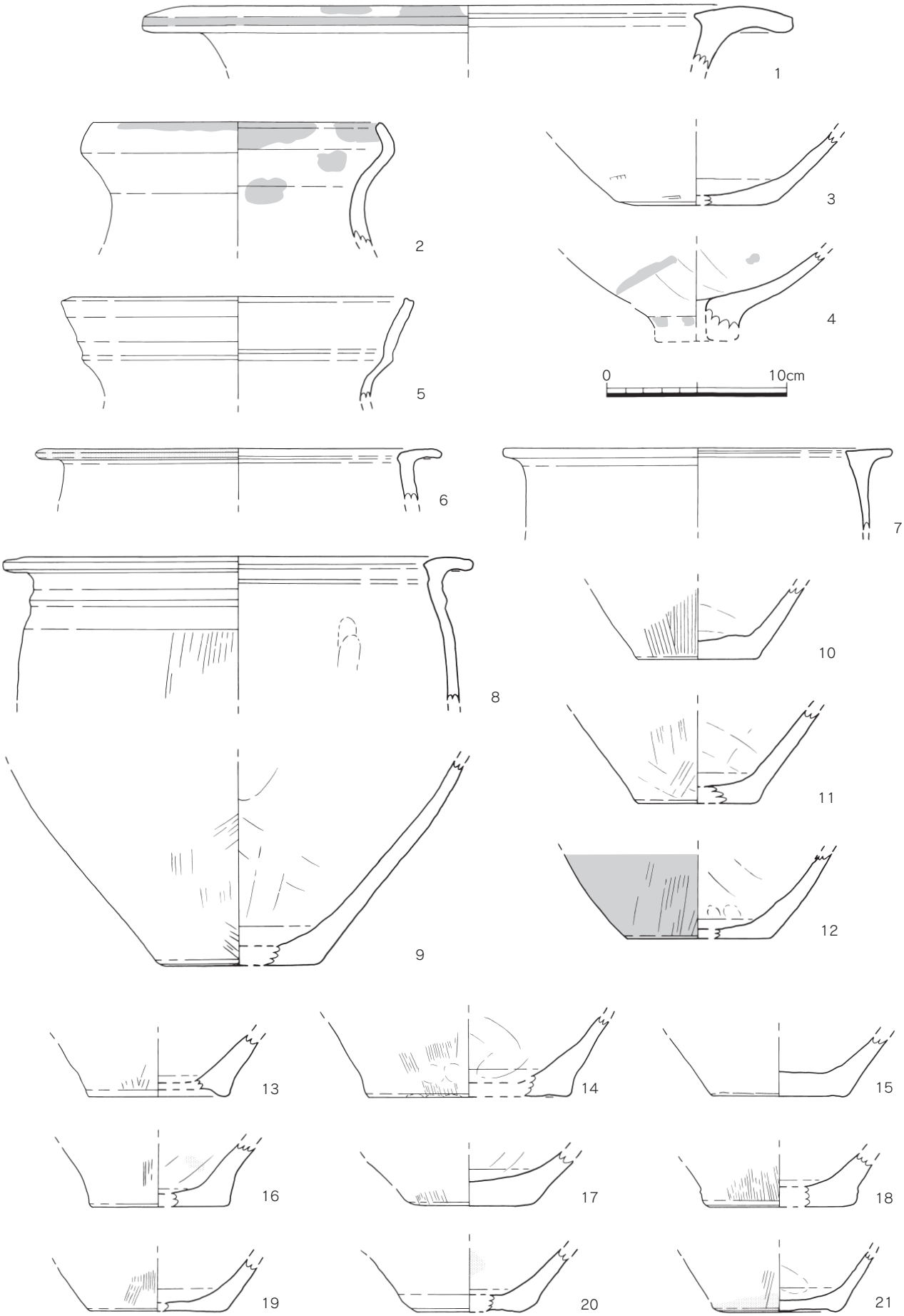
トレンチ2（第84図2）

トレンチ2では、大溝が5号住居跡を切る形で開削されていることと、一度埋没した後に掘り直されていることを確認した。土層は基本的にレンズ状堆積であることから最終的には自然に埋没したものと思われる。トレンチ１と同様に最下層である16層は砂礫層である。その16層を切り込む13層は青灰粘質土で、弥生時代中期後半の甕の上半部が出土した（第86図8）。

トレンチ2出土遺物（第86～88図、第96図1，2，6，7）

第86図1～5は壺である。1は検出面から20～30㎝下にある灰褐色土層から出土した大型の鋤先口縁壺で、跳ね上げ気味の口縁部で端部は面をとる。外面から口縁部上面まで丹塗りを施す。2も灰褐色土層から出土した複合口縁壺である。口縁部はやや丸みをもつが、屈曲部には稜が入り、頸部のしまりはない。3は壺の底部で、平底から断面凸レンズ状の底部への移行段階のものである。底部からの立ち上がりもやや直線的である。4は灰褐色土層から出土した底部付近の土器である。底部中央には焼成前の穿孔が施されている。内外面ともにナデを施す。5は検出面から40～60㎝下にあるオリーブ褐色砂質土から出土した二重口縁壺である。緩くしまる頸部から口縁部に向かって開きながら立ち上がるもので、口縁端部はナデによりくぼむ。

6～21は甕である。6は灰褐色土層から出土した甕の上半部で、ゆるく跳ね上げる口縁部をもつ。内面の突出は小さい。7も灰褐色土層から出土した甕の口縁部で、平坦部はほぼ水平である。口縁部は肉厚であるが、胴部は薄く仕上げる。8は大溝トレンチ2の土層断面図（第84図2）の13層である青灰粘質土層から逆さまの状態で確認された甕の上半部の破片である。口縁はやや跳ね上



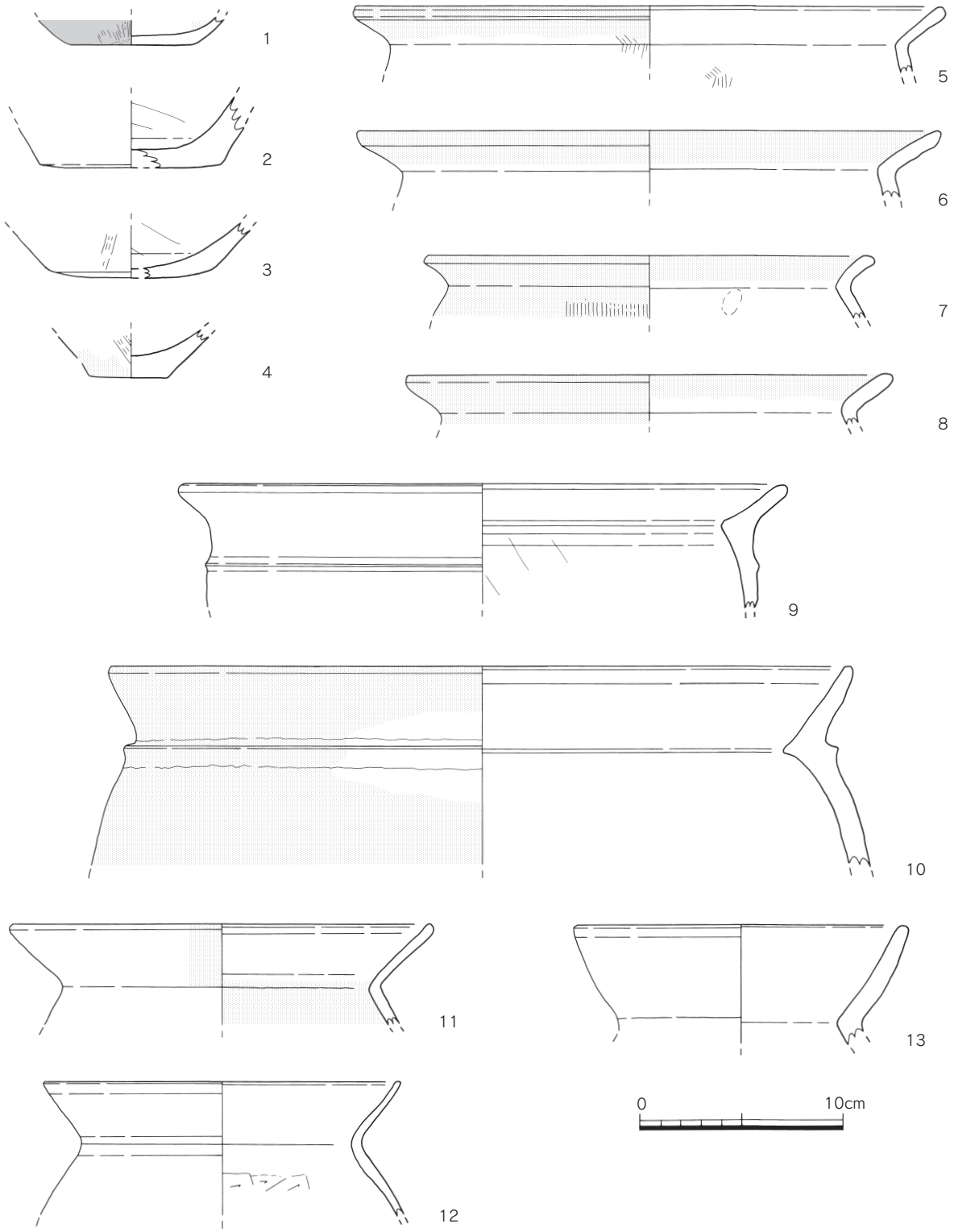
第86図　大溝トレンチ2出土遺物実測図①（1/3）

げ気味に広がり、口縁端部は面をとる。口縁の下には低い三角突帯を巡らし、その下に縦ハケを施す。内面はナデである。9は甕の下半部である。底部中央を欠くが、平底に復元される。外面にハケメを残し、内面はナデを施す。10は灰褐色土層から出土した平底の底部である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。11も灰褐色土層から出土した底部である。底部中央を欠くが平底に復元される。外面にハケメを残し、内面にナデを施す。12も灰褐色土層から出土した底部である。底部中央を欠くが、平底に復元される。底部から胴部に向かって丸みをもちつつ立ち上がる。13は灰褐色土層から出土した甕の底部で、中央を欠くが上底気味に復元される。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。14は甕の底部で、中央を欠くが平底に復元される。外面は縦ハケで、内面はナデを施す。底径がやや大きい。15はオリーブ褐色砂質土層から出土した甕の底部で、平底である。外面はナデを施し、内面は器表面が剥離している。16は灰褐色土層から出土した甕の底部である。中央を欠くが平底に復元される。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。底部から一旦直立気味に立ち上がる。17も灰褐色土層から出土した甕の底部である。断面形は凸レンズ状に近く不安定な形状である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。18は検出面から60～80㎝下に位置するにぶい青灰砂質土から出土した甕の底部である。底部中央を欠くが平底に復元される。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。19は灰褐色土層から出土した甕の底部である。底部中央を欠くが、なお、平底に復元される。底部の器壁は薄い。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。20は底部中央を欠くが、平底に復元される甕の底部である。21は平底の底部で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

第87図1～4は甕の底部である。1は褐色土層から出土した底部で、外面は縦ハケ、内面はナデを施す。外面は丹塗りである。2は底部中央を欠くが、平底に復元されるものである。内外面ともにナデを施す。3は褐色土層から出土した甕の底部で、底部中央を欠くが断面凸レンズ状に復元される。外面は斜ハケ、内面はナデを施す。4は褐色土層から出土した小型の甕の底部である。平底を呈し、外面は斜ハケ、内面はナデを施す。

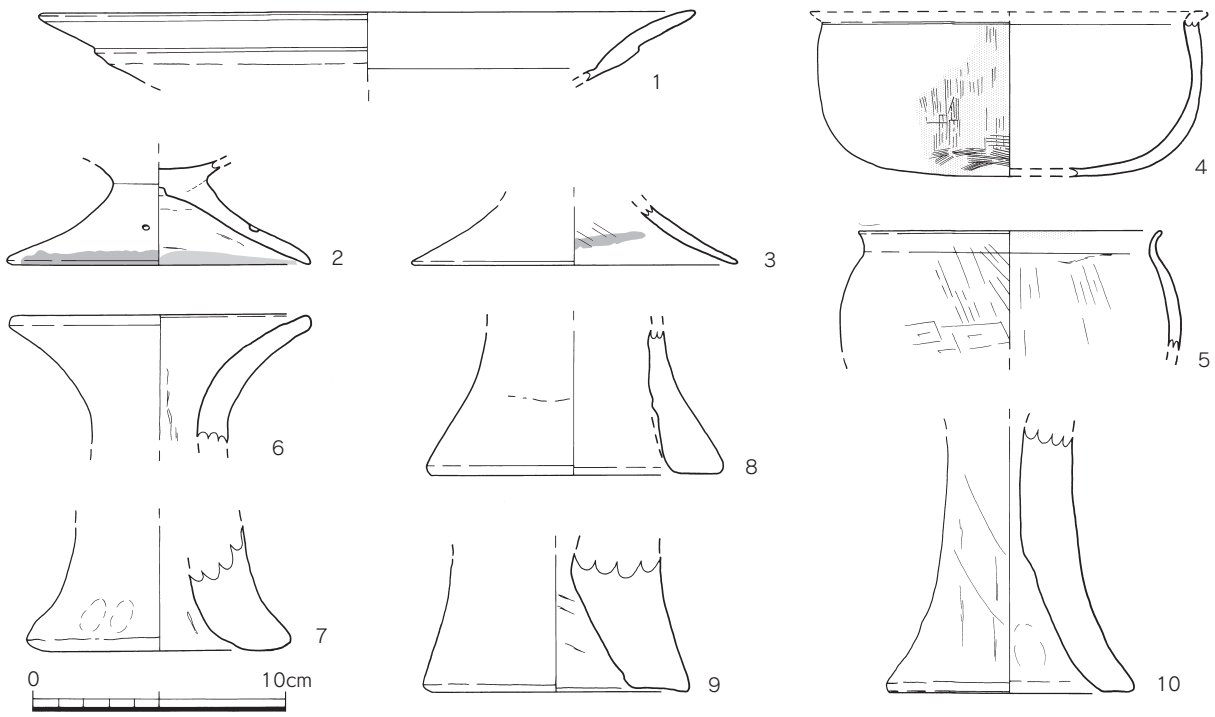
5～10は甕の口縁部である。5は褐色土層から出土した甕の口縁部である。口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。内外面ともに縦ハケを施す。頸部はしまり、明瞭な稜がはいる。6も褐色土層から出土した甕の口縁部で、断面がく字形を呈する。端部は面をとる。内外面ともにナデを施す。7は砂礫層から出土した甕の口縁部で、断面はく字形を呈し、頸部に明瞭な稜がはいる。口縁端部は丸くおさめる。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。8は褐色土層から出土した甕の口縁部で、やや肉厚である。口縁端部は丸くおさめる。9は大型の甕で、受け部状に立ち上がる口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめ、口縁下に小さな三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。10も大型の甕で、受け部状の口縁を呈する。内部の突出がつよい。口縁下には三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデを施す。

11～13は土師器甕の口縁部である。11はオリーブ灰褐色細砂質土から出土した甕の上半部で、口縁端部を小さくつまみ上げる。器壁は薄く、胴部内面にケズリを施す。12はにぶい青灰砂質土から出土した甕の上半部である。丸みをもつ口縁部で、端部に面をとる。外面と口縁部内面は横ナデを施し、胴部内面はヘラケズリを施す。13はやや肉厚の口縁部で砂礫層から出土した。口縁端部は丸くおさめ、頸部に弱い稜がはいる。



第87図　大溝トレンチ2出土遺物実測図②（1/3）

第88図1はにぶい青灰砂質土層から出土した高坏の口縁部である。坏部中位に段をもつが、その後直線的に口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。2は高坏の脚部で短脚である。脚端部は丸くおさめ、裾部の1ヶ所に円形の窪みをもつ。坏部は椀形か。3も高坏の裾部で、最下層の砂礫層から出土する。器壁は薄く、端部は丸くおさめる。



第88図　大溝トレンチ2出土遺物実測図③（1/3）

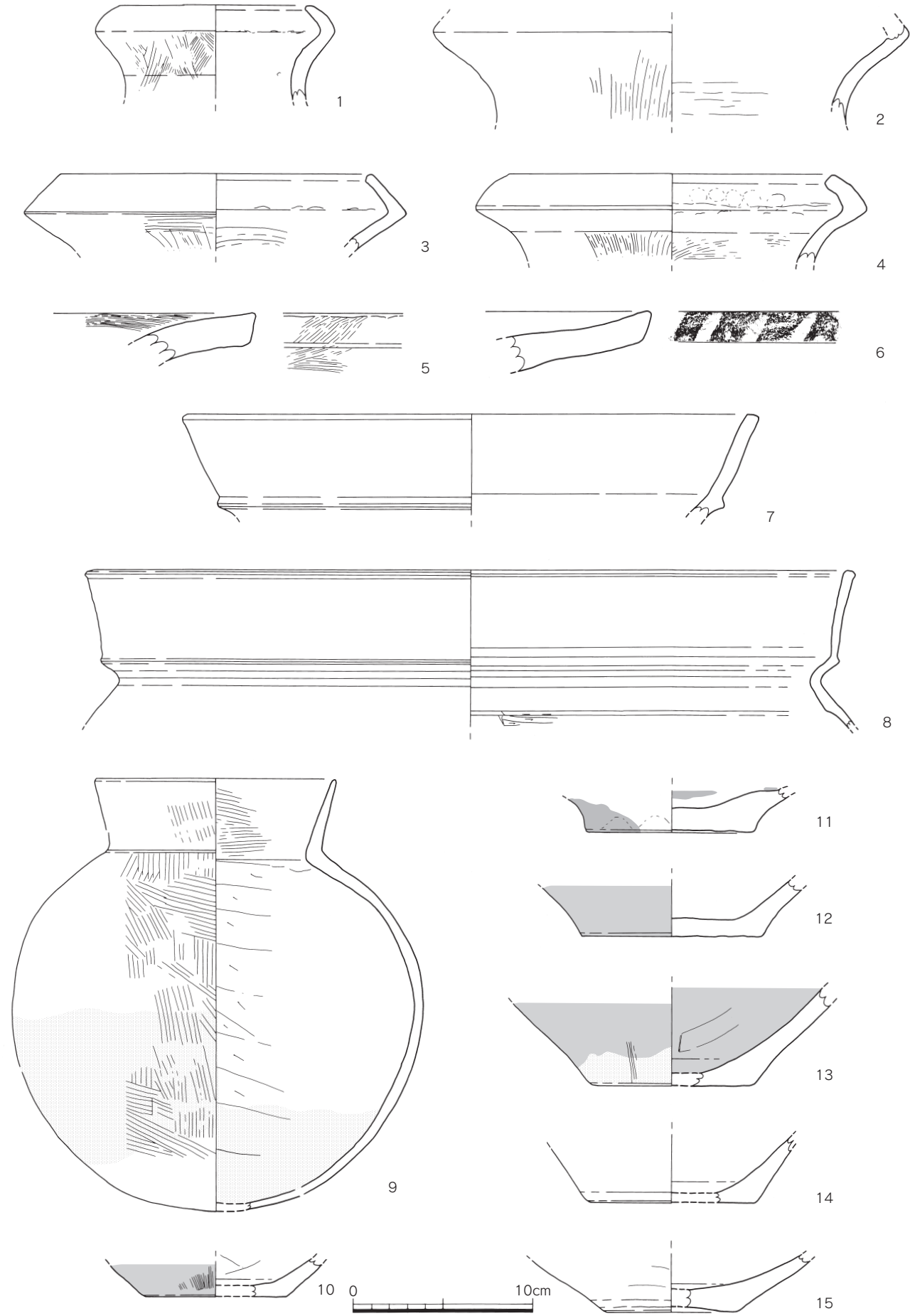
4はにぶい青灰砂質土層から出土した鉢である。全体的に丸みをもち、重心が下がる。底部中央を欠くが不安定な平底に復元される。口縁部も欠くが、小さく反転するものがつくだろう。外面上半は縦ハケ、底部付近は横ハケを施し、内面はナデを行う。やや時期的に新しく位置付けられよう。5もにぶい青灰砂質土層から出土した鉢の上半部である。口縁部は湾曲しながら小さく立ち上がり、端部を丸くおさめる。胴部はやや張り気味で、その上半部に板ナデのハケメ、下半部に横ヘラケズリ、内面にケズリを施す。

6～10は器台である。6は褐色土層から出土した器台の上半部である。端部には面をとり、胴部はよくしまる。7は器台の下半部でオリーブ褐色細砂質土から出土した。全体的に肉厚で、胴部のしまりは弱い。脚部端部はやや跳ね上げ気味である。8は褐色土層から出土した器台の脚部である。内面は少し剥離しているが、胴部のしまりは強くないようである。脚端部は比較的平坦である。9はにぶい青灰砂質土層の下部で、川砂状のものが集中した個所から出土した器台脚部である。非常に肉厚で内外面ともにナデを施す。内面にみられる屈曲部が低位にあるため、天地が逆の可能性もある。10は褐色土層から出土した器台である。口縁部を欠くが、全体的に残りがよい。内外面ともにナデと指オサエで整形する。肉厚な器台で脚部に向かってラッパ状に広がる。

第96図1は紡錘車の未製品である。平面は丁寧な研磨、側面は面とりの研磨を施す。2は紡錘車の破片である。6は刀子の把部か。7は鉄鏃状の鉄器である。

トレンチ3（第84図３）

トレンチ3では再掘削時の際に溝の幅が広がり、4.4mを測る。また、溝底の幅も1.4mを測り、トレンチ1・2で確認された幅よりも大きく広がる。また、12・15層で人頭大程度の石が数多く確認され、中央部ではあまりに密集して一部掘削できないほどであった。このような状態は他のトレンチでは確認されていないことから最初の埋没の原因が洪水等による土石流であった可能性が考え



第89図　大溝トレンチ3出土遺物実測図①（1/3）

られ、掘り直しもこの層まで及んでいない。

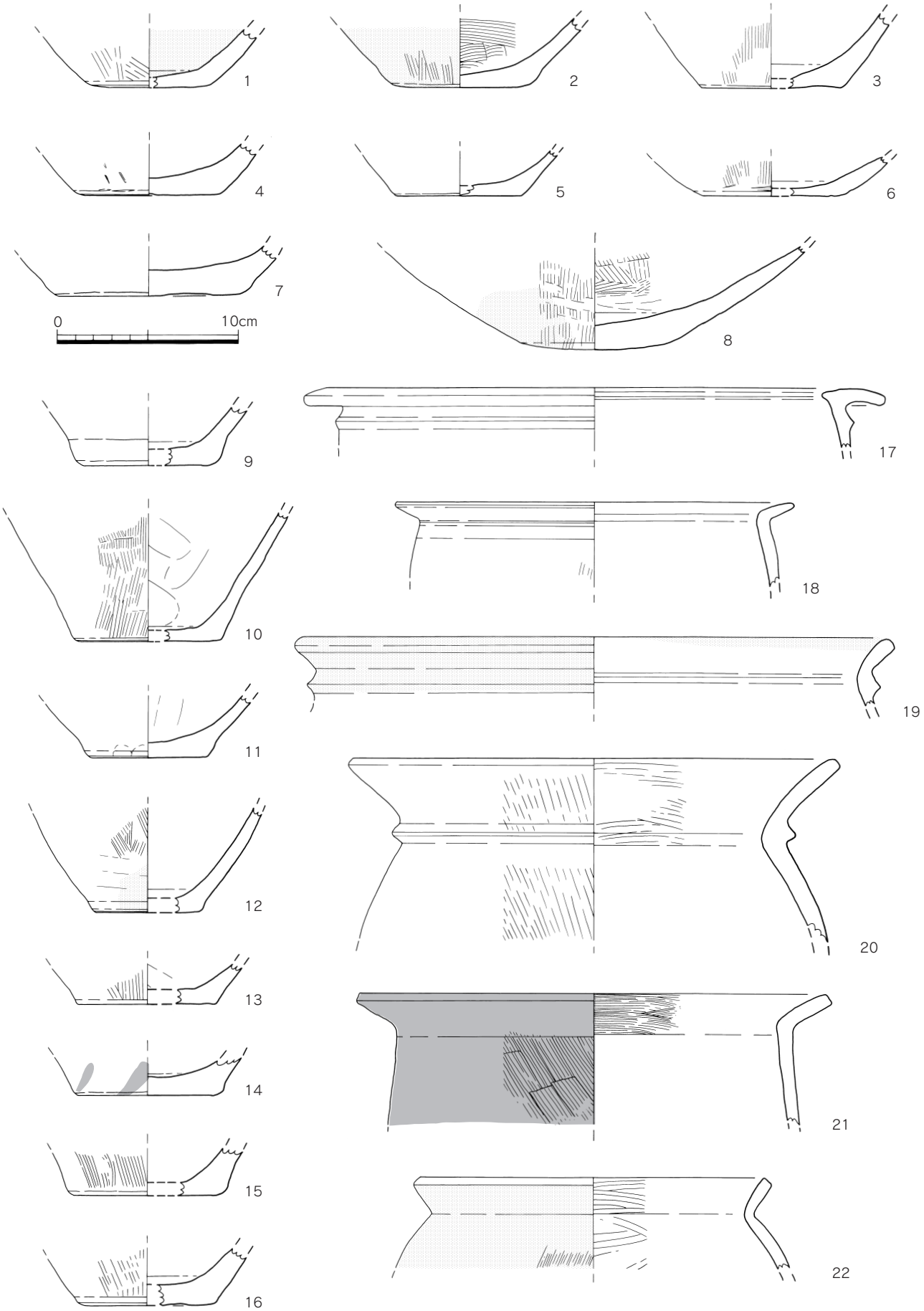
トレンチ3出土遺物（第89～93図）

第89図1～7は壺である。1は小型の複合口縁壺である。口縁部は丸みを帯び、弱い稜線が入る。外面頸部は縦ハケを施し、しまりは緩い。2は灰褐色土層から出土した複合口縁壺の頸部である。口縁端部を欠く。頸部は縦ハケ、内面は横ナデを施す。短頸の複合口縁壺である。3は屈曲部が明瞭な複合口縁壺の口縁部である。頸部外面は縦･横ハケ、内面はナデを施す。4は口縁部片である。口縁屈曲部は肉厚で短い。頸部外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。口縁部の内面には明瞭な指押さえ痕が残る。5はオリーブ灰砂質土層から出土した大型壺の口縁部である。小片のため口径は復元できない。口縁端部にのみ縦ハケを施し、内外面ともに横ハケを施す。6も大型壺の口縁部で、小片のため口径は復元できない。口縁端部にはヘラ状工具で刻目を施す。内外面ともにナデを施す。7は砂が少ないオリーブ褐色砂質土から出土した山陰系の二重口縁壺か。口縁部のみ破片で、頸部との境に三角突帯を巡らせる。口縁端部に面をとる。調整は器表面が剥離しているため不明である。8は最下層の石礫層から出土した山陰系の大型鉢である。胴部から短い頸部を経て、口縁部に至る。口縁は直立気味に立ち上がり、端部に面をとる。内外面ともに口頸部はナデ、胴部内面はヘラケズリを施す。9はオリーブ灰砂質土層から出土した土師器の壺もしくは甕である。球状の胴部に直立気味の口縁部が伴う。口縁端部は丸くおさめる。外面は縦・斜ハケを施す。口縁部内面は横ハケ、胴部は横ヘラケズリを施す。底部は丸底である。

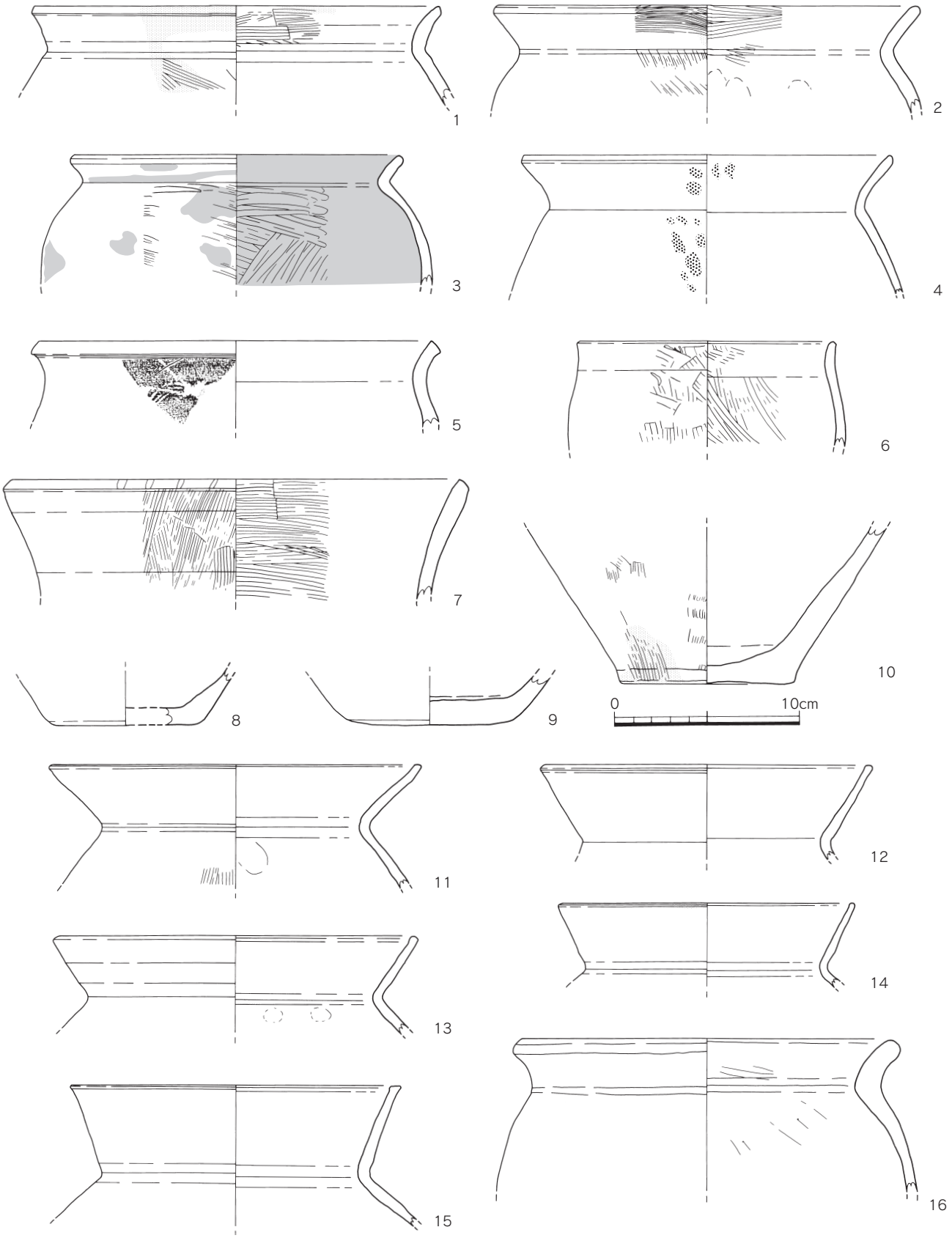
10～15は壺の底部である。10は最下層である石礫層から出土した。底部中央を欠くが、平底に復元される。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。11も石礫層から出土した壺の底部で平底である。内外面ともにナデを施す。12は灰褐色土層から出土した壺の底部である。平底で、内外面ともにナデを施す。13も灰褐色土層から出土した壺の底部で、底部中央を欠くが平底である。外面は丹塗りである。外面はナデと縦ハケ、内面は板ナデを施す。14は石礫層から出土したものである。底部中央を欠くが、平底に復元される。内外面ともにナデを施す。15は灰褐色土層から出土したもので、底部中央を欠くが、やや上げ底気味に復元される。内外面ともにナデを施す。

第90図1～8は壺の底部である。1は平底で、やや丸みを帯びながら立ち上がる底部である。検出面より60～80㎝下のオリーブ灰砂質土。2は直線的に広がりながら立ち上がる平底の底部で、内面に横ハケを施す。外面は全面にススが付着する。3はオリーブ灰砂質土出土の甕の底部で、中央部を欠く。外面に縦ハケを施す。4は検出面から20㎝下の灰褐色土層出土の底部片である。内外面共にナデを施す。5は検出面より50～60㎝下のオリーブ褐色砂質土層から出土した底部片である。6はやや径が大きい底部片で中央部を欠く。外面にハケメを残す。オリーブ灰砂質土出土。7は大型壺の底部片である。平底で肉厚である。8は大型壺の底部片で、断面凸レンズ状を呈する。内外面共にハケを施し、一部ナデ消す。オリーブ灰砂質土出土。

9～16は甕の底部である。9は内彎しながら立ち上がる底部片で、中央部を欠く。10は平底で直線的に立ち上がり、外面に縦ハケを施す。オリーブ灰砂質土出土。11はやや内彎しながら広がる底部片で、平底である。灰褐色土層出土。12は灰褐色土層出土の底部片で、中央部を欠く。外面



第90図　大溝トレンチ3出土遺物実測図②（1/3）



第91図　大溝トレンチ3出土遺物実測図③（1/3）

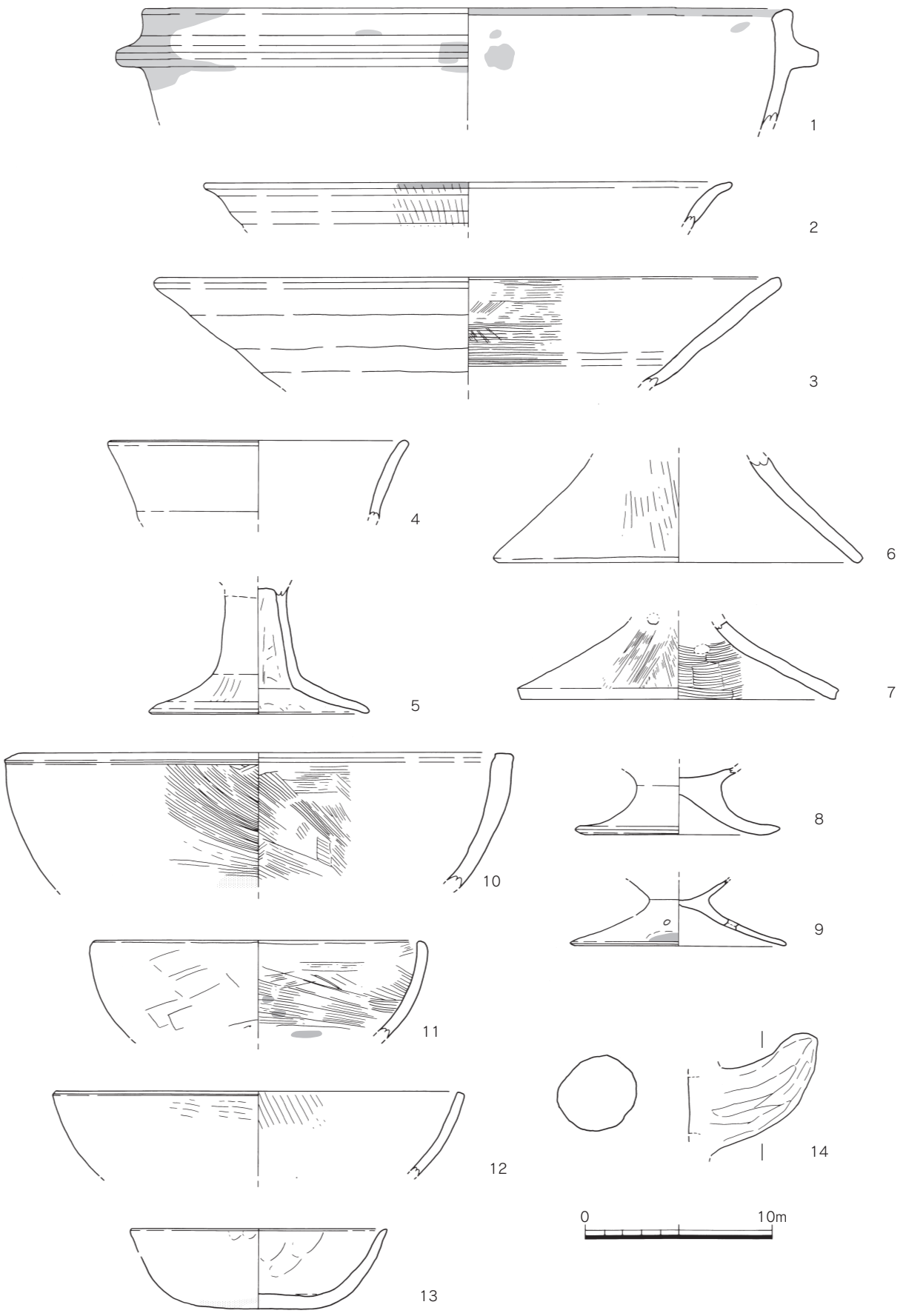
は縦ハケを施したのち、ナデ消す。13は平底の底部片で、外面に縦ハケを施す。オリーブ灰砂質土出土。14は外面に黒斑をもつ平底の底部である。15はオリーブ褐色砂質土層出土の底部片である。中央部を欠くが平底であろう。外面に縦ハケを施す。16は直線的に立ち上がる底部片である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。オリーブ灰砂質土出土。

17～22は甕の上半部である。17の口縁部はやや垂れ気味で、口縁端部は面をとる。口縁部下には三角突帯を巡らせる。18は短い口縁部をもつ甕で、胴部が少し張る。外面に縦ハケを施す。オリーブ褐色砂質土層出土。19は検出面より80～100㎝下の石礫層から出土した甕である。小片から復元したため、口径にやや不安がある。短く外反する口縁部の下に三角突帯を巡らせる。外面全面と内面口縁部にはススが付着する。20はオリーブ灰砂質土層出土の甕である。小片からの復元であるため、口径にやや不安が残る。断面く字形の口縁部をもち、口縁端部には面をとる。頸部には三角突帯を巡らせる。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。21は胴の張りがない甕である。口縁端部に面をとる。外面に縦ハケ、口縁部の内面に横ハケを施す。22は頸部のしまりが強い甕で、胴の張りが強い。短く広がる口縁部の端部は面をとり、外面全面にススが付着する。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。オリーブ灰砂質土出土。

第91図1は最下層の石礫層から出土した甕の口縁部である。口縁は丸みをもって外傾しながら立ち上がり端部に面をとる。頸部のナデは強く、明瞭な稜がはいる。外面口縁部はナデ、胴部は斜ハケを施し、内面口縁部は横ハケ、胴部はナデを施す。2はオリーブ灰砂質土層から出土した甕の口縁部である。口縁部は直線的に外傾し、端部を丸くおさめる。頸部は強くしまり、胴が張りそうである。口縁部は内外面ともに横ハケ、胴部外面は縦ハケ、内面はナデを施す。3はオリーブ灰砂質土層から出土した胴が張る甕の上半部である。口縁は短く外傾し、端部は小さく面をとる。外面はミガキ状のナデと斜ハケ、内面はミガキ状のナデを縦・横方向に施す。4は灰褐色土層から出土した甕の上半部である。口縁は緩く外傾しながら立ち上がり、口縁端部に面をとる。頸部はしまり、肩の張らない胴部に至る。内外面ともにナデを施す。5は外来系の甕である。緩やかに外傾する口縁部で、端部に面をとる。胴部は張らず、肩部に3本一単位の沈線で半円を描く。6はオリーブ褐色砂質土層から出土した小型の甕である。弱く張る胴部に直立気味の口縁が伴う。端部は丸くおさめ、頸部はほとんどしまらないが、弱い稜がかすかに認められる。内外面ともに斜～縦ハケを施す。7は最下層の石礫層から出土した大型の甕の口縁部である。弱く外傾しつつ立ち上がる口縁で、端部に面をとり、ヘラ状工具で刻目を施す。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。小片から復元したため、やや径に不安が残る。

8～10は甕の底部である。8は砂質が大半のオリーブ灰砂質土から出土したものである。底部中央を欠くが平底に復元される。内外面ともにナデを施す。9は平底から断面凸レンズ状底に向かう段階の底部である。底部に厚みがある。10は平底の底部である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

11～16は土師器の甕である。11は大溝の中位に位置するオリーブ褐色砂質土層～淡褐色土層から出土した甕の上半部である。口縁は緩く丸みをもちつつ広がり、端部に面をとる。頸部はしまる。外面は横ナデと縦ハケを施し、内面はナデと、横ケズリを施す。12は大溝の上層に位置する



第92図　大溝トレンチ3出土遺物実測図④（1/3）

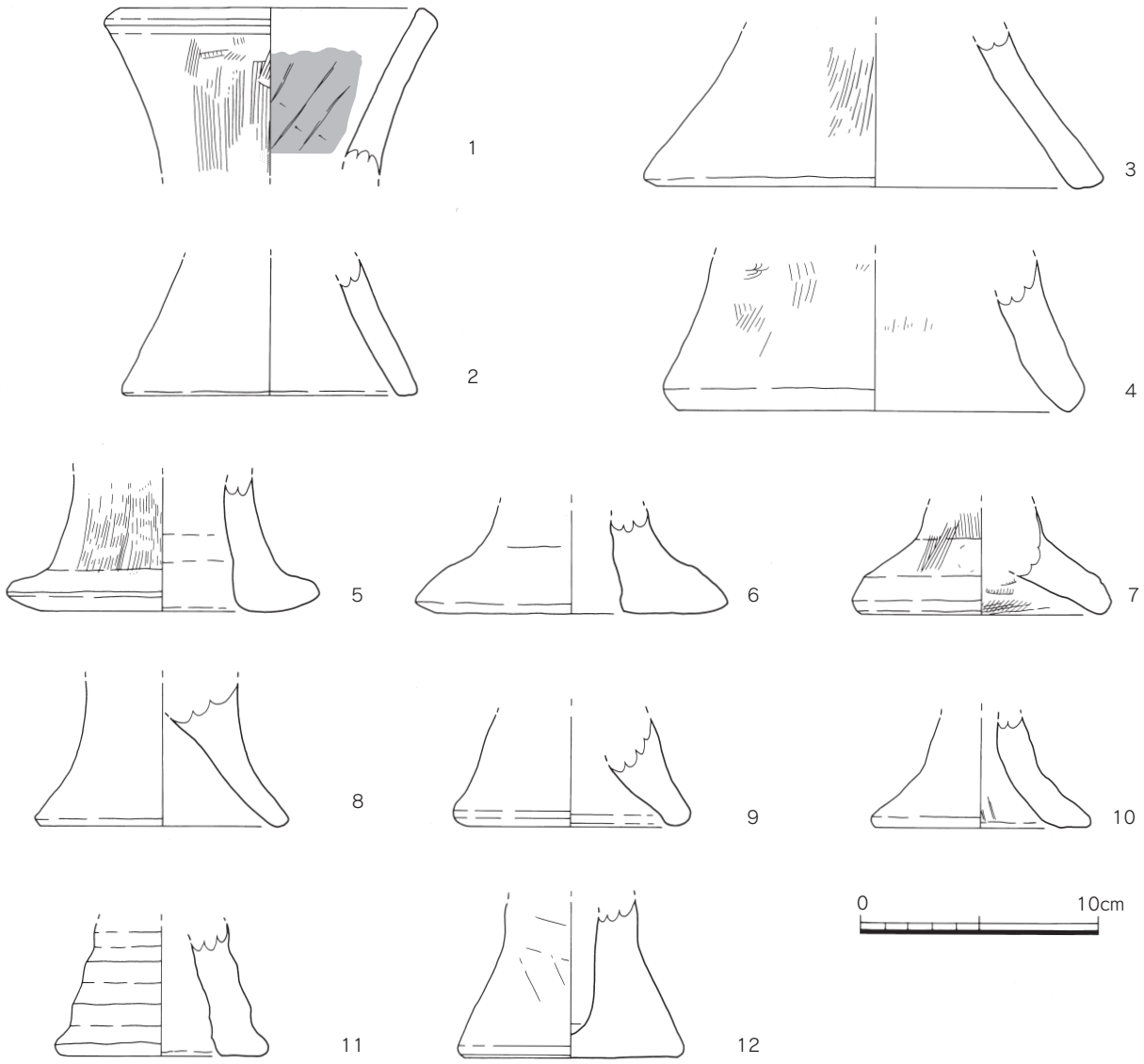
砂が少ないオリーブ褐色砂質土層から出土した口縁部で、やや直線的に立ち上がる。口縁端部は面をとる。13は甕の上半部で、口縁部の内外面に丁寧なナデを施す。外面は横ナデ、内面は横ナデと横ケズリを施す。14は最下層の石礫層から出土した甕の口縁部である。全面を横ナデで整形し、器壁を薄く仕上げる。15は石礫層から出土した甕で、やや口縁部が伸びる。口縁端部は面をとる。外面は横ナデ、内面は横ナデと、横ヘラケズリを施す。16は大溝の下層である砂質が多いオリーブ灰砂質土層から出土した甕である。胴の張りは弱く、口縁部は肥厚する。口縁端部は丸くおさめるが、若干面ももつ。外面は剥離が著しく調整不明であるが、内面は口縁部に横ハケ、胴部に縦ヘラケズリを施す。

第92図1は樽形土器である。素口縁で、口縁端部に内傾する面をとる。口縁の下には方形突帯を巡らせる。外面は丹塗りである。

2～9は高坏である。2は最下層である石礫層から出土した高坏の口縁部である。端部は外側に折り曲げる。外面は縦ミガキ、内面はナデを施す。3は最上層である灰褐色土層から出土した高坏の口縁部である。口縁部の外半部が直線的に広がり、端部に面をとる。外面は横ナデ、内面は横ハケを施す。4は石礫層出土の鉢状の坏部をもつ高坏である。外半部が内湾しながら立ち上がる。5は高坏の脚部である。脚柱部の下で裾部に向かって大きく広がる。脚端部は丸くおさめる。6は灰褐色土層から出土した高坏の脚部で、ラッパ状に広がる。脚端部は面をとる。外面に縦ミガキ、内面に不定方向のナデを施す。7も灰褐色土層から出土した高坏の脚裾部である。端部の断面は方形で面をとる。裾部と脚柱部の境に円形の透をもつ。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。8は砂質が多いオリーブ褐色砂質土層から出土した高坏の脚部である。おそらく鉢状の坏部をもつ高坏で、器壁が厚い短脚である。脚端部は跳ね上げ気味である。9は石礫層から出土した高坏の脚部で、ラッパ状に広がる短脚である。器壁は薄く、脚部の中位に円形透をもつ。

10～12は鉢である。10は大型の鉢で、肉厚である。口縁端部は面をとる。内外面ともに斜ハケを主体的に施す。11は砂質が多いオリーブ褐色砂質土層から出土した鉢の上半部である。口縁端部を丸くおさめる。外面上半に横ナデ、下半は横ヘラケズリを施し、内面は横ハケを施す。12は大溝の中位にあたる褐色土層から出土した鉢の口縁部である。口縁端部に面をとる。外面は横ハケ、内面は縦ハケを施す。13は坏状の鉢で、砂質が多いオリーブ褐色砂質土層から出土した。底部は平底で肉厚である。口縁部は丸くおさめる。内外面ともにナデを施す。やや時期的に新しいものか。14は牛角状を呈する把手である。挿入法により接続されている。

第93図1～12は器台である。1は灰褐色土層から出土した器台上半部である。口縁端部は面をとり、くびれは胴部中位にありそうである。外面は縦ハケ、内面は板ナデを施す。2は石礫層出土の器台の下半部である。直線的に内径しながら立ち上がる。内外面ともにナデを施す。3は砂質が多いオリーブ灰砂質土層出土の器台の下半部である。裾端部は面をとる。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。4は器台の下半部である。裾端部に面をとる。内外面ともにナデと縦ハケを施す。5は最下層である石礫層出土の器台下半部である。断面形がL字状を呈し、裾端部が跳ね上げ気味である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6は灰褐色土層から出土した器台で、断面がL字形呈する。内外面ともにナデを施す。7は灰褐色土層から出土した裾部片であるが、器台になるかやや不安があ

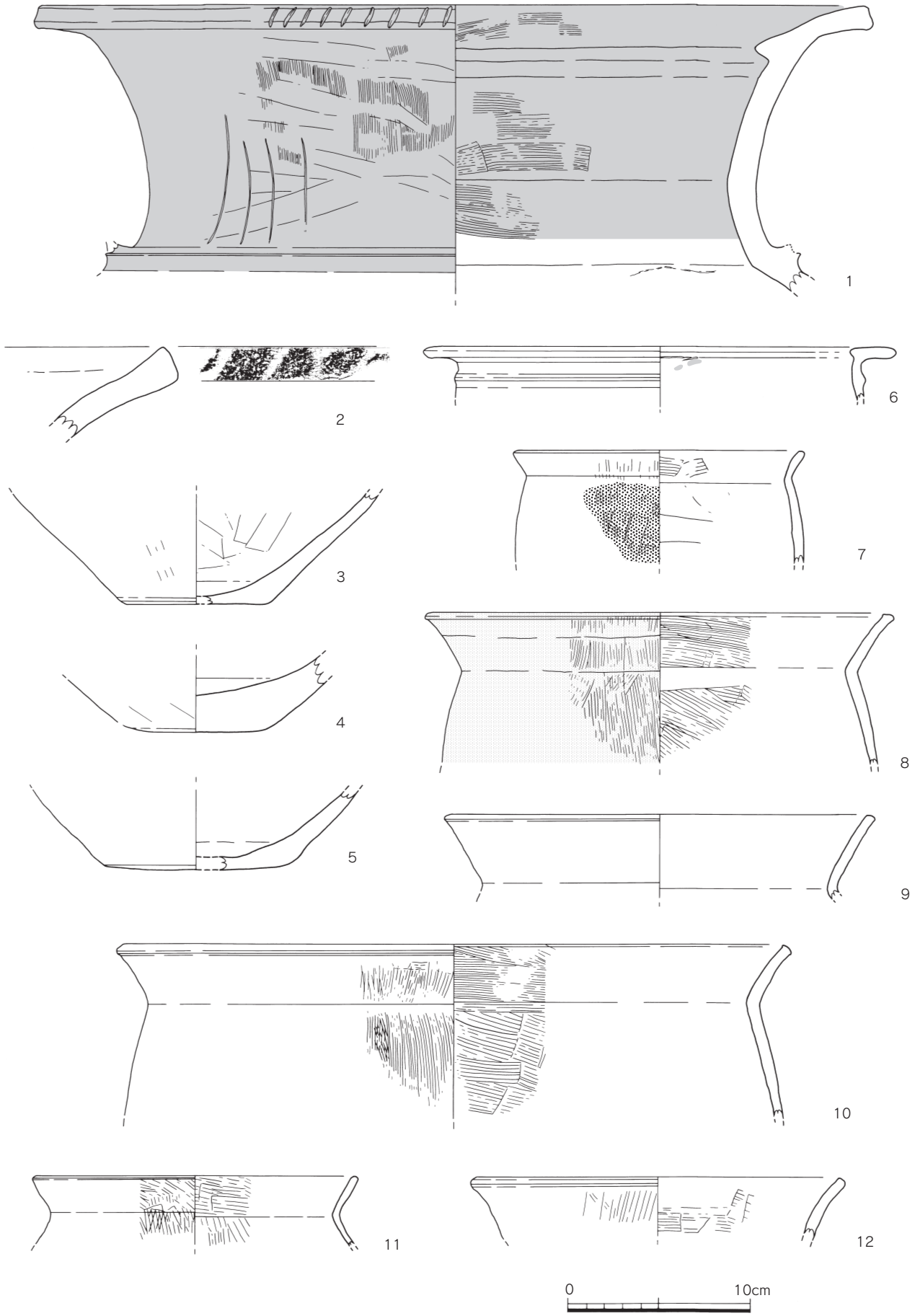


第93図　大溝トレンチ3出土遺物実測図⑤（1/3）

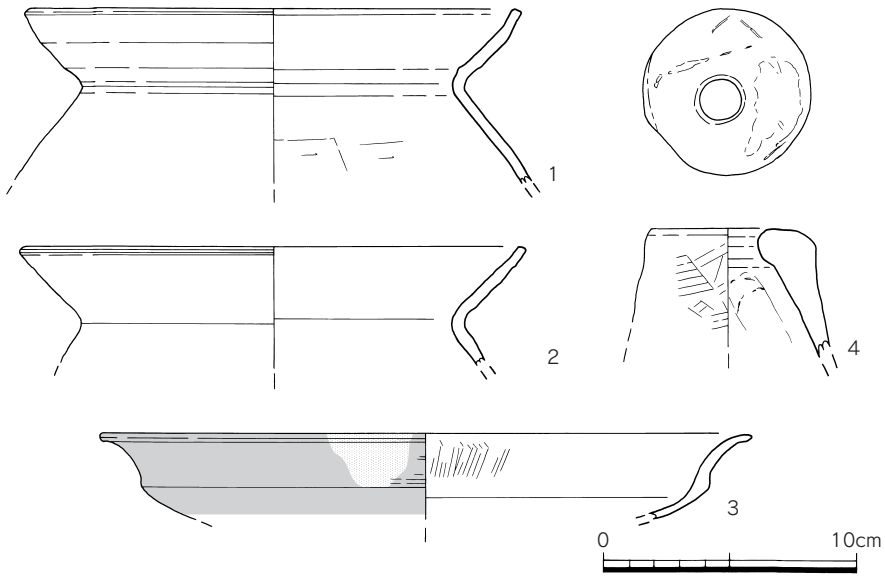
る。裾端部は面をとる。内外面ともに縦ハケを施す。8は褐色土層出土の器台下半部である。裾端部は面をとる。中位より上が欠けて詳細不明であるが、上半部は中実になる可能性もある。9も褐色土層から出土した器台の裾部である。端部は丸くおさめ、上に向かうにつれ、肥厚する。内外面ともに横ナデを施す。10は砂質が多いオリーブ褐色土層出土の小型の器台である。裾端部は小さな面をとる。内外面ともにナデを施す。11は灰褐色土層から出土した器台である。外面に強い横ナデを施し、断面形が波状になる。12は石礫層から出土したものである。当初、天地逆で図化していたが、平坦面の形状や調整方法に違和感があり、底部をもつ形で図化した。内外面ともにナデを施す。

トレンチ4（第84図4）

トレンチ4でも掘り直しに伴い溝の幅が拡げられている。溝の底の幅は1.0m程度と狭く、比較的急な立ち上がりである。このトレンチでも弥生時代終末期から古墳時代初頭頃に営まれた8号住居跡を切っており、再掘削の時期の一点が抑えられる。断面図の上半部はレンズ状の堆積であるこ



第94図　大溝トレンチ4出土遺物実測図①（1/3）

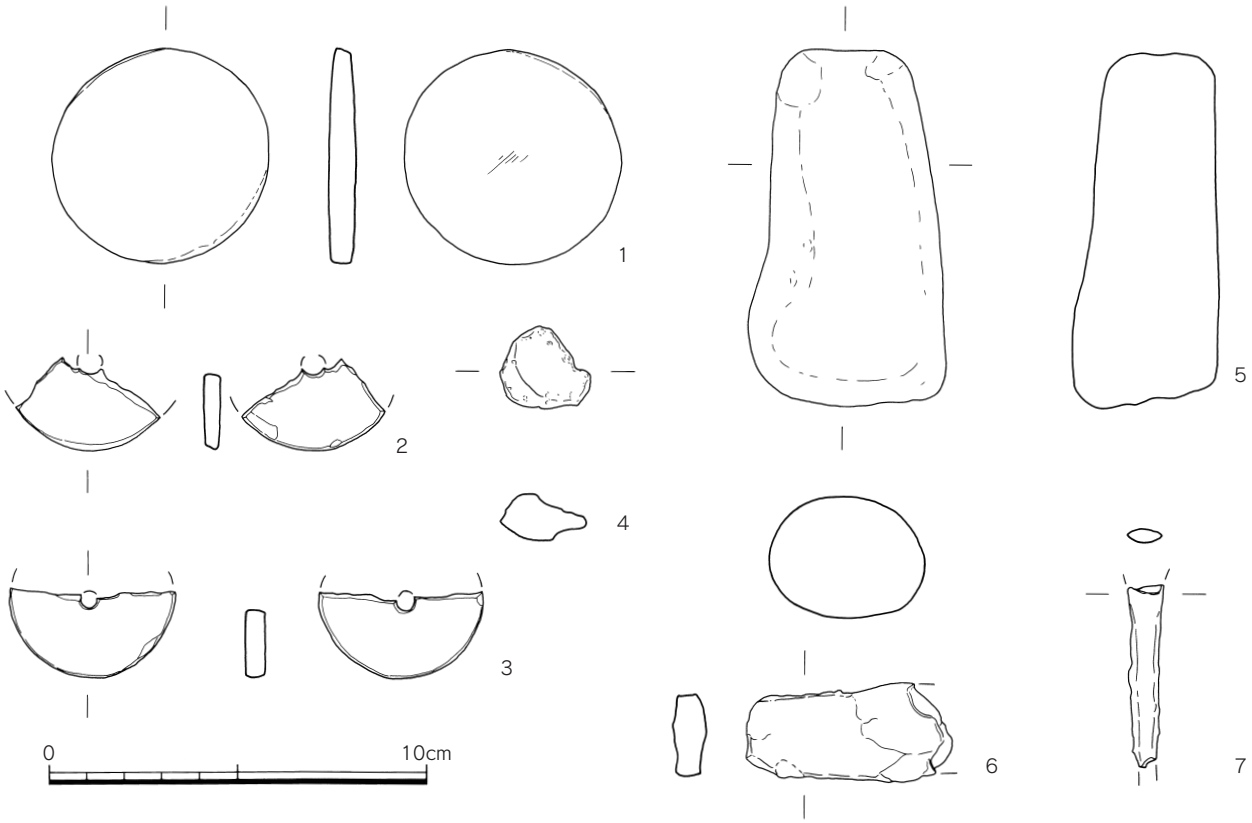


第95図　大溝トレンチ4出土遺物実測図②（1/3）

とから、最終的には自然に埋没していったものと考えられる。

トレンチ4出土遺物（第94～96図3・4）

第94図1～5は壺である。1は大型の鋤先口縁壺の口頸部である。口縁部は立ち上がり気味で、内面は突帯状になる。口縁端部は面をとり、ヘラ状工具で刻目を施す。外面頸部に暗文状縦ミガキが入るが、部分的で頸部付近に認められるに過ぎない。頸部にはM字突帯を巡らせる。外面は縦ハケの後に横ナデ、内面は横ハケを施す。外面全面と内面頸部中位まで丹塗りが認められる。頸部下には粘土接続痕が残る。2は検出面から40～60㎝下にあるオリーブ褐色砂質土から出土した大型壺の口縁部片である。小片のため口径は復元できない。口縁端部に面をとり、ヘラ状工具で刻目を施す。3は最下層である砂礫層出土の底部片である。中央部を欠くが平底である。外面にハケメ、内面にナデを施す。4は検出面から20㎝下にある灰褐色



第96図　大溝トレンチ1～4出土遺物実測図（1/2）

土層から出土した断面凸レンズ状を呈する底部である。内外面ともにナデを施す。5は平底から凸レンズ状底への移行期の底部片である。立ち上がりもやや丸みをもつ。

6～12は甕である。6は砂礫層出土の甕の口縁部である。口縁部はほぼ水平に伸び、口縁端部に小さな面をもつ。口縁下には低い三角突帯を巡らせる。7は小型の甕である。頸部は緩くしまり、口縁部は短く立ち上がる。胴部は張りがない。外面に縦ハケ、内面口縁部に横ハケ、胴部にナデを施す。8は灰褐色土層出土の長胴甕の上半部である。頸部は緩くしまり、内外面ともに稜がはいる。口縁端部は面をとる。外面は縦ハケ、内面口縁は横ハケ、胴部は斜ハケを施す。9は灰褐色土層出土の口縁部片である。頸部はややしまり、内外面ともに稜がはいる。10は大型の甕の上半部である。頸部は緩くしまり、内外面ともに稜がはいる。口縁部は短く立ち上がる。外面に縦ハケ、内面に横～斜ハケを施す。11は砂礫層出土の甕の口縁部で器壁が薄い。頸部は緩くしまり、短い口縁部が伴う。口縁端部は丸くおさめる。12はオリーブ褐色砂質土層から出土した口縁部片である。やや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部に面をとる。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。

第95図1は砂礫層から出土した古式土師器の甕である。内湾する口縁部で、口縁端部に面をとる。胴部内面にケズリを施す。2も最下層である砂礫層から出土した古式土師器の甕である。口縁部は1より直線的に広がり、口縁端部には面をとる。

3は高坏の口縁部片である。浅い坏部で半転部も短く湾曲する。外面に横ハケ、内面に縦ハケを施す。外面に丹塗りを施す。

4は灰褐色土層から出土した支脚である。受部は水平で、中央に焼成前の穿孔を施す。外面に横ハケ、内面にナデを施す。受部の器壁は厚く、脚部は薄い。

第96図3は紡錘車の破片である。4は軽石の破片である。

（2）住居跡（第97～99図）

1号住居跡（第97図）

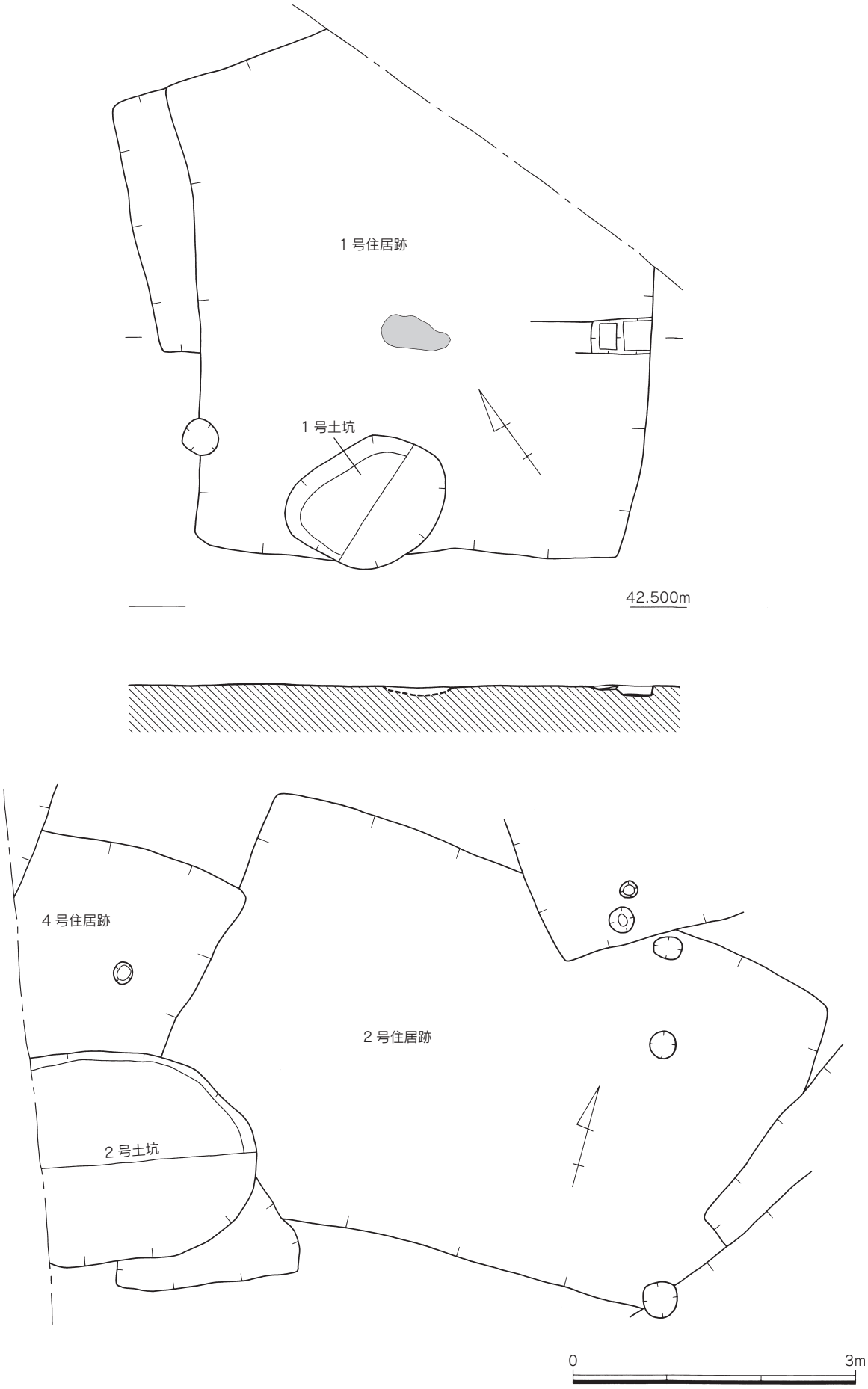
調査区の南寄りで確認された方形の住居跡で、北東―南西方向に主軸をもつ。また、西側を１号土坑に切られる。長軸5.55ｍ、短軸4.80ｍを測る。著しく削られており、2・3㎝掘り下げると床面が検出された。東壁際には屋内土坑を配する。中央部には炭と焼土の集積が認められることから、中央炉があったと判断される。出土遺物はない。

2号住居跡（第97図）

調査区の中央部南寄りで確認された住居跡で、東西方向に長軸をもつ。長軸6.30ｍ、短軸4.05ｍを測る。4号住居跡と2号土坑に切られる。平面プランのみの確認であるため出土遺物はない。

3号住居跡（第98図）

調査区の中央部で確認された方形住居跡である。一部分土坑等に切られるが、4.41ｍ×4.23ｍのほぼ方形プランの住居跡であることが確認された。東西方向にトレンチを設定し、15㎝ほど下が床面で、中央に炭と焼土がまとまっていることから中央炉と判断される。なお、トレンチから出土遺物はない。



第97図　1・2・4号住居跡実測図（1/60）

4号住居跡（第97図）

調査区中央部南寄りで確認された方形住居跡である。遺構の大半を調査区外ならびに2号土坑に切られる。想定される規模は一辺4.20m程度である。4号住居跡も平面プランのみの確認であるため、出土遺物はない。

5号住居跡（第99図）

調査区中央部のやや北寄りで確認された長方形の住居跡である。大溝と3号土坑に切られるがおおよその平面プランは確認できる。長軸を東西方向にとり、長軸4.80m＋α、短軸3.75mを測る。5号住居跡は大溝の開削時期を確認するために完掘した。床面は18㎝下から確認された。床面の中央部に炭のまとまりがあり、中央炉と判断される。遺物は住居跡の北東から多く出土している。

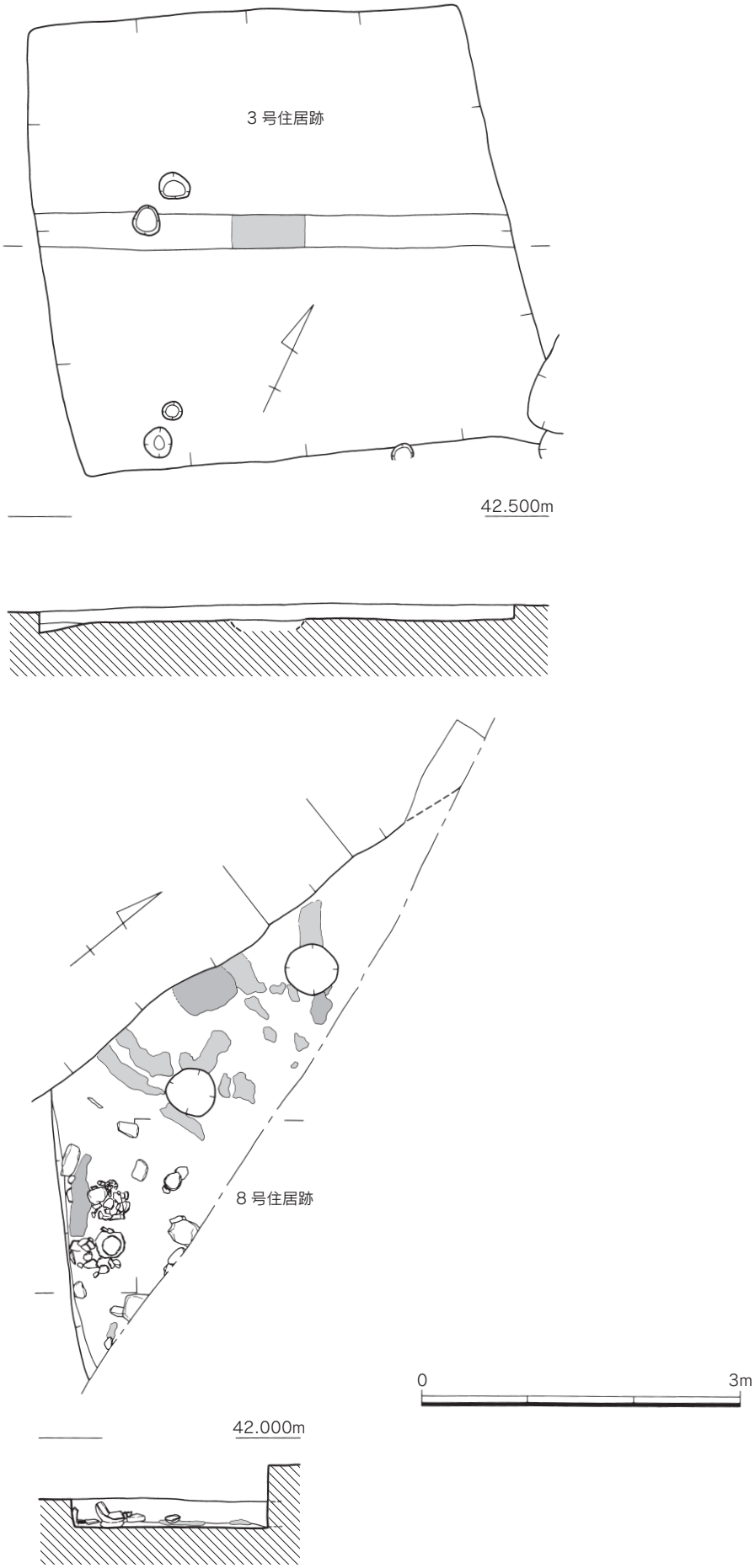
出土遺物（第100～102図、第105図1・2・4）

第100図1～5は壺である。1は小型の無頸壺の上半部である。やや垂れ下がる口縁部をもつ。外面全面と内面上半部には丹塗りを施す。2は鋤先口縁壺の口縁部である。口縁部断面は方形状になる。3は複合口縁壺の口縁部で屈曲部には明瞭な稜が入り、口縁端部には面をとる。4は小型の壺の下半部である。底部は丸底である。外面にハケ、内面にナデを施す。5は壺の底部である。平底で内彎しつつ立ち上がる。外面に縦ミガキを施す。

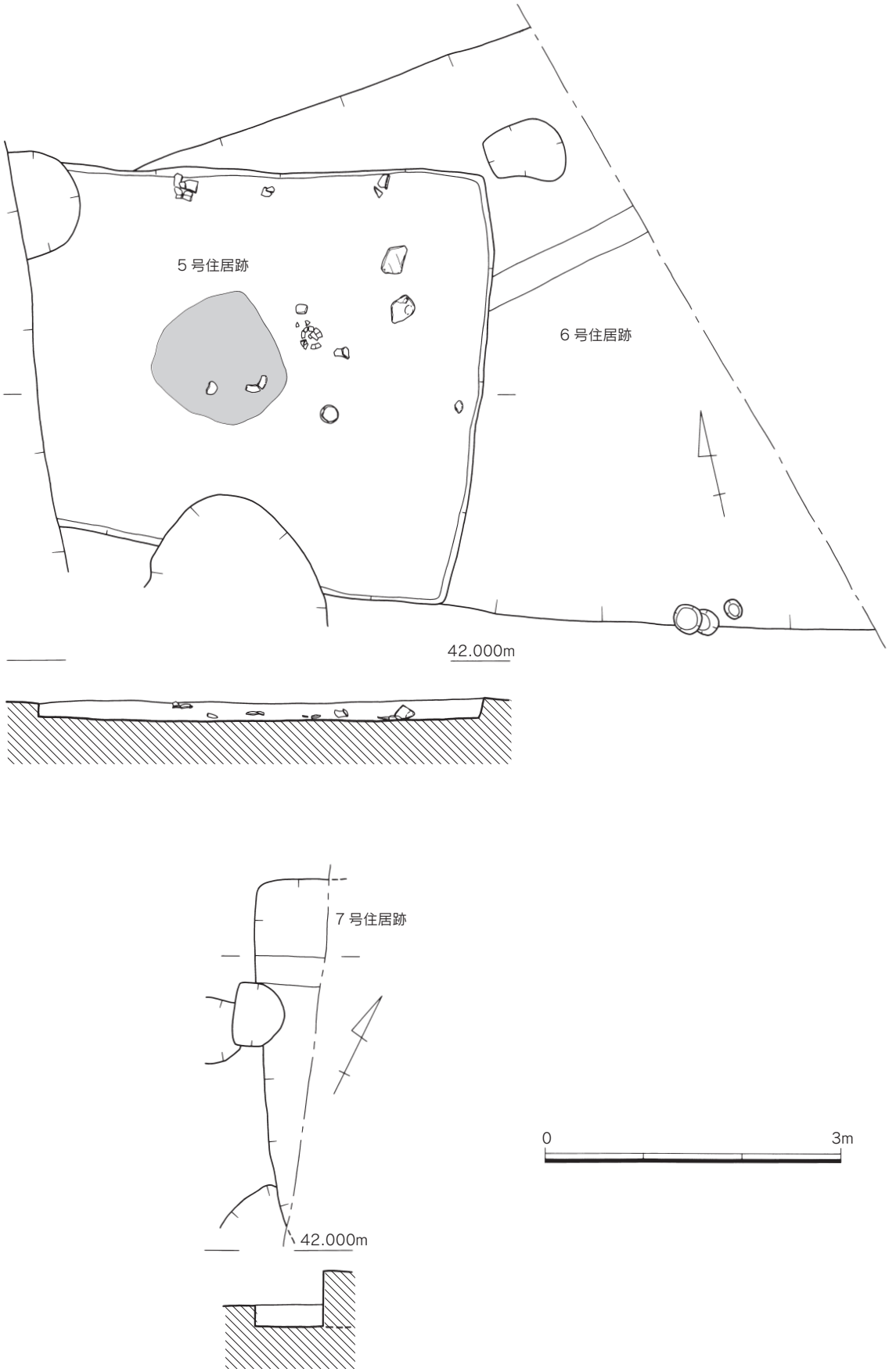
6～15は甕である。6は中央部を欠く底部片で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7はやや内彎しつつ立ち上がる平底の底部で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は外面に丹塗りを施す底部片で、内外面共にナデを施す。9は平底の底部で、内外面共にナデを施す。内面は部分的に器表面が剥離する。10はやや内彎しながら立ち上がる平底の底部で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

11～14は甕の上半部である。11はやや垂れ下がる口縁部をもつ甕で、大型のものである。12はやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、口縁端部に面をとる。口縁部の下には三角突帯を巡らせる。13もやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕であるが、口縁端部は丸くおさめる。胴部外面にはハケメが残る。14は断面逆Ｌ字形の口縁部をもつ甕である。口縁部下がやや肥厚する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。15は甕の底部である。内外面共に縦ハケを施し、底部付近に強い横ナデを施す。底部裏面には回転台として用いた木葉の葉脈が明瞭に残る。

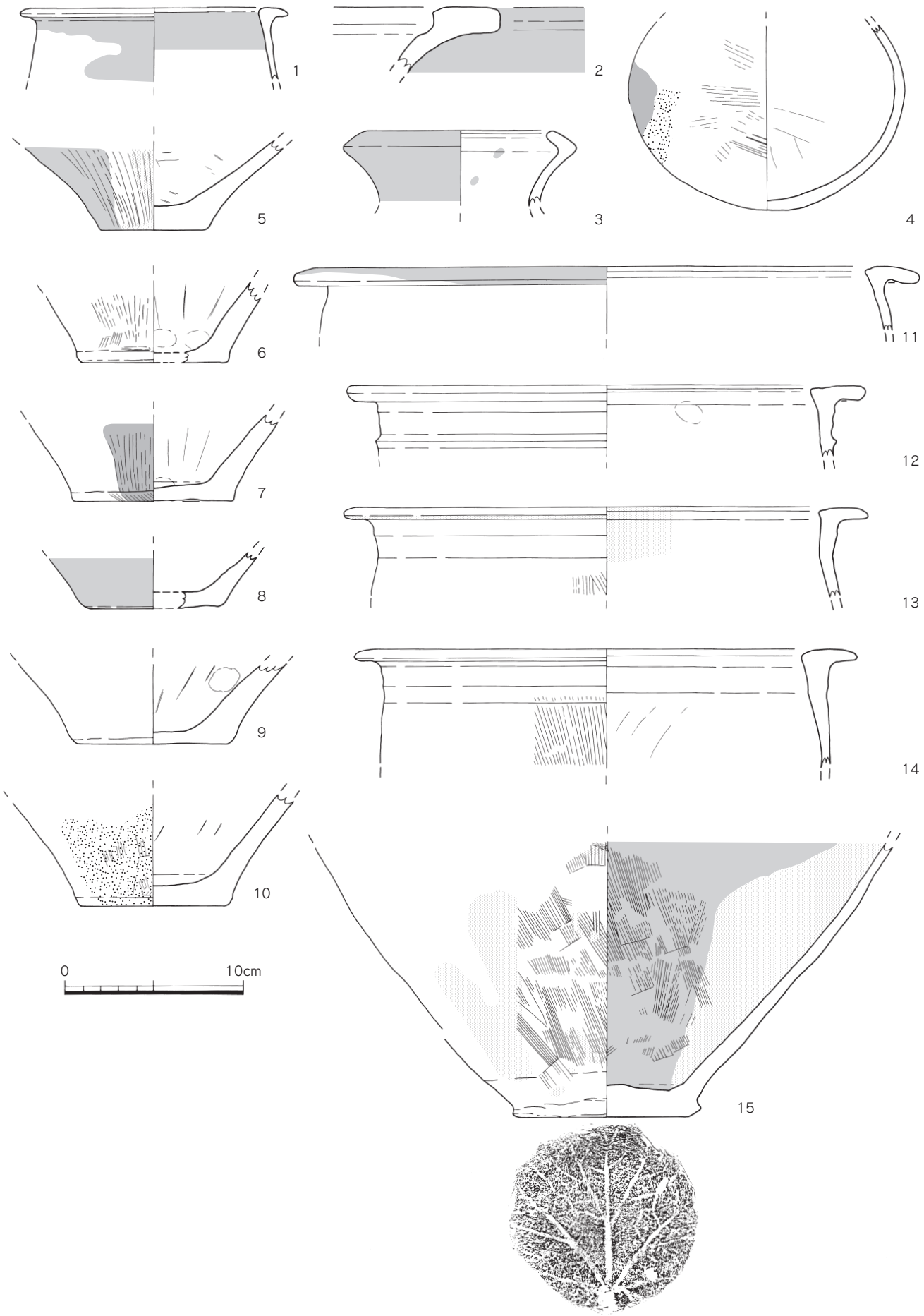
第101図1～11は甕である。1はやや跳ね上げ気味の口縁部をもち、口縁端部に面をとる。頸部には稜が入る。内外面ともに稜が入る。2もやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕である。口縁端部は丸くおさめ、頸部下には沈線状のくぼみがある。外面には縦ハケ、内面にナデを施す。3は断面逆Ｌ字形の口縁部をもつ甕である。頸部には弱い稜がはいる。4はやや跳ね上げ気味の口縁部をもつ甕で、胴の張りは弱い。内外面共にナデを施す。5は口縁部が短い甕で、口縁端部は丸くおさめる。口縁部下は肥厚し、胴部はやや張る。6は断面く字形の口縁をもつ前である。口縁端部には面をとる。胴部外面には縦ハケ、内面口縁部には斜め方向ハケを施す。7は口縁端部を欠く甕である。小片から復元したため、口径にやや不安が残る。胴部内外面共に縦ハケを施す。8は図上で完形に復元された甕で、口縁部が立ち上がり気味に広がる、口縁端部は丸くおさめ、胴が張る。底部は欠損部分が多いが平底であろう。外面にミガキ、内面にナデを施す。9は長胴甕である。口縁は断面く字形で、口縁端部に面をとる。胴部には張りがない。内外面共に全面にハケメを残す。10も長



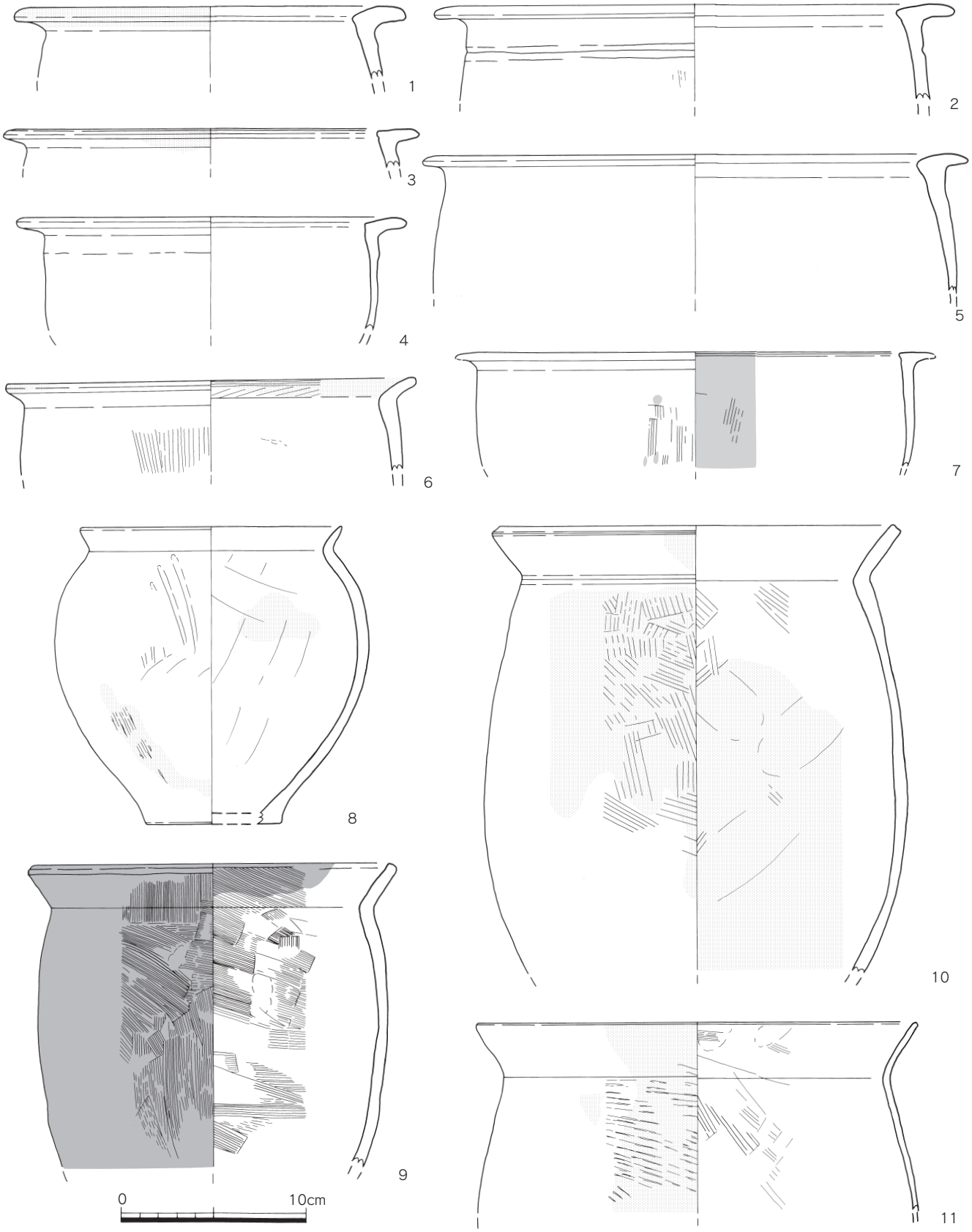
第98図　3・8号住居跡実測図（1/60）



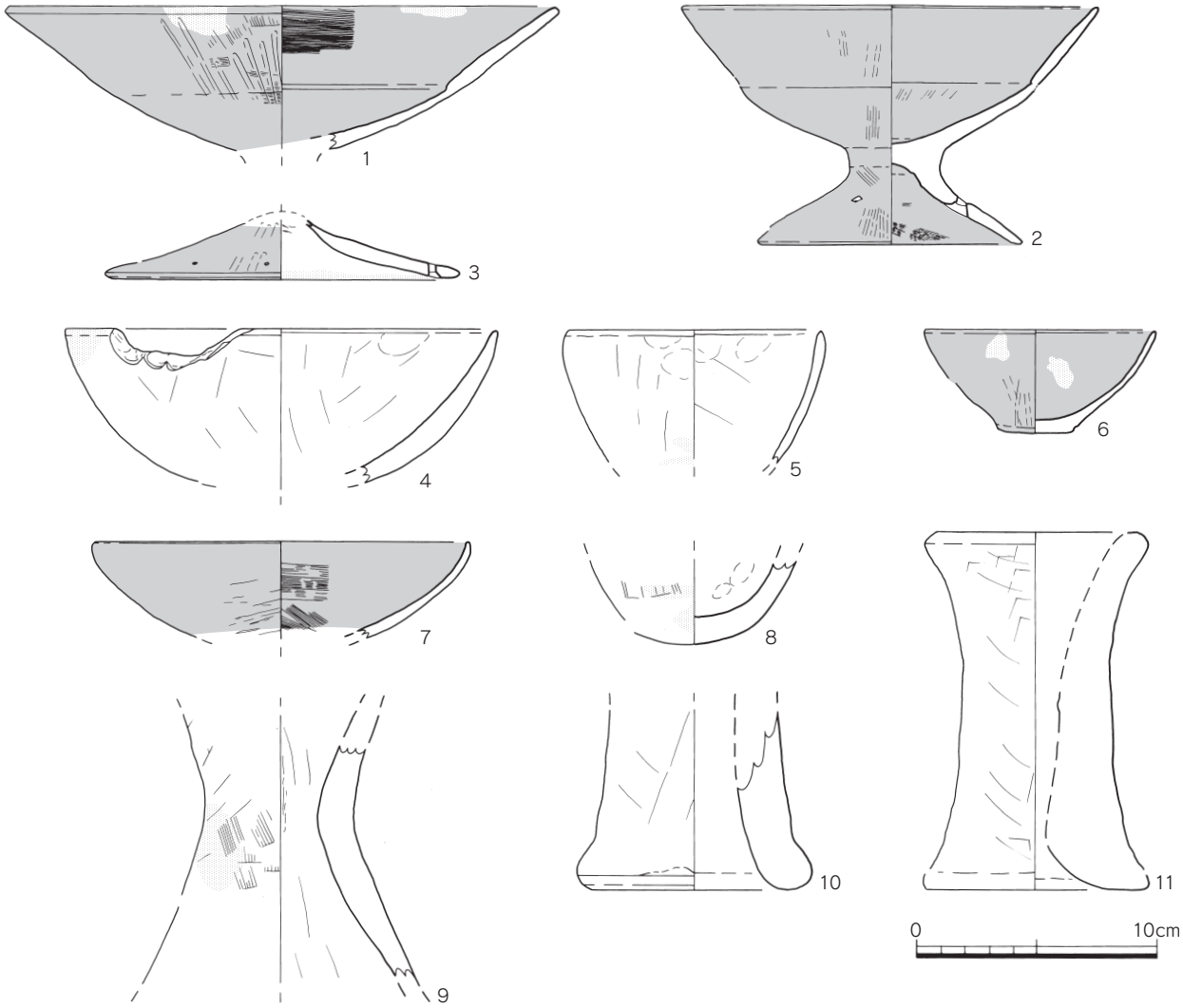
第99図　5～7号住居跡実測図（1/60）



第100図　5号住居跡出土遺物実測図①（1/3）



第101図　5号住居跡出土遺物実測図②（1/3）



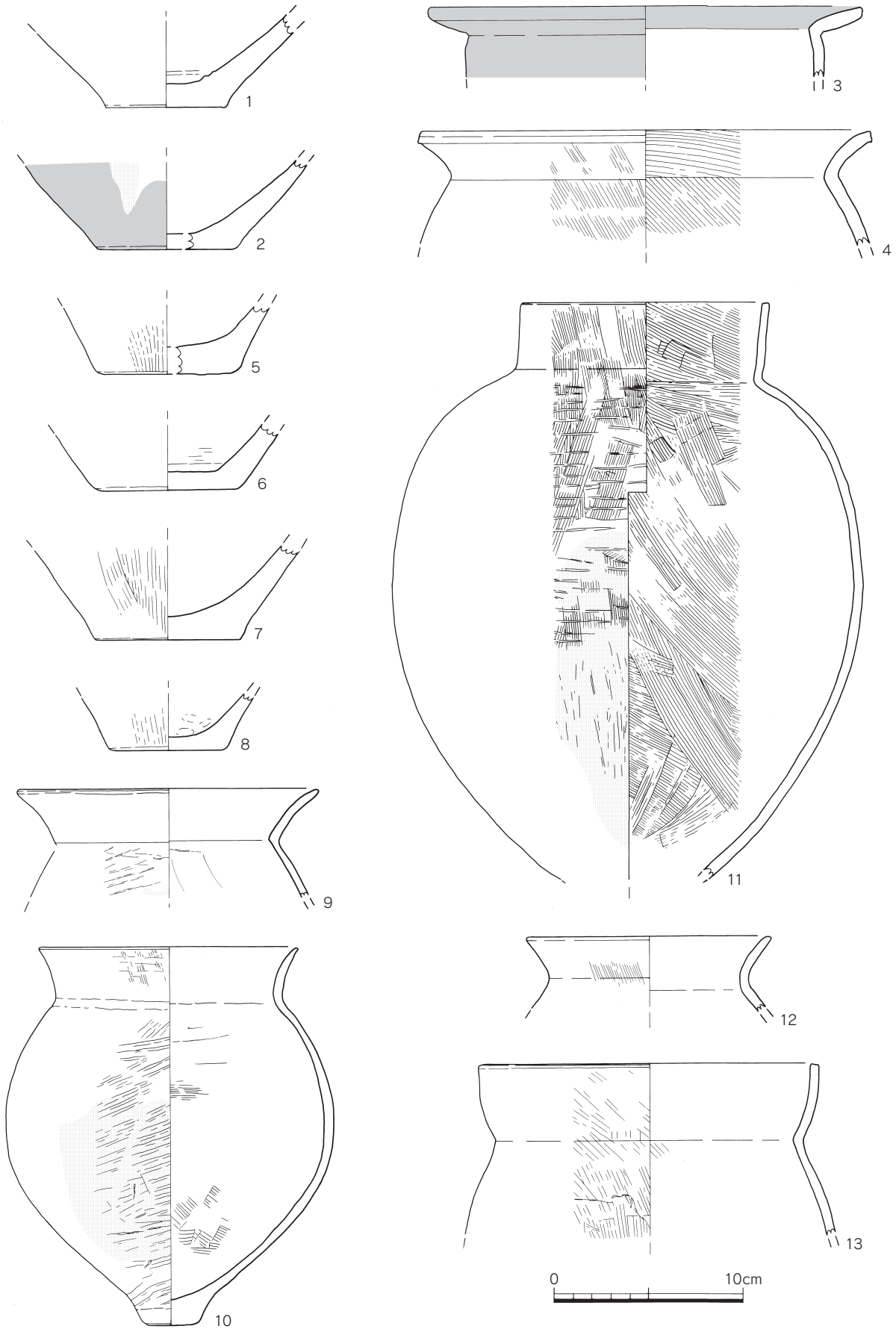
第102図　5号住居跡出土遺物実測図③（1/3）

胴甕である。口縁は断面く字形で、口縁端部に面をとる。頸部の稜は明瞭で、胴の張りは弱い。外面に縦ハケ、内面に斜めハケとナデを施す。11も長胴甕である。外面に左上がりのタタキ、内面に斜めハケを施す。頸部の稜は明瞭に残る。

第102図1・2は高坏である。1は高坏の坏部で、屈曲部が直線的になるが、内面は明瞭な段をもつ。反転部は坏全体の1/2を占め、口縁端部に面をとる。口縁部外面には暗文状の縦ミガキとハケ、内面は横ハケを施す。2は図上で完形に復元される短脚の高坏である。坏部下半は丸みをもち、上半部は直線的に広がる。口縁端部は丸くおさめる。脚部は脚柱部がほとんどなく、ラッパ状に広がる。裾部に3ヶ所の円形透が認められる。内外面共にハケを施す。

3は無頸壺に伴う蓋で天井部を欠く。外面は全面に丹塗りを施す。端部は丸くおさめ、端部付近に2個一対の孔を2ヶ所に設ける。

4～8は椀である。4は底部を欠く椀で、全体的に丸みを帯びる。口縁部を打ち欠き、内外面をナデで仕上げる。5も底部を欠く椀で器壁を薄く仕上げる。口縁端部は丸くおさめる。内外面共にナデを施す。6は坏状の小さな椀である。底部は凸レンズ状を呈し、器壁を薄く仕上げる。口縁端部は丸くおさめ、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は浅い椀で、丸みをもちながら広がる。口縁



第103図　8号住居跡出土遺物実測図①（1/3）

端部は丸くおさめる。外面下部はケズリを施し、内面はハケメを残す。8は椀の底部片で、丸底を呈す。やや肉厚である。

9～11は器台である。9は口縁部と脚裾部を欠く器台で、中央部分が絞られている。外面にナデと縦ハケ、内面はナデを施す。外面の一部にススが付着する。10は器台の下半部である。脚端部は丸くおさめ、全体的に肉厚である。内外面共にナデを施す。11は図上で完形に復元される器台である。全体的に肉厚で、口縁部は丸くおさめる。内外面共にナデを施す。

第105図1は石製紡錘車である。直径4.3㎝、孔径4.2・4.3㎜、厚さ3.3～3.5㎜を測る。平面は細かい研磨痕が多く残り、側面は平面に対して横方向の研磨を施し、面をとる。石材は粘板岩系である。2は軽石製の浮子か。2片に分離していたが接合した。4は黒曜石製の打製石鏃である。基部を抉りこむ凹基式の石鏃である。

6号住居跡（第99図）

調査区の中央部のやや北寄りで確認された方形の住居跡である。住居跡の西側を5号住居跡に切られ、東側は調査区外に伸びている。平面プランとしてはやや歪なので2軒の住居跡が重なっている可能性もある。出土遺物等はない。

7号住居跡（第99図）

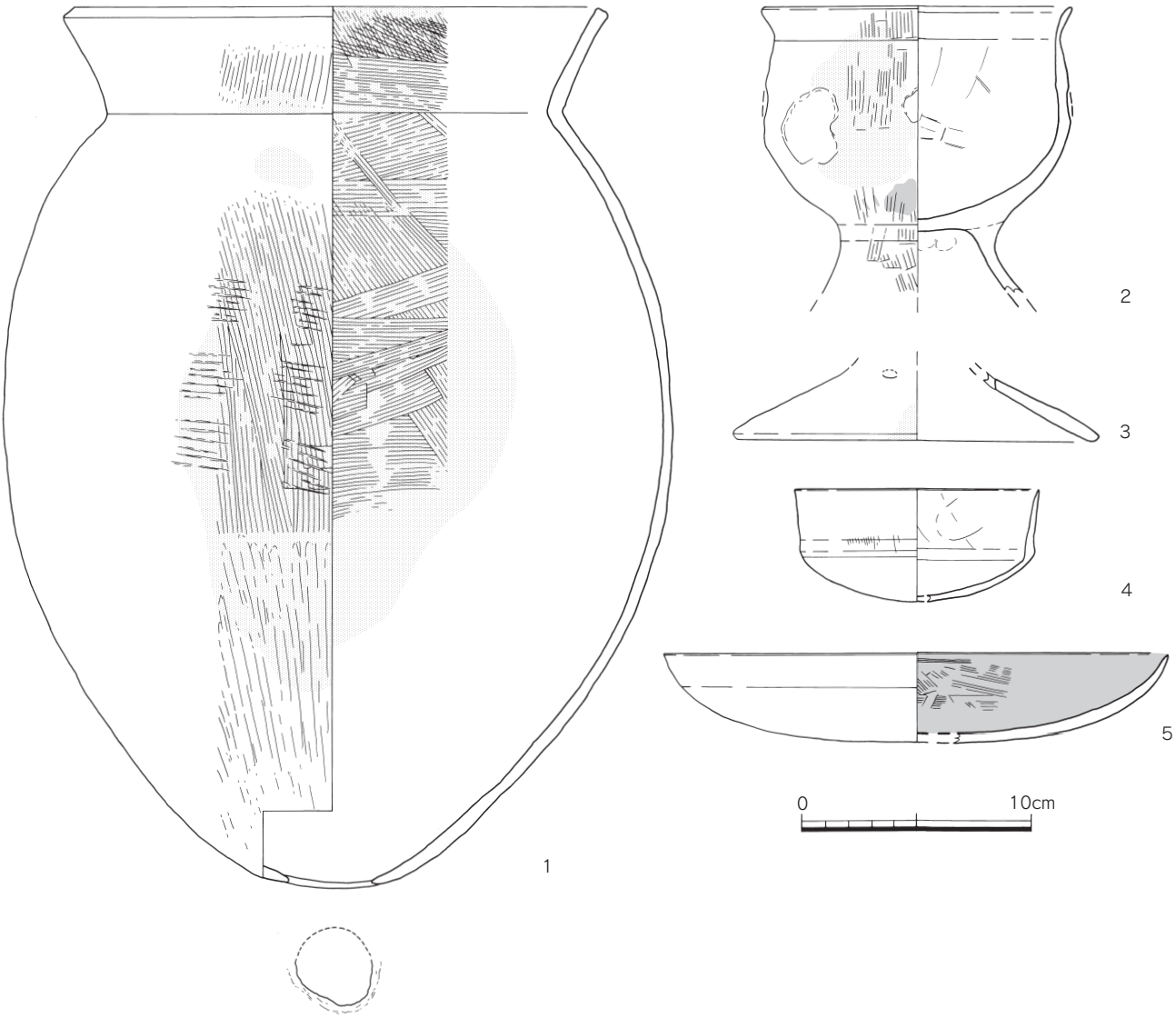
調査区の北端で確認された住居跡で、その大部分が調査区外に伸びている。トレンチを設定したが、遺物は確認されず、床面まで16㎝であった。

8号住居跡（第98図）

調査区の北側で確認された方形の住居跡である。住居の大半は大溝に切られると共に、調査区外に伸びている。調査区を縦断する形で伸びている大溝の開削時期を確認するために完掘した。検出面から27㎝下げると床面に達した。床面には炭化材が広がっており、溝に切られる箇所で炉を確認した。また、南側の壁際では土器がまとまって出土した。

出土遺物（第103・104図、第105図3・5）

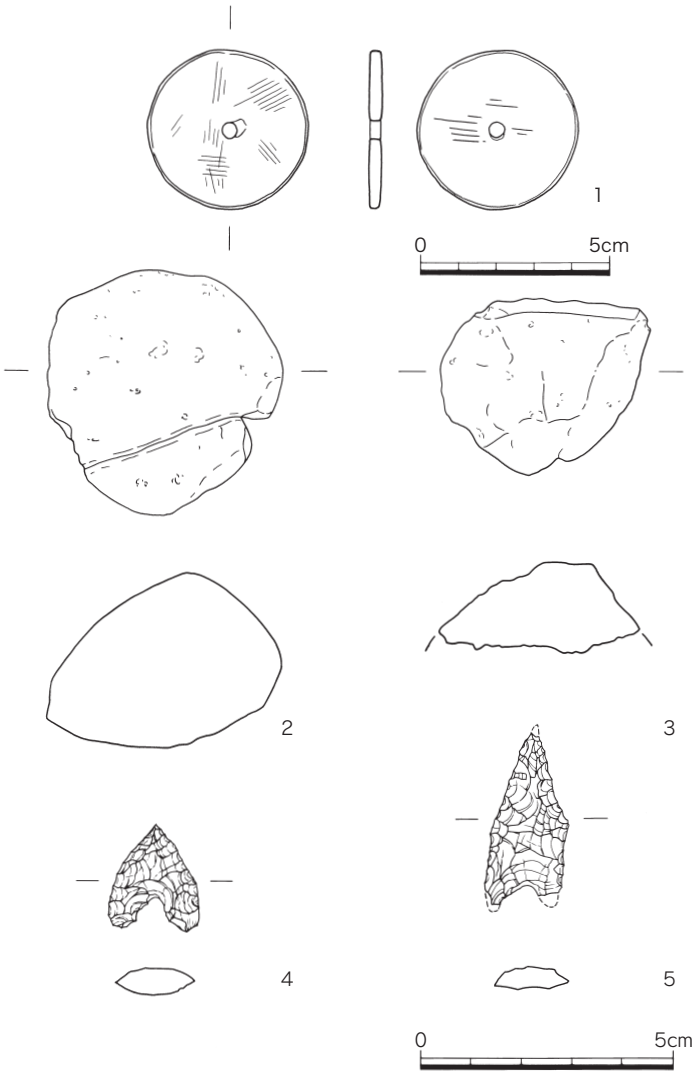
第103図1・2は壺の底部である。1は若干内彎しつつ立ち上がる壺の底部である。2は平底で、外面は丹塗りで若干ススが付着する。3～13は甕である。3は甕の上半部で、やや口縁部が内傾する。頸部には強い横ナデを施し、胴部の張りは弱そうである。口縁端部には面をとる。外面と口縁部内面に丹塗りを施す。4は内彎しながら広がる口縁部をもつ甕で、口縁端部に面をとる。頸部はしまり、内外面共に稜をもつ。5～8は甕の底部である。5は平底の底部で外面に縦ハケを施す。6はやや径の大きな底部片で、直線的に広がりながら立ち上がる。7も直線的に広がりながら立ち上がるもので、外面に縦ハケを施す。8は平底の底部で、外面に縦ハケ、内面に指オサエを施す。9は甕の上半部である。内彎しながら広がる口縁部をもつ甕で、口縁端部は丸くおさめる、頸部は明瞭な稜がはいる。胴部には右上がりのタタキ、内面にナデを施す。10は図上で復元した甕で、全体の1/3～1/4程度の破片から復元しているため、その形態にやや不安が残るが、畿内Ⅴ様式系の甕である。口縁部は内彎しながら立ち上がり、端部には小さく面をとる。頸部は緩くしまり、胴部には右上がりのタタキを施すが、胴下半部には接続痕を明瞭に残す。最大径は胴部の中位より少し上にあり、以下、底部に向かい急速に窄まる。底部は平底である。11は直口壺ともいえるが、胴



第104図　8号住居跡出土遺物実測図②（1/3）

部の形態から甕として報告する。直立気味に立ち上がる口縁で、口縁端部に面をとる甕で、長胴であるが肩が張る。外面は胴部下半に擦過痕、中位から頸部まで横位のタタキの後に縦ハケを施す。口縁部には縦ハケメが残る。内面は全面にハケメを残す。12は小片から復元した小型の甕で、口径には不安が残る。頸部のしまりは緩やかで、弱い稜が入るのみである。13は丸みのある口縁部をもつ甕である。口縁端部には面をとり、頸部のしまりはやや緩い。外面は全面にハケメを残し、胴部には接続痕も確認される。

第104図1はほぼ完全に復元できる甕である。く字状口縁をもち、頸部の屈曲はきつく、内外面ともに明瞭な稜が残る。胴部の張りは強い。口縁端部は面をとり、内面は一部ススが付着する。外面は縦ハケを基調とし、胴部上位には縦ハケの前のタタキ痕も残す。胴の下半は擦過痕を残す。内面は口縁部から胴部中位までは縦・横ハケ、底部付近はナデを施す。底部は尖底であるが、焼成前の穿孔を外側から施す。2は脚台付の小型甕である。脚裾部を欠くが、ほぼ全形に復元できる。口縁部は緩やかにしまり、成形もやや粗い。外面は縦ハケを施し、部分的に器表面が剥離する。3は高坏の脚部である。ラッパ状に広がる短脚と思われる。脚端部は面をとり、裾の屈曲部には円孔を



第105図　5号・8号住居跡出土遺物実測図（1/2・2/3）

施す。4は短脚の高坏の坏部で、椀状を呈する。5は椀である。小片からの復元であるため、口径にやや不安が残る。口縁端部は丸くおさめ、内面に横ハケを施す。底部を欠くが丸底であろう。

第105図3は軽石である。下半部を欠くが、浮子であろうか。5は黒曜石製の打製石鏃である。長さ2.9㎝、幅1.4㎝、厚さ4.0㎜を測る凹基式である。

（3）土坑

1号土坑（第106図1）

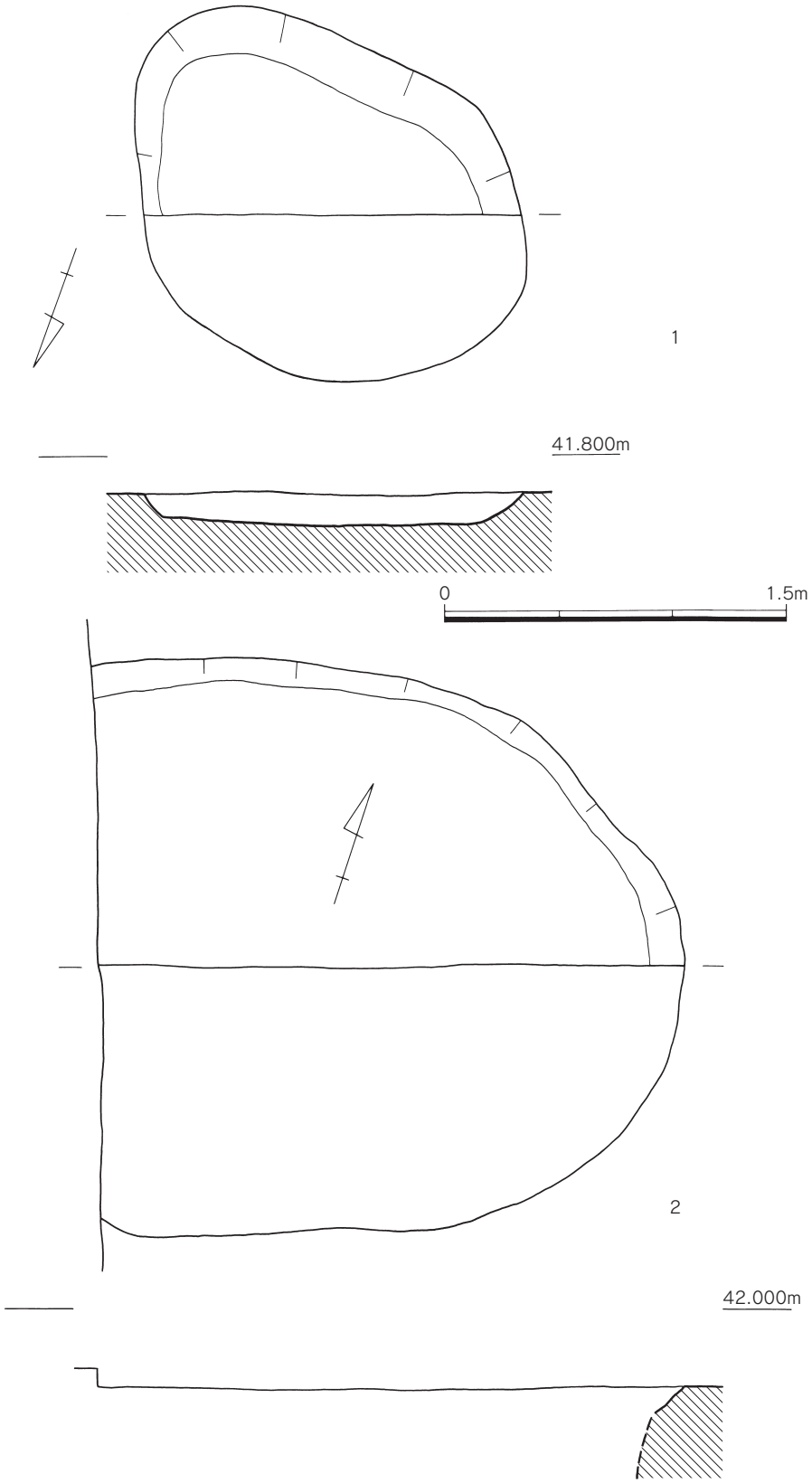
調査区の南側に位置する土坑で、1号住居跡を切る。平面楕円形で、東西方向に長軸をもつ。長軸1.95ｍ、短軸1.42ｍ、深さ0.15ｍを測る。南側半分のみ完掘した。

出土遺物（第109図1）

1は土師皿である。口径8.5㎝、高さ1.5㎝を測り、底部はヘラ切りである。

2号土坑（第106図2）

調査区の南側に位置する土坑で、西側が調査区の外に伸びる。北側半分のみ掘り下げたが、埋土の色や硬さが他の遺構と異なることから中世の井戸と判断し、調査を中断した。現状で長軸2.55



第106図　1・2号土坑実測図（1/30）

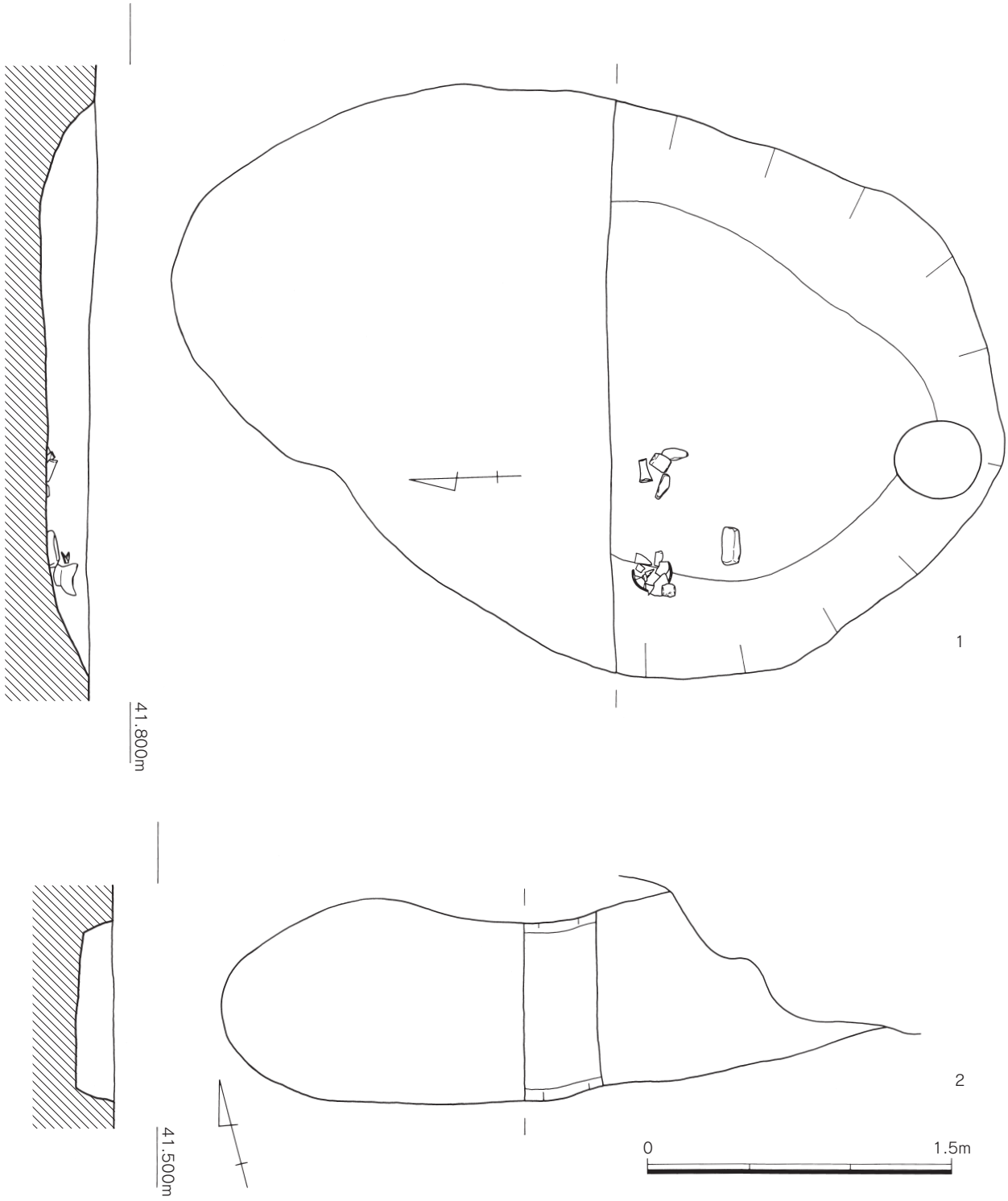
m+α、短軸2.47mを測る。

出土遺物（第109図2・3）

2は山陰系の深鉢である。口縁部のみの破片であるが、径が大きいため深鉢と判断した。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部に面をとる。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。3は器台のくびれ部付近の破片で、口縁部と脚裾部を欠く。くびれ部は上位に位置するが、屈曲はやや弱い。外面に横タタキ、内面に縦ハケとナデを施す。

3号土坑（第107図1）

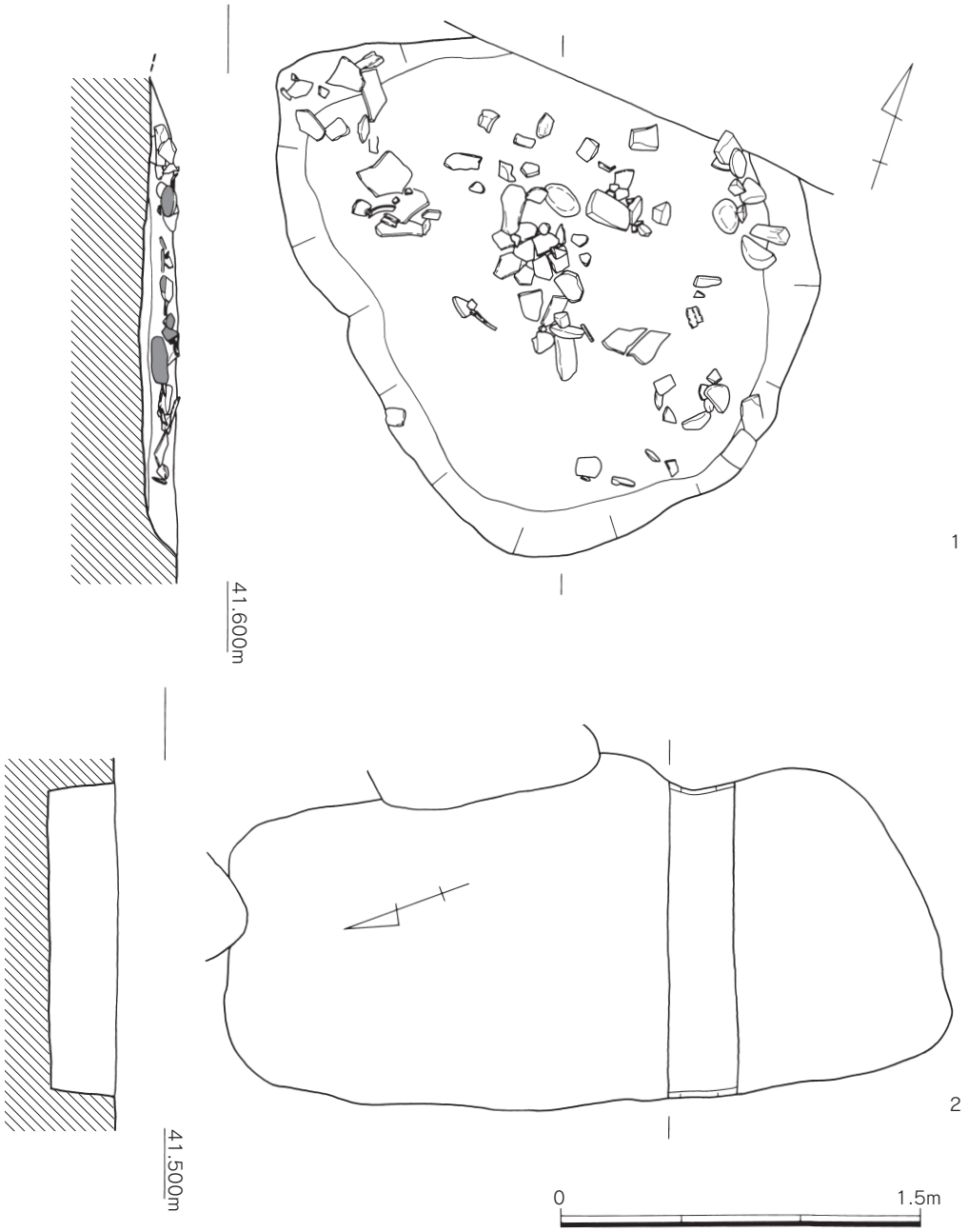
調査区の中央に位置し、5号住居跡と大溝を切る大型の土坑で楕円形を呈する。南側半分のみ掘り下げ、遺構の形状や遺物の出土状況を確認した。南北方向に長軸をもち、長軸4.2m、短軸2.7m、深さ0.28mを測る。



第107図　3・4号土坑実測図（1/30）

出土遺物（第109図4～15）

4～10は壺である。4は複合口縁壺の口頸部で、頸部に2条、口縁部に1条の突帯を巡らせるが、いずれも摩滅し痕跡を留める程度である。口縁部は丸みをもちつつ屈曲し、頸部のしまりは緩い。おそらく短頸の壺になると思われる。5～10は底部片である。5は中央部を欠くが平底で直線的に広がりながら立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。6はやや内湾しながら立ち上がる平

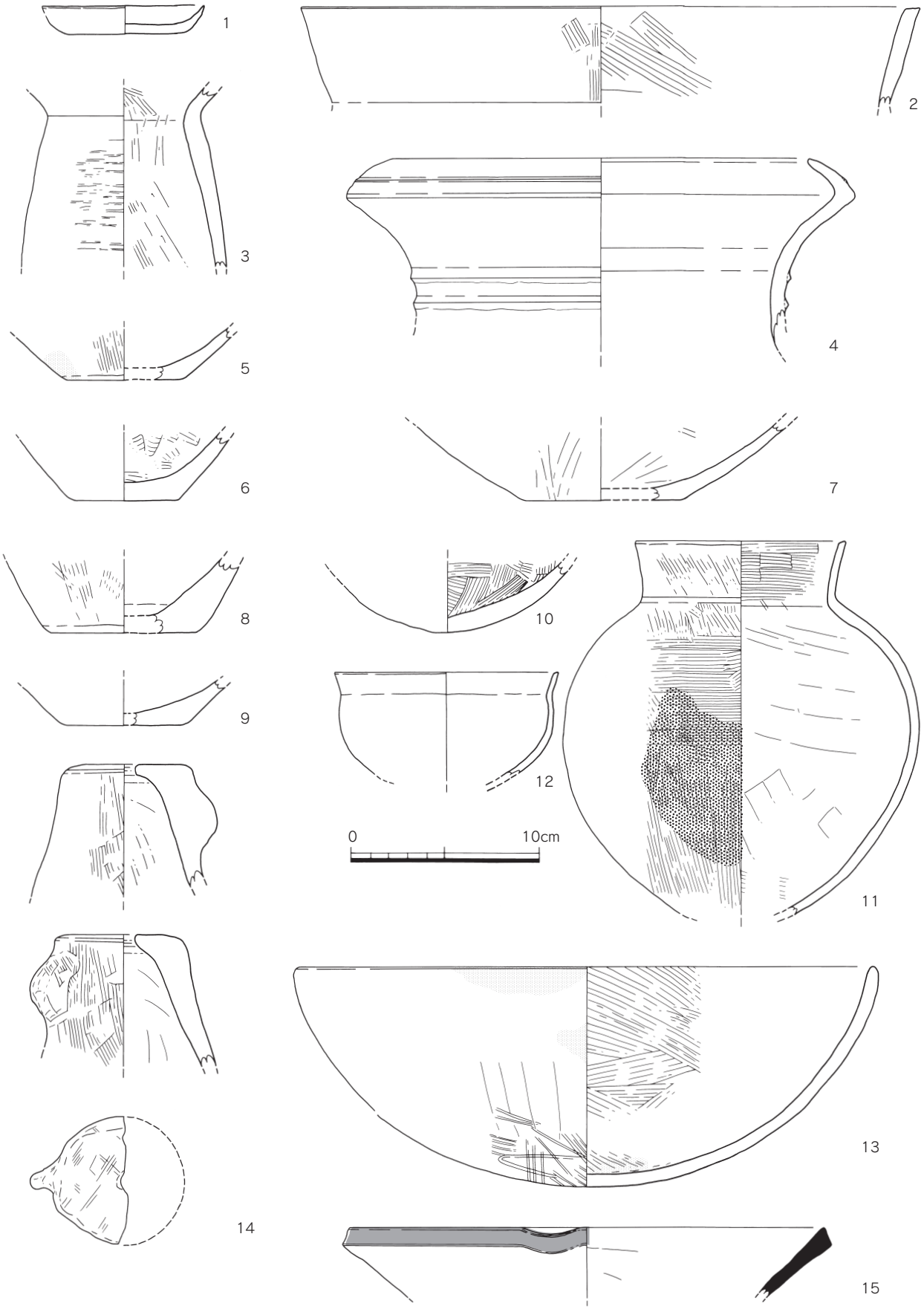


第108図　5・6号土坑実測図（1/30）

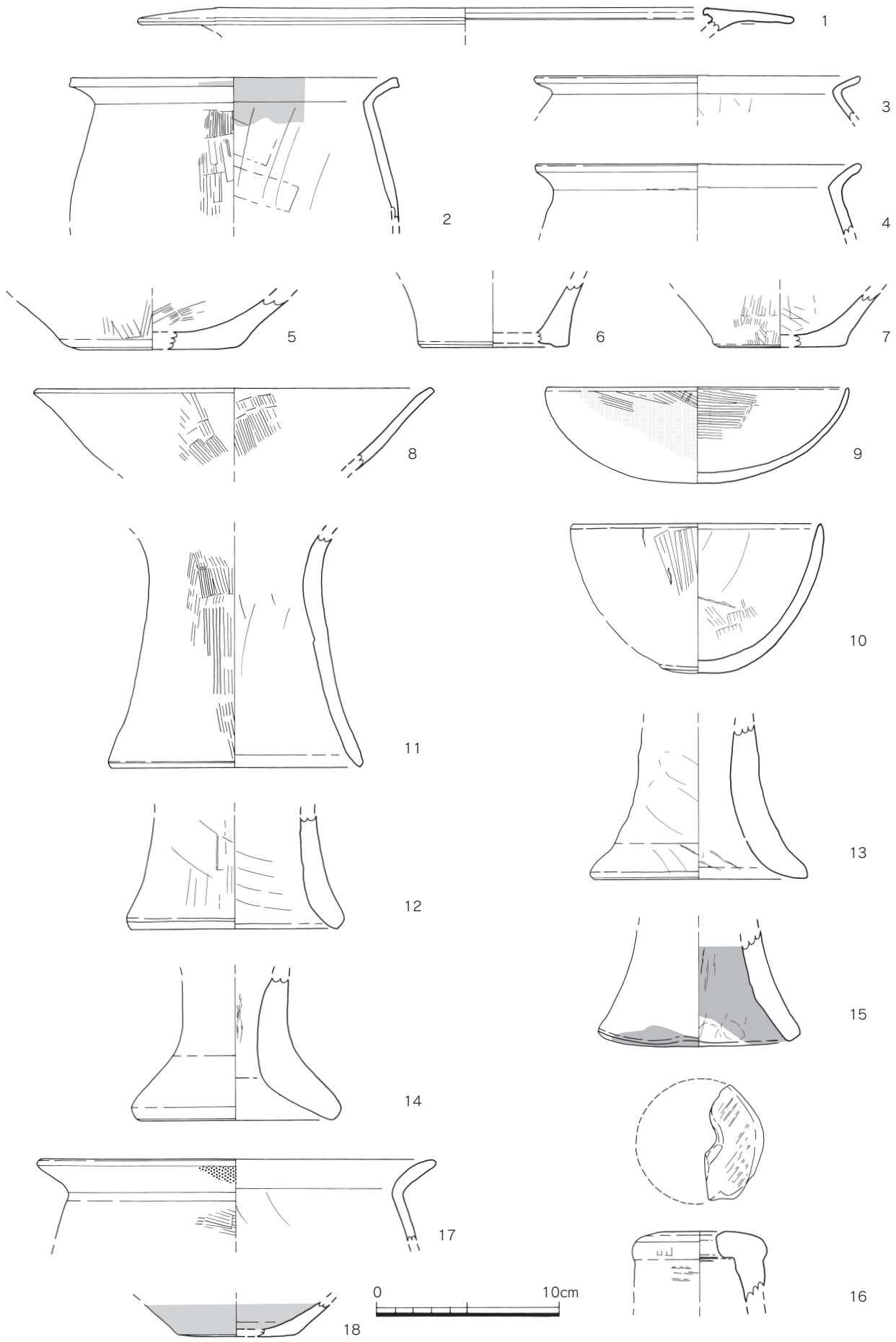
底の底部で、内面にハケメを残す。7は大型の底部片である。中央部を欠くが平底であろう。外面にミガキ状の調整、内面にナデと斜ハケを施す。8は肉厚の底部片で、中央部を欠くが平底であろう。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9も平底の底部片で、内外面ともにナデを施す。10は尖底の底部片である。外面にナデ、内面にハケメを残す。

11は小型の甕である。底部を欠くが、おおよその形態は復元できる。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は面をとる。胴部最大径は中位に位置する。外面は口頸部と胴部下半に縦ハケ、胴部上半に横ハケを施す。口縁部内側は横ハケ、胴部は強いナデを施す。

12は小型の鉢である。鉢状の胴部からしまりのない頸部に至り、口縁部は緩く立ち上がる。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。13は大型の鉢である。素口縁で丸底の底部に至る。



第109図　1～3号土坑出土遺物実測図（1/3）



第110図　4～6号土坑出土遺物実測図（1/3）

口縁端部は丸くおさめる。外面はナデ、内面は斜ハケを施す。

14はつまみをもつ支脚で、天井部に焼成前の穿孔を施す。外面は縦ハケ、内面と天井部はナデを施し、平滑に仕上げる。

15は東播系の捏鉢である。混入品か。

4号土坑（第107図2）

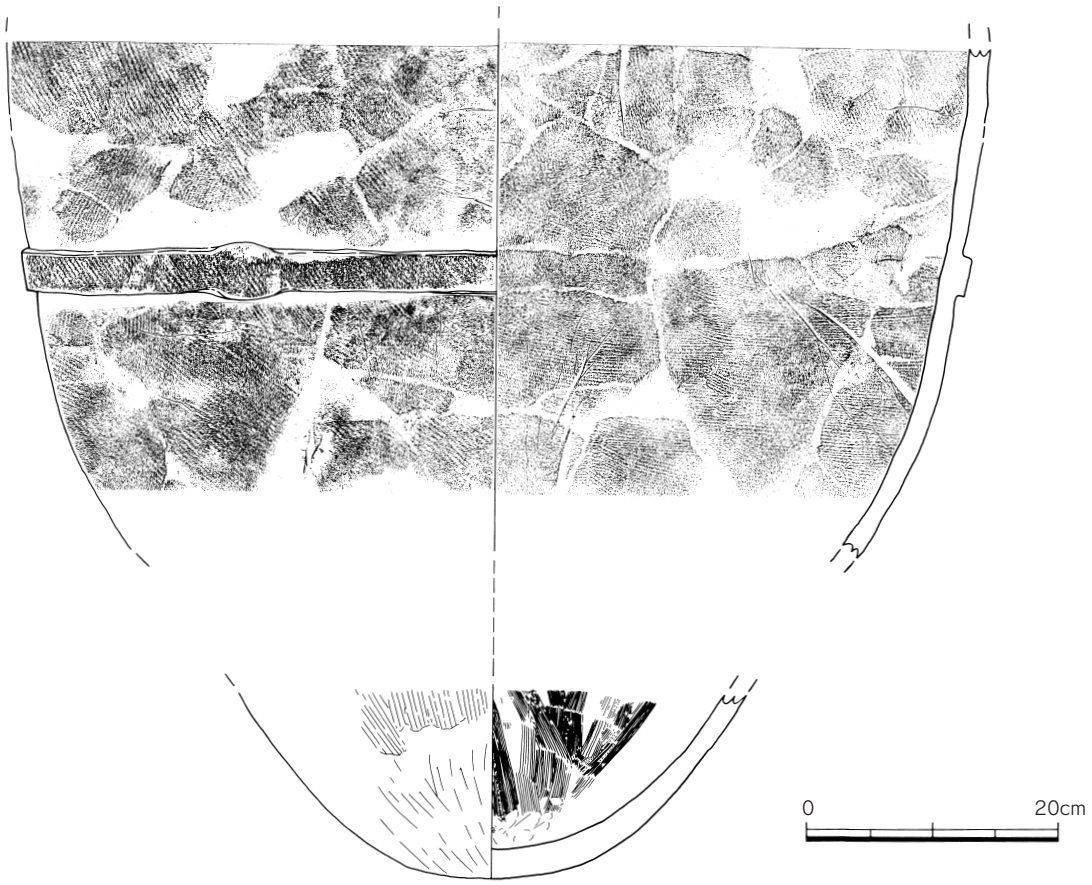
調査区の北側に位置する溝状の土坑で、5号土坑に切られる。土坑の形状を確認するために中央部にトレンチを設定した。東西方向に長軸をもち、現状で長軸3.15m、幅0.9m、深さ0.18mを測る。溝の可能性がある。

出土遺物（第110図1）

1は高坏の口縁部である。直線的に外傾する口縁部で、器壁は薄い。

5号土坑（第108図1）

調査区の北側に位置する土坑で、4号土坑と大溝を切る。また、大溝トレンチ3を掘り下げる際に北側の一部を削っている。ただ、5号土坑より出土した大型の壺の破片が大溝の埋土に食い込んで出土していることから、土坑ではなく、土器溜り状の遺構と判断したほうがよいかもしれない。東西方向に長軸をもち、現状で長軸2.5m、短軸1.92m、深さ0.15mを測る。



第111図　5号土坑出土遺物実測図（1/6）

出土遺物（第110図2～16、111図）

2～4は甕の口縁部である。2は胴の張りが弱い長胴甕である。口縁部は内湾しながら広がり、口縁端部は面をとる。頸部はしまり、内外面ともに明瞭な稜をもつ。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。3は短い口縁部の甕であるが、無頸壺の可能性もある。頸部はやや丸みを帯び、胴の張りが強くなるようである。内外面ともにナデを施す。4は断面く字形を呈する甕の口縁部である。5～7は底部である。5は平底の底部で、少し内湾しながら強く広がる。内外面ともに縦･斜めハケを施す。6は甕の底部で内湾しながら直立気味に立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。7は中央部を欠くが平底の底部で、やや内湾しながら立ちあがる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

8は高坏の坏部である。鉢状の坏部で、口縁部が少し内湾する。口縁端部は面をとる。内外面ともに斜めハケを施す。

9・10は椀である。9は丸底の椀で口縁部が丸みを帯びる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともに横ハケを施す。10は凸レンズ状の底部をもつ深みのある椀である。口縁端部は丸くおさめる。外面は縦ハケ、内面はナデと斜めハケを施す。

11～15は器台である。11はやや薄手の器台である。口縁部を欠くが、くびれ部がやや上位に位置する。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。脚端部はやや薄くなる。12は器台の下半部である。脚端部はやや肥厚する。内外面ともにナデを施す。13は胴部が締まる器台で、脚端部に向かってラッパ状に広がる。内外面ともにナデを施す。14は肉厚な器台の下半部である。小片から復元しているのでやや径に不安が残る。脚部は屈曲し、脚端部は弱く面をとる。15は薄手の器台の下半部である。脚端部のゆがみが大きく、脚径の復元にやや不安がある。外面はナデ、内面にナデと指オサエ痕を残す。

16は支脚片である。1/2弱のものを図上で復元しているので、支え部分の傾きを復元できず、筒状にしている。外面はタタキ、内面はナデを施す。天井部はタタキを施し、中央部に円孔をもつ。

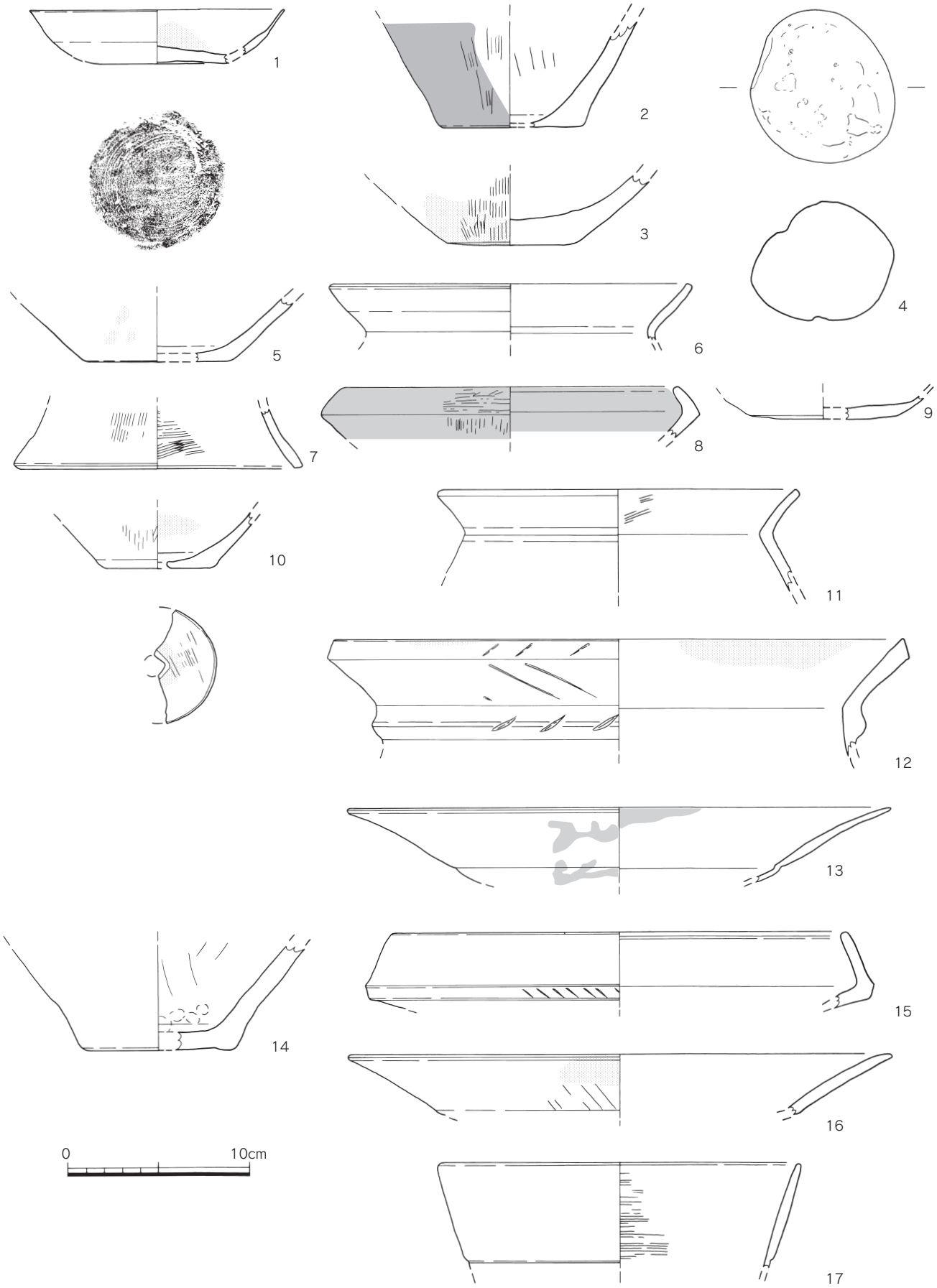
第111図は大型の甕の下半部である。破片が広がった状態で確認されたが、上半分は確認できなかった。また、底部と胴下半分も接続部分を欠いている。この甕の底部は丸底で、外面に擦過痕と縦ハケメを残す。内面は底部中央に指オサエを施し、全面に縦ハケを残す。胴部も内面は全面的に縦方向のハケを主体としつつ、突帯部分には斜ハケを施す。外面はハケメの後にタタキを全面に施す。胴部最大径部のやや下に扁平な方形突帯を巡らし、タタキを施す。

6号土坑（第108図2）

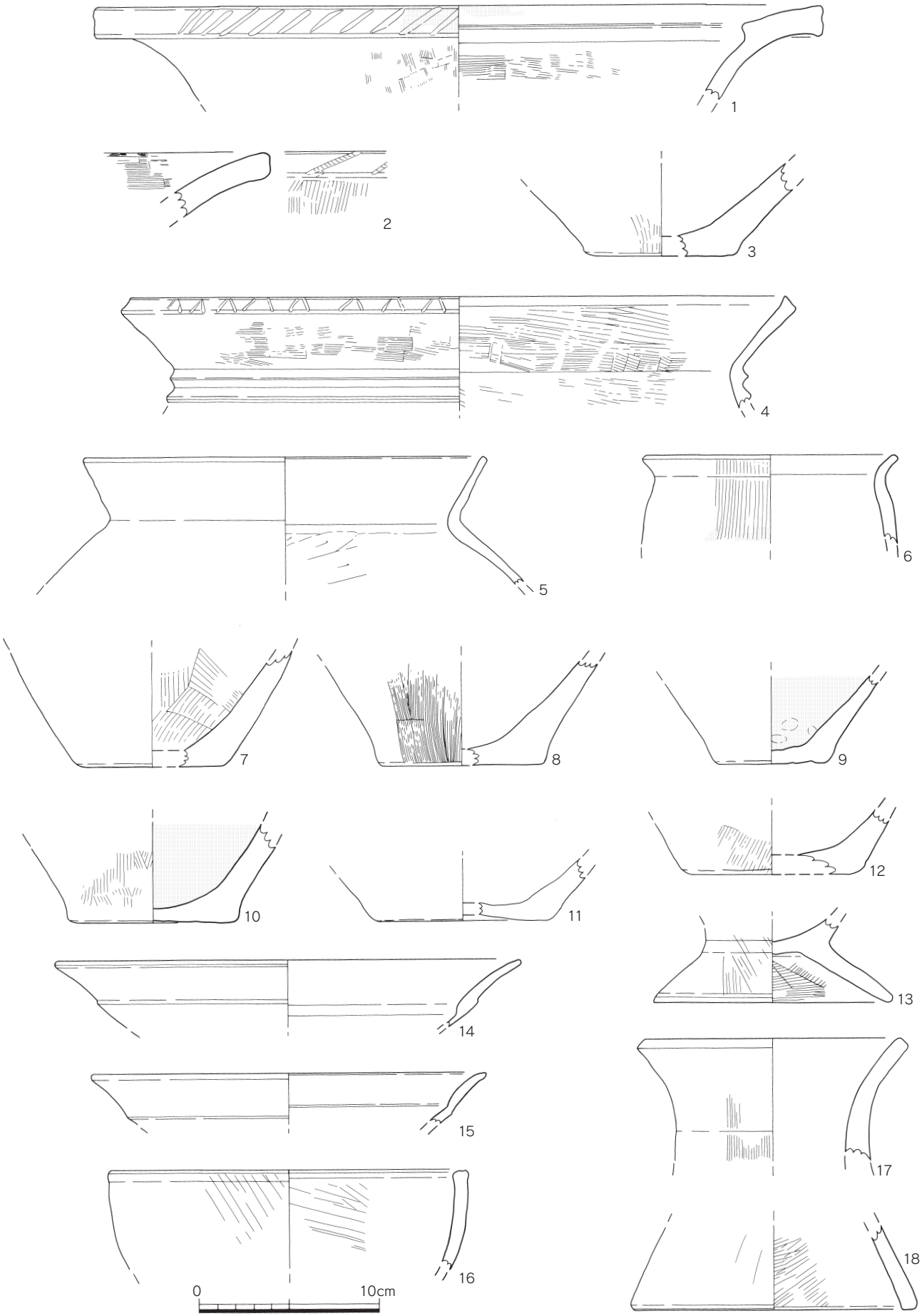
調査区の北側で確認した隅丸長方形の土坑である。当初土壙墓もしくは木棺墓の可能性を考え、トレンチを設定したが、棺等の痕跡はなく土坑と判断した。南北方向に長軸をもち、長軸2.95m、短軸1.42m、深さ0.27mを測る。

出土遺物（第110図17・18）

17は甕の口縁部である。口縁部は肥厚し、口縁端部は丸くおさめる。頸部には明瞭な稜がはいる。外面に横ハケ、内面にナデを施す。18は底部である。中央部を欠くが、平底で、強く広がりながら立ちあがる。



第112図　ピット出土遺物実測図（1/3）



第113図　北トレンチ出土遺物実測図（1/3）

(4) ピット出土遺物（第112図）

1はピット3から出土した土師器坏である。底部からの立上がり部を欠くが、全体の形態は把握できる。底部は厚底で、回転糸切り痕を残す。

2はピット11から出土した弥生土器の甕底部である。底部中央を欠くが平底で、外面にハケメを残す。内面はナデを施す。

3・4はピット13出土品である。3は壺の底部で、断面が凸レンズ状を呈する。外面に縦ハケを施す。4は軽石製の浮子である。平面円形で、断面楕円形を呈する。

5・6はピット16出土品である。5は壺の底部で、中央部を欠くが平底と思われる。6は土師器甕の口縁部である。全体的に薄く仕上げている。

7～9はピット21の出土品である。7は脚部片か。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。器壁が薄すぎるため、甕の口縁部の可能性もある。8は複合口縁壺の口縁部片である。屈曲部は明瞭で、口縁端部はやや丸みを帯びる。9は土師器坏の底部片である。

10～13はピット22出土品である。10は平底の甕の底部片で中央部に焼成前穿孔を施す。11は甕の上半分片である。頸部は強くしまり、内外面に明瞭な稜がはいる。12は大型甕の口縁部である。刻目をもつ台形の突帯を巡らせる頸部から、広がりながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部には面を取り、ヘラ状工具で刻目を施す。13は高坏の口縁部片である。反転部が伸び、口縁端部は丸くおさめる。

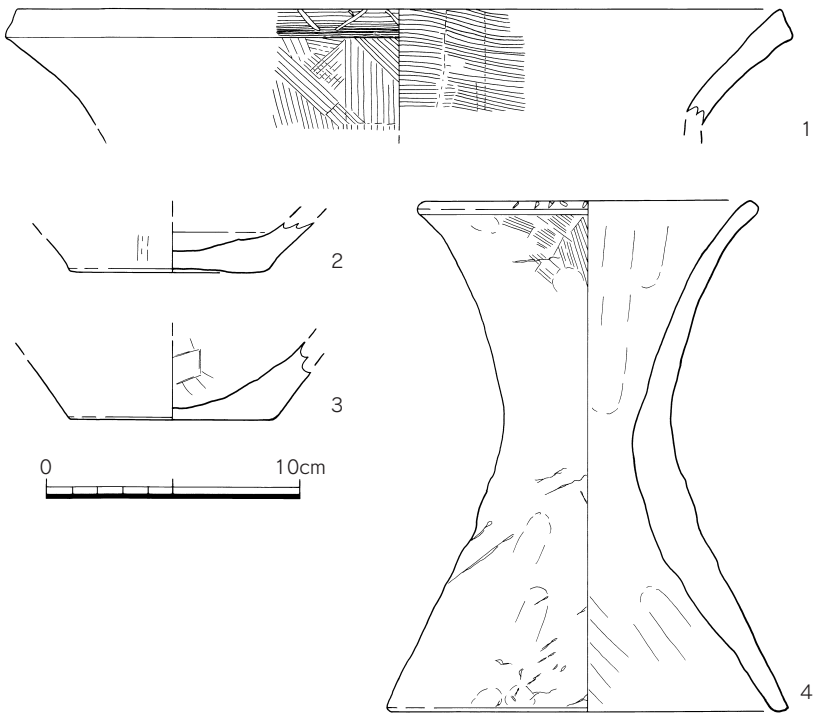
14～17はピット23出土品である。14は平底の甕の底部で、中央部を欠く。15は複合口縁壺の口縁部で、屈曲部に面をとり、刻目を施す。屈曲部から口縁端部に向けて内傾しながら立ち上がる。16は高坏の口縁部片である。反転部が伸び、口縁端部は丸くおさめる。17は坏部が深い高坏の口縁部である。全体的に薄く仕上げ、内面に横ハケを施す。

(5) その他の遺物

北トレンチ出土遺物（第113図）

第113図は調査区の北端部に設定したトレンチから出土した土器である。1～3は壺である。1は大型の鋤先口縁壺である。口縁部は跳ね上げ気味で、その断面は方形に近い。口縁端部には丁寧な横ナデのあと、ヘラ状工具を斜めに押し当て刻目を施す。内外面ともに頸部にはハケメを残す。2も大型壺の口縁部である。小片であったため、口径は出せず、断面のみを掲載する。口縁部の内面には横ハケ、外面には縦ハケを施し、口縁端部にはヘラ状工具で刻目を施す。3は壺の底部である。外面にハケメがうっすらと残る。

4～13は甕である。4は大型の甕の口縁部であるが、小片からの復元であるため、口径にやや不安が残る。口縁部は薄く仕上げ、口縁端部にヘラ状工具を当てて、ハ字状の文様を巡らせる。頸部には三角突帯を二条巡らせる。内外面ともに横ハケを施す。5は土師器の甕の上半部である。直線的に広がる口縁部で、端部の調整を丁寧に行う。胴部内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。6は小型の甕である。頸部のしまりは緩く、内外面ともに弱い稜線がはいる。外面に縦ハケを施す。7～13は甕の底部である。7は平底で、内面に不定方向のハケメを残す。8も平底で外面に



第114図　東・西トレンチ出土遺物実測図①（1/3）

細かいハケメを残す。9は粘土充填の様子が分かる底部で、内面に指オサエ痕を多く残す。また、内面全面が黒色化する。10はわずかに上底で、内面にススが付着する。外面に縦ハケを施す。11は底径が大きく、上底である。壺底部の可能性もある、12は直線的に立ち上がる底部で外面にハケを施す。13は脚台付の甕である。脚部はわずかに丸みをもちつつ広がり、端部を丸くおさめる。外面は縦ハケ、脚内面は断続横ハケを施す。

14・15は高坏である。いずれも小片から復元したので、口径に不安が残る。14・15はいずれも屈曲部後、短く外側に広がる口縁部である。16は大型の鉢である。口縁端部に面をもち、内外面ともに斜ハケを施す。やや肉厚である。17・18は器台である。17は器台の上半部で、外面に縦ハケを施す。18は器台の脚部で、内面に斜めハケを施す。

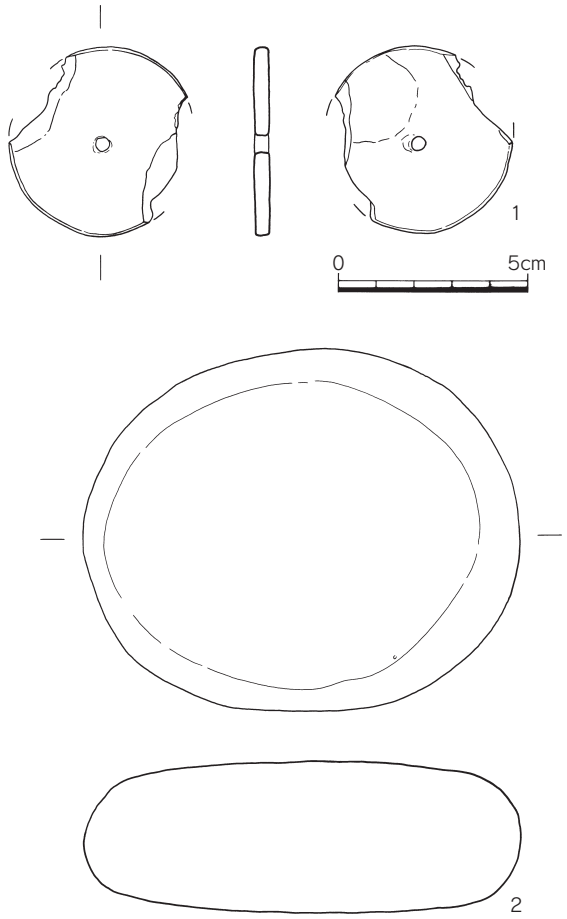
東・西トレンチ出土遺物（第114・115図）

第114図1は西側トレンチ出土の甕である。大型の甕で、広がりながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は面をとり、横ハケを施した後、ヘラ状工具で×字状に刻目をつける。口縁部外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。2～4は東側トレンチ出土品である。2は若干上底の底部片である。全体的に摩滅しているが、外面に縦ハケを施した痕跡が残る。3は平底の底部で、直線的に立ち上がる。4は図上で完形に復元された器台である。クビレ部が若干上方に移動し、口縁端部に刻目を施す。外面は上位に斜ハケ、下部に粗いナデを施し、内面は指ナデを施す。

第115図1は赤雲母片岩製の紡錘車で、破損品である。直径5.0㎝、厚さ4.0～4.3㎜、孔径4.2・4.3㎜を測る。平面は丁寧な研磨を施し、研磨痕もほとんど確認できない。側面は平面に対して横方向の研磨を行い、面をとる。2は敲石である。安山岩系で、側面の敲打痕を残す。長軸11.6㎝、短軸9.7㎝、厚さ4.0㎝を測る。

包含層出土遺物（第116～119図）

第116図1は大型鋤先口縁壺である。鋤先口縁は形骸化し、断面方形に近い形状となる。口縁端部にはヘラ状工具で刻目を施す。頸部には縦ハケメを残す。2は壺の上半部である。口縁端部は丸くおさめ、ヘラ状工具で細かい刻目を施す。頸部のしまりは弱く、弱い稜線がはいるのみである。

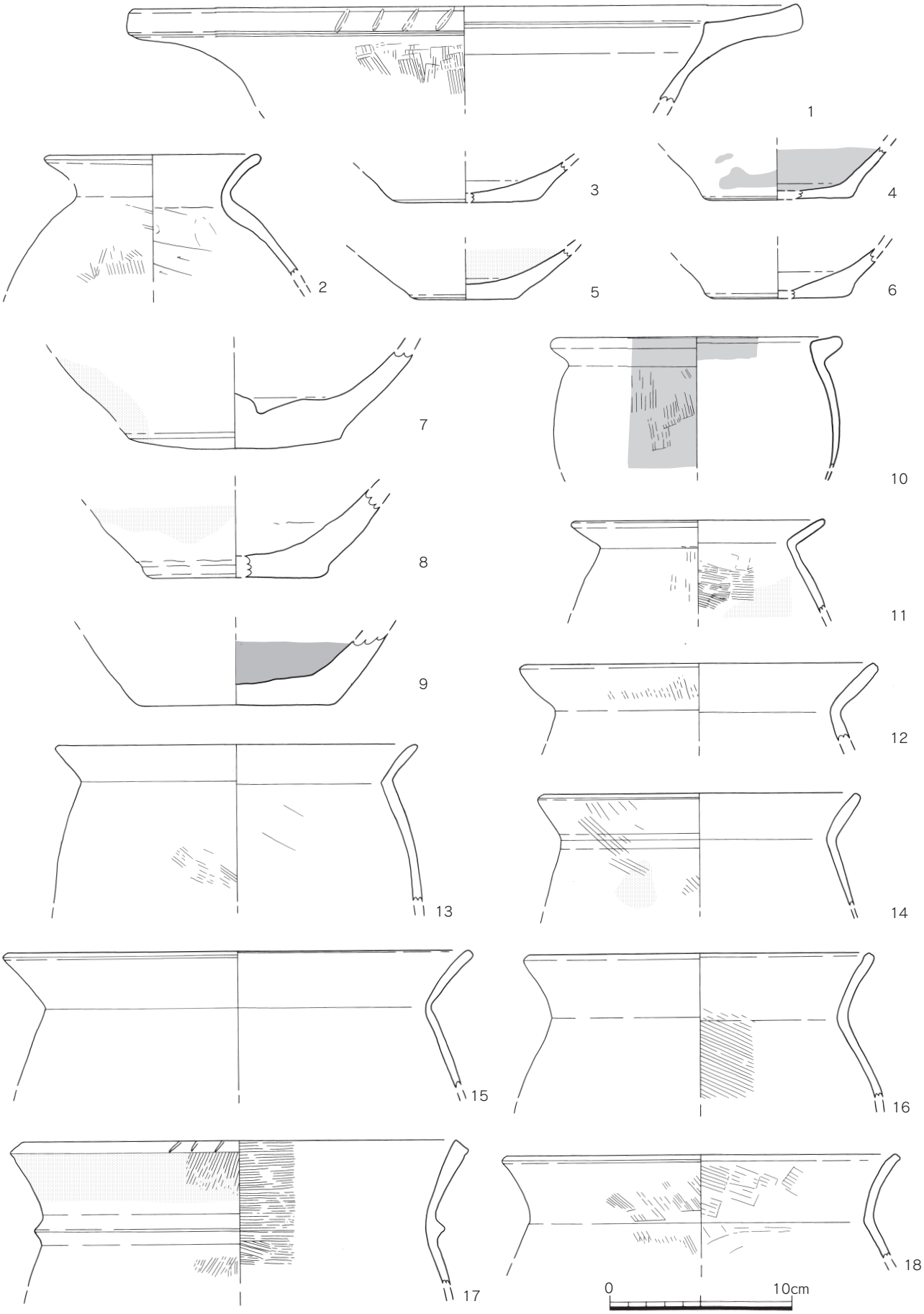


第115図　東・西トレンチ出土遺物実測図②（1/2）

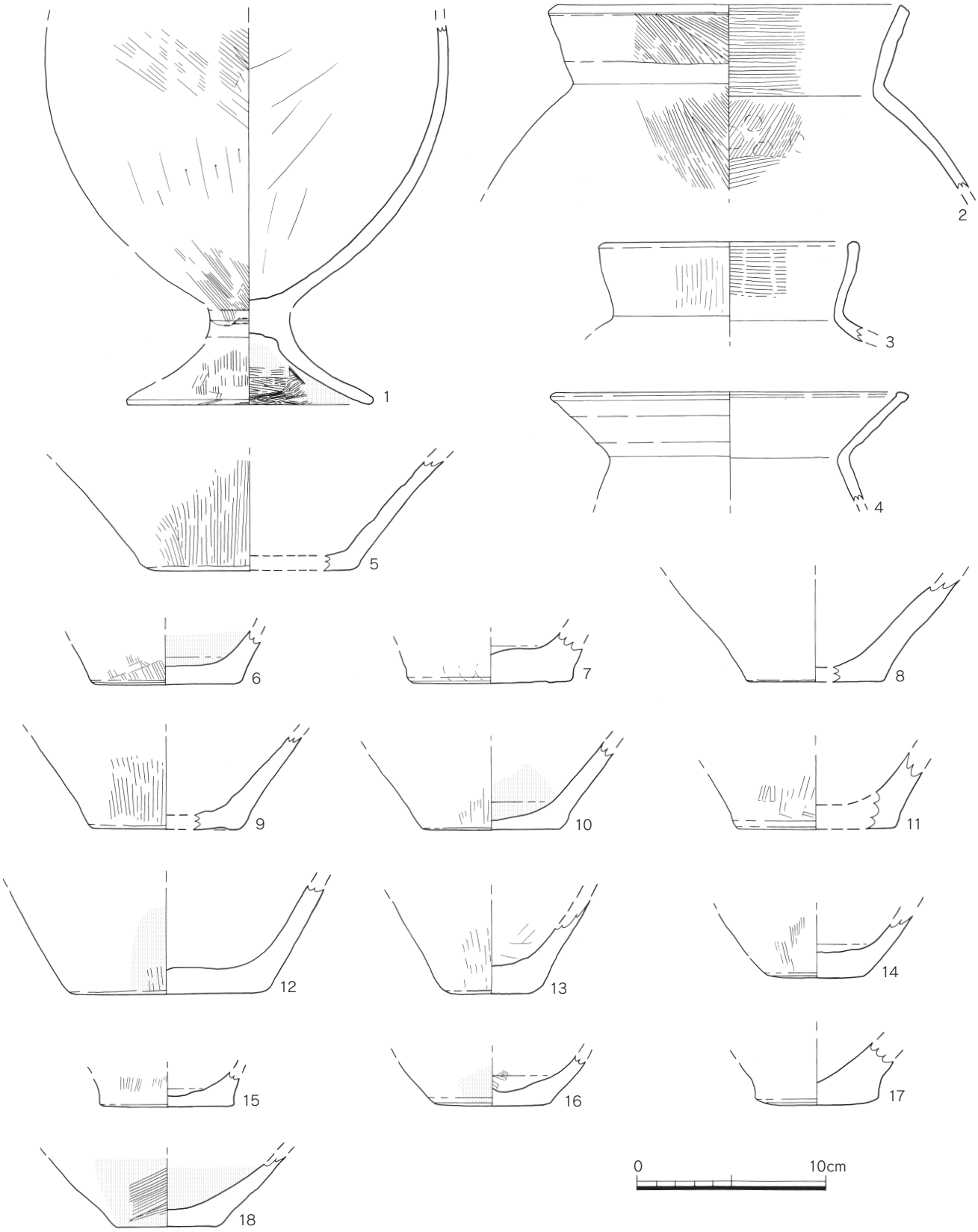
胴部外面にはハケ、内面には横ケズリを施す。3～6は壺の底部である、いずれも平底である。7～9は大型の壺もしくは甕の底部である。7は凸レンズ状底を呈し、非常に肉厚である。内面の調整は粗い。8・9は平底の底部である。10～18は甕の上半部である。10は断面隅丸三角形の粘土帯を口縁部とする小型の甕で、やや胴が張る。外面は縦ハケを施し、外面全面と内面口縁部に丹塗りを施す。11も小型の甕であるが、小片から復元しているので、口径や形態にやや不安が残る。口縁部は直線的に広がり、端部は丸くおさめる。胴部外面に縦ハケメ、内面に横ハケメを残す。12は甕の口縁部である。く字形の口縁部をもち、口内端部は面をとる。口縁部の外面にはハケメを残す。13は長胴甕である。口縁部は短く広がるが、口縁端部は丸くおさめる。頸部はしまり、明瞭な稜線が残る。14も長胴甕である。口縁部はやや肥厚しながら立ち上がり、口縁端部に面をとる。外面はハケメを残し、頸部はしまる。15はやや胴が張る甕である。全体的にうすく仕上げられ、口縁端部が肥厚し、面を取る。16は頸部のしまりが緩い長胴甕である。口縁端部は面をとり、胴部の張りは弱い。胴部内面にはハケメを残す。17はやや大型の甕である。頸部は緩くしまり三角突帯を巡らせる。口縁部は肥厚しながら立ち上がり、口縁端部は面をとり、ヘラ状工具で刻目を施す。18は甕の上半部である。口縁部は内彎しながら立ち上がり、端部に面をとる。頸部は緩くしまり、外面の稜は不明瞭になる。内外面共にハケメを残す。

第117図1は脚台付の甕である。口縁部を欠くが、張りのある胴部から窄まり、ラッパ状に開く脚部に至る。脚部は内外面共にハケを施し、胴部はハケの後にナデ、内面はナデを施す。2は甕の上半部である。直線的に広がりつつ立ち上がる口縁部をもち、口縁端部に面をとる。張りのある胴部で、頸部はしまり、明瞭な稜をもつ。外面は縦ハケを主体とし、内面口縁部は横ハケ、胴部は縦ハケを施す。3は内彎しつつ立ち上がる口縁部をもつ甕で、口縁端部を丸くおさめる。口縁外面は縦ハケ、内面に横ハケを施す。4は布留系の甕であるが、小片から復元したため、やや器形に不安が残る。口縁部は直線的に広がり、口縁端部には面をとる。全体的に器壁を薄く仕上げる。

5～18は底部片である。5は中央部を欠く底部片で、小片から復元したため、やや径に不安が残る。外面は縦ハケ、内面にナデを施す。6は平底の甕で、外面に斜ハケ、内面にナデを施す。7は

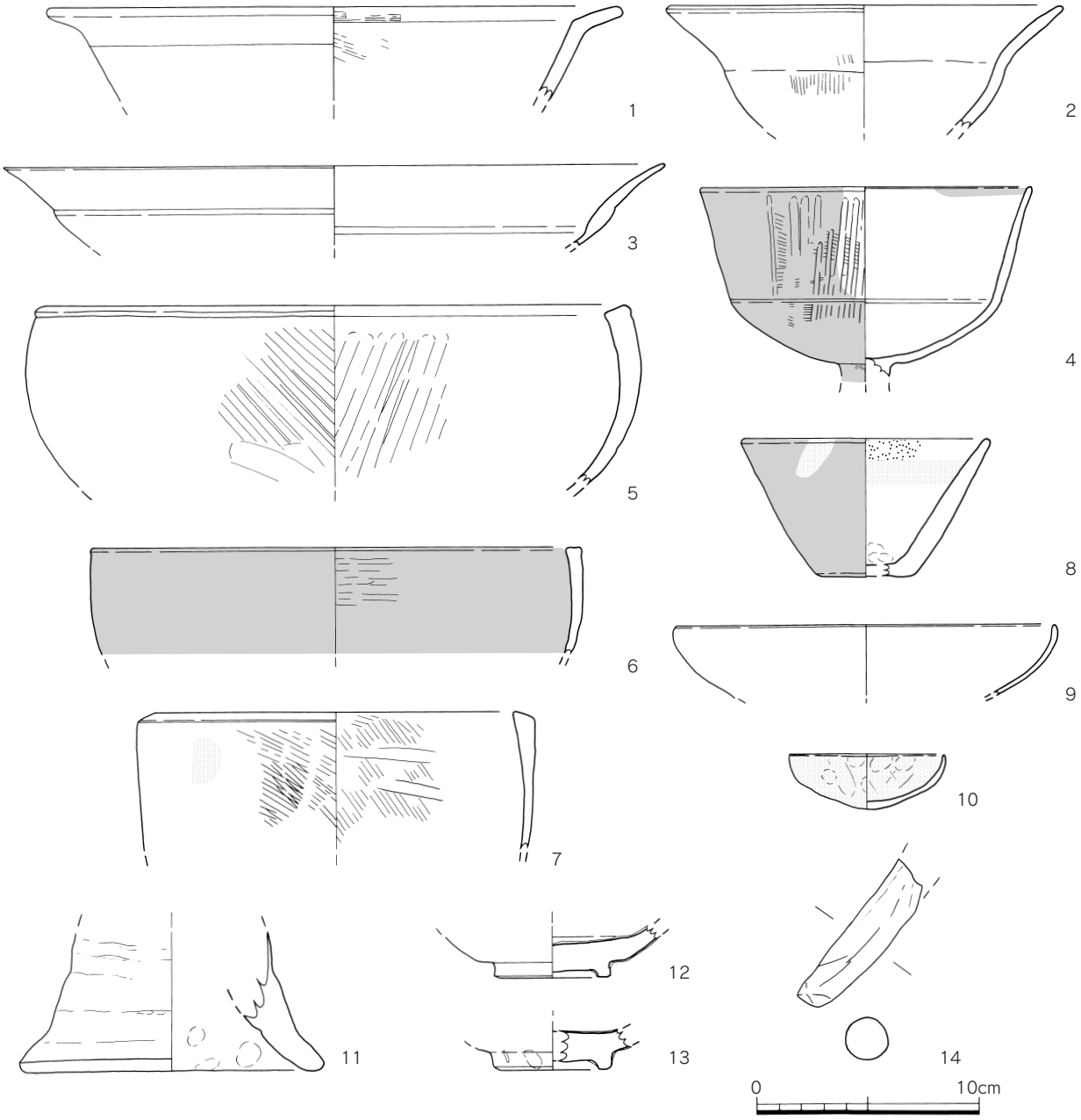


第116図　包含層出土遺物実測図①（1/3）



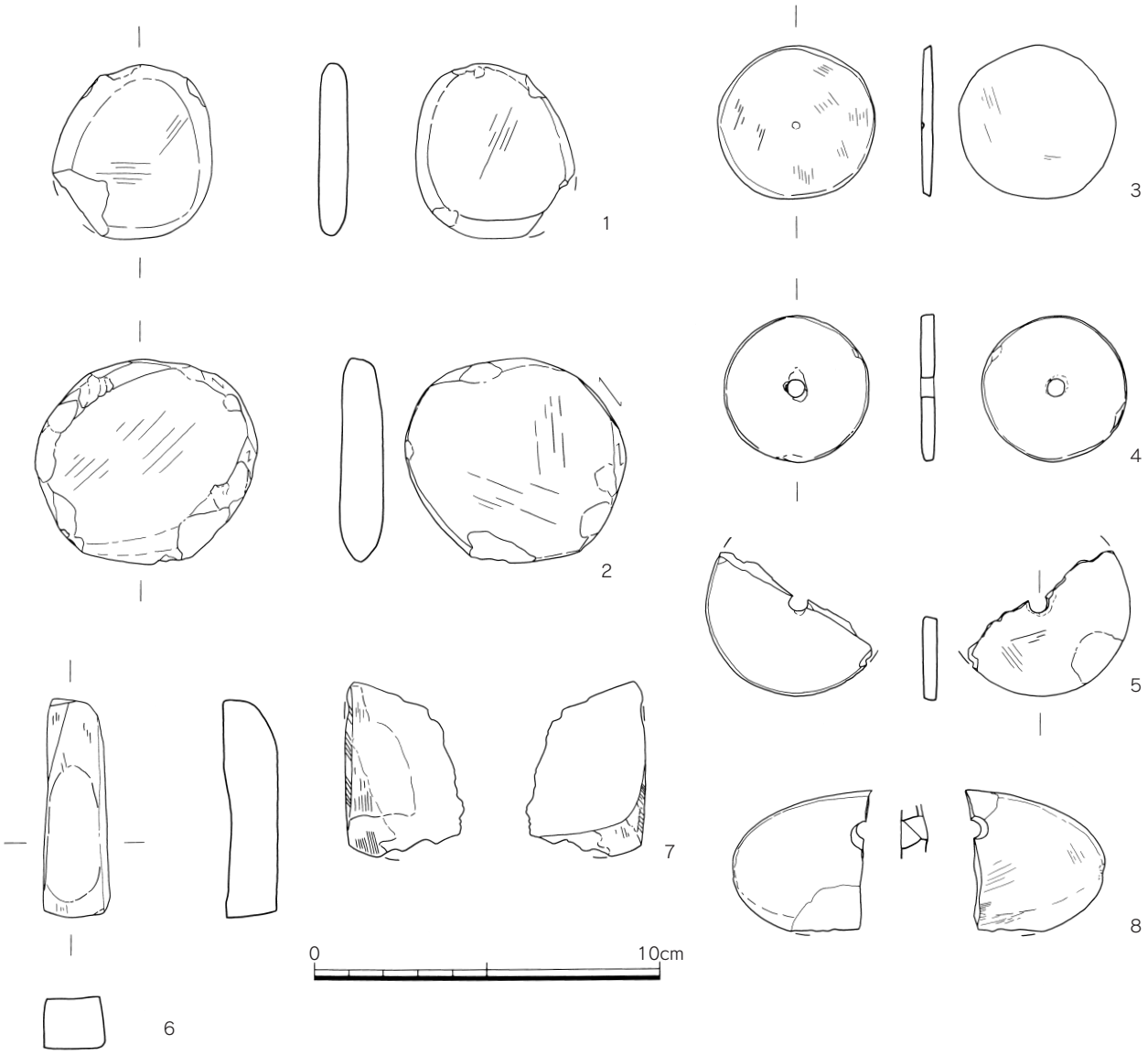
第117図　包含層出土遺物実測図②（1/3）

平底の甕である。肉厚の底部で外面に指オサエ痕を残す。8は中央部を欠くが平底の底部と思われる。内彎しつつ立ち上がり、壺の底部の可能性がある。9は甕の底部で、中央部を欠く。外面には



第118図　包含層出土遺物実測図③（1/3）

ハケ、内面にはナデを施す。10は平底の底部で、直線的に立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。11は中央部を欠くが平底と思われる甕で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12は大型甕の底部片で、平底である。直線的に立ち上がり、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。13は小型の甕の底部で、厚底である。底径は小さく、直線的に立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。14はやや凸レンズ状の底部をもつ甕で、丸みをもちつつ立ち上がる。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。15は平底の甕の底部である。外面は縦ハケ、内面はナデを施す。16はやや凸レンズ状の底部をもつ甕で、内外面ともにナデを施す。17は凸レンズ状の底部で、立ち上がり部に指オサエを施し、内彎させる。内外面共にナデを施す。18は平底の底部である。やや丸みをもちつ



第119図　包含層出土遺物実測図④（1/2）

つ立ち上がり、外面にハケ、内面にナデを施す。

第118図1～4は高坏である。1は内傾する口縁をもつ高坏で、坏部は半球状を呈する。内面にハケメを残す。2は1よりも口縁部が伸びる高坏である。口縁部に比べて、坏部が小さく、半球状を呈する。外面に縦ハケを施す。3は口縁部上半が反転する高坏であるが、反転部は短い。4は深い坏部をもつ高坏坏部である。脚部を欠くが短脚であると思われる。口縁部は浅い椀状の坏部から、直線的にやや広がりながら立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面は横から斜め方向のハケののち、暗文状の縦ミガキを施す。

5～10は鉢・椀である。5は大型の鉢の上半分である。口縁端部は面をとり内傾する。器壁は口縁部付近が厚く、胴下部に向かうにつれて、薄くなる。外面は斜め方向のタタキを施したのち、下から削り上げる。内面はミガキ状のナデを施す。6は5と似た形態であるが、やや小ぶりのものである。口縁部は直立気味で、端部に面をとる。内面に横ミガキ状のナデを施す。7は筒状の土器で全体の形状は不明である。口縁部は直立気味で、端部に面をとり、外傾する。器壁は口縁部が最も厚い。外面、内面共に斜ハケを施す。8は椀である。底部は中央部を欠くが平底で、直線的に広が

りながら立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。9は口縁部が丸みをもつ椀で、底部を欠く。器壁は非常に薄い。10は手捏土器である。器壁は薄く、底部は丸底である。

11は器台の下半分である。外面は絞り痕を多く残す。内面は欠損部分が多いが、指オサエが確認できる。

12・13は青磁椀の底部付近の破片である。12は龍泉窯系の青磁椀で釉薬を比較的厚くかけ、高台内面にまで及ぶ部分がある。基本的に高台下と底部下面は露胎である。13も龍泉窯系の青磁椀であるが、釉薬のかけ方が雑で、外面高台部分が一部露胎している。

14は防長系の脚鍋の脚部か。

第119図は包含層から出土した石器である。1 ～ 5は紡錘車である。1は白雲母片岩製の紡錘車未製品である。側面に加工は認められず、自然面を残し、上下面に弱い研磨を施す。ある程度の丸みをもつ石材の場合、厚さの調整から行うことを示す資料といえる。長さ5.1㎝、幅4.6㎝、厚さ0.85～0.91㎝を測る。2はやや大型の紡錘車未製品で、石材は白雲母片岩を用いる。上下面のある程度の研磨が終了し、不正形であった石材の側面を削り略円形に整える段階の資料である。下側を除くすべての側面に、上下面に並行するケズリを施す。長さ5.9㎝、幅6.4㎝、厚さ1.18～1.35㎝を測る。3も紡錘車の未製品である。上下面は研磨痕を残すが、非常に平滑であり、側面の面取り研磨も終了したもので、穿孔直前段階の未製品である。未製品の中心から少しずれた箇所に窪みがある。直径4.5㎝、厚さ0.35～0.4㎝を測り、石材は雲母片岩である。筆者分類のⅡａ類である（平尾2008）。

4は紡錘車の完形品である。上下面は丁寧な研磨を施し、研磨痕は確認できない。側面は面取りの研磨を施す。直径4.3㎝、厚さ0.39～0.41㎝を測ることからⅡａ類と判断される。孔径は左が0.56㎝、右が0.58㎝を測り、右側の面から穿孔を始めたことがわかる。左側の孔付近の剥離は、穿孔貫通時の剥離の可能性がある。石材は白雲母片岩である。5は紡錘車の1/2程度の破片である。直径は5.6㎝に復元され、厚さは0.39～0.42㎝を測り、Ⅱａ類の紡錘車である。上下面は平滑に仕上げるが研磨痕を残す。側面は面取り横研磨を行うが、実測図の下側の側面は鑿状工具によるケズリが施される。

6は砥石で全ての側面で研磨痕が認められる。特に平面図を示している面の窪みが著しい。砥石のキメは細かい。長軸6.4㎝、幅1.9㎝、厚さ1.5㎝、重さ33.26gを測る。

7は小型の両刃石斧の破片である。欠損部分が多いが、厚さは1㎝程度を測ると思われる。側面、平面、刃部まで全面に研磨痕を残す。古手の両刃石斧か。

8は輝緑凝灰岩製の石包丁で、1/2弱の破片である。刃部も大きく欠く。背は丸く、両面から穿孔を行う。（平尾）

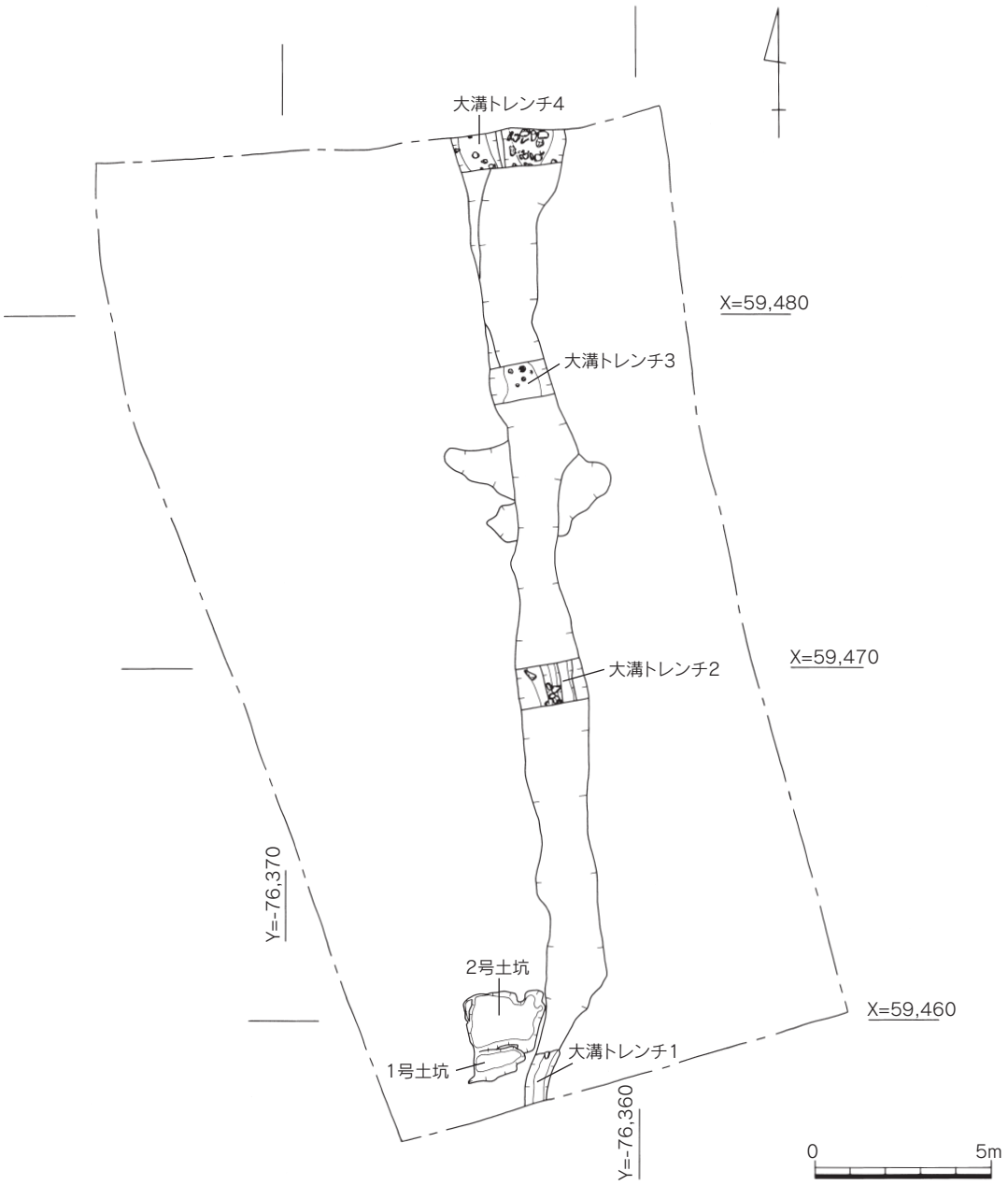
【参考文献】

平尾和久　2008「紡錘車の編年とその画期」『伊都国歴史博物館紀要』3

Ⅶ．屋敷地区467番地

1．調査の概要

平成24年度に実施した調査で南小路地区461番地で確認された大溝の延長方向が確認できるように調査区を設定した。しかし、本調査区は南側の土地と比高差が2ｍ以上あり、溝の存在も危ぶまれたが、かろうじて最下層のみ確認された。結果的に屋敷地区467番地の旧地形は北から南へ自然と上がっていく形と想定され、ある段階で大規模な掘削が行われ、水田として用いられたことが確認された。なお、15㎝ほどの耕作土を除去するとすぐに遺構面が確認された。

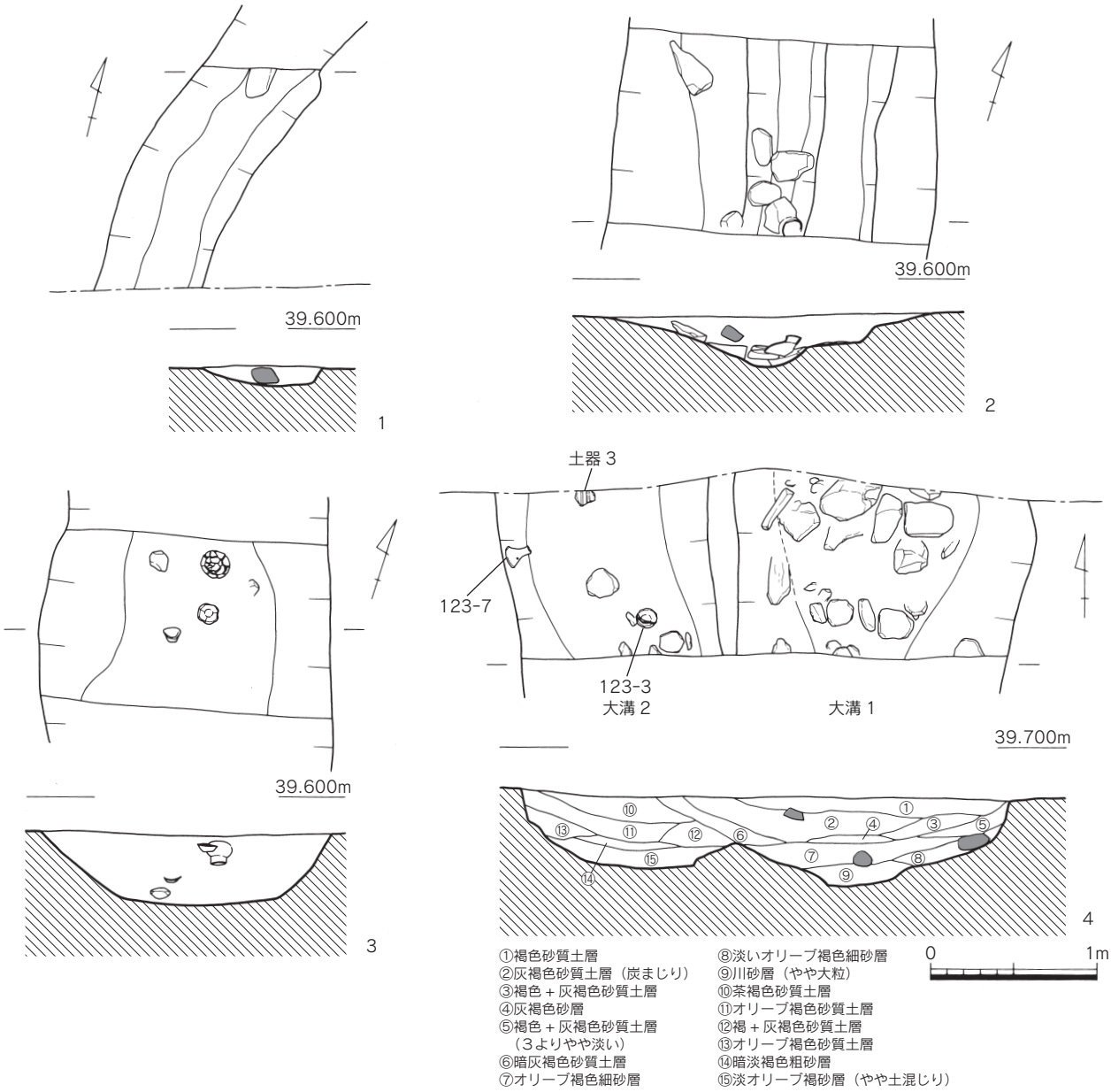


第120図　三雲・井原遺跡屋敷地区467番地全体図（1/200）

2．遺構と遺物

（1）大溝

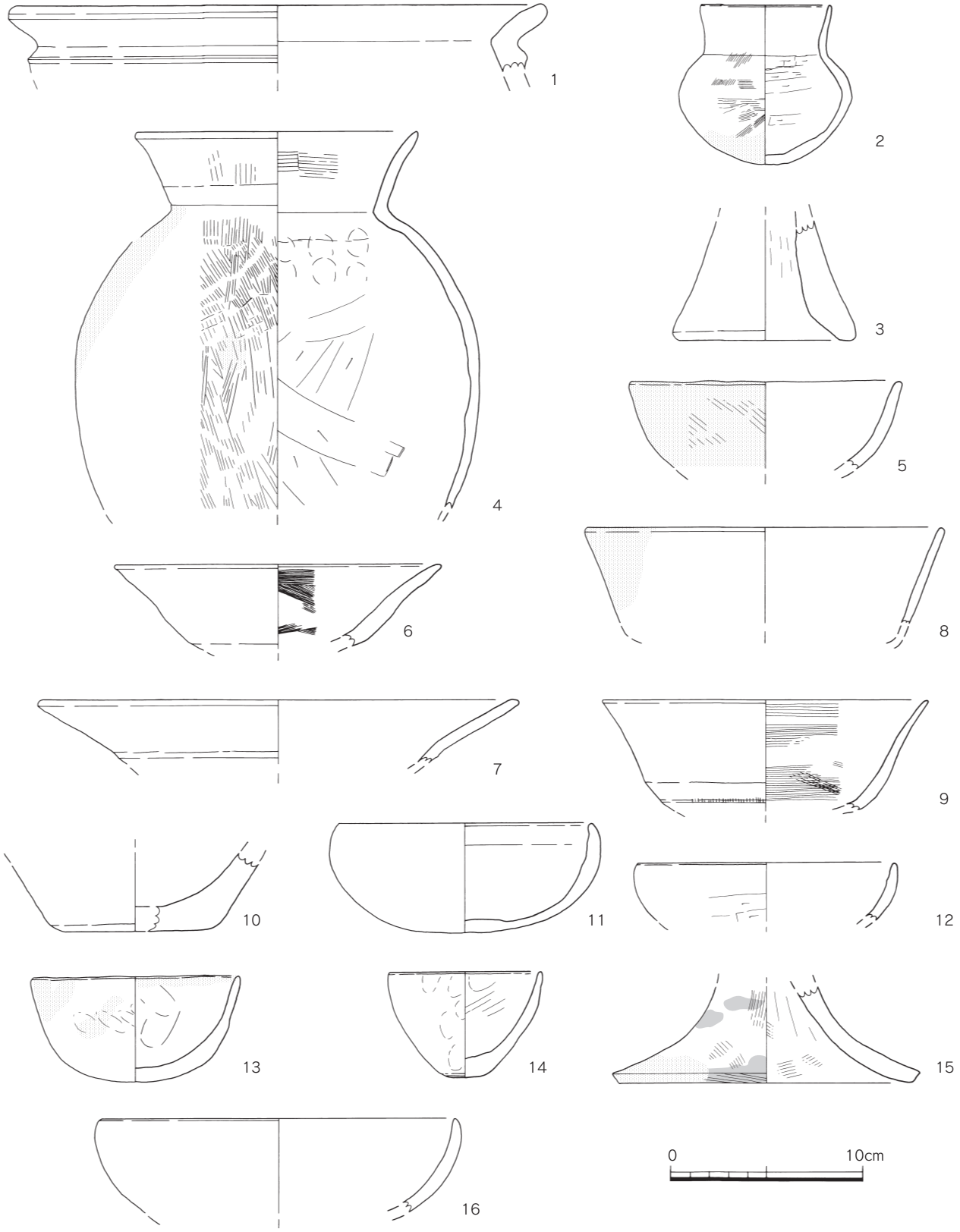
南小路地区461番地で確認された大溝は467番地でも確認された。そこで大溝の深さと掘削・埋没時期を確認するために4箇所にトレンチを設定した。南側では幅が0.65m、深さ10cmほど、461番地の大溝最下層のみが、かろうじて残された状態であったが、北側では幅2mほど、深さ0.55mほど確認された。また、トレンチ4では別の溝を切って大溝が開削されていることも判明した。そこで以下では新しい溝を大溝1、古い溝を大溝2として報告する。なお、大溝1・2とも道を挟んで北側に位置する屋敷地区500番地の調査区でも確認され、1号溝として報告されている（岡部・牟田編2006）。そのほか、調査区の南側で2つの土坑を確認したが、埋土や溝の削平状況から新しい撹乱土坑であると思われる。



第121図　大溝トレンチ平面・土層断面図（1/40）

大溝トレンチ1（第121図1）

検出された大溝の最も南の位置に設定したトレンチである。南側の農地と比高差が2ｍ以上ある



第122図　大溝トレンチ1～3出土遺物実測図（1/3）

ため、大溝の存在も危惧されたが、最下層のみ残されていた。埋土は砂礫で、南小路地区461番地で確認された大溝最下層と同じものである。幅0.65m、深さ10㎝程度のみの確認である。小形丸底壺が残りの良い状態で出土している。

大溝トレンチ1出土遺物（第122図1～3）

第122図1～3は大溝トレンチ1からの出土品である。1は甕の口縁部で、断面く字状を呈する。口縁の下には三角突帯を巡らせる肉厚の甕である。2はトレンチ1の砂利層から出土した小形丸底壺である。口縁部は直立気味に弱く開き、胴部最大径が中位まで下がる。外面は全面にハケ、内面にはケズリを施す。3は器台の脚部で、内面に絞り痕を残す。

大溝トレンチ2（第121図2）

調査区の中央部やや南寄りに設定したトレンチである。幅は2m、深さは30㎝ほどである。断面形態は中央部がややくぼむ形となる。古墳時代前期後半の甕の上半部が良好な形で出土した。

大溝トレンチ2出土遺物（第122図4～9、第125図2）

第122図4～9は大溝トレンチ2出土品である。4は弱く外反する口縁部をもつ甕である。底部を欠くが長胴で外面にハケメ、内面にケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。内面上部には粘土接続痕と指オサエ痕を明瞭に残す。口縁部内面は横ハケメを残す。5は椀である。外面にはハケを施し、全面にススが付着する。6 ～ 9は高坏である。6は屈曲部が不明瞭な高坏で、内面に横ハケを施す。やや肉厚で小ぶりである。7は屈曲部が直線状に延びる高坏で、器壁を薄く仕上げる。やや古手のものか。8は坏部が深い高坏の口縁部である。口縁部は外傾し、一部に黒斑をもつ。9も坏部が深い高坏で、内面に横ハケを施す。外面には接続痕が残る。

第125図2は河原石的な雲母片岩の円礫で、紡錘車の素材と思われる。側面、平面共に未調整で、最初の調整の段階で破損し、廃棄されたものと思われる。直径5.2㎝、厚さは7.0～9.5㎜を測る。

大溝トレンチ3（第121図3）

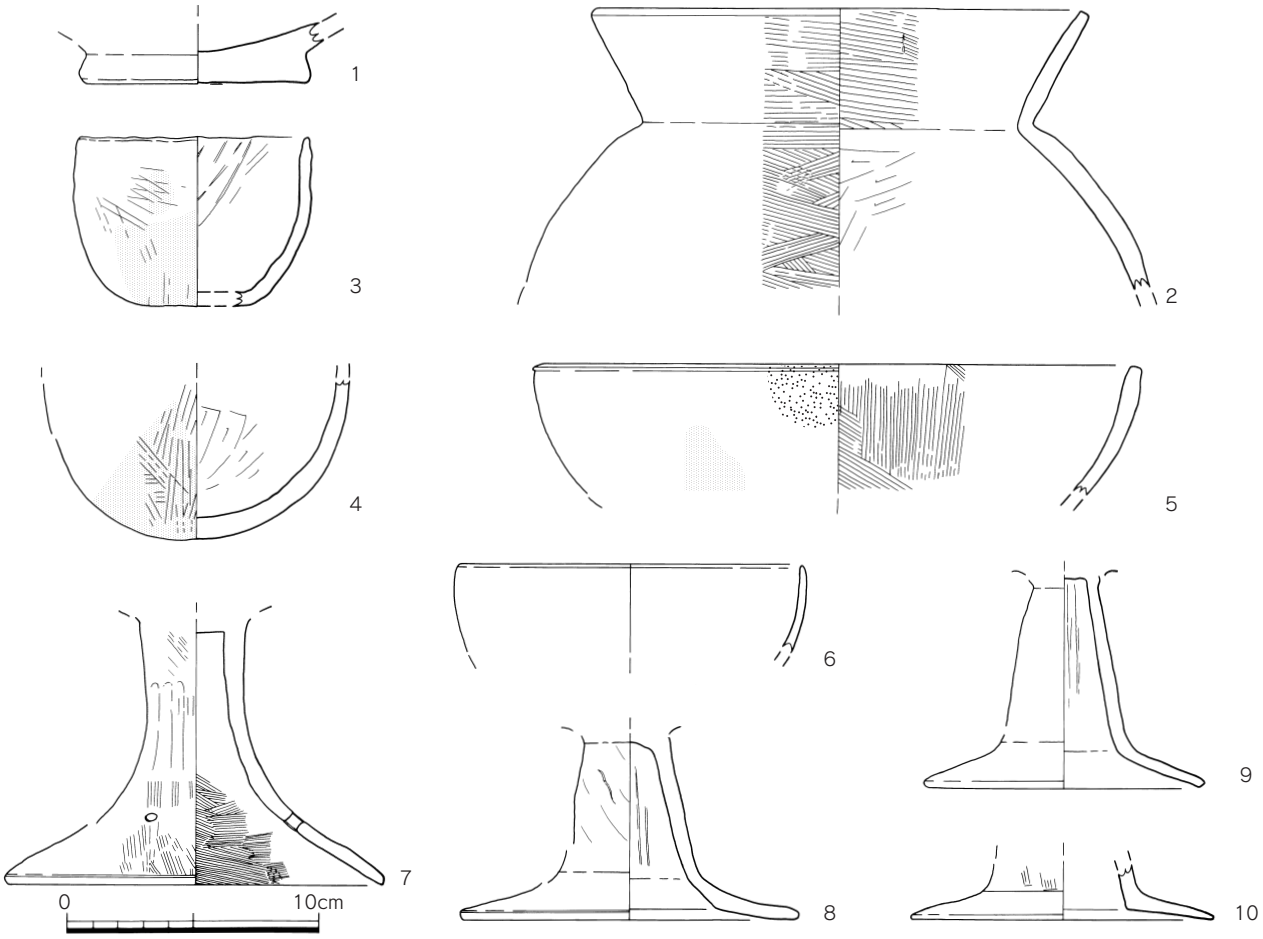
調査区の中央部やや北寄りに設定したトレンチである。幅1.7m、深さ40㎝を測る。溝の断面は逆台形である。小形丸底壺などが出土する。また、最下層である砂礫層と地山に接する箇所で小形仿製鏡が1面出土した。

大溝トレンチ3出土遺物（第122図10～15、第125図1）

第122図10～15は大溝トレンチ3から出土した土器である。10は甕の底部で、摩滅が著しく調整不明。11～14は椀である。11は口縁部付近の器壁が厚くなる椀で、内面に不定方向のナデを施す。12は外面にケズリを施す椀で底部を欠く。13はやや深みのある椀で、外面に黒斑をもつ。14は小型の椀で手捏土器のように全面に指オサエ痕を残す。15は高坏の脚部である。脚端部はナデにより中央が窪み、部分的にススが付着する。内外面ともにハケメが認められるが外面は丹塗りである。

16はトレンチ不明の大溝出土土器である。底部を欠く椀で、口縁端部を丸くおさめる。

第125図1はトレンチ3から出土した小形仿製鏡で、大溝1の最下層の地山にへばり付くような形で出土したが、掘削時に破損してしまい本来の形状が完形か否か不明である。少なくとも現存する破片の断面は新しい割れであり、本来は完形だった可能性もある。なお、気付いた段階で廃土を篩

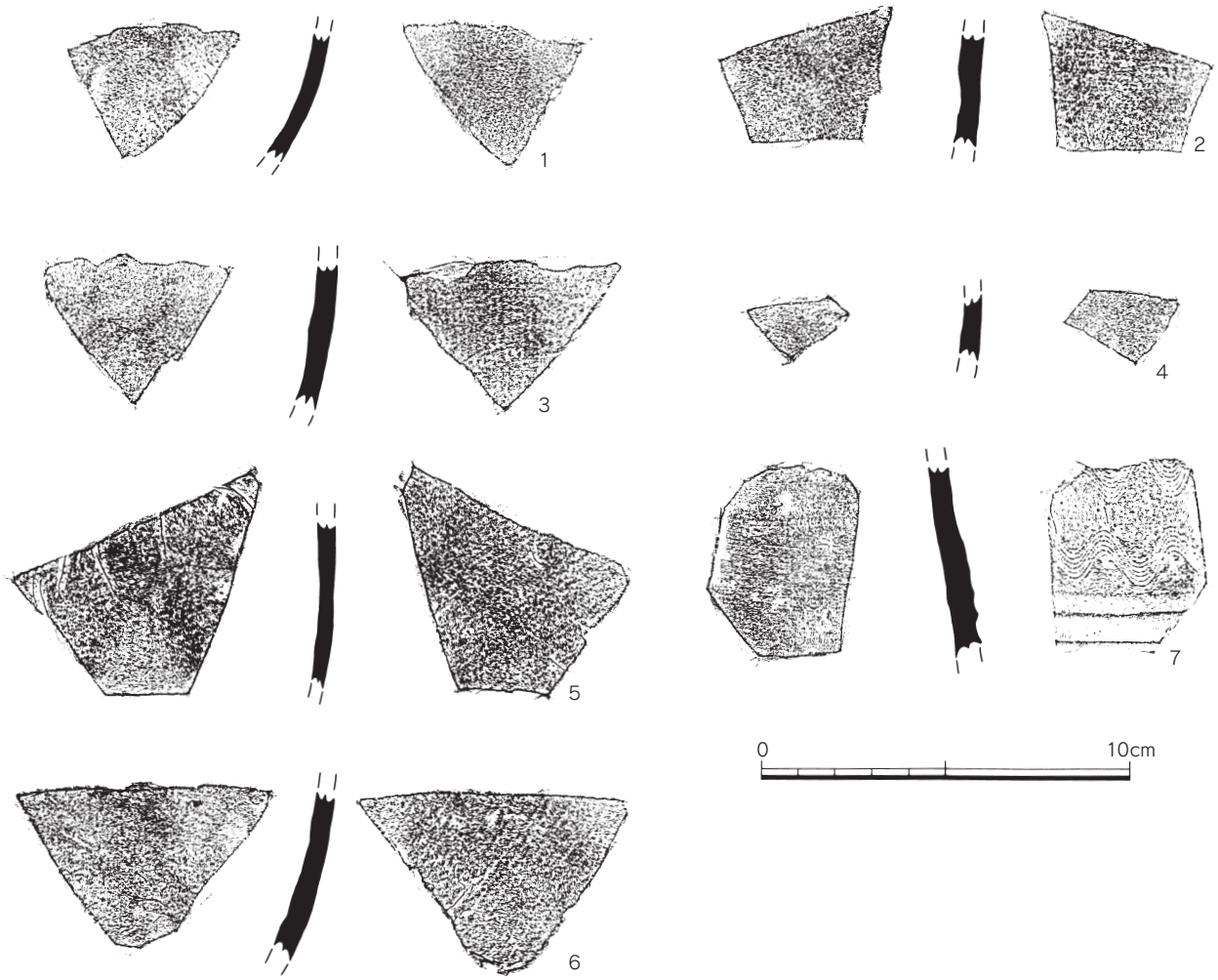


第123図　大溝トレンチ4出土遺物実測図（1/3）

にかけたが、一つの破片を確認するに留まった。三雲・井原遺跡ではこれまで2面の小形仿製鏡が出土しているが、いずれも古墳の周濠や鎌倉時代の溝など後世の遺構から出土しており、新しい時代の遺構の掘り下げに関しても細心の注意を払う必要が再確認された。

この仿製鏡は現在5片の鏡片からなるが、大きな破片に接する鈕付近の破片は位置関係にやや不安が残るものの、そのほかの4片はきちんと接合する。これらから推定される仿製鏡の直径は約5.0㎝で、かなり小型のものである。また、厚さが縁で1.5㎜程度、内区では1.0㎜程度と非常に薄い。鈕は平面楕円形で、断面は摘み上げたような形状である。鈕の周りには不鮮明ながら櫛歯文帯が配され、以下、外側に向かって円圏と文様帯があり、縁に至る。文様帯には蕨手文が施されるが全体的に模糊としている。しかし、縁は狭縁で内外ともにシャープに仕上がっている。従来、狭縁は断面、蒲鉾形のものが多かったが、本例はそれらとは一線を画すものとなっている。また、鏡背には赤色顔料が認められるが、九州歴史資料館加藤和歳氏の分析によりベンガラと判断された。

なお、現在のところ、本例と同笵関係のものが確認されていないが、近い形態のものとして韓国慶尚南道坪里洞出土例が挙げられる[註1)]。



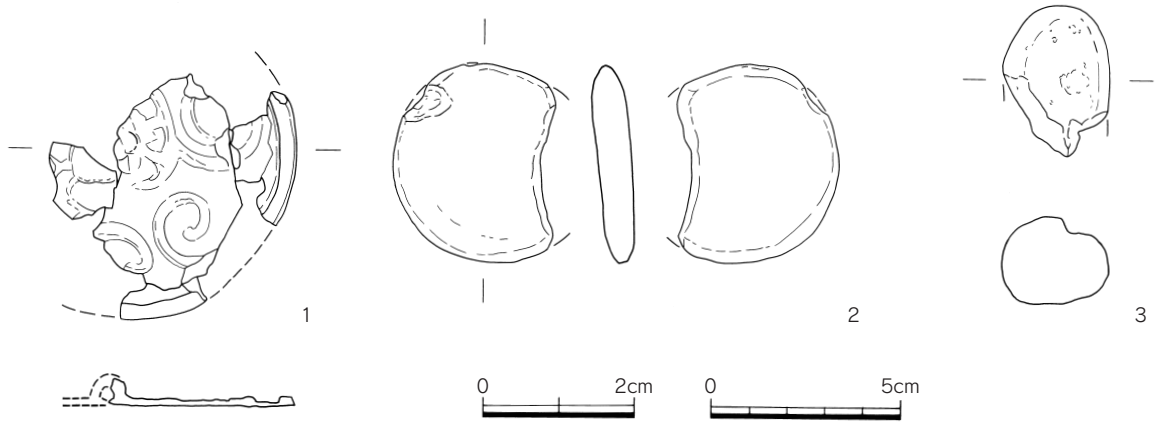
第124図　大溝出土遺物実測図①（1/2）

大溝トレンチ4（第121図4）

調査区の北端部に設定したトレンチである。大溝検出面の幅は2.94ｍと大きなものであったが、土層を確認した結果、南小路地区461に続く大溝に切られる古い溝の存在が確認できた。以下、前者を大溝1、後者を大溝2とする。大溝1は幅が2.1ｍ、深さが0.54ｍを測る。このトレンチでは拳から人頭大の石が多く確認されており、土石流等で埋没した状況を示すと思われる。大溝2は幅が推定1.6ｍ程度、深さ0.42ｍを測る。こちらは大溝1と異なり、大きな石の出土は少ない。埋土から弥生時代後期を中心とする土器が出土した。

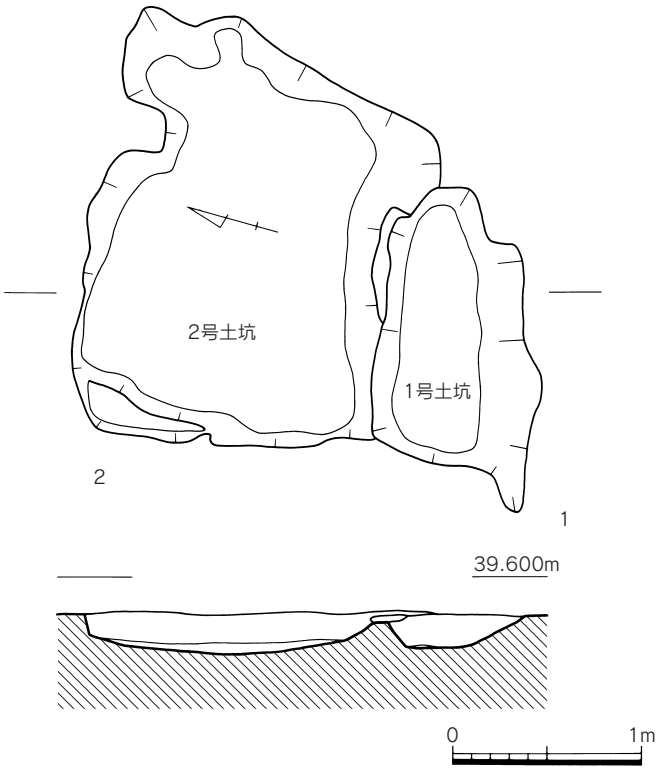
大溝トレンチ4出土遺物（第123図、第125図3）

第123図はトレンチ4出土品である。トレンチの説明でも述べたがトレンチ4では2本の溝が確認されている。そこで、出土品もそれぞれ分けて報告する。1は突帯文期の甕の底部片である。この土器が大溝1の中で最も古い土器になる。2は甕の上半部である。直線的に広がる口縁部をもつ甕で、口縁端部は面をとる。頸部は強くしまり、張りのある胴部へ至る。外面は全面横ハケ、内面は口縁部に横ハケ、胴部に横へラケズリを施す。1･2は大溝1出土。3は大溝2から出土した椀である。底部を欠くがほぼ完形に復元されるもので、内外面共に不定方向のハケメが残る。4は丸底の底部



第125図　大溝出土遺物実測図②（1/1・1/2）

片で、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。5も椀である。口縁端部に面を取り、内面にハケメを残す。外面は口縁部に二次焼成痕があり、胴部にススが付着する。6は小型の椀で、口縁部は丸くおさめる。4～6は大溝1出土品である。7は大溝2出土の高坏脚部である。ラッパ状に広がる脚部で、端部は面をとる。内外面共にハケメを残す。そのほか、図化できていないが大溝2からは頸部に二重突帯をもつ壺の破片も出土している（第121図4　土器3）。8～10は大溝1から出土した土師器高坏の脚部である。8はやや短脚で、脚柱部の中位に膨らみをもつ。脚部内面の屈曲部は明瞭な稜が入る。9はやや長脚で、8と同様に脚柱部の中位が膨らむ。脚柱部の内面には横板ナデを施し、屈曲部もやや緩やかに曲がる。10は高坏の脚裾部である。小片であるため、脚柱部へ至る部分の径に不安がある。

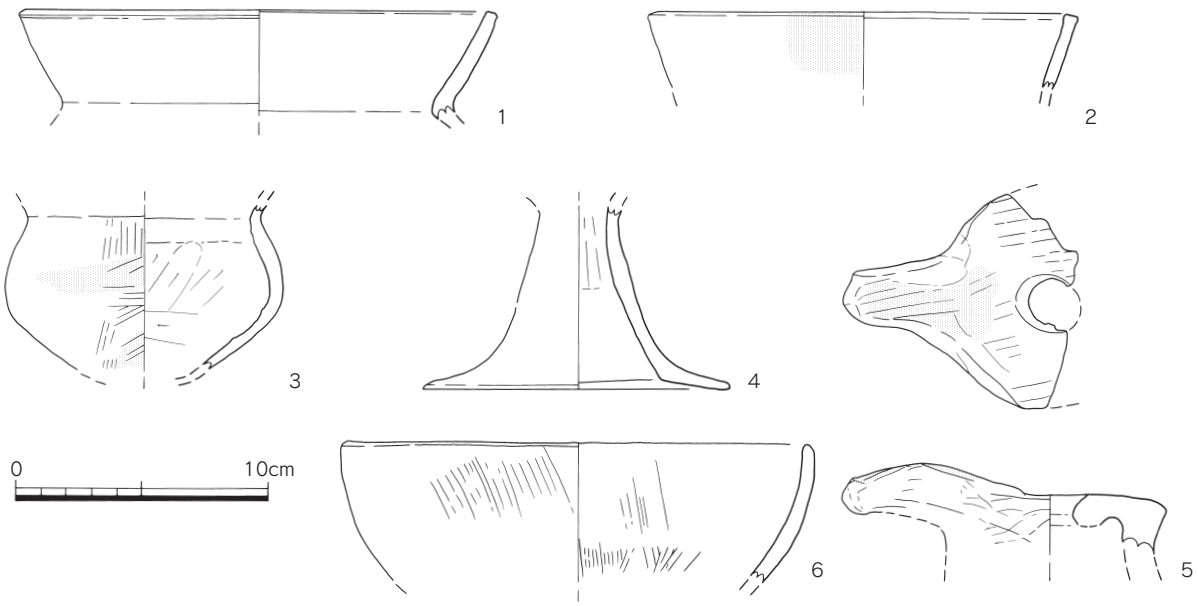


第126図　1・2号土坑実測図（1/40）

第125図3はトレンチ4の大溝1から出土した軽石で、下半分を欠く、現存長4.0㎝、幅2.8㎝、厚さ2.6㎝を測る。浮子か。

大溝出土遺物（第124図1 ～ 7）

第124図1～6は須恵質の甕か壺の胴部片である。いずれも外面にナデ、内面に無文当具痕を残し、一部ナデ消している。小片のため、部位等は不明であるが、本大溝とつながると思われる井原上学遺跡の溝3からも初期須恵器が出土しており、これらも土師器の時期的関係から初期須恵器と考えてよいだろう。7は器台の脚部片である。透かしの部分にあたり、外面に波状文を施す。小片のため天地はわからなかったが、突帯部分に自然釉が認められ、そのかかり具合で天地を判断した。



第127図　1・2号土坑包含層出土遺物実測図（1/3）

（2）土坑

1号土坑（第126図1）

調査区の南側で確認された土坑で、大溝トレンチ1の西に隣接する。長軸1.50m、短軸0.76m、深さ18cmを測る土坑である。土坑の形状や、大溝の削平具合、近隣の攪乱の多さから、新しい土坑と判断される。土坑からは土師器等が出土しているが、混入と思われる。

出土遺物（第127図1・2）

1は土師器甕の口縁部である。口縁部は内彎し、端部は面取りする。2は直立気味に広がる土師器甕口縁部である。ナデを施し、口縁端部が窪む。

2号土坑（第126図2）

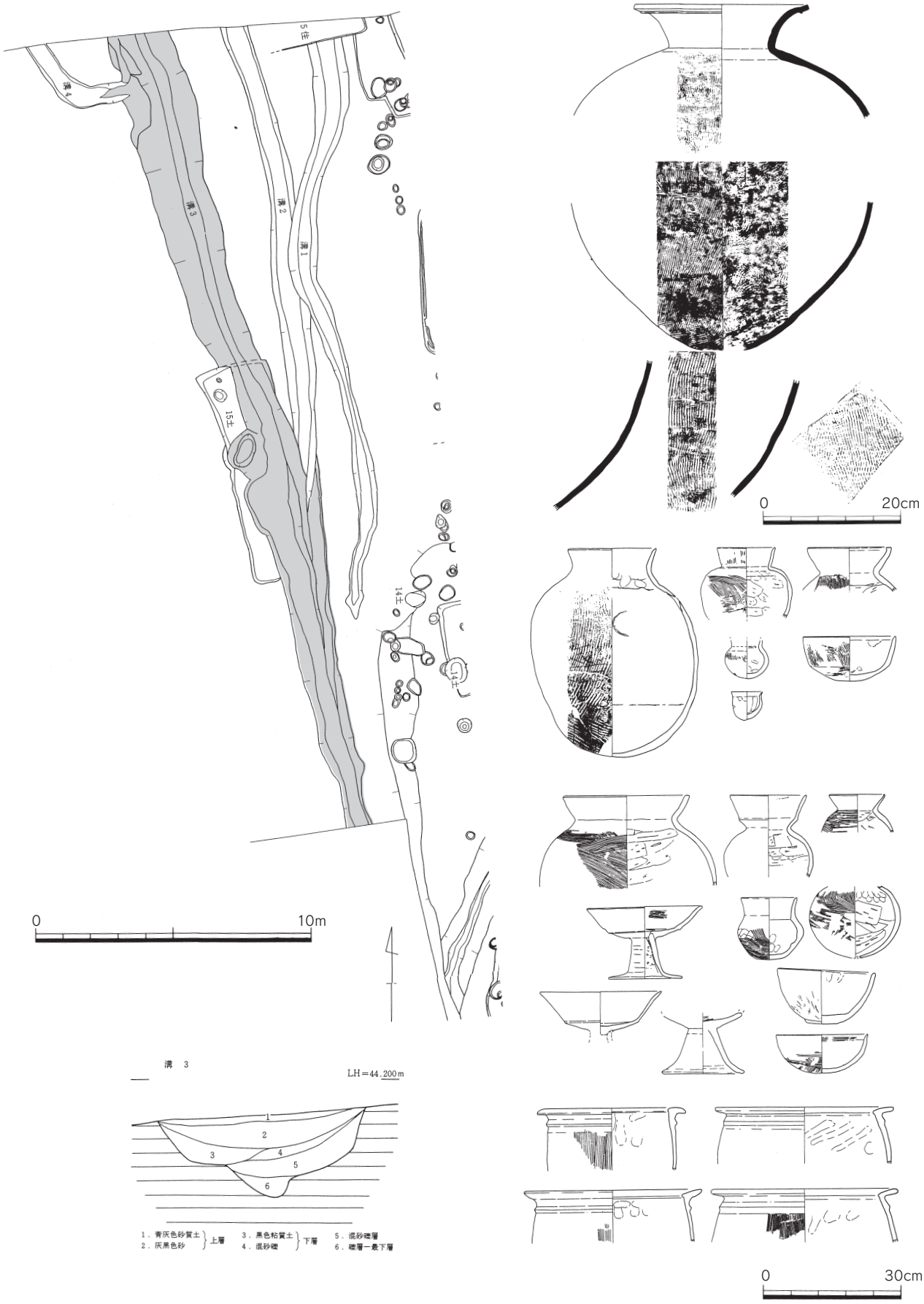
1号土坑の北側に所在する土坑で、東西方向に長軸をもつ。長軸2.20m、短軸1.34m、深さ21cmを測る。1号土坑と同様に土坑の形状や、大溝の削平具合、近隣の攪乱の多さから、新しい土坑と判断される。土坑からは土師器等が出土しているが、混入と思われる。

出土遺物（第127図3～5）

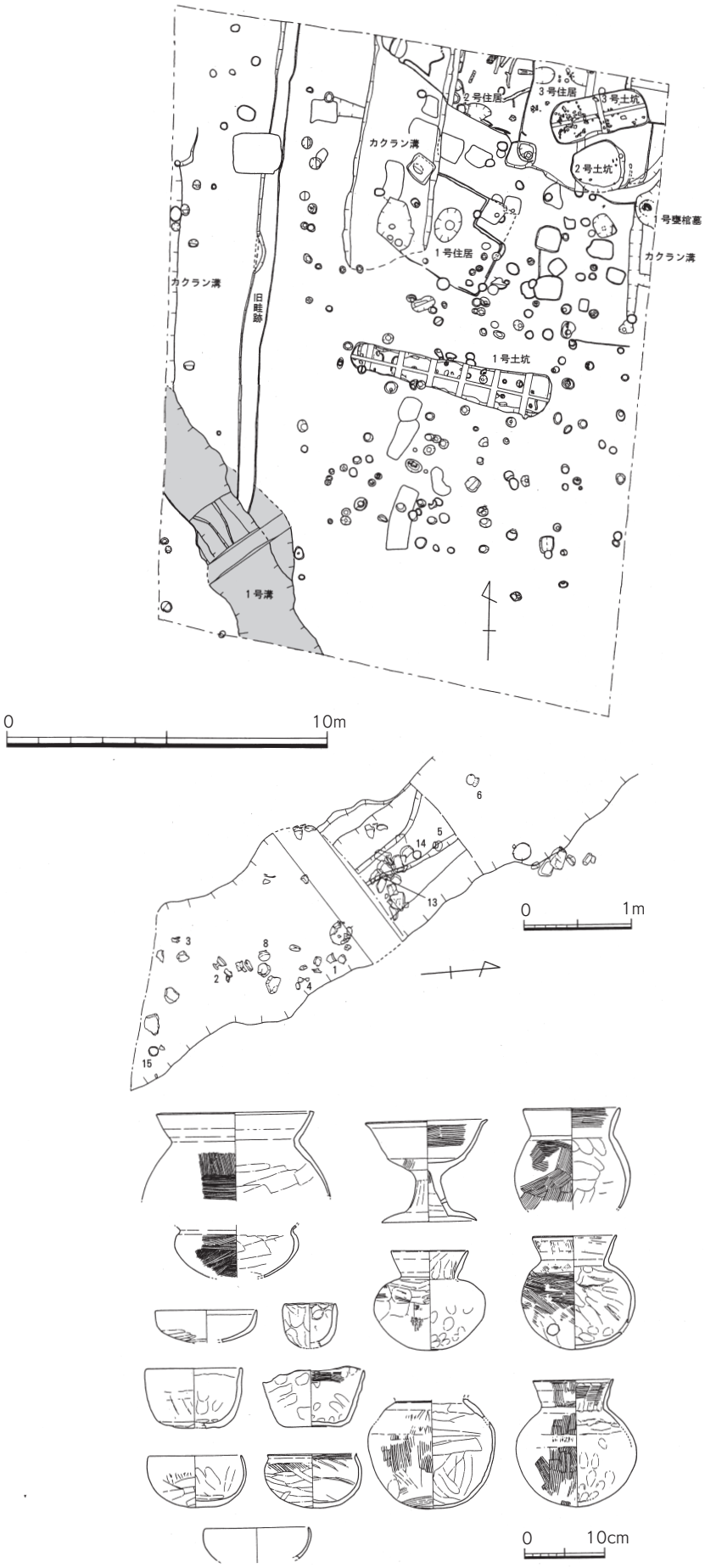
3は鉢である。口縁部と底部を欠く。内面にはケズリを施す。4は高坏の脚部である。ラッパ状に広がる脚部で、内面に明瞭な屈曲部をもつ。5は支脚の上半部である。上面に焼成前の穿孔を施し、一方に突出部をもつ。全面にタタキを施す。

（3）包含層

第127図6は包含層から出土した椀である。底部を欠くが素口縁で内外面ともにハケを施す。



第128図　井原上学遺跡溝3と出土遺物（1/200・1/8・1/12）



第129図　屋敷地区500番地1号溝と出土遺物（1/200・1/60・1/8）

第130図　三雲・井原遺跡西側大溝配置図（1/2,000）

3．小結

平成24年度に調査を実施した南小路地区461番地と屋敷地区467番地の調査では、いずれも南北方向に伸びる大溝が確認された。残りがよいところで、幅2.1m、深さ0.54mを測り、三雲・井原遺跡で確認された溝としては大きな部類に入る。また、埋没時期は古墳時代前期後半に位置付けられるが、本調査区の大溝トレンチ4では古い溝を切る形で大溝が開削されていることも確認できた。この大溝が設けられた三雲・井原遺跡の西側では、これまで数次にわたる発掘調査が実施されており、この大溝に連結すると考えられる溝も確認されていることから、それぞれの調査を概観し、最後に大溝が伸びる想定ラインを提示する。

井原上学遺跡（岡部編1987）南小路地区461番地の南西側160mの地点、西側の瑞梅寺川からは60mほど東に位置する。井原地区県営ほ場整備事業を調査の契機とする。調査の結果、弥生時代後期～古墳時代初頭の墳墓群と、古墳時代の集落が確認されている。集落の西側には北側に伸びる溝が数本検出された。溝5を除く溝は弥生時代中期から後期の包含層を切り込んで設けられており、古墳時代前期後半～中期に埋没する溝3も含まれる（第128図）。溝3は幅2.25m、深さ0.9mを測り、断面はUあるいはV字形を呈する。調査区内における溝の傾斜はきつく、溝の下層にあたる5層に混砂礫層、6層に礫層があることから、土石流などにより溝は埋没したと考えられる。出土遺物は下層から朝鮮系軟質土器が出土し、そのほか、前期後半に位置付けられる小型丸底壺や甕、高坏などの土師器、初期須恵器の大甕も確認された。また、埋土には弥生時代中期の土器を多く含む。

屋敷地区500番地（岡部・牟田編2006）平成12年の国庫補助事業で調査を実施した。屋敷地区476番地の北に接する。瑞梅寺川から東側に90m離れている。調査面積は約280㎡で、住居跡や土坑が検出されている。溝は調査区に南西隅で確認され、1号溝と称される（第129図）。幅1.5m程度を測り、北西側に延びている。なお、平面図ではほぼ同じ進路をとる溝状の遺構を切っており、467番地の大溝トレンチ4で確認された状況と同様なものであると想定される。なお、この段階でも井原上学遺跡（岡部編1987）で確認された古墳時代前～中期の溝との関連性を想定し、集落の西縁に掘削されていることから水路遺構として一連の溝になる可能性を指摘している。

以上、関連する2調査区の概要を記したが、それらを図に落としたものが第130図である。井原上学遺跡と南小路地区461番地の溝は断面の形状が大きく異なることから、やや不安要素もあるが、埋没状況や出土した土器の時期、弥生時代中期の土器を含むことなどから同一の溝であるといえるだろう。用途としては水路と考えられ[註2)]、井原上学遺跡より南方の地点にて瑞梅寺川から取水し、北側の井ノ川・下西地区あたりまで導水したものと考えられる。なお、三雲・井原遺跡を縦断する県道の拡幅工事に伴う調査では、大溝と思われる溝は確認されておらず、最終的には西側の氾濫原（水田地区か）に向かうと考える。

近年、三雲・井原遺跡は弥生時代のみならず古墳時代前期後半～中期にかけても対外交流の窓口の役割を果たしたとの指摘もなされており（重藤2013）、これまでの調査で古い段階の竈付住居跡や半島系軟質土器の集中なども確認されており、当期の遺構の確認も重要になると思われる。

なお、大溝2の延長方向の確認は今後の課題といえる。（平尾）

註

1）九州大学田尻義了氏のご教示による。

2）岡部裕俊氏ご教示。

【参考文献】

岡部裕俊編　1987『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第25集

岡部裕俊・牟田華代子編　2006『三雲・井原遺跡Ⅴ』前原市文化財調査報告書第90集

重藤輝行　2013「北部九州における馬韓・百済系土器について」『日韓古墳時代土器検討会発表要旨』

Ⅷ．井原ヤリミゾ地区2578番地

1．調査の概要

本調査は、井原鑓溝遺跡の所在地確認を目的とする重要遺構確認調査である。

青柳種信の『柳園古器略考』によると、江戸時代後期の文政5（1822）年に王墓のひとつである三雲南小路遺跡が発見された記録があるが、その三雲南小路遺跡が発見される以前の天明年間（1781～1788年）に当時の三雲村と井原村の境に位置する鑓溝で、壺から多くの銅鏡が出土した井原鑓溝遺跡が発見された記録もある。井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯等については伝聞ではあるものの、副葬品の拓本や模写が残されており、三雲南小路遺跡の場合と同様に、貴重な資料となっている。その『柳園古器略考』における井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯のなかで、溝を掘削中に壺を発見したとされている。

井原鑓溝遺跡の所在地確認のためには、当時（江戸時代）掘削していた溝の所在地をまず確認する必要があり、事前に大正年間の古地籍図等を調査し、周辺一帯の聞き取り調査も行った。その調査結果を基に今回の調査区設定となった。

調査区は南北方向に33m、東西方向に3.5～5.0mを測り、調査面積は約150㎡を測る。遺構は主に近世（江戸時代）の溝1条と古墳時代の住居跡5軒と多数の柱穴群を検出した。出土遺物としては、弥生土器、土師器、須恵器片、陶磁器片が出土した。

調査期間は平成17年1月6日から平成17年3月31日までである。

2．遺構と遺物

（1）竪穴式住居（第131図）

本遺跡では、竪穴式住居が5軒検出された。現地保存を優先する調査方針に基づき、平面的な確認と検出表面の土器を採取することで調査を終了している。

検出された竪穴式住居は平均して短辺2.5m、長辺3.5mを測り、長方形を呈する。

遺物は土師器片を表面採取できたが、細片のため図示しえなかった。遺構の時期は古墳時代か。

（2）柱穴群（第131図）

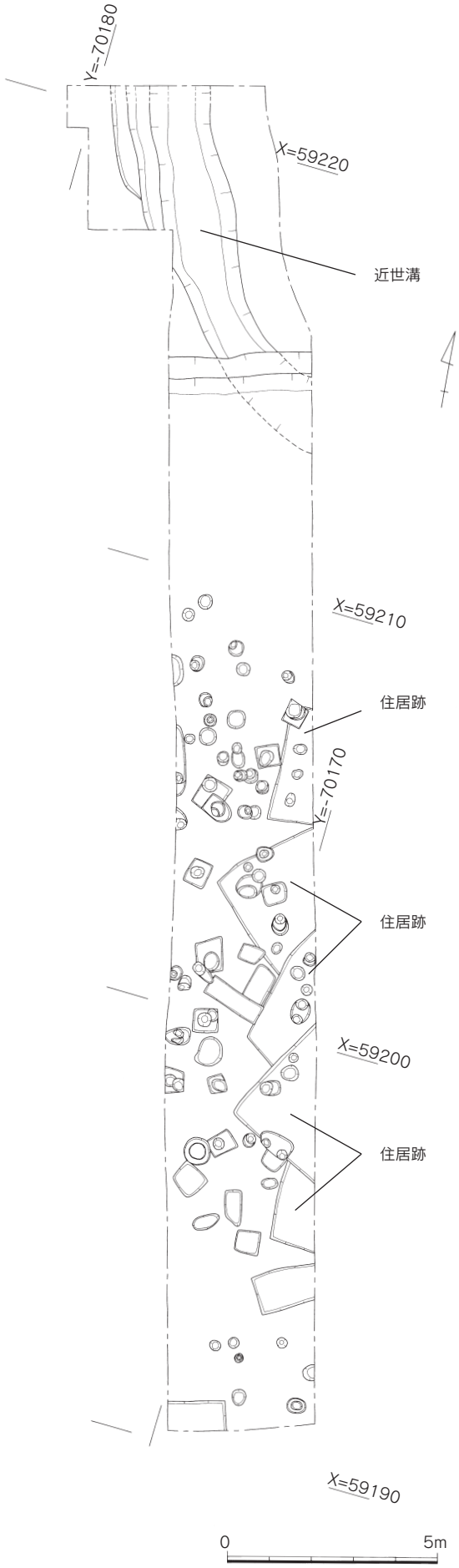
本遺跡では、柱穴群が検出された。現地保存を優先する調査方針に基づき、平面的な確認と検出表面の土器を採取することで調査を終了している。

検出された柱穴群は方形と円形とに大別できる。なかでも方形柱穴群については建物の一部となる可能性がある。

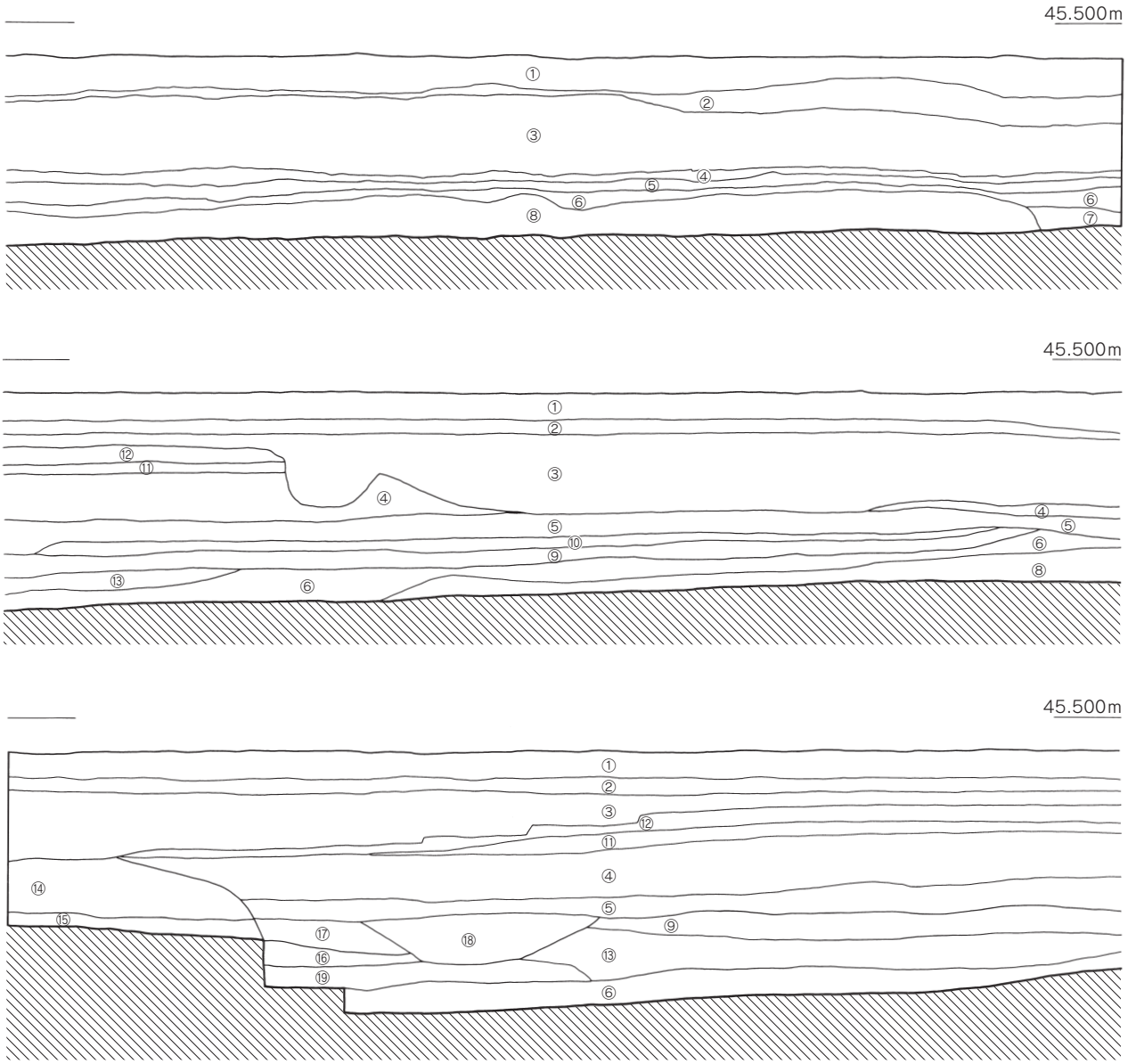
遺物は土師器片を表面採取できたが、細片のため図示しえなかった。遺構の時期は古墳時代か。

（3）溝（第131図）

本遺跡では、溝1条が検出された。調査区北端部から調査区東端部に向かって流れる。最大幅2.5m、最大深さ約0.5mを測り、断面形はゆるやかなＶ字形を呈する。



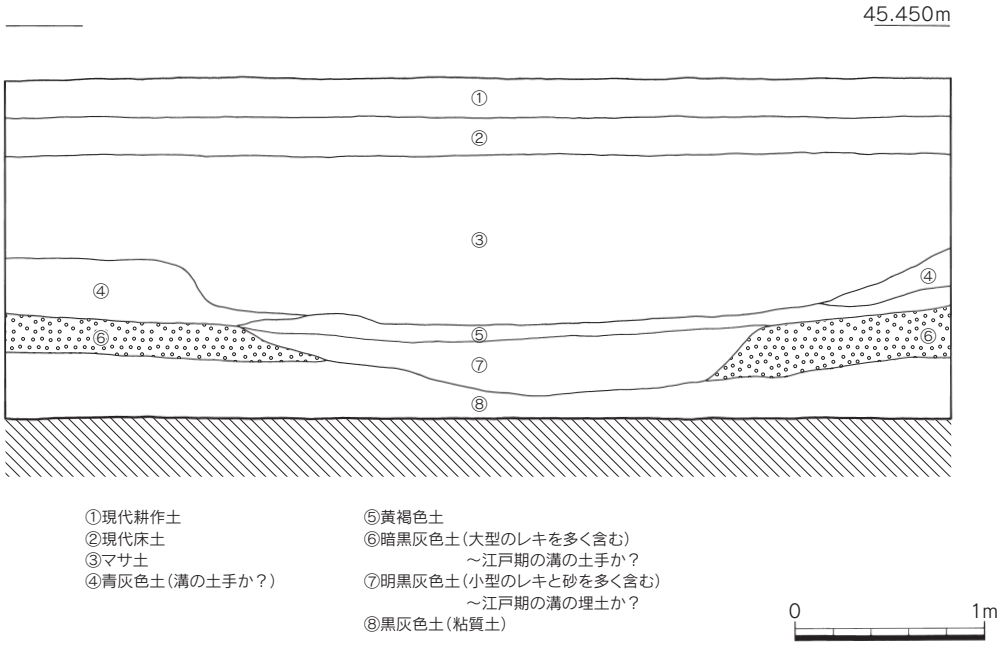
第131図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2578番地全体図（1/150）



①現代耕作土
②現代床土
③マサ土
④前の耕作土（昭和）
⑤前の床土（昭和）
⑥黒色土（レキを含む）
⑦黒灰色土（レキを含む）
⑧暗黒灰色土（レキを含む）
古墳時代遺構面
⑨明灰色土（レキを多く含む）～奈良期か？
⑩褐色土
⑪茶色土（床土）
⑫④と同じ（青灰色土）
⑬明灰色土
⑭昭和の畦畔か（青灰色土）
⑮昭和の床土か（黄灰色土）
⑯⑬と同じ
⑰⑨と同じ
⑱江戸期の溝埋土（砂とレキを含む）
⑲砂レキ層（黒色）

0　2.5m

第132図　東側土層断面図（1/50）



第133図　北側土層断面図（1/40）

遺物は弥生土器片、土師器片、陶磁器片などが出土した。遺構の時期はその出土遺物から17世紀初頭（江戸時代）と考える。

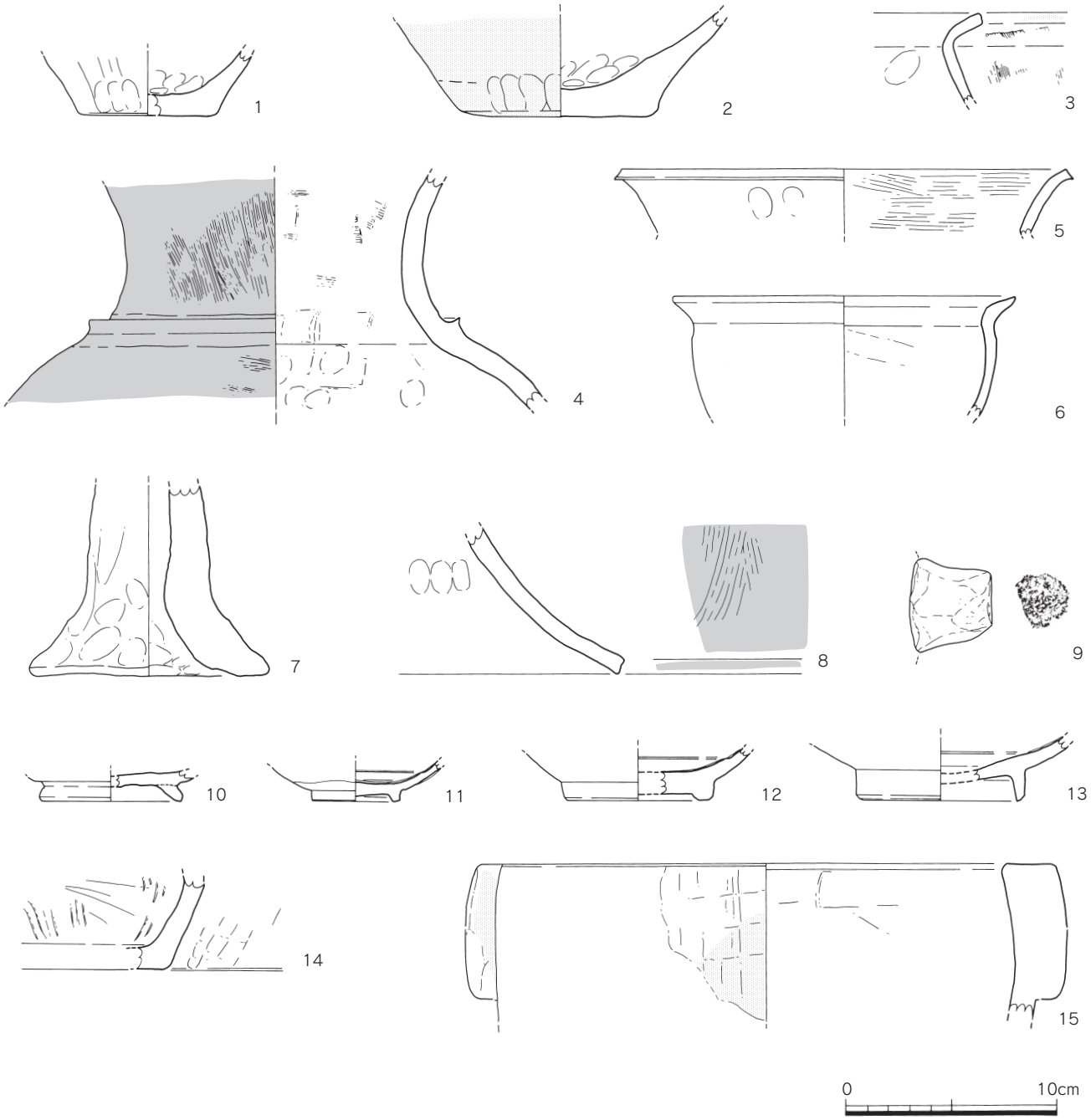
溝内部からの出土遺物（第134図）

1～15は17世紀代（江戸時代）の溝から出土した。1は甕の底部である。復元底径6.6㎝、残存器高3.1㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は底部内面に指頭痕が残り、ナデが施されている。底部から体部にかけての外面にはナデ、底部外面には板状工具によるナデが施されている。平尾編年では9期に相当し、時期は弥生時代中期中頃と考える。2は甕の底部である。復元底径9.0㎝、残存器高5.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は底部内面に指頭痕が残り、ナデが施されている。底部から体部にかけての外面にはナデ、底部外面にはナデが施されている。平尾編年では9期に相当し、時期は弥生時代中期中頃と考える。3は甕の口縁部である。細片のため、口径は不明である。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は口縁部内面に横ナデ、口縁部から体部にかけての内面にナデ、口縁部外面にハケメが残り、口縁部から体部にかけての内面にナデが施されている。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。4は壺の頸部である。残存器高11.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は口縁部から頸部にかけての外面には縦方向のハケメ、その上には丹塗りが施されている。内面については横方のハケメ、ナデが施されている。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。5は甕の口縁部である。復元口径21.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は内面にハケメが残り、外面には横ナデが施されている。平尾編年では15期に相当し、時期は弥生時代後期後半と考える。6は鉢の口縁部から体部にかけての一部である。復元口径は16.1㎝を測る。胎土に

は1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内面が白黄色、外面が黄橙色を呈する。調整は口縁部内面に横ナデ、体部内面にナデが施されている。口縁部外面に横ナデ、体部内面にナデが施されている。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。7は器台の一部である。残存器高9.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに暗橙色を呈する。調整は内外面ともに指頭痕が残る。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。8は高坏の脚部の一部か。残存器高7.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調として内面は明褐色、外面は橙色を呈する。調整は内面にナデ、外面にミガキの上に丹塗りが施されている。細片のため、時期は不明。9は甑の把手である。長さ3.9㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成はあまり良くない。色調は灰黄色を呈する。表面にナデが施されている。細片のため、時期は不明。10は瓦器椀の高台部である。復元高台径6.6㎝を測る。胎土は1.0㎜以下の白色砂粒を若干含み緻密である。焼成は良好。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。調整としては内面にナデ、外面は丁寧なナデが施されている。森田編年第Ⅰ形式に相当し、時期は11世紀後半と考える。11は白磁皿の高台部である。復元底径4.2㎝、残存器高1.9㎝を測る。胎土は粗く、灰色気味の白色を呈する。釉は灰色を帯びた白色を呈し、若干厚めに施釉され、釉表面には気泡や凹凸がある。体部外面下半以下、底部には施釉されない。底部見込み部分には沈線がみられる。白磁皿Ⅲ類に相当し、時期は12世紀中頃と考える。12は白磁椀の高台部である。復元底径7.0㎝を測る。底部見込み部分には沈線があり、この径が広い。胎土は青白色を帯びる白色を呈する。釉色は淡灰色味を帯びている。体部外面下位から高台外面には施釉されない。白磁椀Ⅵ類に相当し、時期は10世紀後半から11世紀中頃と考える。13は染付皿の高台部である。復元底径8.0㎝を測る。胎土は緻密であり、焼成は良好である。底部見込み部分には蛇の目釉剥ぎが施される。磁器皿Ⅱ-Ⅰ期に相当し、時期は1610～1630年と考える。14は滑石製石鍋の底部である。残存器高4.5㎝を測る。色調は内面外面ともに灰白色を呈する。調整としては内面に棒状工具によるナデ、外面にヘラ状工具によるケズリ痕跡が残る。細片のため時期は不明である。15は滑石製石鍋の口縁部である。復元口径27.0㎝を測る。色調は内面外面ともに灰白色を呈する。調整としては内面に棒状工具によるナデ、外面にヘラ状工具によるケズリ痕跡が残る。木戸編年ではⅡ-aに相当し、時期は11世紀代と考える。

(4) その他の出土遺物（第135図）

土層確認のために調査区北側端部にトレンチを設定した。そのトレンチから1～4が出土した。1は壺の口縁部である。復元口径27.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は内外面にハケメが施されている。平尾編年では5期に相当し、時期は弥生時代前期後半と考える。2は甕の底部である。復元底径7.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は内面にナデ、外面にハケメが施されている。平尾編年では5期に相当し、時期は弥生時代前期後半と考える。3は甕の口縁部から体部にかけての一部である。復元口径24.2㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は内面



第134図　溝内部からの出土遺物実測図（1/3）

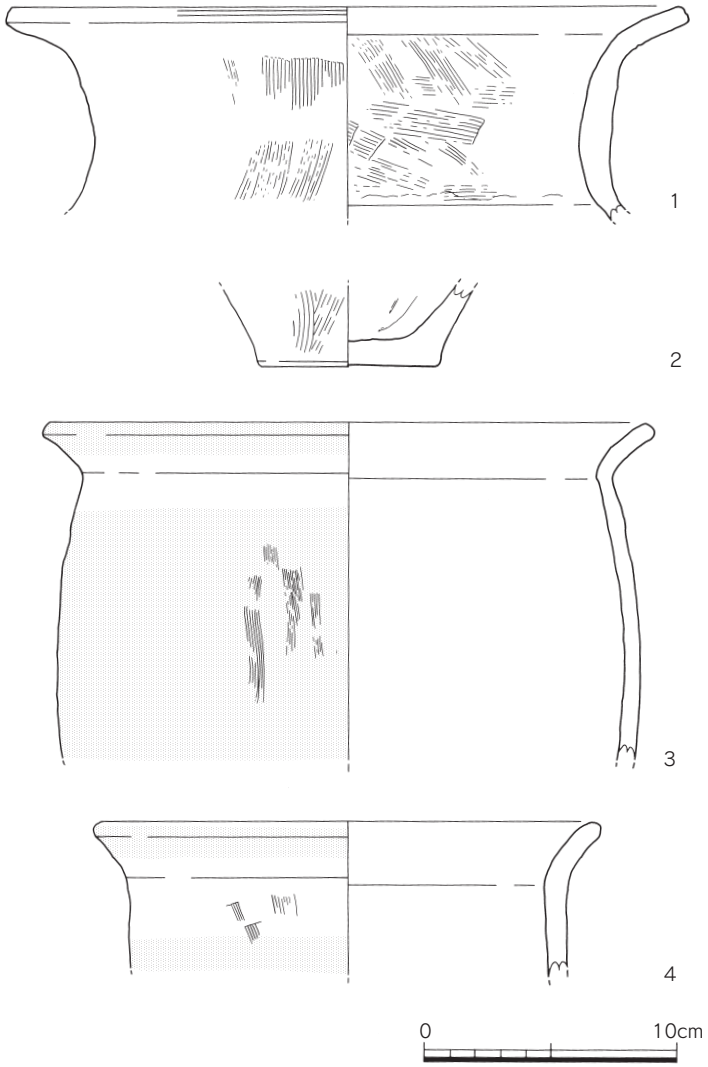
にナデ、外面にハケメが施されている。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。4は甕の口縁部である。復元口径20.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに赤褐色を呈する。調整は口縁部の内外面に横ナデ、体部の内がナデ、外面はハケメが残る。平尾編年では12期に相当し、時期は弥生時代後期初頭と考える。

3. まとめ

調査の結果、竪穴式住居5軒、多数の柱穴群そして溝1条が検出された。そのなかでも溝については井原鑓溝遺跡所在地確認のための大きなヒントになると考える。このことをふまえて、ここでは溝について纏めて今回の調査結果の終わりとしたい。

溝は調査区北端部から調査区東端部に向かって流れる。最大幅2.5m、最大深さ約0.5mを測り、断面形はゆるやかなV字形を呈する。遺物は弥生土器片、土師器片、陶磁器片などが出土している。遺構の時期はその出土遺物から17世紀初頭(江戸時代)と考える。

青柳種信の『柳園古器略考』によると、三雲南小路遺跡が発見される以前の天明年間（1781～1788年）に当時の三雲村と井原村の境に位置する鑓溝で、壺から多くの銅鏡が出土した井原鑓溝遺跡が発見された記録もある。井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯等については伝聞ではあるものの、副葬品の拓本や模写が残されており、三雲南小路遺跡の場合と同様に、貴重な資料となっている。その『柳園古器略考』における井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯のなかで、溝を掘削中に壺を発見したとされている。



第135図　その他の出土遺物実測図（1/3）

今回の調査は『柳園古器略考』の記録にみられる当時（江戸時代）の溝の所在地確認を目的とし、調査を実施した。その結果、17世紀代初頭（江戸時代）の溝を確認できたが、出土遺物の時期と『柳園古器略考』の記録にみられる時期には約200年の差がある。そのため、今回の調査で確認できた溝を『柳園古器略考』の記録にみられる溝と同一視することは難しいと考える。

しかし、注目すべきことに調査区北端部における土層観察では今回確認した溝の上層に再び溝が構築されていることが確認できるのである。このことは17世紀代初頭（江戸時代）に溝が構築されて以来、当該地一帯には溝が継続して構築されていたことを意味する。今回の調査では土層観察でのみ確認できたが、その上層の溝は『柳園古器略考』の記録にみられる時期の溝である可能性がある。井原鑓溝遺跡所在地確認のための大きなヒントになるかもしれない。その意味からも今後の調査に期するところが多い。

（瓜生秀文）

【参考文献】

平尾和久編『三雲・井原遺跡Ⅷ―総集編―』（糸島市文化財調査報告書・第10集・2013年）

森田　勉「九州地方の瓦器椀について―型式分類と編年試案―」（『考古学雑誌』第59巻第2号・1973年）

宮崎亮一編『太宰府条坊XV―陶磁器分類編―』（太宰府市の文化財・第49集・2000年）

木戸雅寿「13．石鍋」（『概説　中世の土器・陶磁器』・中世土器研究会編・真陽社・1995年）

九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』（2000年）

Ⅸ．井原ヤリミゾ地区2583番地

1．調査の概要

本調査は、井原鑓溝遺跡の所在地確認を目的とする重要遺構確認調査である。

青柳種信の『柳園古器略考』によると、江戸時代後期の文政5（1822）年に王墓のひとつである三雲南小路遺跡が発見された記録があるが、その三雲南小路遺跡が発見される以前の天明年間（1781～1788年）に当時の三雲村と井原村の境に位置する鑓溝で、壺から多くの銅鏡が出土した井原鑓溝遺跡が発見された記録もある。井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯等については伝聞ではあるものの、副葬品の拓本や模写が残されており、三雲南小路遺跡の場合と同様に、貴重な資料となっている。その『柳園古器略考』における井原鑓溝遺跡に関する発見の経緯のなかで、溝を掘削中に壺を発見したとされている。

井原鑓溝遺跡の所在地確認のためには、当時（江戸時代）掘削していた溝の所在地をまず確認する必要があり、事前に大正年間の古地籍図等を調査し、さらに周辺一帯の聞き取り調査も行った。

最初に近接する井原2578番地で表土剥ぎを行い、その際に近世の溝を検出した。そこで当該地一帯におけるその他の近世溝の有無を確認するために、大正年間の古地籍図等を参考にして井原2583番地にその調査区を設定した。

調査区は南北方向に23.5m、東西方向に26mを測り、調査面積は約135㎡を測る。遺構は主に古墳時代の大溝2条、古墳時代の土坑1基、古墳時代の木棺墓1基と多数の柱穴群を検出した。出土遺物としては、弥生土器、土師器、須恵器片、陶磁器片が出土した。

調査期間は平成17年1月6日から平成17年3月31日までである。

2．土層観察

井原2578番地で表土剥ぎを行い、その際に近世の溝を検出した。そこでその他の溝を本調査区の表土剥ぎの際に確認しようと試みたが、検出できなかった。そのため、南北方向の土層観察を実施したのであるが、残念なことに近世の溝は確認できなかった。しかし、下層から平行に流れる2条の大溝（古墳時代）を確認することができ、さらに、遺構面が南側から北西側に緩やかに落ちていることも判明した。

東西方向の土層観察でも近世の溝は確認できなかった。しかし、本調査区の西側から東側に向かって遺構面は緩やかに落ちていることが判明した。

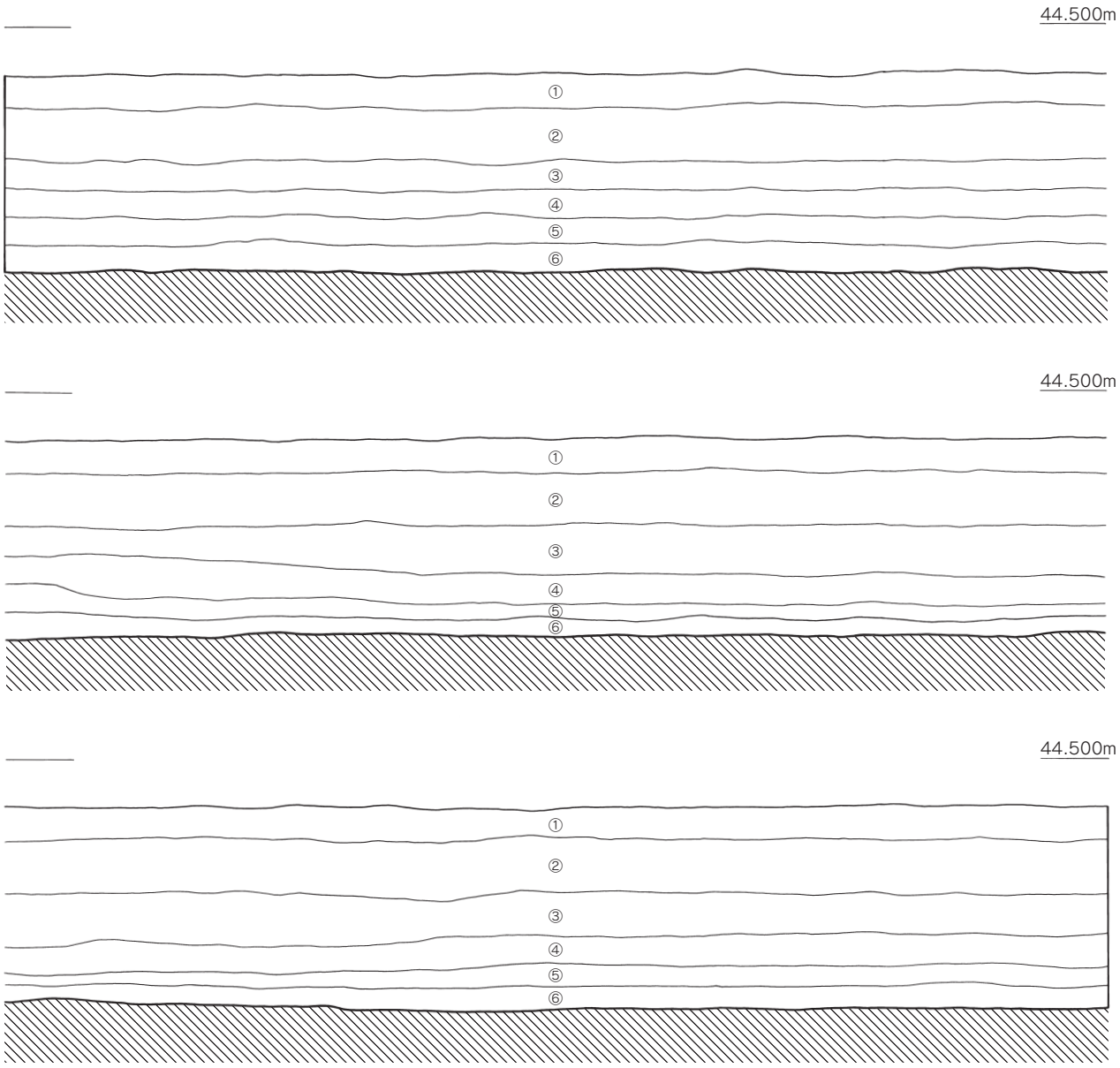
以上、南北方向及び東西方向の土層観察の結果、本調査区の東側は谷状になっていると想定され、今回の調査区は谷の縁の部分に相当すると考える。

3．遺構と遺物

（1）大溝（第136図）

井原2578番地と同様に本調査区でも表土剥ぎの際、近世の溝の検出を試みたが、検出できなかった。さらに南北方向及び東西方向の土層観察でも溝は確認できなかったため、近世の溝の検出を断

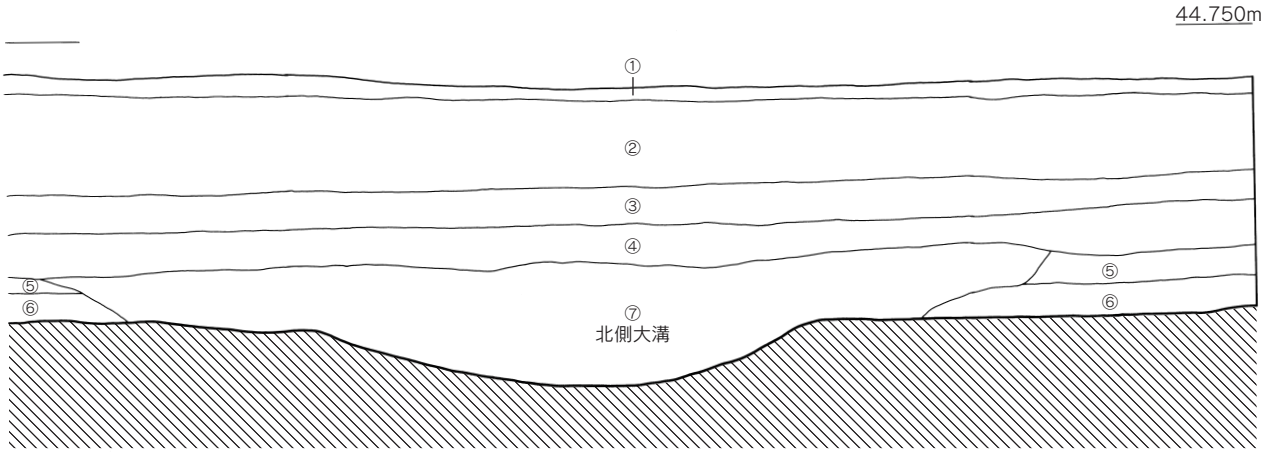
第136図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2583番地全体図（1/200）

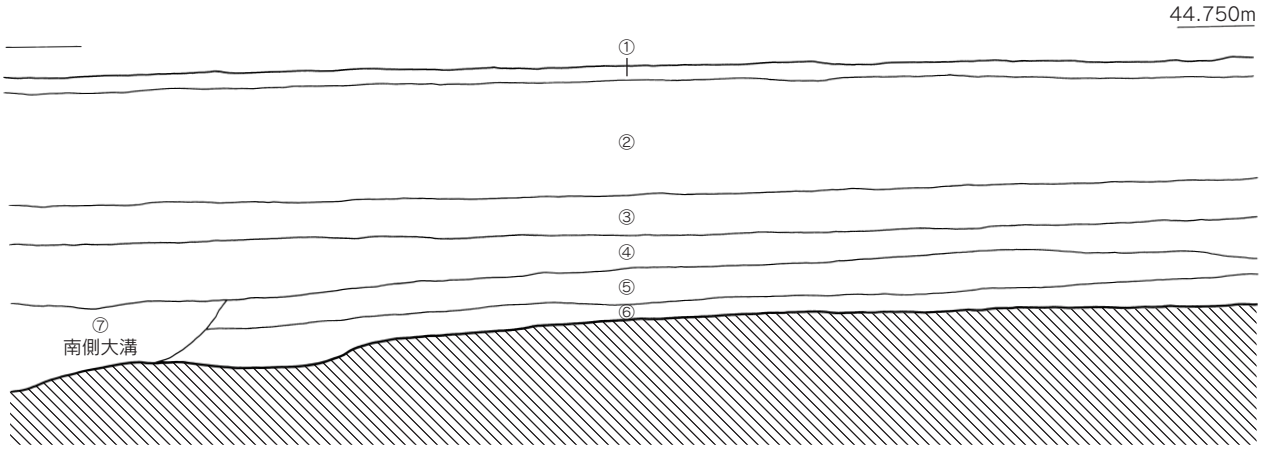


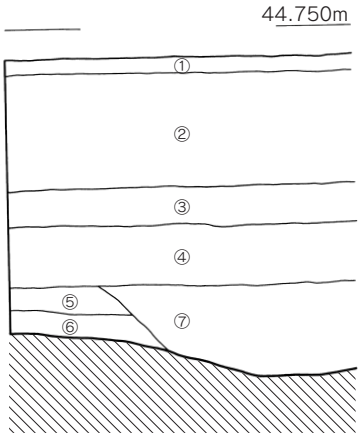
①現代耕作土
②マサ土
③灰色土
④黒灰色土（レキを多く含む）
⑤明灰色土
⑥黒灰色砂質土

0　2.5m

第137図　北側土層断面図（1/50）







①現代耕作土
②マサ土
③灰色土
④黒灰色土（レキを多く含む）
⑤明灰色土
⑥黒灰色砂質土
⑦溝の埋土（黒灰色土：レキを多く含む）

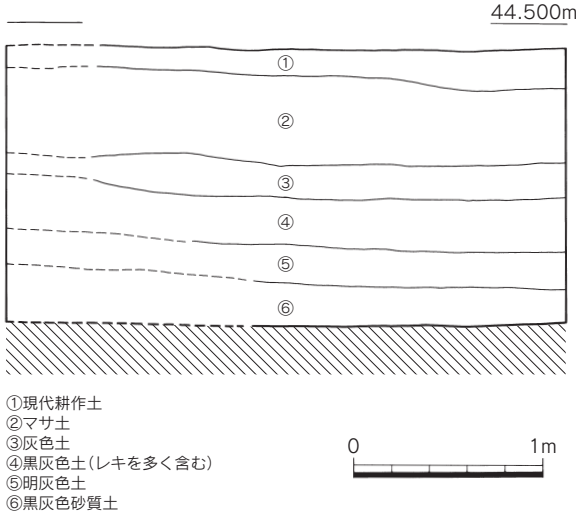
0　2.5m

第138図　西側土層断面図（1/50）

念し、下層に下げていくと、2条の溝がその姿を現した。現地保存を優先する調査方針に基づき、最小限のトレンチ設置と検出表面の土器を採取することで発掘調査を終了している。

検出された2条の溝はほぼ平行に検出され、その間の幅は約9mを測る。軸はほぼ東西方向に置く。北側の溝は最大幅5.0m、現存深さ0.8mを測る。南側の溝は最大幅3m、現存深さ0.6mを測る。断面形はともに緩やかなV字形を呈する。埋土は黒灰色土である。

遺物は2条の溝から土師器片等をトレンチ内部及び表面において採取できたが、細片が多く、一部を除いて図示しえなかった。遺構の時期は古墳時代と考える。



第139図　南側土層断面図（1/40）

（2）土坑（第140図）

本遺跡では、土坑が1基検出された。

検出された土坑は短辺0.75m、長辺1.2m、現存深さ0.3mを計り、平面プランは隅丸長方形を呈する。

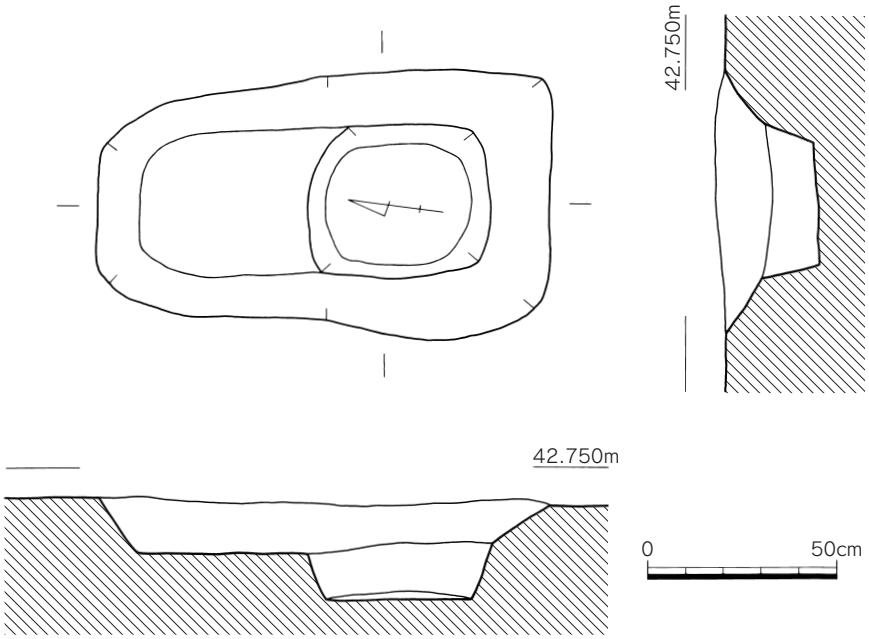
土坑内部の土層観察の結果、木棺の痕跡の一部と想定されるものが確認されており、木棺墓の可能性がある。埋土は黒灰色土である。

遺物は遺構内部から土師器片が出土したが、細片のため図示しえなかった。遺構の時期は古墳時代か。

（3）木棺墓（第141図）

本遺跡では、木棺墓が1基検出された。

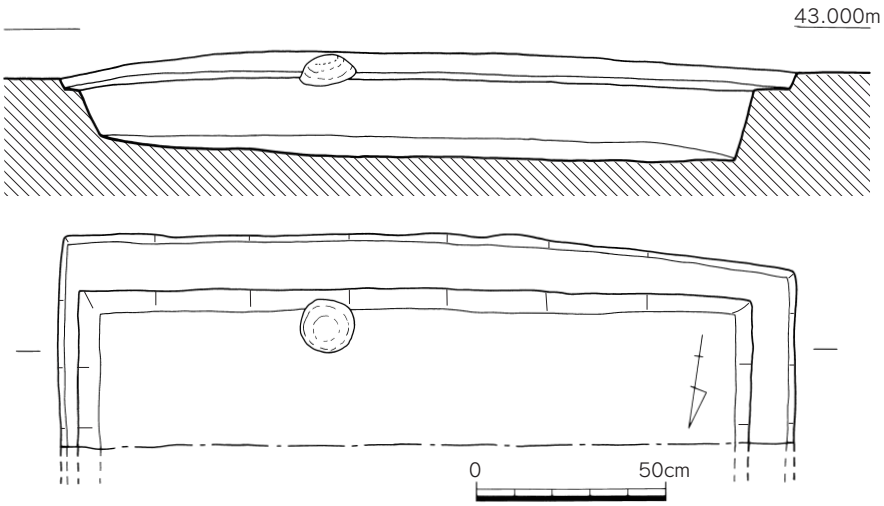
検出された木棺墓は短辺0.6m、長辺1.95m、現存深さ0.3mを計り、平面プランは隅丸長方形を呈する。調査区の制限を受け、約半分程検出している。復元短辺1.2m、長辺1.95mを測り、平面



第140図　土坑実測図（1/20）

プランは隅丸長方形を呈する木棺墓である。木棺墓内部の土層観察の結果、木棺の痕跡の一部が確認されている。埋土は黒灰色土である。

遺物は弥生土器片、土師器（椀）などが出土した。遺構の時期はその出土遺物から古墳時代と考える。



第141図　木棺墓実測図（1/20）

（4）柱穴群（第136図）

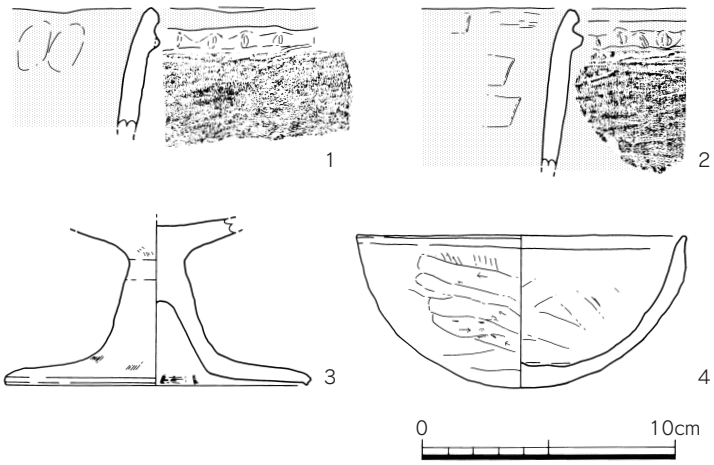
本遺跡では若干の柱穴群が検出された。中には柱の沈下を防ぐため、底部に平らな石を置いている柱穴も検出されている。

遺物は弥生土器片、土師器片などが出土したが、細片のため図示しえなかった。遺構の時期は不明。古墳時代か。

出土遺物（第142図）

1～3は大溝から出土した。4は木棺墓から出土した。

1は甕の口縁部片である。細片のため、口径等は不明である。残存器高4.9㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。内面の調整は指で丁寧にナデており、指頭痕が残る。外面の調整は刻目突帯が施され、板状の工具でナデており、その痕跡が残る。平尾編年では5期に相当し、時期は弥生時代前期後半と考える。2は甕の口縁部片である。細片のため、口径等は不明である。残存器高6.4㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに暗灰黄色を呈する。内面の調整は板状の工具でナデており、その痕跡が残る。外側の調整は刻目突帯が施され、摩擦痕が残る。平尾編年では5期に相



第142図　大溝・木棺墓出土遺物実測図（1/3）

当し、時期は弥生時代前期後半と考える。3は高坏の脚部である。残存器高6.5㎝、復元底径12.1㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は内外面ともに橙色を呈する。内面の調整は指で丁寧にナデており、若干のハケメが残る。外面の調整はハケで調整の後、指で丁寧にナデ消している。平尾編年では20期に相当し、時期は古墳時代前期末～中期初頭と考える。4は椀であり、ほぼ完形である。口径13.0㎝、器高6.0㎝を測る。胎土には1.0㎜以下の白色砂粒を若干含む。焼成は良好。色調は内面が明赤褐色、外面は明黄褐色を呈する。内面の調整は板状の工具でナデており、その痕跡が残る。外面の調整はケズリの痕跡とハケメが残る。平尾編年では18期に相当し、時期は古墳時代前期前半と考える。

なお、大溝からはこのほかに多数の土師器片が出土している。時期としては3と同時期の平尾編年20期（古墳時代前期末～中期初頭）と考えられるため、最も残存状況のよいものを選択し、掲載している。

4．まとめ

当初の調査目的は達成できなかったものの、本調査区から大溝2条、土坑1基、木棺墓1基そして柱穴群が検出された。そのなかでも大溝については三雲・井原遺跡群の解明のための大きなヒントになると考える。このことをふまえて、ここでは大溝について纏めて今回の調査結果の終わりとしたい。

検出された2条の大溝はほぼ平行に検出され、その間の幅は約9mを測る。軸はほぼ東西方向に置く。北側の溝は最大幅2.5m、現存深さ0.8mを測る。南側の溝は最大幅3m、現存深さ0.6mを測る。断面形はともに緩やかなV字形を呈する。埋土は黒灰色土である。遺物は2条の溝から土師器の細片等をトレンチ内部及び表面において多く採取した。遺構の時期は古墳時代前期末～中期初頭と考える。

2条の大溝は、時期が同時期であり、ほぼ東西方向に軸を置き、さらに平行に流れている。このことから、何らかの目的をもった溝と考えることができる。

そこで当該遺跡の周辺に目を向けると、近接する井原2578番地の調査区からは古墳時代の竪穴住居群、桂穴群等が検出されている。また、周辺において溝の北側には古墳時代の住居群が検出されているが、南側にはあまり確認されていないことを考慮に入れると、この溝は古墳時代の集落域を示す溝の一部であった可能性がある。

なお、2条の溝が平行に流れていることから、道路状遺構の可能性もある。これについては今後の周辺の調査の結果より判断すべきものであろうが、可能性を提示しておきたい。　　（瓜生）

【参考文献】

平尾和久編『三雲・井原遺跡跡Ⅷ―総集編―』（糸島市文化財調査報告書・第10集・2013年）

X．井原ヤリミゾ地区2577番地

1．調査の経緯と概要

糸島市教育委員会では、福岡藩士青柳種信の農民に対する聞き取り調査によって副葬品の内容が報告され、そののち出土品ならびに遺跡の所在地もわからなくなってしまった井原鑓溝遺跡の確認調査を継続的に実施している。

井原鑓溝遺跡は天明年間（1781～1788年）に発見されている。その経緯は青柳種信による聞き取り調査によれば、次市という農民が、日照りが続いたため、三雲村と井原村の境にある溝をついたところ、突然朱が流れ出し「壺」が現れた。中からは漢鏡21面以上、刀剣類、巴形銅器3点以上、鎧板の如きものなど大量の副葬品が出土したという。当時において発見からすでに40年という歳月が流れていたものの、漢鏡と巴形銅器は残っていたため、青柳種信はそれらの拓本を採り、発見の経緯と合わせて『柳園古器略考』および『筑前国イ土郡三雲村所古器図説　全』に著していた。前者については関東大震災にて焼失、後者は第２次世界大戦の戦火にて焼失したが、良好な影写本と元本とみられる自筆本が残されており、現在にまで伝えられることとなった。副葬品等は散逸しており、拓本など記録のみが唯一の手がかりとなっている。

本市教育委員会では大正年間の古地籍図により、現在地における溝の所在を確認し、調査を継続している。結果的には平成22年度の調査においても井原鑓溝遺跡を確認することができなかった。ただ、ほかの遺構も確認されておらず、三雲･井原遺跡の南限の一端を確認することができた。

2．遺構と遺物

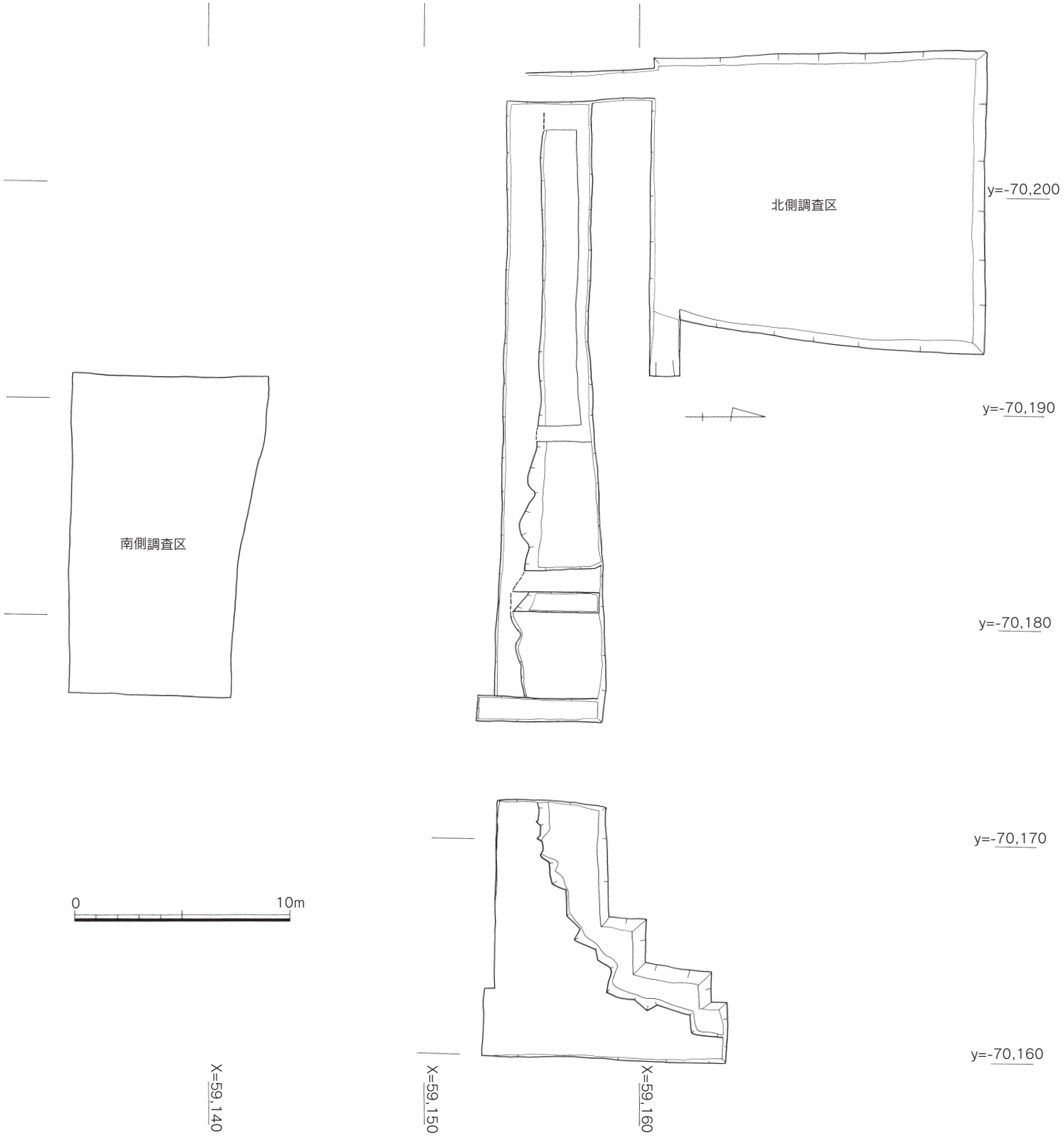
上で述べたように井原ヤリミゾ地区2577番地は、三雲・井原遺跡の南限の外側に位置し、遺構は確認できなかったが包含層より土器類が出土しているので報告する。なお、遺物は全て南側調査区のトレンチより出土している。

第146図1～3は壺の底部である。1は外面の剥離が著しく調整不明であるが、内面にはナデを施す。2は外面に丹塗りでやや上底の底部である。3は内外面ともに剥離し、調整不明である。4は無頸壺の上半部である。口縁端部は丸く、やや立ち上がる。外面は丹塗りで胴部に横ミガキを施す。口縁部内面まで丹が及び、胴部内面にナデを施す。小片からの復元であるため口径に不安がある。

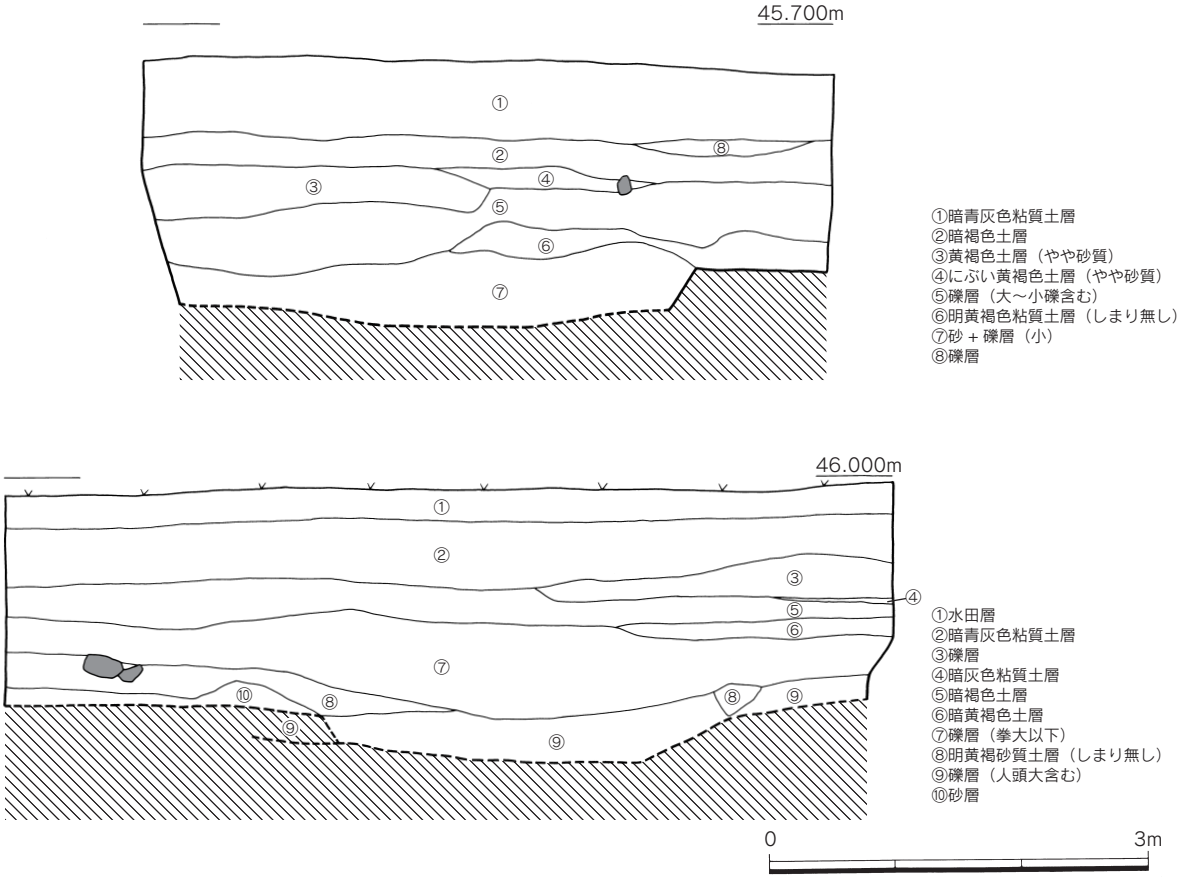
5～7は甕である。5は底部片で外面にハケメを施す。6は土師器甕の上半部で､口縁端部を欠く。頸部のしまりが緩く弱い稜がはいるのみである。胴部は横ハケメを主体とし、頸部付近は斜方向のハケメを施す。内面は頸部直下まで横ハケメが認められるが、胴部上半は横ヘラケズリ、中位以下は縦ヘラケズリを施す。7は口縁部片である。口縁部はやや肥厚し、頸部直下から横ヘラケズリが認められる。

8～10は器台脚部片である。8はやや肉厚の器台で外面にハケメを施す。9は裾が直線的に広がる器台で脚端部に面をもつ。10も直線的に広がる脚部をもつ器台である。

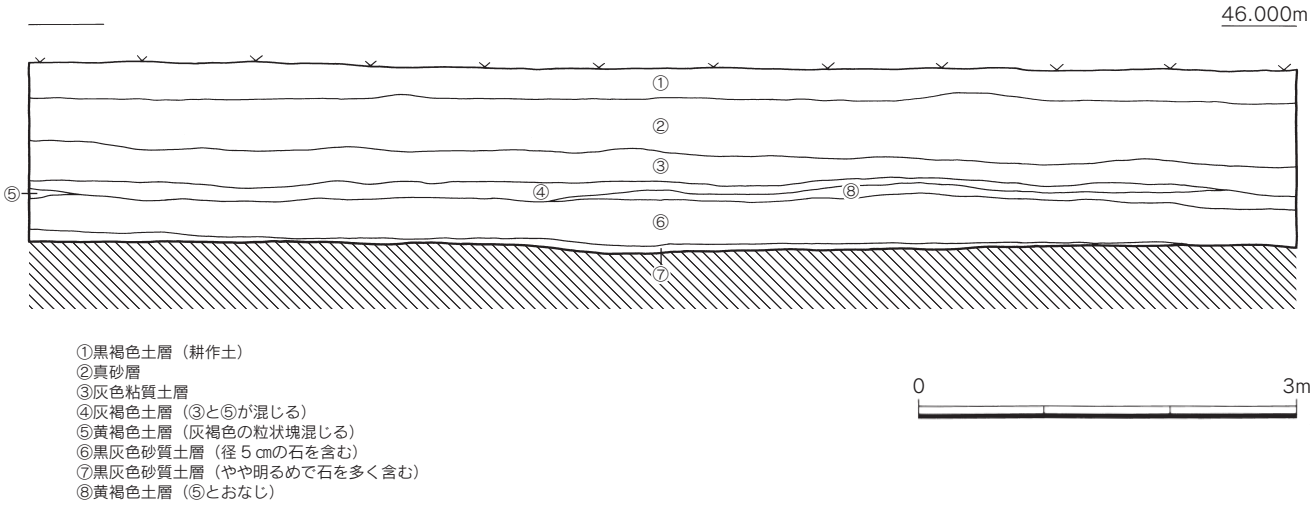
11は須恵器坏蓋である。内面天井部には当て具痕を少し残す。口縁端部は丸くおさめ、蓋の突出部は小さいが丁寧な横ナデが施され、鋭い。天井部は少し窪む。



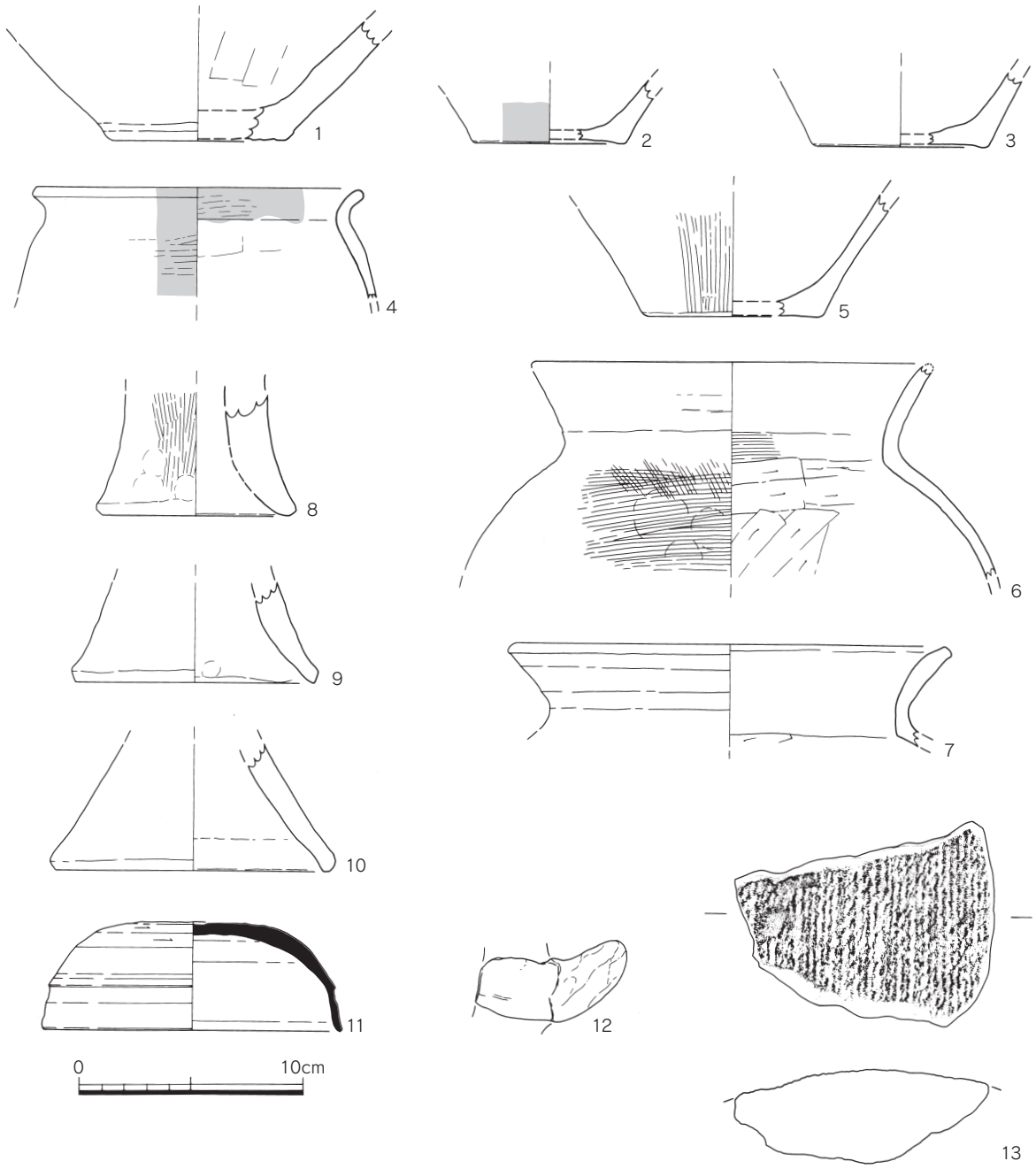
第143図　三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ地区2577番地調査区配置図（1/250）



第144図　南側調査区土層断面図（1/60）



第145図　北側調査区土層断面図（1/60）



第146図　包含層出土遺物実測図（1/3）

12はやや小ぶりの甑の把手である。13は平瓦片である。上面に縄目文を施し、暗灰色を呈する。

怡土城跡で見られる瓦である。（平尾）

第4章　まとめ

Ⅰ．上覚地区439番地1、2号溝について

本調査で検出した1、2号溝は、三雲南小路遺跡の南西側にあたり、特に1号溝は三雲南小路遺跡の西側周溝に対して南延長上に位置することから、注目される遺構である。1号溝は、幅2.57m、深さ24cmを測り、断面は逆台形状を呈する。最下層では弥生時代中期中葉～弥生時代中期後半（9、10期）の土器が出土しており、上層では弥生時代中期末～後期前半（11～13期）の土器が多く見られる。

一方、2号溝も幅2.9m、深さ30cmを測り、2段のテラスをもつ形状である。出土遺物は最下層に弥生時代中期後半（10期）に属する甕が出土し、砥石と鉄矛は、この甕の上位から出土した。上層の土器群は弥生時代中期末～後期前半（11～13期）に属し、1号溝と同時期に機能していたと考えられる。平成24年度に行ったヤリミゾ地区436-1番地のトレンチ調査では、この2号溝の延長上に2号土坑と6号土坑が見つかっており、2号土坑は弥生時代中期中葉～後半の土器が含まれていることから、2号溝と同時期である。

これまでの調査の遺構検出面及び溝底面の標高は以下のとおりである。

（上覚地区439番地）

1号溝　遺構検出面：41.700m　溝底面：41.600～41.630m

2号溝　遺構検出面：41.700m　溝底面：41.380m

（ヤリミゾ地区436-1番地）

2号土坑　遺構検出面：41.780m　溝底面：41.460m

6号土坑　遺構検出面：41.750m　溝底面：41.290m

（三雲南小路遺跡2次調査）西側周溝

1号溝　遺構検出面：41.600～41.700m　溝底面：41.530m

2号溝　遺構検出面：41.600～41.700m　溝底面：41.420m

3号溝　遺構検出面：41.600～41.700m　溝底面：41.400m

これらを見ていくと、遺構検出面では、上覚地区439番地と三雲南小路遺跡2次調査の遺構検出面は、ほぼ変わらない高さである。溝の床面は、北に向かってわずかに標高を下げている状況が確認され、ヤリミゾ地区436-1番地2号土坑と6号土坑は17㎝程度の差異、2号溝と2号土坑は8㎝程度の差異であることから、2号溝と2号土坑はつながる可能性が高いと判断される。

このように見ていくと、はたして今回の調査で検出された1、2号溝が、三雲南小路遺跡の西側周溝に接続するかどうかが問題となる。これについては内部で協議を行った結果、以下の点で1、2号溝は三雲南小路遺跡の周溝と異なる点が指摘された。

①三雲南小路遺跡の周溝幅は、約3.4～4.0mであるのに対して、1号溝の幅は約2.5m、2号溝で推定2.9mと溝幅が大きく異なること

②1、2号溝及び2号土坑の調査結果では、弥生時代中期中葉～後半の土器が含まれているが、三雲南小路遺跡における周溝調査では、出土遺物や祭祀土坑、甕棺墓との切り合い関係から弥生

時代中期後半～末の時期が妥当と考えられることから、1、2号溝は三雲南小路遺跡の周溝よりも1時期古い溝と考えられること

③三雲南小路遺跡の周溝には、丹塗磨研土器が多く含まれるが、1、2号溝には丹塗磨研土器が比較的少量しか含まれていないこと

④今回の調査では、1号溝は、古墳時代中期の住居に切られる形で検出されており、ヤリミゾ地区436-1番地の調査でも弥生時代終末期～古墳時代前期の土器を含む土坑が、溝の内側に見られるなど、古墳時代の遺構がこれら周溝や周溝内に作られる状況は、三雲南小路遺跡では見られないこと

以上の点から、今回検出した1、2号溝は、三雲南小路遺跡の周溝とは別溝の可能性が高いと判断されるが、1、2号溝、2号土坑、6号土坑へと繋がる周溝の存在は、三雲南小路遺跡とは別の墳丘墓がある可能性を示唆するものである。今のところ推測の域を出ないが、仮にこれらの溝が取り囲む墳丘墓があるとすれば、ヤリミゾ地区436-1番地の調査成果は、集団墓の様相を示しておらず、むしろ単独墓の可能性を示している。時期的にも三雲南小路遺跡よりも古い時期が想定でき、2号溝の甕や砥石、鉄矛は、1、2号溝との間に存在する空閑地（陸橋？）に近いところで出土しており、墳墓、被葬者に関連する祭祀の可能性がある。そして、これに関連して注目されるのは、1、2号溝の南側にある掘立柱建物である。未調査であるため、時期比定に問題があるが、東西1＋α間（2.4＋αm）×南北4間（6.6m）を測る建物で、柱穴の掘り方が隅丸正方形であることから、弥生時代に属する可能性があり、墳丘墓に関連する何らかの施設である可能性も否定できない。

最後に、今回出土した鉄矛について触れておきたい。弥生時代の鉄矛は、弥生時代中期中葉に出現し、後期初頭まで見られる。所属遺構が不明なものを除くと、出土遺構が甕棺墓もしくは箱式石棺墓に限られている中で、今回のように溝からの出土は稀有な事例である。鉄矛は小田富士雄氏によって、短鋒式、中鋒式、長鋒式の3つに分類されるが、今のところ、出現期から短鋒式と長鋒式が存在している（小田1977）。また、弥生時代中期末になると、中原遺跡SJ13011や東入部遺跡106号甕棺出土例のように、全長40㎝以上のものが出現することから、鉄戈と同様、一部大型化の動きを見ることができる。上覚地区例は、剣身のように切先から関に向けて広がる形態で、立岩遺跡36号甕棺墓例に類似し、弥生時代中期後半と考える。

以上、1、2号溝が取り囲む墳丘墓を想定したが、現段階ではあくまで想定にすぎず、周溝ラインの確定や周溝内の状況などこれから明らかにしなければならない課題も多く、今後の取り組みに期待される。（江﨑）

【参考文献】

小田富士雄　1977「4鉄器」『立岩遺跡』

潮見　浩　1991「西日本における鉄器の渡来と鉄生産」『日韓交渉の考古学　弥生時代篇』

岡部博俊　2013「Ⅱ．墓域　3．三雲南小路遺跡」『三雲・井原遺跡Ⅷ―総集編―』糸島市教育委員会

平尾和久　2013「Ⅰ．土器　1．弥生土器・土師器」『三雲・井原遺跡Ⅷ―総集編―』糸島市教育委員会

第147図　三雲南小路遺跡及び周辺遺跡位置図（1/500）

Ⅱ．三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品について

本書で報告した上覚地区439番地、南小路地区461番地、屋敷地区467番地では石製紡錘車の未製品が出土している。三雲・井原遺跡ではこれまでの調査でも出土しており、表１に示すように総数24点の未製品が確認できる（第148・149図）。現在のところ福岡県内では、紡錘車の未製品は100例程度確認されている。例えば、石器製作遺跡としても著名な北九州市小倉南区に所在する高津尾遺跡では砂岩・凝灰岩製の紡錘車未製品が4点出土し（山口編1989）、小郡市三沢蓬ヶ浦遺跡では弥生時代前期末～中期初頭の貯蔵穴から粘板岩製の紡錘車未製品が2点確認されている（宮小路編1984）。このように未製品が複数出土する遺跡でも2～4点の出土であり、三雲・井原遺跡の出土数がかなり突出したものであることがわかる。

三雲・井原遺跡では扁平な円礫状の白雲母片岩の未加工石材も出土しており、石材は近隣の河原等で採集されたと思われる。出土地点をみると南小路地区、下西地区、五反間地区など主に遺跡の西側で確認されており、遺跡と西接する瑞梅寺川も採取地の候補と考えらえる。未製品から製作工程は、

円礫採集→側面ケズリによる成形→上下面、側面の研磨による整形→穿孔→完成

という大まかな流れが想定される。

また、以前墳墓に伴う紡錘車の事例を集成し、古墳時代初頭の佐賀県唐津市久里双水古墳の後円部で出土したものを最古例に位置付け、突出して古い事例であると指摘したが（平尾2010）、三雲・井原遺跡でも石橋地区Ⅱ-11・12で確認された6号石棺墓墓壙からも側面と上下面を研磨した円盤状の未製品が出土しており（柳田・小池編1981）、今回報告した上覚地区439番地5号石棺墓墓壙でも穿孔途中の未製品が出土した。前者は土器が出土していないこと、後者は平面プランの確認で出土したものであることから、細かい時期の特定はできないが、周辺の状況から弥生時代終末期～古墳時代初頭に位置付けられよう（江﨑2013）。なお、この時期の墳墓に伴う紡錘車は福岡市でも確認されており、博多区那珂遺跡62次調査方形周溝墓SX28では周溝から土製紡錘車が出土している。時期は古墳時代初頭に位置付けられよう（長家・榎本編1999）。

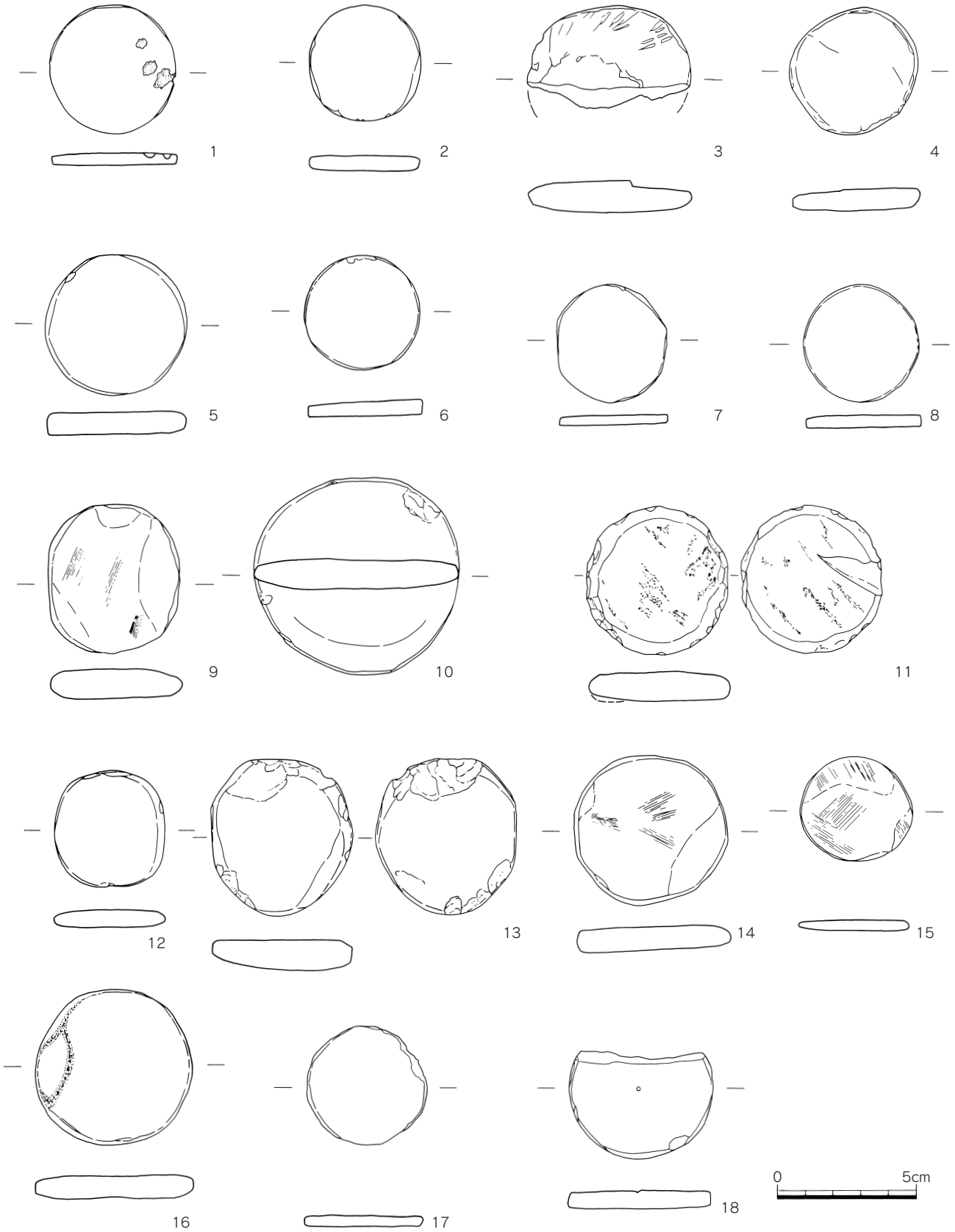
このように北部九州では弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけて点的に墳墓に伴う紡錘車が確認されている。基本的に墳墓に紡錘車を納める事例は、朝鮮半島の慶尚道地域で多くみられることから（平尾2013）、半島からの影響を受けたものであると考えられるが、その数の少なさや紡錘車の形態の違いなどから、弥生時代終末期～古墳時代初頭の段階では先駆的に半島の葬送文化を取り入れたが、広く一般化することなく終わったと思われる。日本列島における紡錘車の副葬・供献の本格的普及は5世紀以降となる。（平尾）

【参考文献】

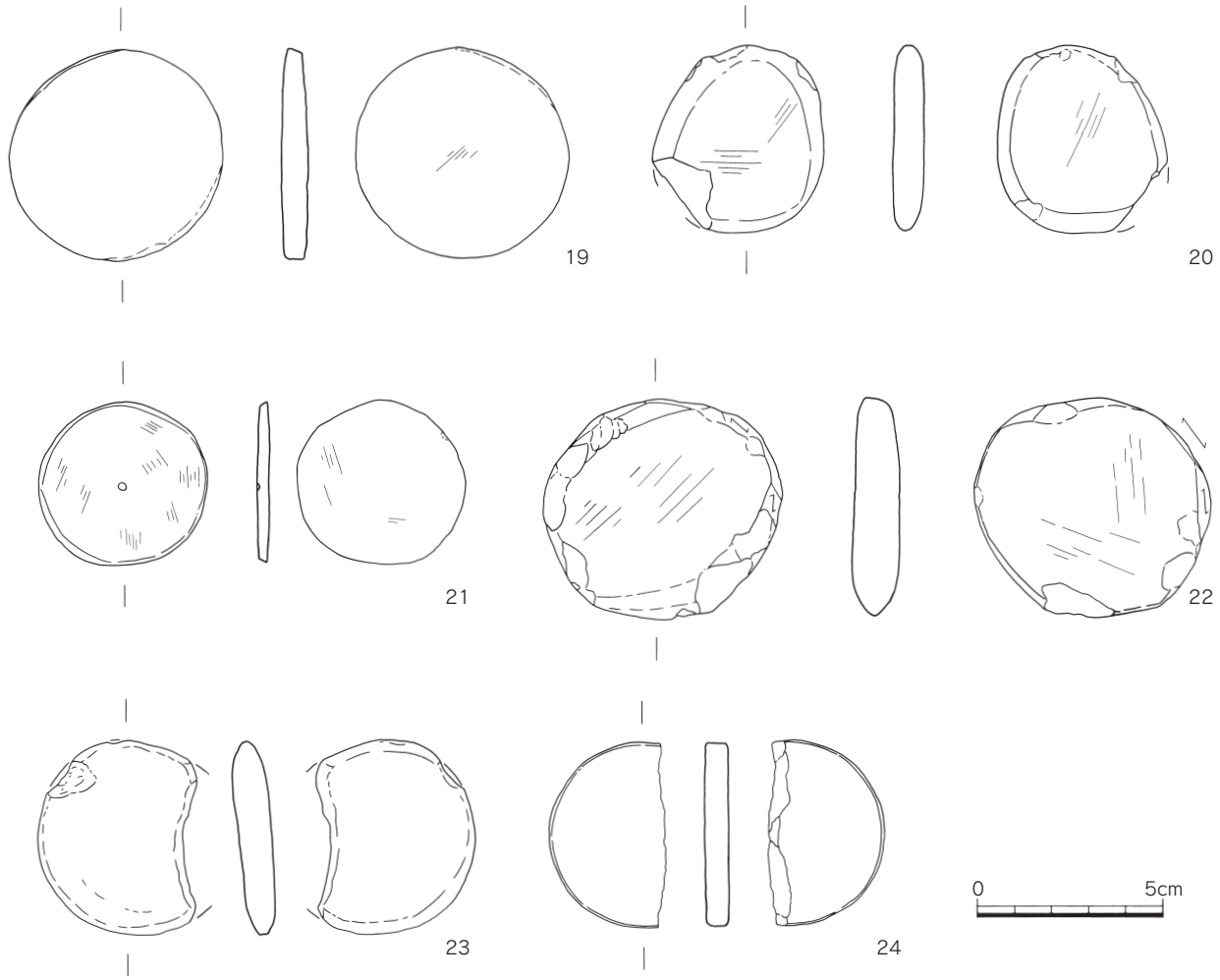
江﨑靖隆　2013「墓域」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

長家伸・榎本義嗣編　1999『那珂22』福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集

平尾和久　2010「墳墓に副葬・供献される紡錘車の基礎的考察」『還暦、還暦？、還暦！』武末純一先生還暦記



第148図　三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品一覧①（1/2）



第149図　三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品一覧②（1/2）

念献呈文集・論文集

平尾和久　2013「韓国における紡錘車副葬墳墓の時期的変遷とその特徴」『福岡大学考古学論集2』考古学研究室開設25周年記念

宮小路賀宏編　1984『三沢蓬ヶ浦遺跡』福岡県文化財調査報告書第66集

柳田康雄・小池史哲編　1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集

山口信義編　1989『高津尾遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第80集

NO	大字	小字	調査区名	出土遺構	報告番号	時期	材質	法量	分類	備考	出典
1	三雲	番上	II-6	表採	147-67	弥生	白雲母片岩	4.6-0.5	IIa		県58
2	三雲	番上	II-6	1号住居	147-68	弥生後期後半	白雲母片岩	4.1-0.5	IIa		県58
3	三雲	仲田	I-16	9号住居	68-11	弥生後期	白雲母片岩	5.9-1.1	IIcか		県60
4	三雲	仲田	I-16	1号住居	68-12	不明	白雲母片岩	4.6-0.8	IIcか		県60
5	三雲	石橋	II-11・12	6号石棺墓	191-4	古墳初頭以前	白雲母片岩	5.0-0.8	IIcか	墓壙	県60
6	三雲	サキゾノ	I-7・8	4号住居	42-7	弥生後期	白雲母片岩	4.2-0.5	IIa	実際は5号住居に伴う	県63
7	三雲	番上	II-5	土器溜	143-21	弥生後期後半～終末期	白雲母片岩	4.2-0.3	IIa		県63
8	三雲	番上	II-5	土器溜	143-22	弥生後期後半～終末期	白雲母片岩	4.2-0.4	IIa		県63
9	三雲	番上	II-5	土器溜	143-23	弥生後期後半～終末期	砂岩質	5.4-1.0	IIcか		県63
10	三雲	番上	II-5	土器溜	143-24	弥生後期後半～終末期	白雲母片岩	7.0-1.1	IIcか		県63
11	三雲	五反間	III-5	包含層	150-5	不明	白雲母片岩	5.3-1.0	IIcか		県63
12	三雲	塚廻り	II-6	1号土壙	173-3	古墳前期	白雲母片岩	4.2-0.6	IIa		県63
13	三雲	下西	II-10	周濠	228-4	不明	白雲母片岩	5.6-1.1	IIcか		県63
14	井原	上学	41	2号土壙	94-6	古墳前期前半	片岩	5.4-0.8	IIcか		町25
15	井原	上学	41	13号住居	94-7	弥生中期後半	流紋岩	3.8-0.4	IIa		町25
16	三雲	南小路	I	1号溝	23-8	弥生後期前半～古墳前期	滑石	5.7-0.8	IIcか		市63
17	井原	ヤリミゾ	2575番地	旧水路1区東	67-12	古墳か	滑石	4.3-0.4	IIa		市86
18	三雲	中川屋敷	480-1番地	SD01	35-4	弥生終末期～古墳初頭	?	5.1-0.6	IIc		市92
19	三雲	南小路	461番地	大溝トレンチ2	96-1	古墳前期後半	白雲母片岩	5.8-0.7	IIc		本報告
20	三雲	南小路	461番地	包含層	119-1	不明	白雲母片岩	5.1-0.8	不明	未加工品	本報告
21	三雲	南小路	461番地	包含層	119-3	不明	白雲母片岩	4.5-0.4	IIa		本報告
22	三雲	南小路	461番地	包含層	119-2	不明	白雲母片岩	5.9-1.3	不明		本報告
23	三雲	屋敷	467番地	大溝トレンチ2	125-2	古墳前期後半	白雲母片岩	5.2-0.9	不明	未加工品	本報告
24	三雲	上覚	439番地	5号箱式石棺墓	22-3	不明	片麻岩系	4.9-0.7	IIc		本報告

【出典】
県58：柳田康雄編　1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集
県60：柳田康雄・小池史哲編　1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集
県63：柳田康雄・小池史哲編　1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集
町25：岡部裕俊編　1987『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第25集
市63：角　浩行編　1997『三雲・井原遺跡群1』前原市文化財調査報告書第63集
市86：平尾和久編　2004『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財調査報告書第86集
市92：江﨑靖隆・楢﨑直子編　2006『三雲・井原遺跡』前原市文化財調査報告書第92集
※紡錘車の分類：平尾和久　2008「紡錘車の編年とその画期」『伊都国歴史博物館紀要』3
　挿図と表のNOは対応している。

表１　三雲・井原遺跡出土石製紡錘車未製品一覧

Ⅲ．三雲・井原遺跡屋敷地区467番地出土小形仿製鏡について

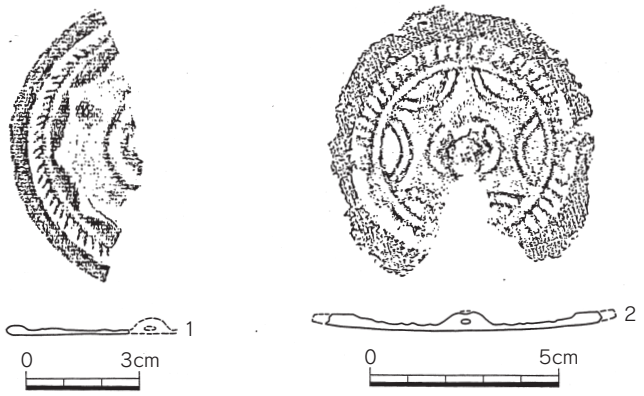
三雲・井原遺跡屋敷地区467番地で確認された大溝のトレンチ3では溝の最下層から小形仿製鏡が出土した。分類としては高倉Ⅰａ類とｂ類の間、田尻第1型い類とう類の間、林分類の渦文型に該当する（高倉1972、田尻2003、林2010）。三雲・井原遺跡では、これまで2面の小形仿製鏡が出土しており以下で概観する。

第150図1は八反田地区Ⅰ－1で確認された13世紀頃に開削された大溝の最下層から出土したものである。全体の1/3ほどの破片であるが、直径7.6㎝に復元される。縁は狭縁で、断面は蒲鉾形を呈する。文様構成は内側から鈕座―円圏―不明文様帯―連弧文―斜行櫛歯文―素縁となる。なお、連弧文は9弧文に復元される。高倉分類Ⅰｂ類、田尻分類第2型ａ類である。小形仿製鏡の製作時期は弥生後期前半と推定される（柳田・小池編1982）。

2は端山古墳の周濠から出土した小形仿製鏡である。報告書では古墳の周濠という想定外の地点から出土であったため、出土地点の詳細は不明となる。発掘時に損傷を受けており、本来は完形であったと思われる。小形仿製鏡の復元径は8.1㎝、縁の幅約1.1㎝、縁の厚さ3.25㎜である。また、全体的に錆に覆われ、青緑色を呈するが、破損部分の断面は赤銅色である。文様構成は内側から鈕―円圏鈕座―複線連弧文（6弧文）―複線円圏―斜行櫛歯文―素縁となる。これらの特徴から高倉分類Ⅱｂ類、田尻分類第3型ａ類となる。製作時期は弥生時代終末期に位置付けられる。

今回出土した小形仿製鏡は重圏文系で同笵関係にある鏡はないが、形態的に近いものとして韓国慶尚南道坪里洞例が挙げられる。田尻分類では鈕の周りにある櫛歯文帯の欠如が第1型う類の特徴とされる。本例は鈕の周りにある櫛歯文帯は残るものの狭縁の内側にある櫛歯文が欠如することから、い類より新しく、う類に近い段階といえる。ちなみにい類は小郡市横隈狐塚遺跡出土例を指標とし、う類は福岡市有田遺跡177次調査2号甕棺出土例を指標とする。後者は甕棺の形態から弥生時代後期初頭とされ（榎本編1997）、本例の製作時期もおおよそ同時期に位置付けられる。

ただ、林正憲氏のように原鏡からの乖離の方向性の違いを基準に分類を行うと（林2010）、やや新しく位置付けられる可能性もあるが、いずれにしても三雲・井原遺跡では最古段階の事例であ



第150図　三雲・井原遺跡出土小形仿製鏡（1/2）

る。

従来、三雲・井原遺跡においては、三雲南小路遺跡や井原鑓溝遺跡など王墓とされる厚葬墓が複数確認され、弥生時代後期以降も中国鏡を入手・副葬していく地域であると認識されている。一方、青銅器の鋳型は広形段階のものに限られ（伝三雲屋敷出土広形銅戈鋳型・伝三雲川端出土広形銅矛鋳型2点）、春日市須玖遺跡群のような集中した出土も認められなかったが、弥生時代後期初頭頃の製作と考えられる本例の出土により、モデルとなる小形の中国鏡を多く所有する三雲・井原遺跡の人々が小形仿製鏡の創出の一翼を担った可能性も出てきたと考えられる。もちろん、その証明には鋳型等の青銅器鋳造関連資料の確認も必要であり、今後は青銅器鋳造関連施設の確認も視野に入れた調査が求められよう。（平尾）

【参考文献】

榎本義嗣編　1997『有田・小田部28』福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集

高倉洋彰　1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58-3

田尻義了　2003「弥生時代小形仿製鏡の製作地」『青丘学術論集』22

林　正憲　2010「弥生小型倭鏡の起源について」『遠古登攀』

柳田康雄・小池史哲編　1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集

Ⅳ．三雲・井原遺跡ヤリミゾ地区1094番地出土人骨について

谷畑美帆（明治大学　日本先史文化研究所）

本節では、三雲南小路遺跡（糸島市三雲･井原に所在）から南西に約200mの地点に位置する三雲･井原遺跡ヤリミゾ地区1094番地における47号甕棺から出土した未成人について記すこととする。以下、遺存部位をはじめ、本個体を観察することによって得られた所見を記す。

1）頭蓋骨

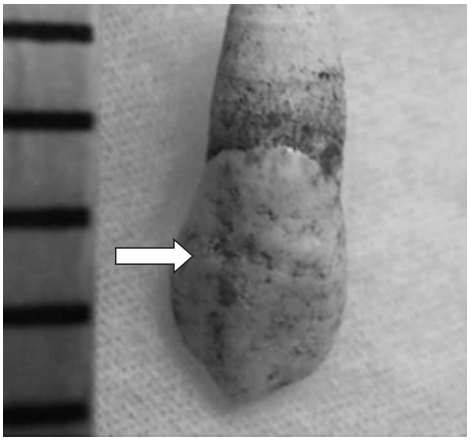
頭蓋骨の8割は破片状態で出土しており、その遺存状態はやや不良である。顔面頭蓋では、前頭骨･左頬骨・左上顎骨及び鼻骨の一部が遺存しており、その他、左右頭頂骨・後頭骨の一部が確認できる。左右の眼窩にはクリブラ･オルビタリアの所見（左右ともグレード0）は認められない（Nathan &Hass1966）。

歯槽は左上下顎の一部のみの遺存（第一小臼歯～第二大臼歯）であり、歯牙の遺存は下記の通りである。

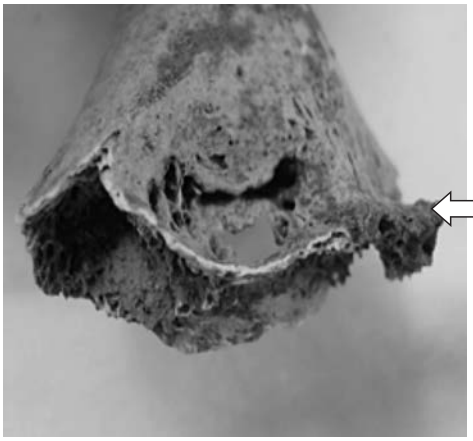
左　／／⑥⑤④③②①　｜①②③④⑤⑥ - - 右
　　／／⑥⑤④③②①　｜①②③④⑤ - - -
　　／歯牙なし　○　歯牙あり　―歯槽なし

本個体において遺存している歯牙は、すべて永久歯である。咬耗はほとんど確認されない。また、左上顎歯槽部の遺存から永久歯の上下顎第二大臼歯が未萌出であることが認められる。本個体の年齢が11歳半～13歳未満であることを示している。

古病理学的所見としては、上顎左右犬歯いずれにも中程度のエナメル質減形成の所見を確認する（第1図）。また下顎の右第2小臼歯には軽度のエナメル質減形成の所見が認められる（石川・秋吉1978）。



第1図　エナメル質源形成の所見を持つ犬歯



第2図　未癒合の上腕骨遠位端

２）上肢骨

骨質が脆く、近位および遠位の骨端は遺存していない。骨幹部は、左右上腕骨および左尺骨・左橈骨のみの遺存である。中手骨・手根骨などは遺存していない。

骨幹部において、骨折などの外傷性疾患の所見は確認されない。上腕骨遠位内側骨端は未癒合であり、本個体の年齢が13－16歳未満であることを示している（第2図）。

３）体幹骨

背骨、肋骨および寛骨の一部が遺存している。

４）下肢骨

上肢骨同様、骨質は脆く、近位および遠位の骨端は遺存していない。骨幹部は、左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨において遺存している。中足骨・足根骨などは遺存していない。

骨幹部において、骨折などの外傷性疾患の所見は確認されない。

以上の所見から、本個体の性別は不明であるが、年齢が11～12歳程度の小児骨とされる。

古病理学的所見として観察されるものは、幼少期以前の栄養不良を示すエナメル質減形成のみである。しかし、骨病変として提示される所見以外の病変が存在していた可能性は高く、さまざまな病因が複雑に関与しつつ、本個体の早世につながったと考えられる。

弥生時代後期に相当する本個体は小児骨であり、骨質が脆く薄いため、全体としての遺存状態は不良である。しかし、当該地域における人骨の出土数は多いとはいえず、中でも小児などの未成人骨は、全体としての総数が特に少なく、貴重である。

また、東京大学総合研究博物館における吉田邦夫・宮崎ゆみ子両氏（敬称略）のご協力により、本個体の肋骨片を用い、食性分析を実施したが、コラーゲンの遺存が不良であることなどから、残念ながら結果を提示することはできなかった。

【文献】

石川梧朗・秋吉正豊（1978）「歯の形成不全（構造の異常）」『口腔病理学Ⅰ』p.58－113．永末書店

高木實（2004）「歯と歯列の成長発育」『口腔の構造と機能』p.114－115．医歯薬出版株式会社

Kenneth A.(1993) *A field guide for human skeletal identification*, Charles C Thomas Pub Ltd. *2nd ed.*

Nathan,H & Hass,M（1966）“Cribra Orbitalia” A Bone condition of the Orbit of unknown Nature. Israel Journal of medical Science. Vol.2, p.171-191

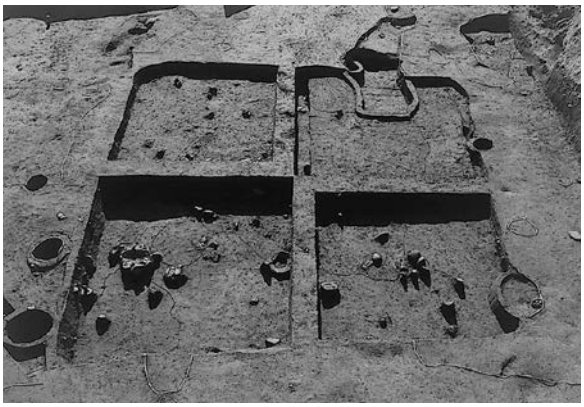
写真図版

1-1　上覚地区439番地西側全景
（真上から）

1-2　1号溝上層土器出土状況
（真上から）

1-3　1、2号溝完掘状況
（真上から）

図版２

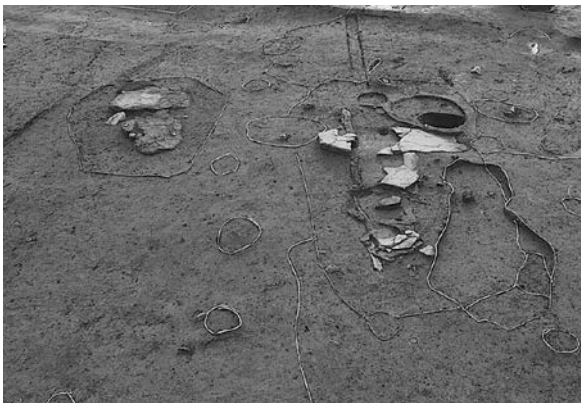


2-1　18号住居完掘状況（北から）

2-2　30号住居完掘状況（南から）

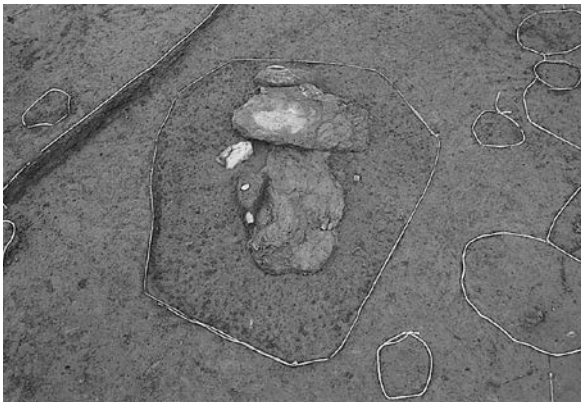
2-3　Ⅰ－６トレンチ再調査全体写真（南から）

2-4　2号箱式石棺墓、2号祭祀土坑検出状況（南から）

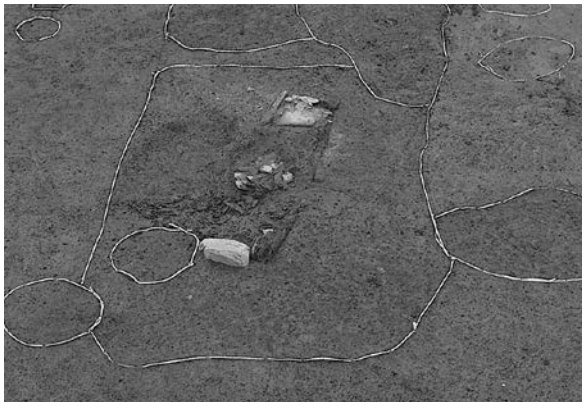


2-5　4、5号箱式石棺墓検出状況（北から）

2-6　4号箱式石棺墓半掘状況（北から）



2-7　5号箱式石棺墓検出状況（西から）



2-8　3号箱式石棺墓検出状況（西から）

3-1　1号祭祀土坑土器出土状況（南から）

3-2　2号祭祀土坑土器出土状況（南から）

3-3　1号溝土器出土状況（南から）

3-4　1号溝土器出土状況近景（南から）

3-5　1号溝下層土器出土状況（南から）

3-6　1号溝下層土器出土状況近景（南から）

3-7　2号溝土層断面状況（西から）

3-8　2号溝上層土器出土状況（南から）

図版４

4-1　2号溝下層土器出土状況（南から）

4-2　2号溝鉄矛、砥石出土状況（南から）

4-3　2号溝埋納甕出土状況（南から）

4-4　1、2号溝完掘状況（南から）

4-5　2号土坑墓完掘状況（南から）

4-6　1号水路完掘状況（南から）

4-7　10号土坑内塊石検出状況（西から）

4-8　1号水路内塊石出土状況（西から）

5-1　1号住居

5-2　1号住居

5-3　12号住居

5-4　18号住居

5-5　18号住居

5-6　18号住居

5-7　31号住居

5-8　34号住居

上覚地区439番地出土遺物①

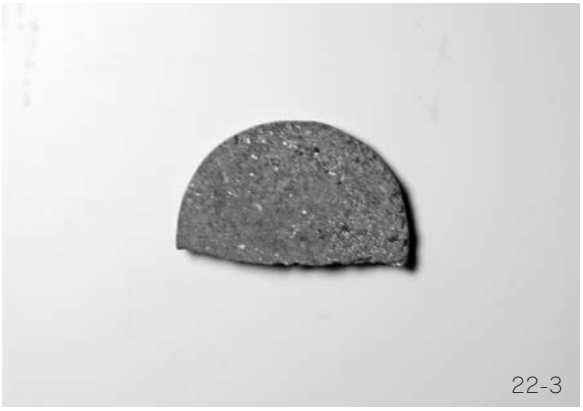
図版6

6-1　34号住居

6-2　37号住居

6-3　3号箱式石棺

6-4　4号箱式石棺



6-5　5号箱式石棺

6-6　1号祭祀

6-7　1号祭祀

6-8　1号祭祀

上覚地区439番地出土遺物②

7-1　1号祭祀

7-2　1号祭祀

7-3　2号祭祀

7-4　2号祭祀

7-5　2号祭祀

7-6　2号祭祀

7-7　2号祭祀

7-8　2号祭祀

上覚地区439番地出土遺物③

図版8

8-1　2号土壙墓

8-2　1号溝

8-3　1号溝

8-4　1号溝

8-5　1号溝

8-6　1号溝

8-7　1号溝

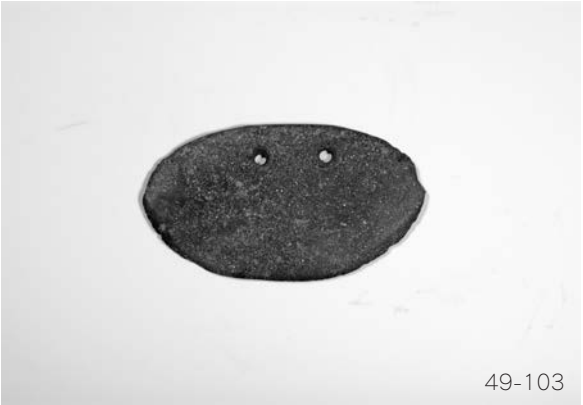
8-8　1号溝

上覚地区439番地出土遺物④

9-1　1号溝

9-2　1号溝

9-3　1号溝



9-4　1号溝 石包丁

9-5　2号溝

9-6　2号溝

9-7　2号溝

9-8　2号溝

上覚地区439番地出土遺物⑤

図版10

10-1　2号溝 甕

10-3　2号溝 砥石

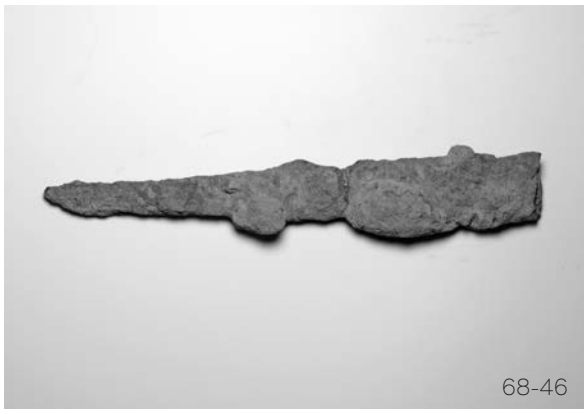
10-4　SK-06

10-5　SK-07

10-2　2号溝 鉄矛

上覚地区439番地出土遺物⑥

11-1　SK-09



11-2　1号水路 大刀

11-3　1号水路

図版12

12-1　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区全景（北から）

12-2　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区全景（南から）

13-1　2号土坑土層検出状況（北東から）

13-2　4号土坑検出状況（東から）

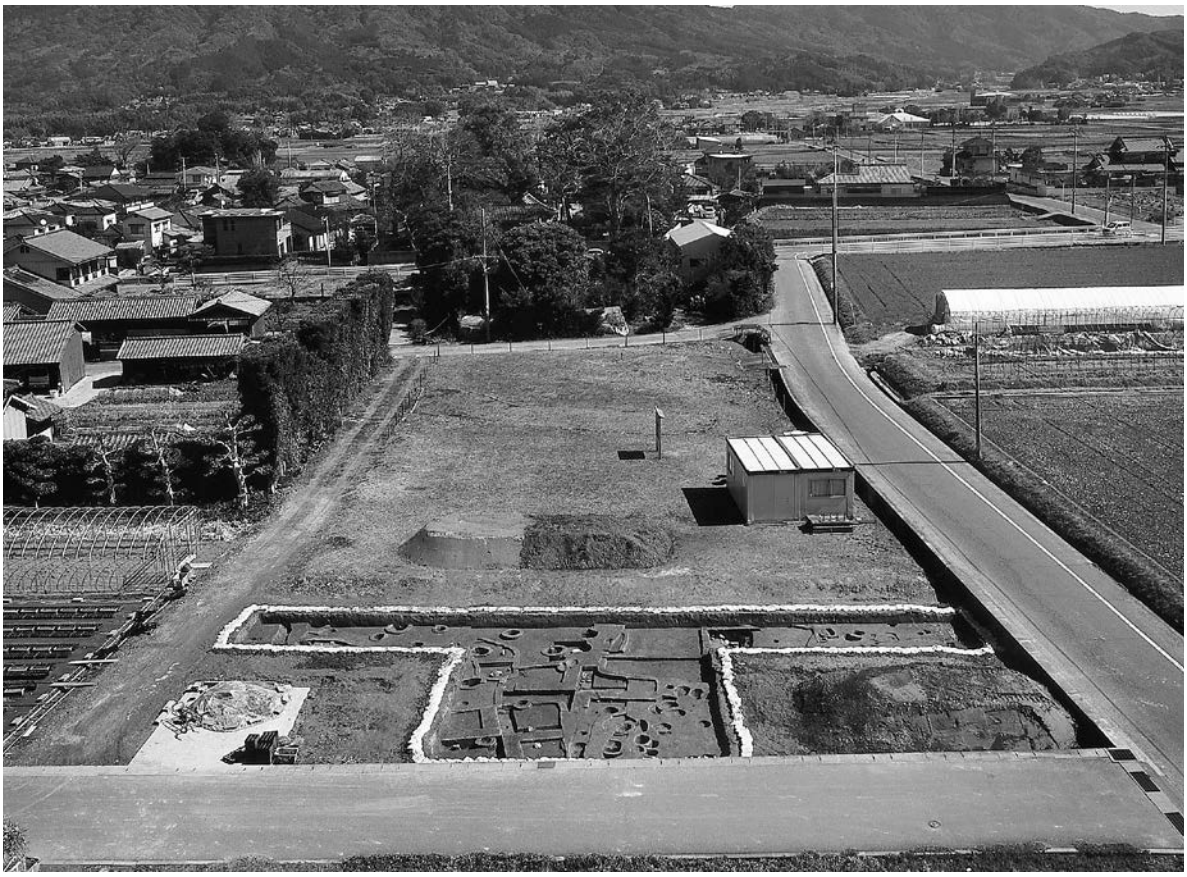
図版14

14-1　6号土坑土層検出状況（南西から）

14-2　8号土坑検出状況（北から）

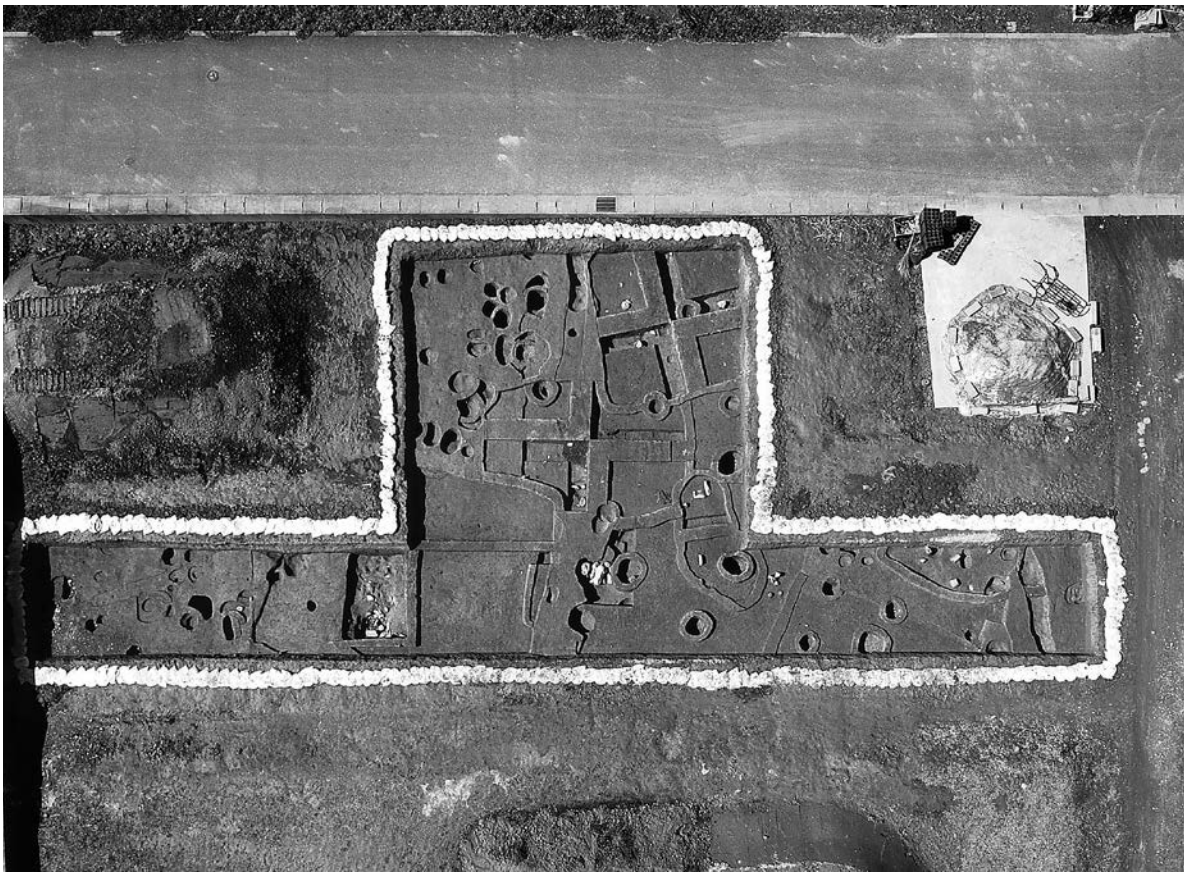
15　三雲ヤリミゾ地区436-1番地調査区出土遺物

図版16



16-1　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（西から）

16-2　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（北から）

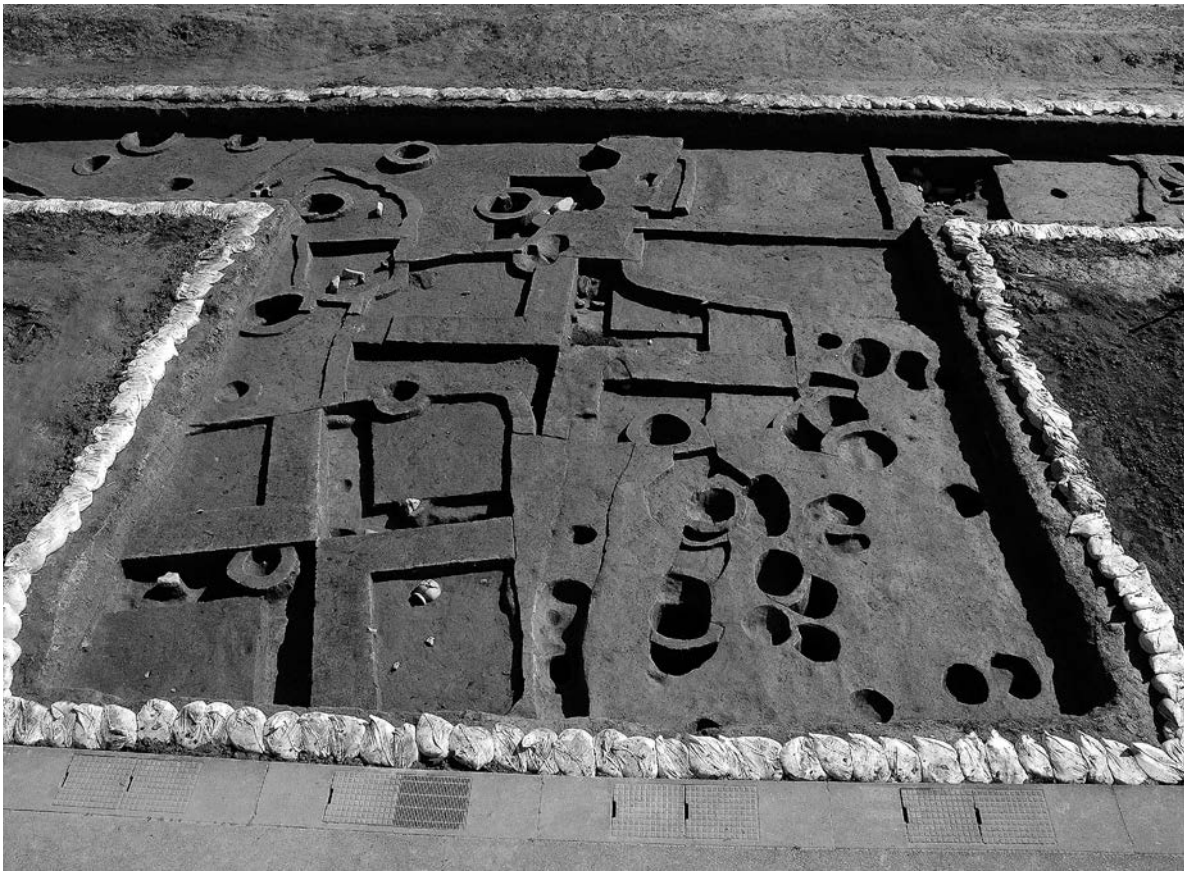


17-1　南小路地区458-1番地調査区全景（上空から）

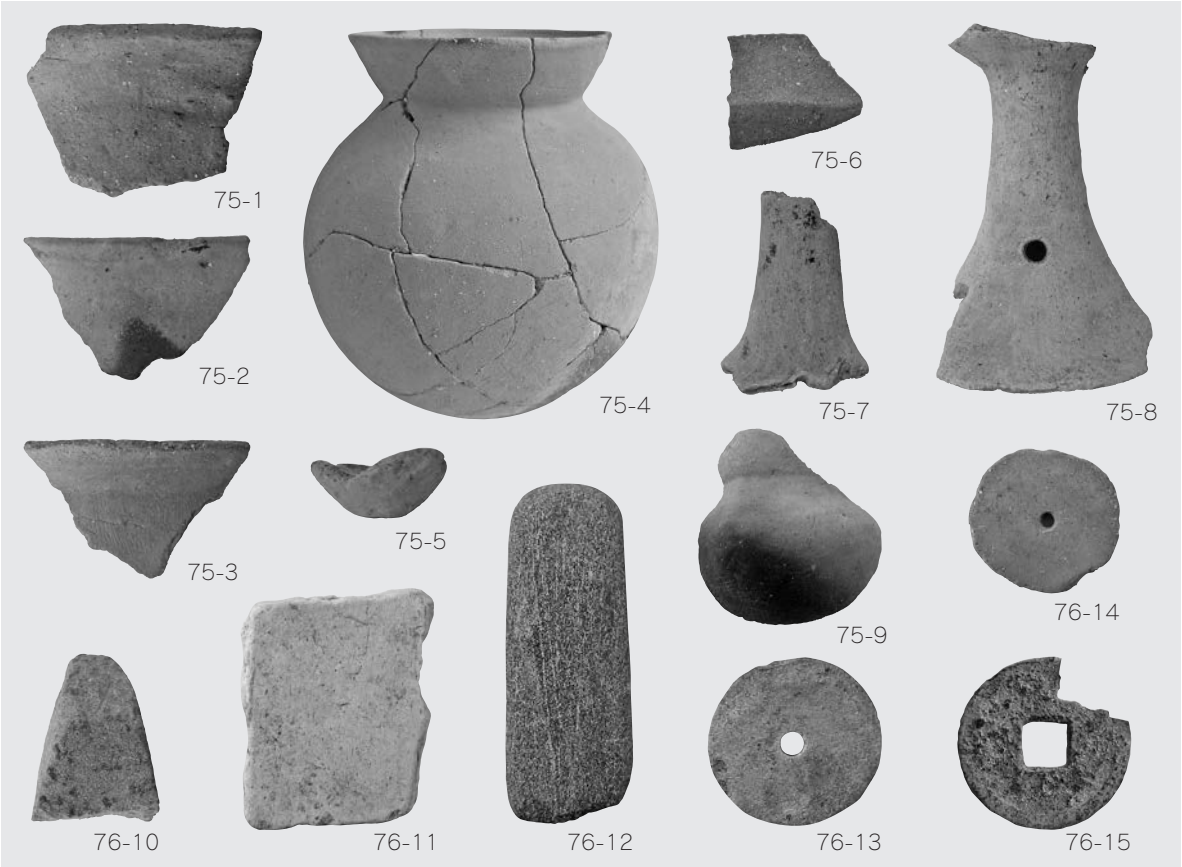
17-2　南小路地区458-1番地調査区俯瞰（南西から）

図版18

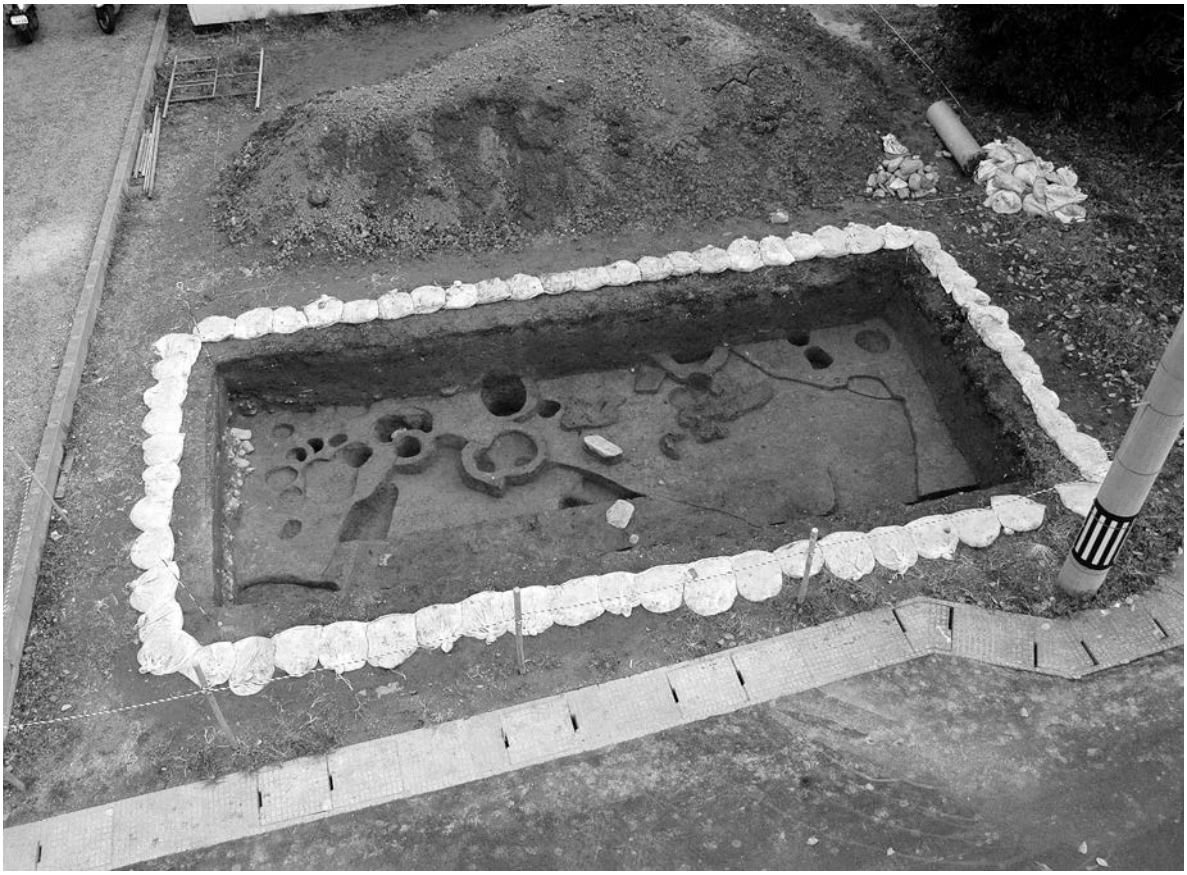
18-1　南小路地区458-1番地調査区検出状況（北西から）



18-2　南小路地区458-1番地調査区検出状況（西から）



19-1　南小路地区458-1番地調査区出土遺物



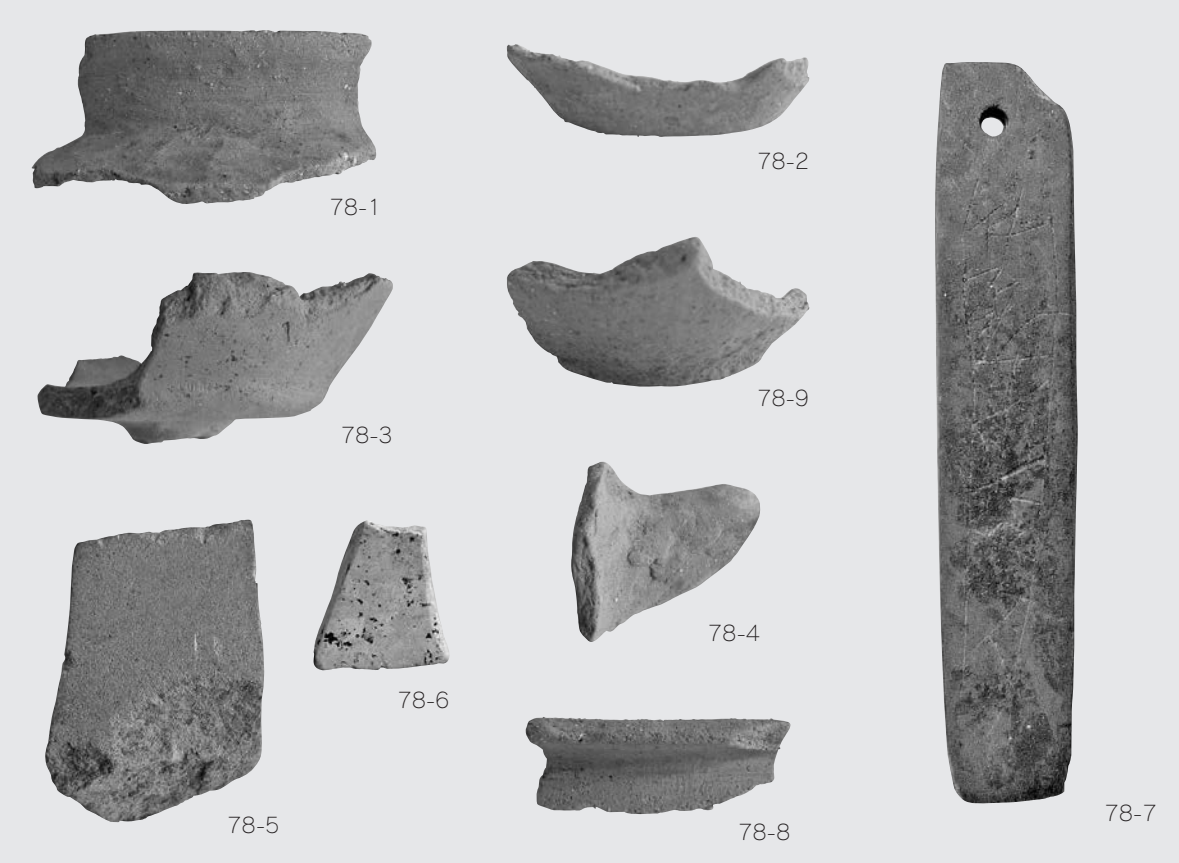
19-2　南小路地区470-3番地調査区T1全景（西から）

図版20

20-1　南小路地区470-3番地調査区T1全景（北から）

20-2　南小路地区470-3番地調査区T2全景（北から）

21-1　南小路地区470-3番地調査区T2遺構検出状況（西から）

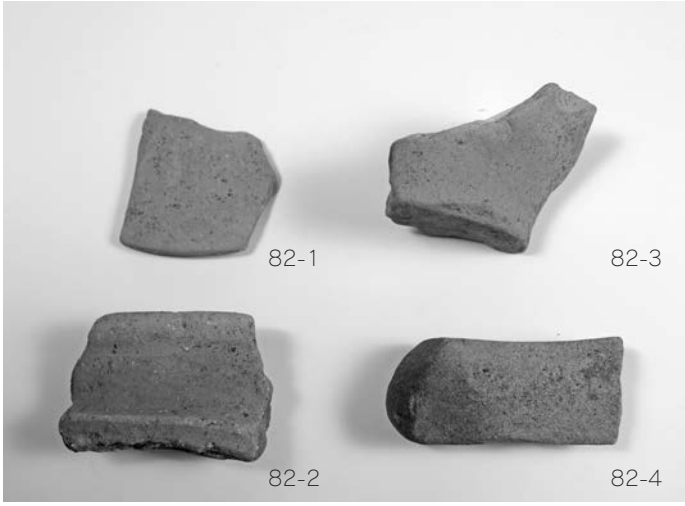


21-2　南小路地区470-3番地調査区出土遺物

図版22

22-1　屋敷地区486番地東側調査区全景

22-2　屋敷地区486番地西側調査区全景

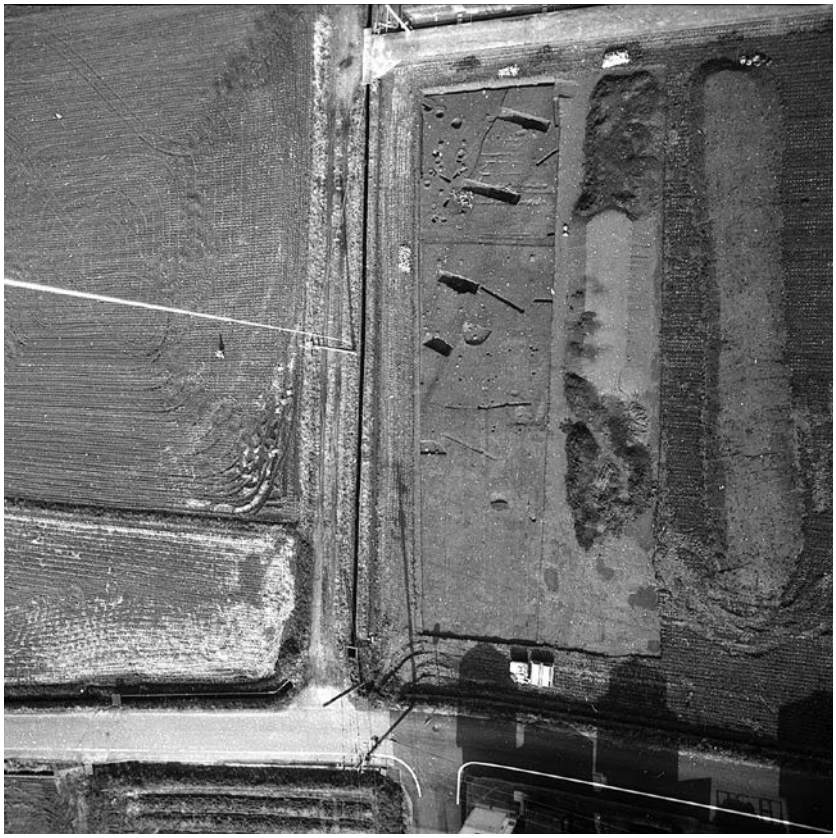


22-3　屋敷地区486番地出土遺物

23-1　南小路地区461番地調査区遠景（西から）

23-2　調査区遠景（東から）

図版24



24-1　調査区全景

24-2　大溝全景

25-1　大溝トレンチ1・2と5号土坑

25-2　大溝トレンチ1

図版26

26-1　大溝トレンチ2

26-2　大溝トレンチ3

26-3　大溝トレンチ4

27-1　2号土坑

27-2　3号土坑

27-3　5号土坑

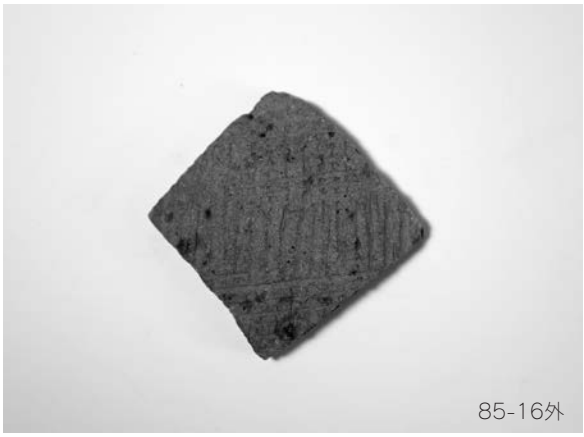
図版28

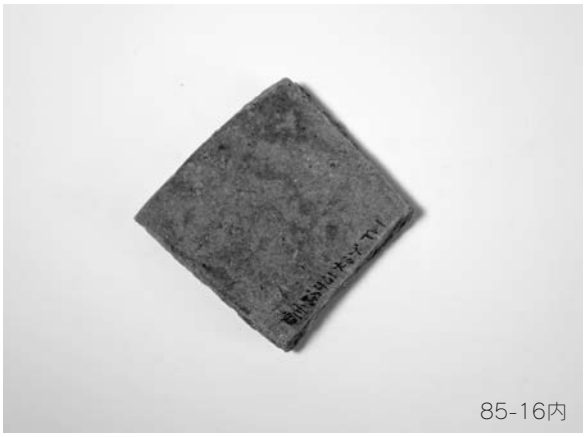
85-1

85-11

85-14

85-10


85-16外


85-16内

96-5

88-2

南小路地区461番地出土遺物①

87-10

86-2

86-8

86-4

96-1

96-2

96-6

96-7

南小路地区461番地出土遺物②

図版30

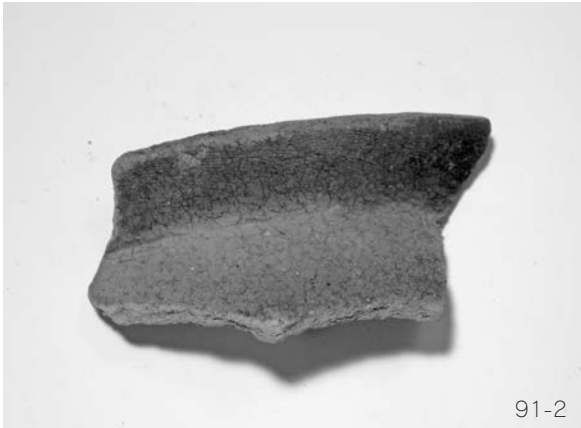
92-13

92-5

90-21

89-4

92-1


91-2

91-1

91-15

南小路地区461番地出土遺物③

90-20

91-16

91-3

89-9

95-4

95-4

94-1

95-1

南小路地区461番地出土遺物④

図版32

94-10

94-8

96-3

102-10

101-6

101-5

100-14

101-2

南小路地区461番地出土遺物⑤

101-11

100-12

102-11

101-9

101-8

102-6

100-4

102-9

南小路地区461番地出土遺物⑥

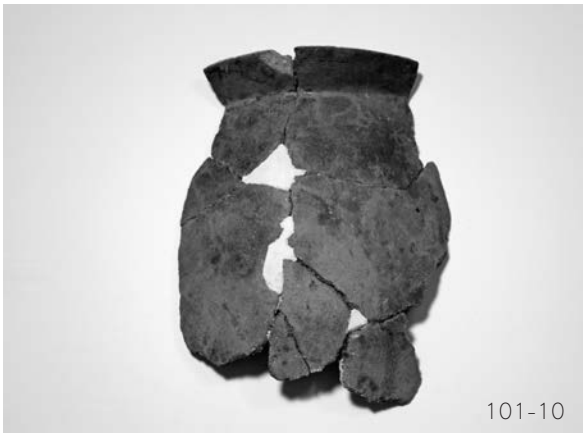
図版34

102-3

102-1

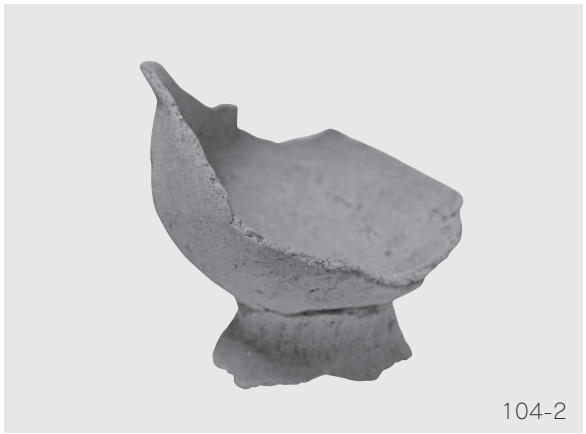
100-15

102-2

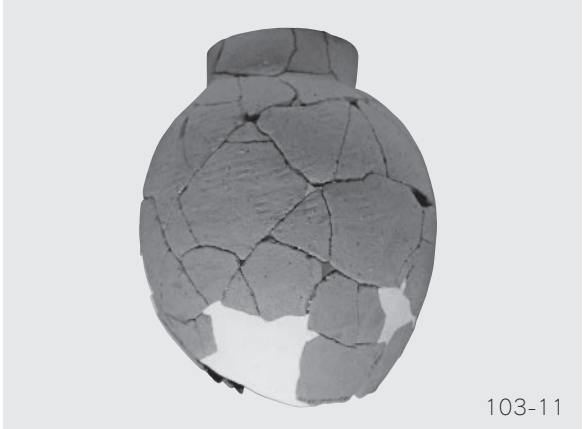

101-10

105-1

105-2

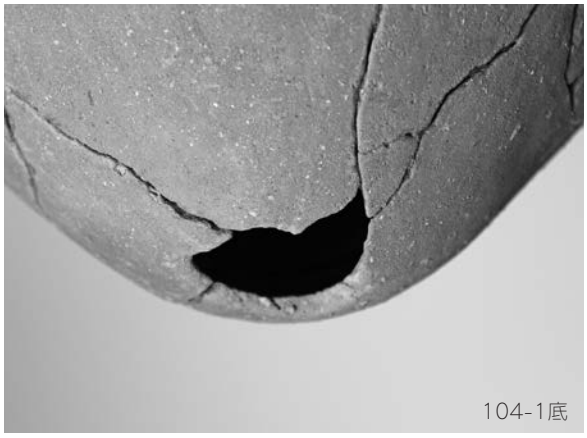

104-2

南小路地区461番地出土遺物⑦


103-11

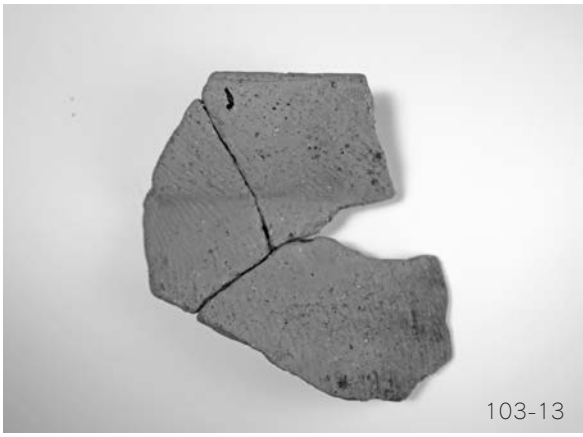
103-9

104-1


104-1底

103-10

103-4


103-13

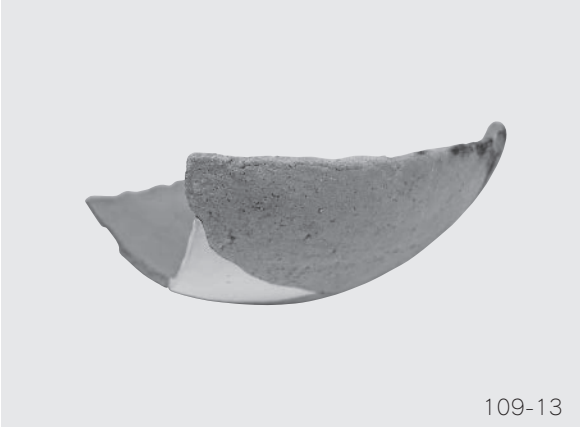
105-3

南小路地区461番地出土遺物⑧

図版36

105-4·5

109-11


109-13

109-12

110-11

110-13

110-14

110-10

南小路地区461番地出土遺物⑨

110-9

110-15

111

113-13

113-1

113-4

114-4

115-1

南小路地区461番地出土遺物⑩

図版38

115-2

112-4

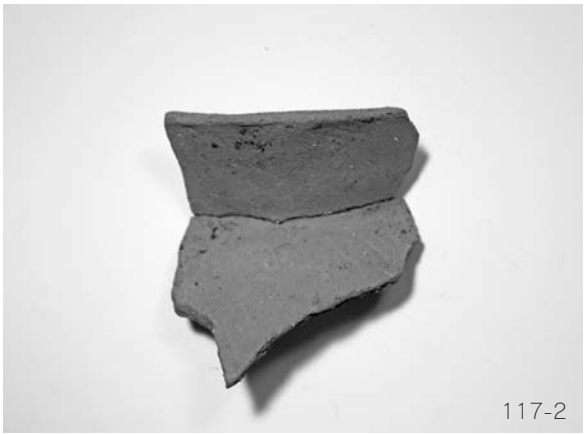
112-12

118-10

116-2

117-1

116-1


117-2

南小路地区461番地出土遺物⑪

118-1

116-16

116-11

116-18

116-17

117-4

118-4

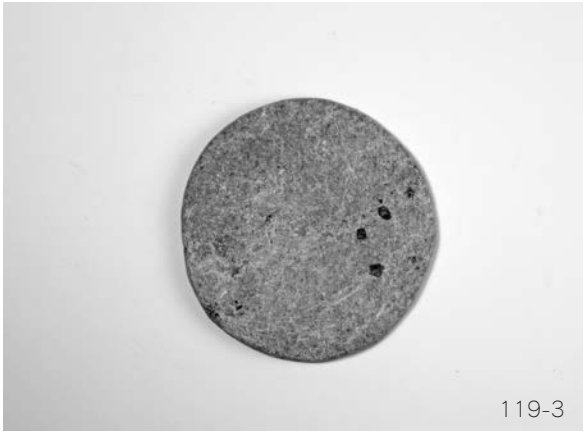
116-13

南小路地区461番地出土遺物⑫

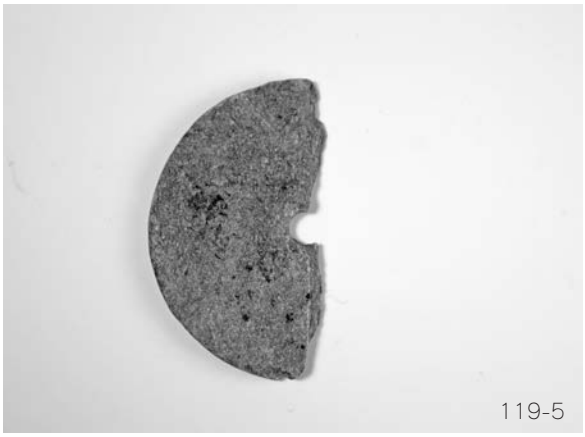
図版40

119-6

119-4


119-3

119-8


119-5

119-7

119-2

119-1

南小路地区461番地出土遺物⑬

41-1　屋敷地区467番地調査区遠景（上は461番地）

41-2　屋敷地区467番地調査区全景

図版42

42-1　調査区北側全景

42-2　調査区南側全景

43-1　大溝トレンチ1全景

43-2　大溝トレンチ2全景

43-3　大溝トレンチ2遺物出土状況

図版44

44-1　大溝トレンチ3全景

44-2　大溝トレンチ3遺物出土状況

44-3　大溝トレンチ4全景

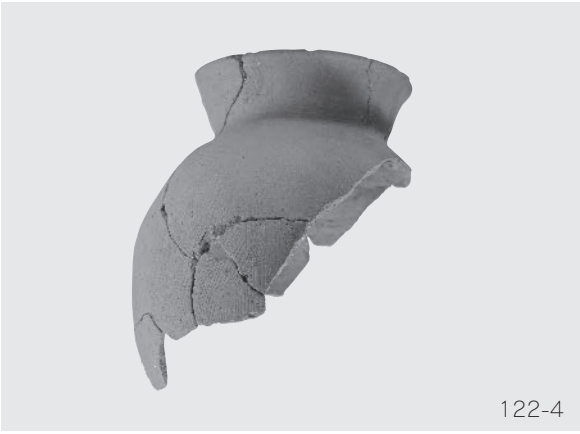
122-2

124-7

122-5

122-9

122-15


122-4

122-12

122-14

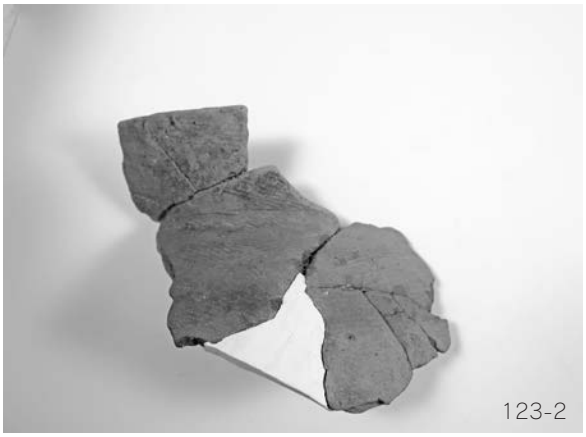
屋敷地区467番地出土遺物①

図版46

122-13

122-11

123-1


123-2

123-7

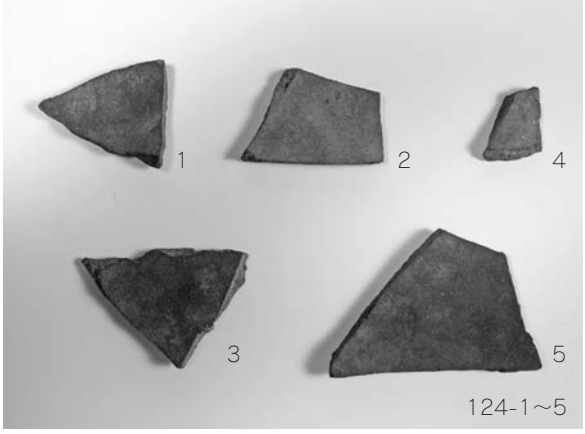
123-8

123-9

123-4

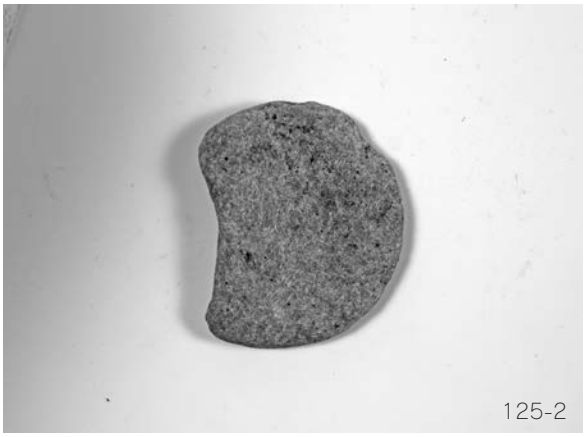
屋敷地区467番地出土遺物②

123-3



124-1～5

124-6


125-2

125-1

127-5

127-3

127-4

屋敷地区467番地出土遺物③

図版48

48-1　井原ヤリミゾ地区2578番地全景（南より）

48-2　井原ヤリミゾ地区2578番地全景（真上より）

49-1　近世溝（北より）

49-2　近世溝（南より）

図版50

50-1　住居跡（南より）

50-2　住居跡（西より）

134-2

134-4

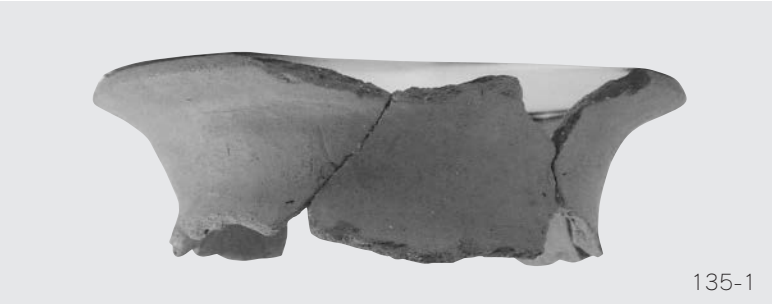
134-7

134-9

134-13

134-15

51-1　溝内部からの出土遺物


135-1

135-2

135-3

51-2　その他の出土遺物

図版52

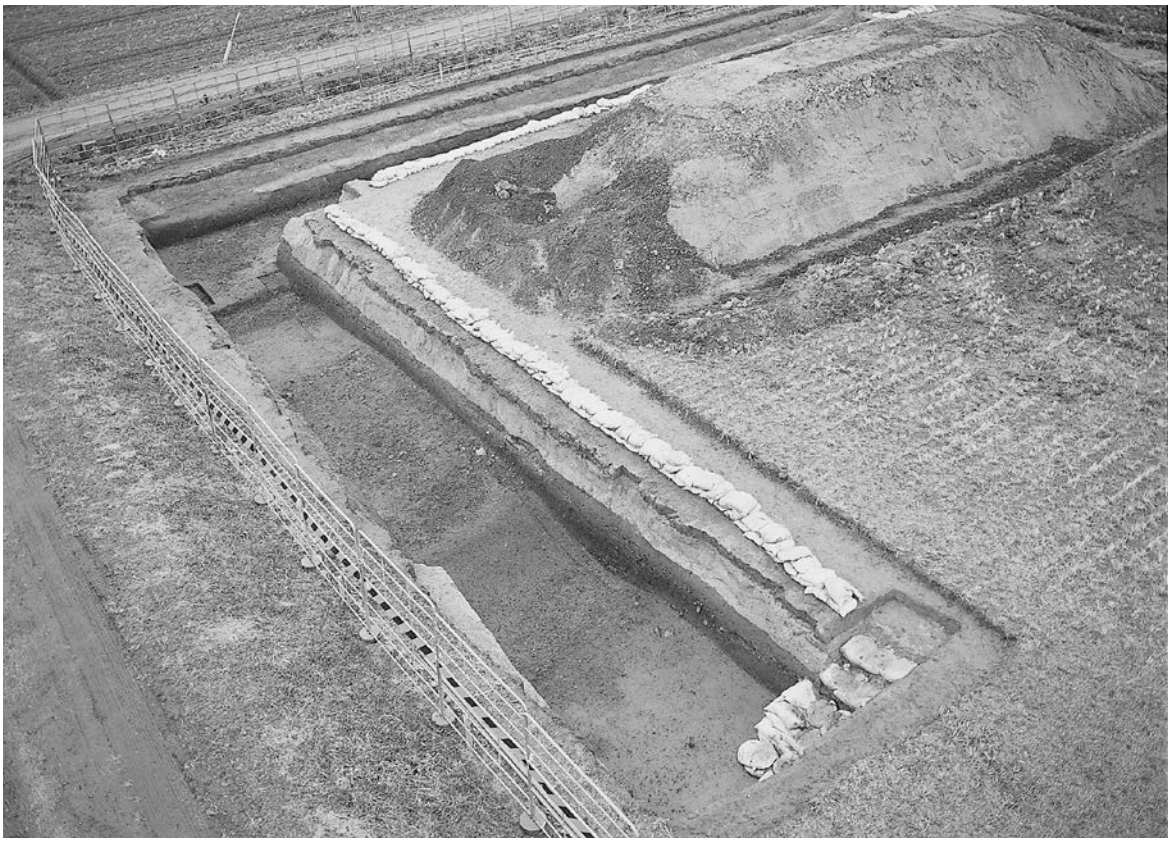
52-1　井原ヤリミゾ地区2583番地全景（南西より）

52-2　井原ヤリミゾ地区2583番地全景（北西より）

53-1　木棺墓（東より）

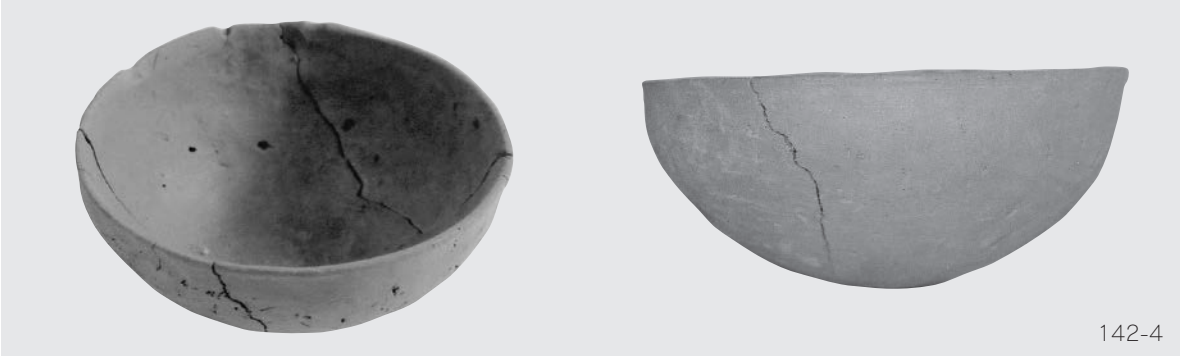
53-2　木棺墓（南より）

図版54



54-1　大溝遠景（南西より）

54-2　南側大溝（南より）



55　大溝・木棺墓出土遺物

図版56

56-1　井原ヤリミゾ地区2577番地
東側調査区全景

56-2　井原ヤリミゾ地区2577番地
近世水路①

56-3　井原ヤリミゾ地区2577番地
近世水路②

57-1　井原ヤリミゾ地区2577番地
近世水路③

57-2　井原ヤリミゾ地区2577番地
北側調査区

57-3　井原ヤリミゾ地区2577番地
南側調査区

図版58

146-6

146-4

146-12

146-9

146-7

146-11

146-13外

146-13内

井原ヤリミゾ地区2577番地出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	みくも・いわらいせきⅨ
書名	三雲・井原遺跡Ⅸ
副書名	三雲南小路・上覚・屋敷・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区の調査
巻次	
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書
シリーズ番号	13
著者名	平尾和久(編集)、江﨑靖隆、河合修、瓜生秀文
編集機関	糸島市教育委員会
所在地	〒819-1192　糸島市志摩初30
発行年月日	平成26(2014)年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三雲・井原遺跡	三雲上覚439	40222		130.2399 ～ 130.2419	33.5341 ～ 33.5375	2009/11/4～2010/3/21	1451	重要遺跡確認
	三雲ヤリミゾ436-1					2010/7/26～2011/1/24	55	重要遺跡確認
	三雲南小路458-1					2011/2/9～3/10	129	個人住宅
	三雲南小路470-3					2011/10/27～11/22	36	個人住宅
	三雲屋敷486					2012/2/2～2/23	45	個人住宅
	三雲南小路461					2012/11/12～2013/3/31	460	重要遺跡確認
	三雲屋敷467						400	重要遺跡確認
	井原ヤリミゾ2578					2005/1/6～3/31	150	重要遺跡確認
	井原ヤリミゾ2583					2005/1/6～3/31	135	重要遺跡確認
	井原ヤリミゾ2577					2010/11/9～2011/3/31	540	重要遺跡確認

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三雲・井原遺跡	三雲上覚439	集落	弥生 古墳	溝、住居、土坑、箱式石棺墓	鉄矛、弥生土器、土師器	
	三雲ヤリミゾ436-1	集落	弥生	住居、土坑、ピット		
	三雲南小路458-1	集落	弥生	住居、土坑、ピット		
	三雲南小路470-3	集落	弥生	住居、ピット		
	三雲屋敷486	集落	弥生	住居	弥生土器、石器	
	三雲南小路461	集落	弥生 古墳	大溝、住居、土坑	弥生土器、土師器、須恵器	
	三雲屋敷467	集落	弥生 古墳	大溝、土坑	弥生土器、土師器、小形仿製鏡	
	井原ヤリミゾ2578	集落	弥生	住居、柱穴群、溝	弥生土器、土師器、陶磁器	
	井原ヤリミゾ2583	集落	弥生	溝、土坑、木棺墓、柱穴群	弥生土器、土師器	
	井原ヤリミゾ2577	集落	不明	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、古代瓦	

三雲・井原遺跡Ⅸ

―三雲南小路・上覚・屋敷・ヤリミゾ・井原ヤリミゾ地区の調査―

糸島市文化財調査報告　第13集

平成26(2014)年3月31日

発　行　糸島市教育委員会
福岡県糸島市志摩初30
TEL 092-332-2093

印　刷　正光印刷株式会社
福岡県糸島市波多江駅北3-16-3
TEL 092-321-2022

付図　三雲・井原遺跡　上覚地区439番地　全体図(1/200)